令和４年度

博士論文（指導教員　大島　吉郎）

『紅楼夢』における形容詞重畳式についての研究

大東文化大学大学院外国語学研究科

中国言語文化学専攻博士課程後期課程

（学籍番号　20231101）

胡　春艶

第一章　序論 1
1.1　研究背景 1
1.1.1　北京官話の基盤としての『紅楼夢』 1
1.1.2　近代中国語から現代中国語への過渡期における重要な言語資料 2
1.2　研究動機 3
1.2.1　『紅楼夢』における形容詞重畳式の多用 3
1.2.2　『紅楼夢』各版本における形容詞重畳式の異なり 4
1.2.3　『紅楼夢』における形容詞重畳式とその日本語訳への対応 5
1.3　研究方法 5
1.4　研究目的と位置づけ 6
1.5　言語資料について 7
1.6　本研究の構成 8
第二章　先行研究と問題点 9
2.1　中国語の形容詞重畳式についての先行研究 9
2.1.1　全般的な研究 9
2.1.2　個別的な研究 9
2.2　日本語の畳語形容詞および日中対照に関する先行研究 11
2.3　『紅楼夢』における形容詞重畳式および日本語訳に関する先行研究 11
2.4　問題点 12
第三章　形容詞重畳式について 13
3.1　関連概念の整理 13
3.1.1　形容詞の定義と分類 13
3.1.2　形容詞重畳式の定義 14
3.1.3　重言と重畳 14
3.2　形容詞重畳式の特徴 16
3.2.1　描写性 16
3.2.2　量 18
3.2.3　主観性 19
3.3　基式と重畳式の意味関係 21
3.4　まとめ 23

第四章『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式 24
4.1　『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式 24
4.1.1　統計研究 24
4.1.2　語構成 25
4.1.3　文成分 27
4.2　『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式 28
4.2.1　統計的研究 28
4.2.2　語構成 28
4.2.3　文成分 31
4.3　『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式 31
4.3.1　統計的研究 31
4.3.2　語構成 31
4.3.3　文成分 33
4.4　『紅楼夢』前八十回における ABAB 式形容詞重畳式 33
4.4.1　統計的研究 33
4.4.2　語構成 33
4.4.3　文成分 34
4.4.4　意味分析 34
4.5　『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式の意味分析 35
4.5.1　物語性 35
4.5.2　具体性と個別性 35
4.6　まとめ 36
第五章　『紅楼夢』後四十回における形容詞重畳式 37
5.1　はじめに 37
5.2　『紅楼夢』前八十回と後四十回の統計的研究 37
5.3　使用頻度からの比較 38
5.4　文体学から見た前八十回と後四十回の相違点 40
5.4.1　スタイル（style）について 40
5.4.2　前八十回と後四十回における AA 式形容詞重畳式 41
5.4.3　前八十回と後四十回における ABB 式形容詞重畳式 42
5.4.4　前八十回と後四十回における AABB 式形容詞重畳式 45
5.5　まとめ 47

第六章　『紅楼夢』各版本における ABB 式形容詞重畳式の比較研究 48
6.1　はじめに 48
6.2　『紅楼夢』の版本についての説明 48
6.3　各版本における ABB 式形容詞重畳式の比較研究 50
6.3.1　各版本の異なる ABB 式形容詞重畳式 50
6.3.2　ABB 式形容詞重畳式から見た版本関係 51
6.3.3　『紅楼夢』に初出の ABB 式形容詞重畳式 54
6.4　まとめ 56
第七章　認知言語学から見た『紅楼夢』の形容詞重畳式 57
7.1　文成分の制約条件—“的”との共起— 57
7.1.1　朱德熙 1961、1993 57
7.1.2　『紅楼夢』における形容詞重畳式と“的”の共起 57
7.1.3　共起の内因 60
7.1.4　まとめ 64
7.2　空間化から見た基式と重畳式 65
7.2.1　『紅楼夢』における基式（単音節性質形容詞）と重畳式（状態形容詞）の比較 65
7.2.2　空間化 68
7.3　視点—「当事者事態関与型」と「傍観者事象観察型」 74
7.4　共感覚メタファーから見た ABB 式形容詞重畳式 75
7.4.1　A と BB の感覚のコロケーション 76
7.4.2　共感覚から見た ABB 式形容詞重畳式の認知プロセス 79
7.4.3　共感覚から見た A と BB の制約性 82
7.5　終わりに 84
第八章　形容詞重畳式と『紅楼夢』日本語訳についての考察 85
8.1　はじめに 85
8.2　『紅楼夢』の日本語訳について 85
8.3　日中擬声･擬態語について 86
8.3.1　漢語擬声･擬態語とは 86
8.3.2　和語擬声･擬態語の形式 87
8.3.3　中日擬声･擬態語について 87
8.4　AA 式形容詞重畳式とその日本語訳の対応研究 88

8.4.1　韻文における重言と擬声･擬態語の対応一致の状況 89
8.4.2　韻文における重言と擬声･擬態語の対応不一致の状況 89
8.4.3　非韻文における重言の対応状況 91
8.5　対応の動機づけ 92
8.5.1　描写性 92
8.5.2　具体的な個別性 94
8.5.3　五感からの体験性 95
8.5.4　主観性 96
8.6　まとめ 98
第九章　終章 100
9.1　結論 100
9.2　今後の研究課題 101
引用書目： 102
参考文献： 103
付録表 109
付録表１：『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式 109
付録表 2：『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式 118
付録表 3　『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式 121
付録表 4　『紅楼夢』前八十回と後四十回における AA 式形容詞重畳式の比較 124
付録表 5　『紅楼夢』前八十回と後四十回における ABB 式形容詞重畳式の比較 126
付録表 6　『紅楼夢』前八十回と後四十回における AABB 式形容詞重畳式の比較 128
付録表 7　『紅楼夢』各版本における ABB 式形容詞重畳式 130
付録表 8　『紅楼夢』前八十回における AA 式と三日本語訳の対応 141
図表一覧 176
論文初出掲載一覧 177
謝辞 178

第一章　序論

『紅楼夢』は中国清代中期乾隆年間における章回体長編小説である。明清白話小説の代表作として、前八十回は曹雪芹の作、後四十回は後人の補作、北京官話で書かれた社会百科全書[1]的性格も併せ持つとされる。それは、当時の華北地方を中心とする北方社会の言語の実態を反映しており、近代中国語から現代中国語への過渡期に位置している。

本研究は各版本の形容詞重畳式の使用状況を通して、『紅楼夢』の言語特徴を明らかにすることを目的に、版本の関係、言語の連続性、作者の問題などの諸方面からの考察を行い、認知言語学を援用しながら、なぜ重畳式を使用するか、その動機付けの解明を目指す。また、現代中国語と比較し、近代中国語の特徴の一端を窺おうとするものである。

重畳は中国語の代表的な言語手段として、主に形容詞重畳式および動詞重畳式を中心に行われる。重畳の定義について、李宇明（1996a:10）は、「重叠是使某语言形式重复出现的语言手段。（重畳とは、ある言語形式を重複出現させる言語手段である：筆者訳、下同。）」と指摘している。『紅楼夢』における形容詞重畳式は豊富で、場面や対象を効果的に描写することを可能にする。

1.1　研究背景

1.1.1　北京官話の基盤としての『紅楼夢』

（1）官話

徐丽（2014:10）は、「官话是明清时代汉民族共同语的通俗称呼，官话在一般情况下是指在明清官场上通行的语言。（官話は、明清時代の漢民族共同語の通俗的な称呼で、一般的に官界で通行していた言語を指す。）」と定義する。叶宝奎（2001:4）は、明清時期の漢民族の共通語を官話と称する。「官話」という術語は、明代から 1940 年代まで用いられ、民国時代には、「国語」とも称された。官話を北方語の汎称とし、現代中国語の「普通語」にほぼ相当すると指摘している。

（2）北京官話

Mr.Edkins は、「把官话划分为三个主要系统：南京官话，北方官话和西部官话，他以南京、北京和成都（四川省盛会），分别代表各个官话系统的标准。（官話を南方官話と北方官話と西部官話の三つの主要系統に分け、南京、北京、成都（四川省省都）がそれぞれ各官話系統の基準を代表する。）」と指摘している。[2] 林焘（2001:173）は、北京語と北京官話を区別する。「北京话指的只是北京城区话。（中略）从我国东北地区（包括内蒙古自治区的东部）经过河北省东北部的围场、承德一带一直到北京市城区，行成一个东北宽阔，西南狭窄的区域。（中略）这个方言区可以称为北京官话区。（北京語とは、北京城区の言葉だけを指す。（中略）我が国の東北地方（内蒙古自治区の東部を含む）から河北省東北部の囲場、承德一帯を経て北京市城区までは、東北が広く、南西が狭い区域を形成している。（中略）この方言区は北京官話区と称することができる。）」と指摘している。また、林焘（2001:177）は、紀元 1644 年、清朝が北京に都を定めるとともに、東北方言を含む北京官話区を形成したと指摘している。

中国語研究会編（1969:186）は、北京語と北京官話の関係について、「ここにいう北京

---

[1] 王利器（1979）〈《红楼梦》是学习官话的教科书〉《红楼梦学刊》第 1 辑，pp.163-168.

[2] ［英］威妥玛著 张卫东译（2002）《语言自迩集——19 世纪中期的北京话》北京大学出版社，p.5 から引用.

語とは、北方語または官話といわれるものよりは狭く北京およびその周辺に行われる言語という意味で、北京官話というのにほぼ等しいが、北京語から土語的要素を除き文語を加味した高級な交際用語を北京官話ということもあるからここでは用いない。」と指摘する。上記の北京語は林焘の北京城区話にほぼ相当し、北京官話は公式な政府の使用語を指している。

明清の官話は、南京官話から北京官話へと変遷して行った。南京官話から北京官話への変遷は、日本の中国語教育史にも反映することとなった。六角恒広（1988:30-31）は、外務省が漢語学所（東京外国語学校の前身）を設立し、1871 年から 1876 年 9 月まで南京官話を講じていたが、1876 年 9 月から北京官話の教育へ変わったと指摘している。

『紅楼夢』は乾隆五十六年（辛亥年、西暦 1791 年）以前、写本として伝わってきたが、乾隆五十六年以降に、刻本として刊行された。もとの名を『石頭記』という。乾隆の中葉に完成し、北京官話を用いて書かれた白話小説である。王利器（1979:165-166）は、「所谓官话，即指北京话，当时谓之京话。（中略）产生于乾隆年间的《红楼梦》，就是以官话写成的社会百科全书，体大思精，语言丰富，是学习官话最理想的教科书。（官話とは、北京語を指し、当時は京語と言った。（中略）乾隆年間に生まれた『紅楼夢』は、官話で書かれた社会百科全書である。物語の構造が大きく、構成が緻密で、言語表現が豊かであり、官話を学ぶのに最も理想的な教科書である。）」と述べる。太田辰夫（1988:289）は、「従来、北方語ないしは広義の官話による作品はあったが、北京語を基盤として書かれた作品は、『紅楼夢』をもって最初とするからである。」と指摘している。

『紅楼夢』が日本に伝来した時期について、宋丹（2015:333）の考証によると、『紅楼夢』は寛政五年（乾隆五十八年）十二月九日（紀元 1794 年 1 月 10 日）に日本に伝来したという。伊藤漱平（2008:187）は、「唐通事が『紅楼夢』を高級教材に用いていたことは前に述べたが、外国語学校でも十年前後から教諭の潁川重寛が教材として使用するようになったという。」と指摘している。『紅楼夢』は、日本で北京官話の教材として使用されていたのである。18 世紀における北京官話を研究するための重要な言語資料を提供すると考えられる。

1.1.2　近代中国語から現代中国語への過渡期における重要な言語資料

一般的に、中国語史は古代中国語、近代中国語、現代中国語に分けられる。近代中国語は古代中国語と現代中国語の間において、過渡的な役割を果たす。

近代中国語の上限と下限は議論がある。王力（1980:35）は、文法が言語の発展に対して持つ重要性によって、13 世紀から 1840 年のアヘン戦争時代までの期間を近代中国語と見なし、アヘン戦争から 1919 年の五･四運動までの期間を、過渡段階と見なす。蒋绍愚（2005:5-6）は、文法と音声の面から考察した結果、近代中国語の上限は、唐代初年だとし、近代中国語の下限を 18 世紀の中期、あるいは大まかに言うと、清代の初期と見なしている。

王（1980）によれば、『紅楼夢』の成書期は、近代中国語の範囲に入る。蒋(2005:5-6)によれば、多くの近代中国語の研究者は、通常『紅樓夢』『兒女英雄傳』をも近代中国語の研究範囲に入れていると指摘している。

言語は、徐々に変化を遂げているが、変化の移行期間があって、すぐに完全に変化することはない。非完全的なバリエーションが存在し、『紅楼夢』は、近代中国語と現代中国語のグレーゾーン（移行期、あるいは過渡期）に位置付けられると考える。よって、『紅楼夢』が近代中国語か、現代中国語かを検討することより、むしろ近代中国語から現代中国語への過渡的な作品とみなすのが相応しいと考える。梁扬ほか（2006:8）は、

「《红楼梦》还是中国近代汉语向现代汉语过渡的标志性著作，是汉语言发展史上不可或缺的重要一环。(『紅楼夢』はやはり中国近代漢語が現代漢語に向かう過渡的な代表的著作であり、中国語発展史上に不可欠の重要な一環である。)」と指摘している。

『紅楼夢』は、近代中国語と現代中国語への過渡期において、近代中国語と現代中国語の通時的変化に関する研究に高い価値を有する言語資料である。

1.2　研究動機

本研究は、『紅楼夢』における形容詞重畳式に焦点を絞る。その理由として、以下の三点を挙げる。

1.2.1　『紅楼夢』における形容詞重畳式の多用

『紅楼夢』は白話小説だが、その中に多くの韻文を混じえている。梁扬ほか（2006:148）は、『紅楼夢』は真の“文备众体”と見なす。『紅楼夢』の韻文に、形容詞重畳式の用例が多く、特にAA式重畳式の使用頻度の高い点が注目される。

例えば、『紅楼夢』第五十回「芦雪广争联即景诗　暖香坞雅制春灯谜」[3] 所収の詩群から、形容詞重畳式の用例を見てみよう。

1) 宝玉道：清梦转聊聊。何处梅花笛？（第50回:p.669）
(宝玉[4]、――
夢さえ清しいよよさびしゅう　笛の音はいずこ梅花とおぼしきが
（第50回:pp.340-341）

2) 宝钗连声赞好，也便联道：枝柯怕动摇。皑皑轻趁步，(第50回:p.670)
(宝釵は「うまい、うまい」とほめそやし、自分もそこでこう続けました。
林の枝を揺るまいとして　白皚皚足を運べりかろがろと)
（第50回:p.342）

3) 黛玉忙联道：翦翦舞随腰。煮芋成新赏，(第50回:p670)
(すると黛玉がすかさず――
ひらひら舞いて腰にしたごう　今更にながめ賞でつつ芋を煮て)
（第50回:p.343）

4) 黛玉又忙道：无风仍脉脉，（第50回:p.674）
(黛玉が代わってさっそく――
風なきになお脈々と降るとはいかに)
（第50回:p.350）

5) 宝琴又忙笑联道：不雨亦潇潇。(第50回:p.674)
(宝琴がこんどはあわてて、また笑いながら――
雨ならざるもまた瀟瀟と)
（第50回:p.350）

『紅楼夢』では、賈宝玉と姉妹が「海棠社」という詩の会を開催し、詩の創作の場面

---

[3] 章回名と例文は「(前八十回）曹雪芹著　(后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008）《红楼梦》人民文学出版社」の版本に拠る。原文によって、簡体字で表記する。本研究の引用部分は簡体字と繁体字の表記について、原文のままとする。

[4] 訳文は「曹霑作 伊藤漱平訳（1996.9-1997.11）『紅楼夢』(1-12冊）平凡社」に拠る。下同。

が多く出現する。詩にはAA式形容詞重畳式が多く使用される。

韻文のほかに、非韻文に形容詞重畳式も頻繁に出現する。次に、非韻文における形容詞重畳式の例文を挙げる。

6) 宝玉此时与宝钗就近，只闻一阵阵凉森森甜丝丝的幽香，竟不知系何香气，遂问："姐姐熏的是什么香？我竟从未闻见过这味儿。"(第8回:p.122)

（宝玉はこのとき、宝釵のすぐそばにいて、なにやらひんやりとしてほのかに甘い香りが、ぷうんぷうんと漂ってくるのを嗅ぎつけました。しかし、なんの香りとも見当がつかず、たまりかねてたずねます。

「お姉さまの焚きしめてらっしゃるのは、なんというお香ですかね？ついぞこんな香りを嗅いだことがないのですけど……」）（第8回:p.281）

例6）は非韻文におけるABB式形容詞重畳式の使用例である。文昌荣（1997:189-190）は、"凉森森"について、「首见于清人曹雪芹《红楼梦》。1.清凉的感觉。（最初に清人の曹雪芹の『紅楼夢』に見える。1.清涼の感覚。）」と記す。また、文昌荣（1997:316）は、"甜丝丝"について、「首见于清人曹雪芹《红楼梦》。1.形容有甜味。（最初に清人の曹雪芹の『紅楼夢』に見える。1.甘い味があることを形容する。）」と記す。文（1997）によれば、『紅楼夢』に初出のABB式形容詞重畳式があるとしている。

『紅楼夢』は白話小説であるが、特徴として"诗""词""歌""赋"などの韻文が多く用いられている。韻文であれ非韻文であれ、形容詞重畳式が豊富に見られ、パターンも多様である。『紅楼夢』から初出のABB式形容詞重畳式も窺える。本研究は『紅楼夢』における形容詞重畳式の研究を通して、近代中国語の言語的特徴について、新しい着眼点を提供する。

1.2.2 『紅楼夢』各版本における形容詞重畳式の異なり

『紅楼夢』は、程甲本が刊行される乾隆五十六年（辛亥年，西暦1791年）以前、巷間流布した写本は曹雪芹の原本ではなく、"脂砚斋"の評語がある写本（抄本）であり、一般に"脂本"と称される。

12種の写本は、注記される年代と特徴によって、"甲戌本""己卯本""庚辰本""红楼梦稿本""蒙古王府本""戚蓼生序本""戚宁本""甲辰本""舒元炜序本""俄藏本""郑振铎旧藏残本""靖应鹍藏本"と呼ばれる。これらの写本はすべて"脂砚斋本"の系統に属する。乾隆五十六年（辛亥年，西暦1791年）以後、大量の刻本"程甲本""程乙本"などが続々と出現し、転写から印刷の段階に入った。

これらの写本は過録本であることから、各版本における形容詞重畳式、特にABB式は字句に異なりが見られる。たとえば、"白汪汪"は庚辰本に"白汪汪"とあるが、修正を経て、"白漫漫"になる。己卯本は、右側に赤文字で"漫"という字を添える。甲戌本は"白茫茫"と書く。ほかの版本は"白汪汪"と表記する。影印の版本から修正の跡が見えるのである。

各版本における形容詞重畳式の異なりは、抄写者の識字レベル、言語能力と忠実度に繋がりがある。このほかにも、ABB式形容詞重畳式は主観性が高く、抄写者が意味を把握しにくいため、各版本に様々な形式で現われる。

本研究は、紅楼夢の各版本の形容詞重畳式の異同を明らかにすることを通して、各版本の関係に傍証を加えることにしたいと考える。

1.2.3　『紅楼夢』における形容詞重畳式とその日本語訳への対応

『紅楼夢』の日本語訳について、宋丹（2015:319-326）は、1982 年から 2015 年までの訳本を考察した結果、全訳本と抄訳本などの版本は 38 種あり、そのうち全 120 回の訳本は 9 種であると指摘する。伊藤漱平訳は 1958-1960 年、1963 年、1969-1970 年、1973 年、1996-1997 年の 5 種類がある。井波陵一訳が 2013-2014 年に出版され、最も新しい。

以下に、原文と四つの日本語訳を取り上げる。

7) 纤腰之楚楚兮，回风舞雪；珠翠之辉辉兮，满额鹅黄。（第 5 回:p.72）

松枝訳：繊腰の楚々たるは、風を廻らし雪を舞わす。珠翠の輝々たる、つや美しき鳶黄の額。（第 5 回:p.133）

伊藤訳：柳腰なよなよとして、風雪をも舞わしめ、飾り珠きららきららと、照りまさる額のつややかさ。（第 5 回:p.156）

飯塚訳：楚々たる柳腰、風雪にも堪えがたく、真珠、翡翠の飾り玉、鵞鳥の羽か鴨の頸、黄と緑に輝きぬ。（第 5 回:p.58）

井波訳：繊腰の楚楚として　回風の雪を舞わすがごとく　珠翠の輝輝として　満額　鵝黄ならんとす
ほっそりとくびれた腰は　つむじ風に舞い踊る雪さながら　きらきら輝く宝石と　額いっぱいに施された鵝黄の化粧（第 5 回:p.83）

例 7）の原文と日本語訳との対比から、“楚楚”はそれぞれ「楚楚」「なよなよ」「ほっそりと」に対応し、“辉辉”はそれぞれ「きららきらら」「輝輝」「きらきら」に対応することがわかる。すなわち、AA 式形容詞重畳式が漢語擬声･擬態語と固有擬声･擬態語に対応することが見て取れる。『紅楼夢』における形容詞重畳式と擬声･擬態語の対応は、どのような状況にあるのか。形容詞重畳式と漢語擬声･擬態語の対応は漢文訓読と繋がりがあることがうかがえよう。中国語の形容詞重畳式は、日本語の擬声･擬態語に対応することが多く、形式的に重ね方が多く見られ、両者の対応は形式と繋がりがあることが指摘されよう。

『紅楼夢』は中国古典長編小説において重要な位置付けがなされる。その形容詞重畳式は豊富で、幾つかの特徴を有する。本研究では、各版本における形容詞重畳式の異同を追うことを通して、『紅楼夢』の言語特徴および各版本の関係に傍証を示し、近代中国語と現代中国語の対比に新たな視角を提供することを目指す。そのためには、『紅楼夢』の形容詞重畳式と日本語訳の対応関係を明らかにすることは、重畳の言語手段の動機付け解明に資するものと考える。『紅楼夢』を言語資料として、形容詞重畳式を研究する意義はこの点において明らかである。

1.3　研究方法

本研究が用いる研究方法はデータ分析、比較法、コーパスなどである。一つの研究方法に拘らず、研究内容に基づき総合･応用を図りたい。定量分析の結果から帰納し、演繹分析を通して、通時と共時両面から研究を行う。具体的に以下の三つの方法にまとめられる。

①　統計的な計量方法。『紅楼夢』をデータ化したうえで、プログラミング言語 python（パイソン）を活用し、使用頻度を統計処理し、統計学の方法で、前八十回と後四十回における形容詞重畳式の使用頻度の区別を検定する。

② 相互比較方法。比較しなければ、共通点と相違点は明らかにならず、本質を認識することはできない。本研究は、『紅楼夢』各版本における形容詞重畳式の使用実態を比較し、版本の関係を検討し、形容詞重畳式とその日本語訳への対応語を対照し、相違点を明らかにする。また、前八十回と後四十回における形容詞重畳式の使用頻度、使用実態を比較し、作品の文体論的特徴と作者の同一性を検討する。

③ 共時的、通時的研究方法。『紅楼夢』における形容詞重畳式とその日本語訳への対応研究は、共時的な視点から行い、形容詞重畳式の変遷と出現時期を明らかにするためには、通時的な観点で行うべきである。これには、BCC コーパスと CCL コーパスを利用し、近代中国語から現代中国語への語彙変容に新たな方法論と視点を提起する。

また、上記の方法のほかに、認知言語学の理論によって、重畳の動機付けを明らかにする。これらの方法によって考察を行うことにより、『紅楼夢』における形容詞重畳式の文法特徴を明らかにすることができるとともに、その歴史変遷や各時代における揺れの特徴を明らかにすることが可能となる。

1.4 研究目的と位置づけ

本研究で取り上げた問題点を解明するため、研究目的と位置づけについて、以下の五点を挙げる。

第一に、『紅楼夢』各版本における形容詞重畳式の使用実態を明らかにする。これまでの先行研究は、版本を必ずしも重要視せず行われてきたため、各版本間の形容詞重畳式の使用実態に関する研究は十分とは言えない。本研究は、形容詞重畳式の特徴を総括することを目的に、『紅楼夢』各版本における形容詞重畳式のパターン、使用頻度、語構成、文成分、意味、コロケーションなどを諸方面から分析し、その特徴を明かにする。それにより『紅楼夢』の言語的特徴の理解を深めるための新たな視点を提出する。

第二に、『紅楼夢』における形容詞重畳式とその日本語訳への対応を検討する。『紅楼夢』の形容詞重畳式は、日本語訳でどのような語に対応するか、その対照研究は皆無と言える。形容詞重畳式へ対応する日本語訳をまとめ、対応する訳語は重ね方であるかを検討し、日中両言語の重ね型の相違点を解明し、関連性を探る。

第三に、認知言語学の観点から、基式（単音節性質形容詞）から重畳式（状態形容詞）を形成するプロセスおよび重畳の動機付けを解明する。本研究は、言語現象を人間の認知で解明する認知言語学を援用し、基式と重畳式を比較する。認知言語学の諸理論を応用し、重ね型使用の動機付けを解明することを目指す。

第四に、『紅楼夢』の版本関係、作品の文体論的特徴を考察する。形容詞重畳式の使用を観察することにより、『紅楼夢』の各版本間の過録関係、版本は同一の系統に属するか否かについて、形容詞重畳式から傍証することにしたいと考える。形容詞重畳式から『紅楼夢』の作者の意図、作品の文体論的特徴を窺うことで、前八十回と後四十回の作者の同一性について措定する。形容詞重畳式の考察は、以上の問題点を解明するため、新たな視点を提供することが可能となる。

第五に、近代中国語と現代中国語の相違点について検討を試みる。近代中国語から現代中国語への過渡期における『紅楼夢』の形容詞重畳式を考察し、近現代中国語の異同点について、語彙の変遷および連続性があるか否かを検討し、近代中国語の特徴と形容詞重畳式の変遷を明らかにすることを試みる。

1.5　言語資料について

本研究では、『紅楼夢』の写本、刻本、日本語訳を中心とする言語資料における形容詞重畳式を考察し、比較する。言語資料は以下に取り上げる。

庚辰本：

1.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《脂硯齋重評石頭記》庚辰本（1-4）　人民文學出版社

己卯本：

2.（清）曹雪芹著（1981）《脂硯齋重評石頭記》上下　上海古籍出版社

红楼梦稿本：

3.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《乾隆抄本百廿回紅樓夢稿》（1-3）　人民文學出版社

甲戌本：

4.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《脂硯齋重評石頭記》甲戌本　人民文學出版社

蒙古王府本：

5.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《蒙古王府本石頭記》（1-7）人民文學出版社

戚序本：

6.（清）曹雪芹著（1988）《戚蓼生序本石頭記》（1-8）文學古籍刊行社

戚宁本：

7.（清）曹雪芹著（2011）（紅樓夢古抄本叢刊）《戚蓼生序本石頭記》（1-5）南圖本　人民文學出版社

舒元炜序本：

8.（清）曹雪芹著（2019）（紅樓夢古抄本叢刊）《舒元煒序本紅樓夢》（1-3）人民文學出版社

甲辰本：

9.（清）曹雪芹著（1989）《甲辰本紅樓夢》（1-4）書目文獻出版社

俄藏本：

10.（清）曹雪芹著（2014）（紅樓夢古抄本叢刊）《俄羅斯聖彼得堡藏 石頭記》（1-6）人民文學出版社

郑振铎藏本：

11.（清）曹雪芹著（1977）《鄭振鐸藏本紅樓夢》沈阳出版社

程甲本：

12.（清）曹雪芹 高鶚著（1992）《程甲本紅樓夢》（1-6）書目文獻出版社

程乙本：

13.（清）曹雪芹著（紅樓夢叢書）《程乙本新鐫全部繡像紅樓夢》（1-6）廣文書局

現代の版本：

14.（前八十回）曹雪芹著　（后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008）《红楼梦》人民文学出版社

日本語訳：

15.曹雪芹作 松枝茂夫訳（1972.5-1985.7）『紅楼夢』（全 12 冊）岩波書店

16.曹雪芹 高鶚作 飯塚朗訳（1980）『紅楼夢』集英社版　世界文学全集 11、12、13

17.曹霑作 伊藤漱平訳（1996.9-1997.11）『紅楼夢』（1-12 冊）平凡社

18.曹雪芹作 井波陵一訳（2013.9-2014.3）『新訳　紅楼夢』（全 7 冊）岩波書店

1.6　本研究の構成

本研究は全9章から構成される。

第 1 章と第 2 章は、本研究の背景と動機、研究方法、目的及び位置づけ、先行研究と問題点について概観する。

第 3 章では、形容詞重畳式についての関連概念の整理を行う。形容詞重畳式の定義をまとめ、描写性、量、主観性の三点を詳述し、通時的な観点から重畳と重言を区別する。

第4章はデータ分析を行う。『紅楼夢』前八十回におけるAA式、ABB式、AABB式、ABAB式形容詞重畳式の語例、使用頻度をデータ化し、諸パターンのそれぞれ語構成および文成分を分析し、意味分析を行う。

第 5 章では、後四十回における形容詞重畳式をデータ化し、分析する。統計学の方法を利用し、前八十回の形容詞重畳式のデータと比較し、前後の作者は同一性を判断する。さらに、文体論から、前後の形容詞重畳式の使用状況を通して、使用頻度、類義語の選択、使用場面から、前八十回と後四十回の異同点を提示する。

第 6 章では、ABB 式形容詞重畳式を対象として、『紅楼夢』現存の写本及び刻本における形容詞重畳式の異同を考察し、版本の関係に証拠を提示する。各版本の ABB 式形容詞重畳式の使用実態を明かにし、特徴をまとめる。ABB 式形容詞の書写形式と使用の異なり、特に『紅楼夢』に初出の ABB 形容詞重畳式から版本間の関係を解明することを試みる。

第 7 章では、認知言語学の観点から、『紅楼夢』における形容詞重畳式の動機づけを探る。認知言語学の理論的枠組に基づき、文成分の制約条件の一つとしての“的”との共起を分析する。空間化の仮説を提案し、基式（単音節性質形容詞）から重畳式（状態形容詞）への認知プロセスを究明し、話者の視点から基式と重畳式を比較する。共感覚メタファーから、ABB 式形容詞重畳式の認知プロセス及び A と BB の制約性を考察する。

第 8 章では、『紅楼夢』全 120 回の日本語訳を整理し、形容詞重畳式への対応する語例について詳しく考察し、対応状況を明らかにする。第 1、2 節では、『紅楼夢』の日本語訳を整理する。第 3 節では、日中オノマトペの定義を整理する。第 4 節では、AA 式と擬声･擬態語の対照研究を行う。第 5 節では、対応の動機づけを検討し、認知言語学の視点から、描写性、個別性、五感からの体験性、主観性の共通点があることと主張する。両者の相違点は、具体的に次の三点にまとめられる。①AA 式と固有擬声･擬態語は描写性が高い代表的な有標表現である。②AA 式も擬声･擬態語も、観察者の参与度と評価を通して、主観性を把握しやすい。③AA 式は定量形容詞として、擬声･擬態語は尺度軸に一定の位置付けが出来ないことから、定量化しにくいものと想定する。

終章では、本研究の結論および今後の研究課題を述べる。

本研究は、『紅楼夢』における形容詞重畳式を考察し、各版本と日本語訳の使用実態を解明することを目標とする。形容詞重畳式という言語手段を通して、『紅楼夢』の言語特徴を明にし、版本と日本語訳の研究に新たな視点を示す。認知言語学の観点に基づき、基式から重畳へのプロセスおよび動機付けを解明し、その結果を広く言語学の重ね型研究に傍証を示すとともに、近代中国語の研究に大きな意義をもつことが考えられる。

第二章　先行研究と問題点

先行研究を概観し、そこから見える問題点について指摘する。まず、中国語の形容詞重畳式の先行研究を概観し、次に、日本語の畳語形容詞および日中対照に関する先行研究をまとめて、最後に、『紅楼夢』おける形容詞重畳式とその日本語訳の対照に関する先行研究をまとめ、以下の三つをめぐって指摘する。

2.1　中国語の形容詞重畳式についての先行研究

中国語の形容詞重畳式に関する研究は、統語論、意味論の観点から重要なテーマとして位置付けられ、全般的な研究と個別的な研究に分けて考えられる。

2.1.1　全般的な研究

朱德熙（1956/1999）は、現代中国語の形容詞を簡単形式と複雑形式に分ける。簡単形式は、単音節形容詞（大、红、多、快、好）と一般的な二音節形容詞（干净、大方、胡涂、规矩、伟大）を含んでいる。複雑形容詞は、(1) 重畳式、(2) 接尾語をつける形容詞（黑乎乎、黑咕隆咚、可怜巴巴）、(3) 煞白、冰涼、通红のような形容詞、(4) 形容詞を中心とする連語（很大、挺好、非常漂亮、又高又大）のように分類される。このうち（1）類を「完全重畳式」（XX：小小儿、XXYY：老老实实、干干净净）と「不完全重畳式」（胡里胡涂、古里古怪）に分け、文成分（連体修飾語、連用修飾語、述語、補語）の性質から、さらに「甲類成分」と「乙類成分」とに分け、比較を行い、形容詞重畳式の「感情的色彩」を検討している。

朱德熙（1982:73）は、形容詞を性質形容詞と状態形容詞に分け、性質形容詞は「属性」を表し、状態形容詞は「描写性を帯びる」と規定する。

吕叔湘（1965/2002:290-313）は、統計的な手法を用い、杨朔の《海市》における 1400 余りの形容詞を抽出し、形容詞重畳式の中でも、主に AA 式、ABB 式、AABB 式の語構成を分析し、文成分の使用状況を考察している。意味の面からは、朱德熙（1956/1999:3)、黎锦熙（1959:87)、李宇明（1996a:11-13)、石毓智（1996:2-3)、李劲荣（2006:145）などは、形容詞重畳式は“量范畴”にあると主張している。刘丹青（1986:13)、沈家煊（2015:647) などは、“描写摹状”説を主張し、谢自立ほか（1995:225）は、“强调”説を指摘している。

語用論の観点からの代表的な学説は、“生动性”を主張するものである。王力(1943/1985:298-299)、李劲荣(2014)は、形容詞重畳式の語用論的特徴を“描绘性”“调量性”“凸显性”にまとめている。石锓（2010:17-19）は、形容詞重畳式について、“程度”“状态”“强调”“主观评价”“类同物复现”の五つの意味にまとめ、通時的視点から、各状態形容詞のバリエーションを通して、各時代における使用実態の変化を体系化している。しかし、石（2010）は『紅楼夢』においては、詩など韻文の擬古材料が多く、形容詞重畳形式についての考察には不適切であるとして、『紅楼夢』が有する重要な資料的価値を顧みなかった結果、重要な事実を見落としている。

2.1.2　個別的な研究

主に AA 式、ABB 式、AABB 式、ABAB 式に分けられる形容詞重畳式の特定の形式をめぐって、個別的な研究が行われている。

2.1.2.1　AA 式形容詞重畳式に関する先行研究

杨振兰（2003）は、AA 式形容詞重畳式（以下 AA 式と略称）めぐって、“叠音”と“重叠”の区別について、単純語と複合語の定義から、形態素の構造を中心に分析し、意味論と語用論を基に比較する。王国栓（2004）は、“量范畴”から、AA 式は量の増加を表すと指摘している。李泉（2005）は、重畳できる 155 語の単音節形容詞を考察し、意味と文成分を分析したうえで、文成分の連続性を指摘し、認知言語学の「際立ち」を利用し、単音節形容詞重畳式の“増量”を解明する。

2.1.2.2　ABB 式形容詞重畳式に関する先行研究

ABB 式形容詞重畳式（以下 ABB 式と略称）に関する辞典として、相原茂ほか（1990）、文昌荣（1997）、张美兰（2001）がある。相原茂ほか（1990）は、BB の一致性によって、語例を収集し、中国語と日本語で解釈する。文昌荣（1997）は、2000 程度の ABB 式の語源と出典を明らかにする。张美兰（2001）は、唐五代から清代末年までの 1400 程度の語例を挙げる。

ABB 式の語構成については、邵敬敏（1990）、石锓（2010）、李劲荣（2014）がある。邵敬敏（1990）は、“A＋BB→ABB（后重叠附加式）”“AB＋B→ABB（后重叠扩展式）”“BA＋B→ABB（前重叠倒置扩展式）”“AABB－A⇔ABB（双音重叠前省略式）”の四つの種類に分けて、動態分析の方法によって、ABB 式の発展の傾向を明らかにする。石锓（2010:241）は、元明清時代の ABB 式を“附加式（红彤彤）”、“重叠式（慌张张）”、“音缀式（慌张张）”、“主谓式（泪汪汪）”に分ける。李劲荣（2014：37）は、A と BB の性格によって、ABB 式を“派生式”“主谓式”“后补式”に分ける。

ABB 式の性格については、侯冬梅（2015）、董雪松（2015）、赵青青（2021）がある。侯冬梅（2015）は、コーパスを利用し、通時と共時の両方面から、ABB 式の文成分の発展と使用頻度を考察し、また、ABB 式と“de”のコロケーションについて、主語＞補語＞連体修飾語＞目的語＞述語＞連用修飾語の順序に並んでいると指摘する。董雪松（2015）は、視点、五感、情感から ABB 式の主観性を検討し、意味および程度副詞の共起の面から ABB 式の“量”を考察し、描写性と主観性の関係を分析する。赵青青（2021）は共感覚メタファーから、ABB 式の描写性、量、主観性の三点を解釈する。

2.1.2.3　AABB 式形容詞重畳式に関する先行研究

AABB 式形容詞重畳式（以下 AABB 式と略称）の語構成について、AB が一つの語になるか否かによって、吕叔湘（1965/2002:295）、李宇明（2000:315）、石锓（2010:126）、杨柳（2012:10）などは、「[AB×２]の AABB 形容詞重叠式」と「[AA＋BB]の AABB 形容詞叠加式」の二種類に分ける。胡孝斌（2007）は、さらに通時的な観点から、上述の二種類は歴史上では「AA＋BB」の一種類だけであり、認知言語学の類像性から AABB の重畳原因を解釈する。石锓（2005）は、唐代以前の AABB 式について、語構成は“AA＋BB”だけであり、AA と BB のコロケーションは臨時性があり、意味で二元的な状態を表すと指摘している。任海波（2001）は、コーパス言語学の方法により、AABB 式は常用されればされるほど、AB は一語と認識され、並列式の A と B が、AABB 式になりやすいという結論を得ている。

2.1.2.4　ABAB 式形容詞重畳式に関する先行研究

ABAB 式形容詞重畳式（以下 ABAB 式と略称）についての先行研究は、主に、李凤吟

（2006）、石锓（2004）、李宇明（1996b）がある。李凤吟（2006）は、ABAB 式と AABB 式を比較し、双音節性質形容詞 ABAB 式の語義と文成分を検討する。石锓（2004）は、ABAB 式の種類、形成時期、意味の検討を通して、性質形容詞 ABAB 式の起こり及び状態形容詞 ABAB 式の形成原因を分析する。李宇明（1996b）は、二音節性質形容詞の重畳は“致使性”があり、“让/使/叫+某人+ABAB”の文型に用いられ、及び ABAB 式と AABB 式を比較し、前者は動態であり、述語に用いられ、後者は静態であり、連体修飾語、連用修飾語、補語、述語に用いることができると指摘している。

2.2　日本語の畳語形容詞および日中対照に関する先行研究

日本語の畳語に関する全般的な研究には、山田孝雄(1936)がある。山田(1936)は複合語を畳語と熟語に分け、さらに造語成分の関係を「主従関係」「一致関係」「並立関係」に分け、「人々」「山々」などの語彙は「並立関係」であり、「年々」「ちかぢか」「泣く泣く」のような副詞性の語彙は「一致関係」であると指摘する。

日本語畳語形容詞についての研究は主に文法的な意味に集中している。橋本四郎(1957)、東郷吉男(1982)は、日本語重複形容詞が情意的な意味を含むと述べるものの、その原因については深く論述されていない。吴艳（2014）は、『日中辞典』(小学館 1987)における常用畳語形容詞の 49 例を、形態素によって、分類し、音声の連濁から分析し、意味の変化を検討している。谯燕（2008）は、日本語の畳語をめぐって、語構成、意味論、統語論および日中対照の多方面から体系的に論述し、日本語の畳語形容詞はすべて「しく活用形容詞」であるとし、構成語素の歴史的発展を分析している。しかし、中日対照において、中国語の形容詞重畳式は、一般的に日本語の擬音･擬態語に対応することが指摘され、異なる品詞であるため、対照研究はできないと述べている。品詞の制限を除外すれば、翻訳の視点から中国語の形容詞重畳式と日本語の擬声･擬態語の対応関係についての研究は有意義であると考えられる。

日中形容詞重畳式の対照研究には、田梅（2014）がある。田梅（2014）は、日中形容詞重畳式の構造、意味を比較し、「畳語の形をとることによって、具体的な状況･様子を生き生きと描写する状態･感情形容詞に変わる。」と述べ、中国語のタイプは日本語より多いと指摘している。

以上見てきたように、日本語の畳語についての研究は、中国語ほど豊富ではない。日本語の畳語形容詞の研究は、形式、意味、文法機能について、まだ体系化されるに至っていないのが現状である。重ね型の日中対照研究は、十分であるとは言えないであろう。

2.3　『紅楼夢』における形容詞重畳式および日本語訳に関する先行研究

『紅楼夢』における形容詞重畳式について、潘晓(2011)は、『紅楼夢』における形容詞重畳式の AA 式、AABB 式、ABB 式、ABAB 式、ABAC 式、AAB 式、BAA 式の 7 種類、総計 303 語を抽出し、統語論の観点から分析を行い、「量」「状態」「評価」の三点から検討する。また、『醒世姻縁傳』と比較することで、『紅楼夢』に“滴溜滴溜”のような ABAB 式状態形容詞の出現を指摘する。現代中国語を比較してみると、形容詞重畳式は『紅楼夢』において、“忒”“怪”“好”などの程度副詞と共起でき、否定副詞の“非”と共起できるという顕著な差異が見られる。前八十回と後四十回を比較して、後四十回に「重畳式＋児的」のような児化音の使用例が多く出現すると指摘している。しかし、潘(2011)の挙げる“滴溜滴溜”は、状態形容詞か擬声語か、再検討の必要があると思われる。

池間里代子（2019）は、前八十回と後四十回の「畳音」「双声」「畳韻」の使用状況を比較し、「後四十回の双声がやや少ない」、「『吩咐』『嘱咐』の出現が後四十回に偏っている」、「後 80 回の方に畳語使用が多い」という結論を得て、「二書合并（続作者肯定説）」を示唆すると述べる。

『紅楼夢』における形容詞重畳式は、その日本語訳への対応に関する研究について、管見の及ぶ限り無いようである。

2.4　問題点

検討すべき課題は概ね以下の五つの点に集約できると考えられる。

（1）形容詞重畳式に関する研究は現代中国語に集中し、近代中国語を対象とする研究は体系化されていない。

（2）『紅楼夢』における形容詞重畳式の用例収集が十分ではなく、量的調査及び実証的な研究が必要とされる。

（3）『紅楼夢』おける形容詞重畳式とその日本語訳の対応、対訳研究は展開されていない状況である。

（4）『紅楼夢』各版本間および前八十回と後四十回の比較について、形容詞重畳式を通しての研究は、ほとんど行われていない。

（5）認知言語学の観点から、多数の言語に存在する重畳の言語手段として使用される動機づけが解明されていない状況である。

第三章　形容詞重畳式について

3.1　関連概念の整理

本章では、先行研究を踏まえて、形容詞重畳式に関連する形容詞の定義、分類、重言、重畳などの概念を明らかにするうえで、形容詞を再定義することにし、研究対象を明確化したいと考える。

3.1.1　形容詞の定義と分類

中国語の形容詞は、形態的特徴を欠くことから西欧語とは異なり、体系化し整理する過程は複雑であり、品詞の分類の基準をどう設けるかによって形容詞の定義、語例も異なってくる。以下に、代表的な先行研究に見られる観点を取り上げ整理することにしたい。

3.1.1.1　马建忠 1898

马建忠（1898/1998:21）は、形容詞を「静字」と述べ、「凡實字以肖事物之形者，曰静字。形者，言乎事物已有之情境也。(およそ實字で事物の形を真似るものを、靜字という。形とは、物事がすでに有する情景のことである。)」と定義している。

3.1.1.2　黎锦熙 1924

黎锦熙（1924/2007:22）は、区別詞を形容詞と副詞に分け、形容詞について、「是用来区别事物之形态、性质、数量、地位的，所以必附加于名词之上。(実体的事物の形態、性質、数量、位置を区別するために用いられるので、名詞の前に付けなければならない。)」と指摘している。

3.1.1.3　王力 1943

王力（1943/1985:12-17）は、“白马”の“白”及び“好人”の“好”を挙げ、「凡词之表示实物的德性者，叫做形容词。(およそ語の中で実物の徳性を表すものを形容詞と呼ぶ。)」と定義し、“德性”というのは、「性質」にほぼ相当する。王力（1943/1985:48-49）は、形容詞の構文機能について、描写（陳述）文の述語となることを述べている。

3.1.1.4　朱德熙 1956、朱德熙 1982、黄伯荣ほか 1991、钱乃荣 2001

2.1.1 で言及したように、朱德熙（1956）（1982）は、性質形容詞と状態形容詞の概念を設定し、性質形容詞は単純に「属性」を表し、状態形容詞は「描写性を帯びる」と説明する。黄伯荣ほか（1991/2011:12-13）、钱乃荣（2008:138-139）は、朱（1956）（1982）の分類を踏まえて、形容詞について、文法的意味の面においては、性質・状態を表し、構文機能の面においては、主に述語と連体修飾語の文成分になると指摘する。

3.1.1.5　王启龙 2003

王启龙（2003:11）は、形容詞を“一般形容词”（述語と連体修飾語にもなる形容詞）と“特殊形容词”（述語か連体修飾語だけになる形容詞）とに分け、“一般形容词”を“单纯形容词”（性質形容詞）と“复杂形容词”（状態形容詞）に分け、特殊形容詞を“非谓形容词”と“非定形容词”に分ける。

3.1.1.6　再定義

本研究は、王（2003）を踏まえて、「形容詞は属性と状態を表し、性質形容詞と状態形容詞に分けられ、すべての文成分となる。性質形容詞は程度副詞を伴い、同時に目的語を取らない。ある範囲の形容詞は重畳が可能であり、状態形容詞に属する。」と再定義することにする。

3.1.2　形容詞重畳式の定義

石锓（2010:1、3）は、李宇明（1996a）の「重畳（reduplication）」の定義を踏まえて、重ねられる以前の基礎形式を基式と呼び、重ねた新形式を重畳式と呼ぶ。基式の品詞によって、名詞重畳、動詞重畳、形容詞重畳、数量詞重畳、副詞重畳、擬声語重畳式に分けられる。重畳の完全性によって、完全重畳（AA 式、AABB 式、ABAB 式）と不完全重畳（ABB 式[痴呆呆]、AAB 式[漆漆黑]、A 里 AB 式[糊里糊涂]）に分類されると指摘する。石（2010）のように、形容詞重畳式とは、基式の品詞が形容詞であり、語構成の形式が重ね型の言語手段である。

唐作藩（2007:78）は、《中国语言文字学大辞典》で、“重叠式形容词”について、「指形容词的重叠式。(形容詞の重畳式を指す)」と定義し、「完全重畳式形容詞」と「不完全重畳式形容詞」に分類する。しかし、「不完全重畳式形容詞」には“A 里 AB 式”の一類しかないと指摘している。唐（2007）の定義では、“重叠式形容词”と“形容词重叠式”の概念が混同されていると考える。“重叠式形容词”とは、基式の品詞に拘わらず、重ね型で形容詞になることであり、“形容词重叠式”とは、基式の品詞が形容詞に拘り、重畳したことである。先行研究は、主に基式の品詞の枠で、研究対象を限定し、検討してきたのである。

“重叠式形容词”は、基式の品詞が名詞、動詞、形容詞、副詞などに及ぶ。たとえば、“鳏鳏”の基式の“鳏”は、「①一種大魚。②老而無妻。」（王力（2000）《王力古漢語字典》）という意味で、名詞の品詞である。“翦翦”の基式の“翦”は、「①割斷。②剷除。③鉸（後起義）。④姓氏。」（《王力古漢語字典》）という意味で、名詞と動詞の品詞である。

“形容词重叠式”は、基式の品詞は形容詞であるが、重畳式の品詞は必ずしも形容詞ではない。たとえば、“白白”の「④谓无代价地，无报偿地。⑤谓无缘无故地。」（汪维懋（1999）《汉语重言词词典》）という意味は、副詞の用法を表す。

張恒悦（2016:21）は、中国語の重ね型について、「品詞の枠を越えた横断的な研究の視点」を主張し、異なる品詞からなる重ね型の関係を検討する。本研究は、張（2016）を踏まえて、『紅楼夢』を言語資料として、研究対象を規定する。研究対象は、『紅楼夢』各版本における AA 式、ABB 式、AABB 式、ABAB 式であり、基式の品詞に拘わらず、重畳後に、語義と用法が形容詞に合致する重ね型である。以上の“重叠式形容词”と大体同じだが、使用習慣のため、便宜上「形容詞重畳式」という術語をそのまま用いる。

3.1.3　重言と重畳

3.1.3.1　重言の通時的研究

重言は、“迭字”“迭音词”“重语”“重文”とも称されるが、実質的には古代中国語の重畳である。[5] 重言という概念は、東漢·許慎（約 58～約 147）の《說文解字》（卷二上）に「䨻，呼雞重言之。从凵州聲。讀若祝。之六切。」[6] とある。段玉裁（1735～1815）の

---

[5] 石锓（2010:9-10）《汉语形容词重叠形式的历史发展》商务印书馆.

[6] ［東漢］許慎　撰（2012:35）《说文解字》影印本 浙江古籍出版社.

《说文解字注》に「當云𠀤𠀤，呼雞重言之也。（中略）雞聲𠀤𠀤。故人效其聲訝之。」[7]とある。許慎と段玉裁は、“重言”という術語を使い、段は“𠀤𠀤”という重ね型を例示する。人が鶏鳴に倣って、鶏を呼ぶ擬声語であることが分かる。

《爾雅》（釋訓　第三）[8]に、重ね型の項目が76ある。意味による同義語は、同一の項目に編集しており、たとえば、“明明，斤斤，察也。”そのため、AABB 式の子子孫孫を除き、AA 重ね型の語例は142ある。また、郭璞[9]の注は、“綽綽、爰爰，緩也。”の項目について、次のようにいう。

“皆寛緩也。悠悠、偁偁、丕丕、簡簡、存存、懋懋、庸庸、綽綽，盡重語。”

このように、《爾雅》にすでに AA 式重ね型を収録し、郭璞はこれらの AA 式重ね型を“重語”と呼ぶ。

明·楊慎（1488～1559）撰《古音複字》五巻[10]には、AA 式重ね型を専ら収録する。異体字は同一の項目に収めており、たとえば、“芊芊”、“仟仟”、“裕裕”は異体字として、同一の項目に置かれる。同書は、AA 式重ね型を“複字”と呼び、五巻に AA 式重ね型を430項目収める。

明·方以智（1611～1671）撰《通雅》五十二巻[11]は、釋詁、天文、地理、算数、植物、官制、礼儀等を含む百科全書的著作である。「釋詁」（巻之九）（巻之十）では、「重言」という題目で重ね型を包括する。同書巻之九の冒頭に、「取其同聲而鈔之。未有所發明是正也。古人多通而疊聲形容尤通。此其重言之原原乎。」とある。同書は、畳声の語彙を「重言」とする。異体字は《古音複字》と同じく同一の項目に収めている。たとえば、「慿慿、譝譝、繩繩、承承相通。」とある。

清·史夢蘭（1813～1898）撰《疊雅》[12]（巻十三）は、重言詞を収録し、項目数は559に達する。自序に、「字異而義同則彙歸一部，文同而解異則別立一條。」とある。同義語は同一の項目に収め、一語で解釈する。たとえば、“遼遼、遙遙、邈邈（貌貌、藐藐）、渺渺（眇眇）、悠悠（攸攸）、迢迢、怊怊、逴逴、翹翹、芒芒（茫茫）、迥迥、緜緜、懸懸、亭亭、苕苕、杳杳，遠也。”の如くである。自序にはまた、「惟是形容之妙，每用重言；名物之稱，尤多複字。」とある。同書は“重言”“複字”の術語を使用し、重ね型の品詞は主に形容詞と名詞に属すると説明する。《疊雅》（巻十）では、動作を表す畳語を挙げて、《疊雅》（巻十一）では、擬声語の畳語を挙げる。

このように、清代以前においては、“重言”のほかに、“重語”“複字”などの呼び方が行われており、《爾雅》、《古音複字》、《通雅》、《疊雅》などの書に AA 式重言が収録されており、《疊雅》の語例が559と最も多い。

清代以降、AA 式重ね型は“重言词”、“叠音词”、“叠字”などと称されている。赵克勤（1987:73）は、「重言词由两个相同的汉字重叠组成，都是实词，并有具体的词汇意义。」（重言詞は二つの同じ漢字から重畳したものである。共に実詞であり、かつ具体的な語彙意味を有する。）」と指摘する。向熹（1993:411）、郭珑（2000）は、重言詞について、二つ同じ音節の重畳からなる双音詞であり、“叠音词”と称すると指摘する。吕叔湘（1942/2002:9）は、「叠字就是前人所谓的“重言”。（畳字はすなわち古人のいう「重言」である。）」と指摘する。

以上見てきたように、重言についての命名は多岐にわたり統一されておらず、重言の

---

7) ［漢］許慎　撰［清］段玉裁　注（1981/1988:63）《说文解字注》上海古籍出版社.

8) ［晉］郭璞　注［宋］邢昺　疏（2010）《爾雅注疏》上海古籍出版社.

9) 「［晉］郭璞　注［宋］邢昺　疏（2010：180）《爾雅注疏》上海古籍出版社」から引用する。

10) ［明］楊慎　撰 李調元　校定（1985）《五色線 古音駢字 古音複字》叢書集成初編 中華書局.

11) ［明］方以智　著（1990）《通雅》中国书店影印 据清康熙姚文燮浮山此藏轩刻本影印.

12) ［清］史夢蘭　原著 高光新　點校(2015)《疊雅》史夢蘭集三 天津古籍出版社.

基式に、音節、形態素、字などがあり、明確な区別を行うことは出来なく、主に重畳してから AA 式になることを指す。

3.1.3.2　重言と重畳の区別

重言は主に AA 式に集中し、本節では、AA 式の重言と重畳を区別していく。汪维懋（1999:1）は、重言を狭義と広義に分ける。狭義の重言は、同じ単音節の形態素からなる単純語であり、たとえば、“潺潺、霏霏、耿耿”などであるとする。広義の重言は、狭義の重言のほかに、同じ単音節語からなる双音節語であり、たとえば、“飒飒、区区、青青”などであるとする。

AA 式の A は漢字一文字とし、漢字の性質から音節、形態素、語（単語）に分けることとする。

石锓（2010:1）は、“猩猩、蛐蛐、飕飕、飒飒”を例として挙げ、音節の重畳により一語となるものを“叠音”とも呼び、“蒙蒙、霏霏、堂堂、茫茫”の例を挙げて、形態素の重畳からなる重ね型であり、“红红”は、語（単語）からなる重ね型であると述べる。

吕叔湘（1942/2002:9）は、畳字は、前人のいわゆる「重言」であり、形容詞において最も多く、二種類に分けられるという。重畳しないと使えない語は第一類に、重畳しなくても使える語は第二類とする。“翩翩、盈盈、巍巍、累累、喋喋、津津、孜孜、喃喃、诺诺、谔谔、熙熙、攘攘”などが第一類の語であり、“缓缓、密密”などが第二類の語であると述べる。これは現代中国語の共時的観点から導き出された結果である。通時的観点からみると、“翩”は、先秦の《诗经》で語として用いられている。例えば、“翩彼飛鴞，集於泮林。”（フクロウ　空高く飛んで　泮水の岸辺の林に集まる。[13]）《诗经》（鲁颂·泮水）《毛詩詁訓傳》では、“翩，飛貌。”と解釈する。両者の区別について、石锓（2010:34）によると、“翩翩、孜孜、盈盈”などは、単音節状態形容詞の“翩”、“孜”、“盈”からなる重畳式であり、“缓缓、密密”などは、単音節性質形容詞の“缓”、“密”からなる重畳式であると考えている。

本研究は、吕（1942/2002）、石（2010）の分類を踏襲し、第一類を「AA 式重言」といい、第二類を「AA 式重畳」と称する。

3.2　形容詞重畳式の特徴

3.2.1　描写性

李劲荣（2014:65）は、「形容词重叠式表示描绘摹状的意义一直是学界的共识。（形容詞重畳式は、状態を描写することを表す。これはすでに学界共通の認識である。）」と指摘している。描写について、《现代汉语词典》（第 7 版）906 頁で「用语言文字等把事物的形象或客观的事实表现出来。（言語文字を用いて、事物の形象または客観的な事実を表現する。）」と定義する。古代中国語の AA 式重言は、西周金文で少数用いられ、《诗经》で顕著に発達を見せ、文献上最も早く出現した重ね型として、南朝梁代·劉勰の《文心雕龍》に注目される。

劉勰は、《文心雕龍》（卷第十·物色　第四十六）の中で、《诗经》の重言について、次のようにいう。[14]

是以詩人感物、聯類不窮。流連萬象之際、沈吟視聽之區。寫氣圖貌、既隨物以宛轉、

---

[13] 日本語訳は「程俊英 蒋见元　今译 松岡栄志　日译（2015）《诗经》大中华文庫 汉日对照　外文出版社」から引用する。

[14] 「戸田浩曉（1978:620）『文心雕龍』下　新釈漢文大系 65. 明治書院.」から引用する。

屬采附聲、亦與心而徘徊。故灼灼狀桃花之鮮、依依盡楊柳之貌、杲杲為日出之容、瀌瀌擬雨雪之狀、喈喈逐黃鳥之聲、喓喓學草蟲之韻、皎日嘒星、一言窮理、參差沃若、兩字窮形。並以少總多、情貌無遺矣。

（是を以て詩人の物に感ずる、類を聯ねて窮らず。萬象の際に流連し、視聽の區に沈吟す。氣を寫し貌を圖けば、既に物に隨つて以て宛轉し、采を屬し聲を附すれば、亦心と與に徘徊す。故に灼灼は桃花の鮮かなるを狀べ、依依は楊柳の貌を盡くし、杲杲は出日の容を為し、瀌瀌は雪を雨らすの狀に擬し、喈喈は黃鳥の聲を逐ひ、喓喓は草蟲の韻を學び、皎日·嘒星は、一言にして理を窮め、參差·沃若は、兩字にして形を窮む。並に少を以て多を總べ、情貌遺す無し。）

王运熙ほか（1998:414）は、物色篇について、文学と自然の風物の関係を論述し、『詩経』の作者は風物をよく観察し、簡にして要を得たことばで豊富な自然を表すと指摘している。すなわち、自然の風物を修飾する場合、簡潔にまとめると、重言が使用される。たとえば、“灼灼”“依依”“杲杲”“瀌瀌”などがその例であり、“喈喈”“喓喓”は中国語の“象声词”で、日本語の擬声語に対応する。“参差”は“双声”で、“沃若”は、接尾辞の“若”を添えるものである。《文心雕龍》（卷第十·物色　第四十六）は、これらの言葉の文法的な意味を「情貌」であると指摘し、「寫氣圖貌、既隨物以宛轉。（風物の気勢と情状を描写する時、すでに物に随い変化できる。）」と述べる。石锓（2010:70）は、現代中国語で表現すれば、「描摹事物的各种状态。（事物の各種の状態を描写する）」と指摘する。

このように、古代中国語では、重言は発展を遂げ、高い描写性をその特徴とする。現代における研究者は、重言を含む形容詞重畳式について、描写性が高いと述べる。たとえば、王力（1943/1985）、吕叔湘（1980/1991）、朱德熙（1956/1999；1982）、俞稔生（2007）、石锓（2010:287）、李劲荣（2014:72、88）などである。

以下に、主に王力（1943/1985）、吕叔湘（1980/1991）を取り挙げる。

王力（1943／1985:298）は、畳語の語彙手段を、修辞学のレベルで捉え、“拟声法”と“绘景法”の修辞手段に位置付け、「绘景法是使所陈说的情景历历如绘。（繪景法は、陳述する情景を生き生きと、絵のようにさせることである。）」と指摘する。吕叔湘（1980/1991:716）は、形容詞重畳式を“生动形式”と言い、いきいきとした表現の効果をもたらすと述べられる。

以下に、『紅楼夢』における形容詞重畳式の例文を挙げて、説明してみよう。

8) 小燕接着揭开，里面是一碗虾丸鸡皮汤，又是一碗酒酿清蒸鸭子，一碟腌的胭脂鹅脯，还有一碟四个奶油松瓤卷酥，并一大碗热腾腾碧荧荧蒸的绿畦香稻粳米饭。（第62回:p.858）

（小燕が受け取って蓋を取ってみますと、なかには、蝦丸鶏皮湯（蝦団子入りの鶏の血を凝らせたもののスープ）が一碗、それと酒蒸しの家鴨が一碗、塩づけの胭脂色をした鵝鳥の脯が一皿、ほかに奶油を使った松の実入りの捲酥（松の実・落花生・胡麻などをつぶして捲きこんだやわらかいクッキー風の菓子）四個を盛った一皿、それからほかほかと碧光りがしておいしそうに蒸し上がった香ばしい梗米のご飯を盛った丼が一つはいっています。）（第62回:p.93）

例 8）では、“热腾腾”は「①形容热气蒸腾的样子。（湯気が立ち上るようすを形容する。）」（张美兰（2001）《近代汉语后缀形容词词典》）という意味で、“碧荧荧”は「形容

颜色碧绿而有微弱光亮的样子。(色が緑かつ微弱な光があるようすを形容する。)」(《近代汉语后缀形容词词典》)という意味である。“热腾腾”は、熱いという感覚よりは、むしろ食品が出来立てで湯気が立っている様子を表し、ほかほかの感じを与える。“碧荧荧”は、「緑」より、きらきら美しく輝く緑を感じさせる。ABB 式は、描写する対象が宛も目の前に存在し、事態が起こっているかのように描く表現手段であり、「臨場感」を伴う。

張恒悦（2016:3）は、「ビビッド性」と「描写性」について、「即ち形容詞の重ね型によって喚起される、ありありと目の前にあるような臨場感あふれる非概念的イメージの生成である。」と指摘している。

3.2.2　量

朱德熙（1956/1999:3）は、「乙类成分表示的属性都跟一种量的观念或是说话的人对于这种属性的主观估计作用发生联系。(乙類成分が表す属性は、どれも一種の量的な観念または話し手のこの属性に対する主観的な評価作用と関連している。)」と述べる。この“乙类成分”は、形容詞重畳式を指す。

李宇明（1996a:11）は「词语重叠是一种表达量变化的语法手段，“调量”是词语重叠的最基本的语法意义。(語彙の重畳は、量の変化を表す文法的手段であり、「調量」は語彙重畳の基本的な文法的意味である。)」と指摘している。

张国宪（2000:448）は、量幅と量点について、「量幅和量点的判别可以用程度词来测定，能与程度词组配的形容词具有量幅特征，反之只有量点的特征。(量幅と量点の判別は、程度語を用いて判断することができ、程度語と組み合わせられる形容詞は量幅の特徴を持ち、その逆は量点の特徴のみを持つ。)」と指摘している。

時衛國（2009:90）は、「通常、物事の程度性を測定するには、常識的には、ある価値尺度軸が想定され、その基点から極点までの間に無数のランクがあり、程度の高低、大小が細かに標示される。」と指摘している。

これらの程度副詞が尺度にどう位置するかは、おおよその見当であり、具体的な数値に対応させることはできない。仮に極点と基準点を決め、程度副詞の大体の位置を示す。例えば「高い」という例を挙げると、中国北方地方の成人男性として、1.8 メートルは“很高”と見なし、1.79 メートルは“很高”と見なさないか。“很高”は漠然たる概念なので、明確な点に位置付けることはできない。「高」の“量幅”に“很高”の量点を表すとともに、“很高”自身の中に一定の“量幅”を含んでいる。“很高”は、具体的な数字に対応せず、社会と個人基準によって、1.75 メートルから 1.8 メートルまでも、“很高”の範囲に含まれる可能性がある。具体的に図 1 で示したものである。

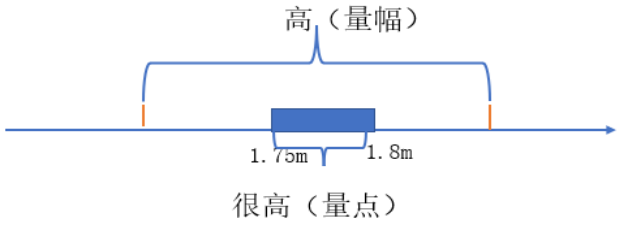


図 1　量幅と量点

“量幅”と“量点”の特徴から、性質形容詞は、程度副詞と共起でき、“量幅”を有し、状態形容詞は、程度副詞と共起できず、“量点”を有する。

沈家煊（1995:376）は、「有界」と「無界」を、性質形容詞と状態形容詞の区別の基準

と見なし、性質形容詞の「白」を例として、“雪白”も“灰白”も、白い概念に属し、「白」というのは、各種の程度の「白」の集まりで、“量幅”あるいは「無界」を表し、“雪白”と“灰白”は“量幅”の中の一つの段階（量段）あるいは一つの点（量点）を表すと指摘している。

以上に論述したように、形容詞重畳式は程度副詞と共起しにくく、形容詞重畳式の程度量が尺度軸に占める位置を想定すれば、ある位置を固定するが、どのような具体的位置であるかについては、観察者の個人的な基準か集団の基準によって、異なる可能性がある。たとえば、“高高的鼻子”を挙げて、必ず一定の高い「量」を表し、尺度軸に位置づける。しかし、具体的にどの位置をつけるのか、概ね話者の認知基準あるいは社会の共通の認知によって、決まる。

すなわち、形容詞重畳式は量点を表し、定量化手段と見なされる。根拠として、形容詞重畳式は程度副詞と共起にくいことがある。形容詞重畳式は、ある量点を固定するため、程度副詞で量を表す必要がないと考えられる。

しかし、すべての形容詞重畳式が量を表すかについては、再検討の必要があると考える。たとえば、“白白”、“高高”などは、尺度軸に一定の位置を占め、量を表すが、これに対して、“飘飘”、“楚楚”などは尺度軸に位置を占めるのが判断しにくい。“白白”、“高高”は性質形容詞の重畳式であり、“飘飘”、“楚楚”などは重言である。前者は、性質形容詞の特徴を残し、一定の量を表すが、後者は状態を表し、一定の量を表さないと言える。

3.2.3　主観性

3.2.3.1　主観性の定義

Langacker,R.W（1987/2004:491、493）の「主観的（Subjective）」の定義について、「An entity is subjective to the extent that its role as observer is maximized, and its role as object of observation is minimized.（一つの実体（entity）が主観的であるとは、観察者の役割が最大化され、観察対象の役割が最小化される事態である。）」と指摘している。実際に、個人の発話には、程度の差はあるものの主観性が認められ、主観と客観は相対的概念であり、便宜上、主観の認知作用が最大化することは主観と見なされ、主観の認知作用が最低の状況にあることは、客観であると見なされる。

辻幸夫（2013:159）は、Langacker のステージ･モデルの理論を、以下のようにまとめる。

ステージ･モデルにおいて、認知主体がオフ･ステージに位置し、自己とは明瞭に区別されたオン･ステージ上の認知客体に注意を向けるとき、認識主体と認識客体はそれぞれ最大限に「主体/客体として把握」される（subjectively/objectively construed）。これに対して、認識主体がオン･ステージ上の認知客体との結びつきを強めるにつれ、主体/客体の非対称性が弱まり、話し手が認識主体として把握される度合いである「主体性」が減少する。

池上嘉彦（2008:3）は、「主観的把握」について、「話者が問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする場合。実際には話者が問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする。」と指摘している。以上の「主観性」は、観察者ないし話者の参与度を基に把握されている。

一方、Traugott（1995:31）は、「主観化」とは「意味が命題に対する話し手の主観的信念

/態度に根ざすようになるプロセス」[15] であると定義する。沈家煊（2001:268）は、Lyons（1977:739）の観点を参照し、「“主观化”（subjectivity）是指语言的这样一种特性，即在话语中多多少少总是含有说话人“自我”的表现成分。也就是说，说话人在说出一段话的同时表明自己对这段话的立场、态度和感情，从而在话语中留下自我的印记。（「主観化」とは、言語の次のような特性を指す。すなわち、言葉に多かれ少なかれ話者の「自我」の表現成分を含む。つまり、話し手はあるまとまりのある一区切りを話す時、同時に自己のその話に対する立場、態度、感情を表明し、それによってその言葉に自我の印を残すのである。）」と定義する。蒋静忠（2018:28）は、“主观量”と称し、「在对客观事物、事件的量进行表达时，附加上说话人的主观评价、情感、态度。（客観的事物、事件の量を表現する時、話し手の主観的な評価、感情、態度を付け加える。）」と定義する。これらは、観察者の態度と評価から「主観性」を把握するものである。

言語表現の「主観性」のプロセスをまとめれば、それは、観察者（話者）の体験から認識し、自身の立場による参与度を決めて、把握するプロセスである。認知する過程に観察者の自身の態度、感情を引き込んで、評価を表す。

3.2.3.2　参与度

沈家煊（2001:270）は、形容詞重畳式は比較的に主観的な感情色彩を帯び、これは周知の言語事実であると指摘している。参与度から見れば、小野秀樹（2004:59）は、「AA 的 N 型」は「眼前の N の本来の姿を見たまま」に伝える表現形式であり、成立させる条件は外見上、視覚的に捉えられるものであると指摘している。

AA 式形容詞重畳式という表現形式を用いて、観察者（話者）は観察対象を視覚的に捉え、身体の体験性を直感的なものとして伝える。観察者の「臨場感」を伴い、参与度も高いため、主観性も高いと見なされる。また、もし観察者（話者）が現場に居なくても、形容詞重畳式の言語手段を使えば、話者（観察者）は、以前の体験を通して想像し、描写する対象が宛も目の前に存在するかのように描く効用があり、主観性も高いと見なされる。

3.2.3.3　評価

「評価」について、『広辞苑』（第 5 版）2275 頁では、「②善悪· 美醜· 優劣などの価値を判じ定めること。特に、高く価値を定めること。」と解釈する。朱德熙（1956/1999:35）は、重畳式が連体修飾語と述語の文成分として、“爱抚、亲热（愛撫、親密）”という語感があると指摘している。プラス評価かマイナス評価か、人によって異なりがあるので、主観性が高く、判断しにくい。したがって、参考量と期待量の概念を援用し説明する。

参考量は、比較のプロセスに必要な要素として用いられる。

Langacker（1987/2004:102）は、比較について、S>T という形式で示す。S は比較の基準（standard）であり、T は比較のターゲット（target）である。S は、基準の参考点として、T は S を参考にして評価される。両方を接続する動作「>」を「スキャン」と呼ぶ。「スキャン」という用語は、動作の方向性を反映し、S から T までの移動と見なす。T の値は S から外れる程度次第だと指摘している。比較には、S が必要で、S から外れる程度によって、T の値を決める。比較のプロセスは、参考点が必要な要素と見なされ、参考点の量を参考量という。

李善熙（2003:18）は、期待量について、「当参照量是说话人所期待的一个量、或说话

---

[15] 「辻　幸夫（2013:160）『新編　認知言語学キーワード事典』」　から引用する。

人认为听话人所期待的一个量时，我们称这个参照量为期待量，期待量带有主观性。(参照量は話し手が期待する量である時、または話し手が、聞き手が期待する一つの量であると思っている場合、私達はこの参照量を期待量と呼ぶ。期待量は主観性を有する。)」と指摘している。この場合、参考量が期待量を超える場合、プラス評価と見なされ、参考量が期待量に達しない場合、マイナス評価と見なされる。「プラス評価」、「マイナス評価」は、いずれも観察者の主観の感情と態度を帯びる。期待量を超えるか及ばないかは、主観的な基準によって判断される。

形容詞重畳式は、その時だけの状況、その人だけの状況を表し、「臨場感」を伴っていることから、恒常性の特徴をもっておらず、比較の基準は主観的な期待量であるため、主観的評価を表す。

以上から、形容詞重畳式は、観察者（話者）の主観から認知せざるをえず、主観によって表現する。

3.2.3.4　形容詞重畳式の主観性

性質形容詞は、たとえば、“高”“低”“大”“小”のように、事物の属性を表す。“高山”、“大河”などは誰が見ても、山は高く、川は広い。このように考えれば、個人の主観的認識から独立して存在し、属性を表す性質形容詞は、客観的表現である。しかし、主観と客観は相対的な概念であり、「高い山」は何メートル以上の山のことを言うか、客観的な基準が決まっているわけではなく、主観的な面も多分に有している。

形容詞の重畳式は、その時の（一回性の）性状を描写し、リアルタイムで観察者の感覚器官を通して、そのままの情景と特定の事象を描写する。形容詞重畳式は、話者の主観的な体験から認知し、表現する。

形容詞重畳式の主観性は言語に表現すれば、比較文に入れにくいことで説明できると考える。

（1）対義語が存在しないこと。

性質形容詞を比較文に入れることは、対義語が存在することを前提とする。たとえば、高－低、老―少、大―小などの相対的関係が存在する。これに対して、たとえば、“高高”の対義語は“低低”ではなく、対義関係が想定しにくいため、比較文に入れにくいと考える。

（2）比較の基準は主観的なこと。

以上論述したように、形容詞重畳式は主観性が高く、この評価の「プラス」と「マイナス」の判断は、参考量と期待量を比較した結果によって判断される。基準としての期待量はそれ自体主観性が高いため、形容詞重畳式の評価も主観性が高いのである。形容詞重畳式は、客観性が低く、主観的な描写･表現に用いる可能性が高く、比較しても、比較の差が数値化しにくいため、比較文に入れにくい原因と考える。

3.3　基式と重畳式の意味関係

基式と重畳式の関係は、意味の分析を行い、解明する。意味の面で、両者の意味の拡張のプロセスを問うことをせず、辞典に記述される項目について比較する。

李宇明（2000:330）は、重畳式の意味を判断する方法について、基式と重畳式の意味を比較し、両者の異なりが重畳の意味と見なされると指摘している。形容詞重畳式の基式と重畳式の関係を、意味の面で総括してみると、以下の分離･独立のタイプ、一部融合のタイプ、包含のタイプに分けられる。

（1）分離·独立のタイプ

このタイプについて、基式と重畳式は意味の面で、つながりがない。以下に『紅楼夢』における例文を挙げる。

9) 翦翦舞随腰。煮芋成新赏，（第 50 回:p.670）

（ひらひら舞いて腰にしたごう 今更にながめ賞でつつ芋を煮て）（第 50 回:p.343）

例 9）では、“翦翦”は「形容风轻而带寒意。（軽くて肌寒い風を形容する。）[16]」という意味である。“翦”の意味は、「①割断。②剷除。③鉸（後起義）。④姓氏。」（《王力古漢語字典》）である。基式の意味はどの項目でも重畳式の意味とつながりがないと窺える。

（2）一部融合のタイプ

一部融合のタイプは、基式と重畳式の意味が一部共用されることである。

10)纤腰之楚楚兮，回风舞雪，珠翠之辉辉兮，满额鹅黄。（第 5 回:p.72　例 7）の再掲）

（柳腰なよなよとして、風雪をも舞わしめ、飾り珠きららきららと、照りまさる額のつややかさ。）（第 5 回:p.156）

11)凤丫头就是楚霸王，也得这两只膀子好举千斤鼎。（第 39 回:p.520）

（それと同様、鳳ちゃんを楚の覇王（項羽のこと。秦末漢初の英雄）に見立てたとしても、この両の腕がないことには、千斤からある鼎をらくらくと持ち挙げることもできない相談。）（第 39 回:p.309）

楚楚:①鮮明華美貌。②茂盛貌。③淒苦貌。（《王力古漢語字典》）

楚:①樹名，落葉灌木，即牡荊。②責罰人用的箠杖。③痛苦。④排列整齊貌。⑤鮮艶，華美。⑥粗俗。⑦戰國七雄之一，楚國。（《王力古漢語字典》）

辞典の項目から、重畳式の“楚楚”の第一項目と基式の“楚”の第五項目の意味は同じであり、一部融合のタイプに属する。例 10）について、第 5 回に「原义为鲜明整洁的样子，这里作纤细秀美解。（本来の意味は鮮やかでさっぱりした様子だが、ここでは繊細に美しい姿と解釈している。）[17]」という注がある。例 11）は、“楚國”の意味を表す。

（3）包含のタイプ

包含のタイプは、基式の意味は、重畳式の意味をカバーすることである。

12)只见他里头穿着一件半新的靠色三镶领袖秋香色盘金五色绣龙窄裉小袖掩衿银鼠短袄，里面短短的一件水红妆缎狐肷褶子，腰里紧紧束着一条蝴蝶结子长穗五色宫绦，脚下也穿着麂皮小靴，越显的蜂腰猿背，鹤势螂形。（第 49 回:pp.661-662）

（見れば彼女、その中には領と袖とに三色の縁どりを施し、秋香色の地に金糸と五色の糸とでもって竜をぬいとった、褄がせまく袖が小さく、腋の下で、鈕をかける式の、銀鼠の毛皮裏の短い中古上着を着て、その下にはごく短い水紅色の緞子に狐の腋毛皮を裏にした褶子（乗馬服）を着こみ、腰に蝶結びと長い総飾りとをつけた宮中製の五色の組紐をきっちりしめ、足には鹿皮製の華奢な長靴をはいているとあって、これではどう見ても、腰つきは蜂のよう、背の曲げぐあいは猿を思わせ、さながら鶴か螳螂かといったところです。）（第 49 回:p.323）

---

[16] 「（前八十回） 曹雪芹 著 （后四十回）无名氏 续 程伟元 高鹗 整理（2008）《红楼梦》人民文学出版社」の注に拠る。

[17] 同上。

短短：时间、空间相距很短。(《汉语重言词词典》)
短："長"的反義詞。(《王力古漢語字典》)
"短"と"短短"の意味関係は、基式の"短"の意味が、重畳式の"短短"の意味を含んでいると見なされる。
以上の三種類は、具体的に以下の図 2 で示したものである。

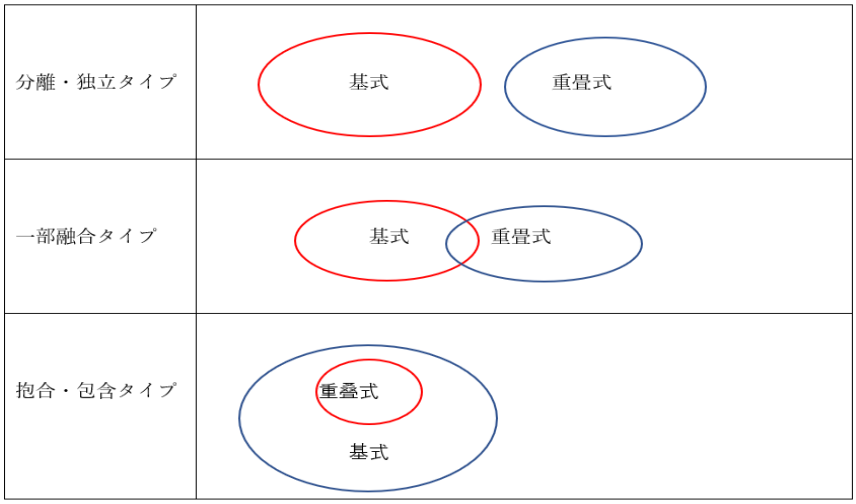


図 2　基式と重畳式の意味関係

分離·独立のタイプとは、基式と重畳式が意味の上で繋がりがないことがわかる。石锓（2010:58）は、「确定某重言词的基式是否独用，以基式和重言词的意义相同相近为准。仅仅是字形相同而意义上没有联系的，不是重叠关系。(ある重言詞の基式が単独に使用されるか否かの判断は、基式と重畳式が同義·類義意味を持つという事実に基づいて行われる。字形が同じで、意味に繋がりがないものは、重畳の関係とは言えない。)」と述べる。
よって、第一類の分離·独立のタイプは、ほぼ AA 式重言であり、基式と重畳式が意味の上でつながりがないため、重畳の関係と見なされない。第二類と第三類は重畳の関係と見なされる。第三類では、基式は主に単音節の性質形容詞である。朱德熙（1956/1999:23）は、双音節の形容詞は一般的に乙類成分（状態形容詞）の性質を帯びると指摘している。すなわち、双音節の形容詞は、性質形容詞と状態形容詞のグレーゾーンに位置することになる。したがって、基式と重畳式の意味関係を考察する際、基式が双音節形容詞の語例は除く。

3.4　まとめ

本章では、形容詞の定義と分類に関する先行研究を踏まえて、研究対象を規定し、形容詞を再定義する。通時的観点から、古代中国語の重言をまとめ、重言と重畳を区別した。さらに、形容詞重畳式の描写性、量、主観性の三つの特徴を説明した。
(1) 形容詞重畳式は、描写性を表す言語手段であった。
(2) 形容詞重畳式は定量化手段として、量点を表した。
(3) 参与度と評価から、形容詞重畳式は主観性が高いと見なされた。
また、AA 式を対象として、基式と重畳式が意味上の関係を解明し、分離·独立のタイプ、融合のタイプ、包含のタイプの三種類に分けた。

第四章『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式

本章では、『紅楼夢』前八十回[18]を言語資料として、主に AA 式、ABB 式、AABB 式、ABAB 式のパターンを研究対象とする、それらを統計的に処理し、それぞれ語構成、文成分から考察し、意味の共通点を検討する。第三章では、形容詞重畳式を基式の品詞に拘わらず、重畳後に、語義と用法が形容詞に合致する重ね型と規定した。これに基づき、『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式の特徴をさらに詳しく分析する。

4.1　『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式

4.1.1　統計研究

『紅楼夢』の庚辰本は比較的に完備している唯一の版本であるため、主に庚辰本を考察し、ほかの版本を参考にする。庚辰本は二回が失われたため、具体的な語例は、庚辰本を底本とする人民文学出版社刊（2008）に拠る。『紅楼夢』前八十回における AA 式は、異なり語数が 132 で、延べ語数が 542 である。AA 式の中で、使用頻度が最も高いのは“好好”であり、58 回に達する。次は“细细”の 53 回、“忙忙”の 41 回、“慢慢”の 39 回、“小小”の 18 回である。AA 式重畳式は使用頻度が高く、AA 式重言が概ね一回のみ使用される。AA 式が研究対象に属するか否は、『紅楼夢』においての意味と用法によって、判断される。

例えば、“白白”は、「①谓显其明者。②形容颜色很白，洁白。③朱朱或赤赤、红红与“～～”连用。④谓无代价地，无报偿地。⑤谓无缘无故地。⑥谓轻易地；自由自在地。⑦谓没有效果；徒然。⑧形容清楚，确实。」（《汉语重言词词典》）という意味である。①②⑧の項目は形容詞の用法で、④⑤⑥⑦の項目は副詞の用法である。『紅楼夢』における“白白”の例文を挙げる。

13)雨村听了大怒道：“岂有这样放屁的事！打死人命就白白的走了，再拿不来的！”（第 4 回:p.56）
（雨村はこれを聞いていたく立腹し、「おのれ、さような野放図なことが許されてよいものか！人をなぐり殺しおったやつばらをむざと逃亡させておきながら、召捕れずにおるとはもってのほか……」）（第 4 回:p.124）

14)如今我又吃不着奶了，白白的养着祖宗作什么！（第 8 回:p.127）
（いまもうわたしだって乳を飲むのは卒業したというのに、そんな役にも立たない手合いなんかお祖母さま扱いして養っておいたところでなんになるのだ？）（第 8 回:p.300）

15)林黛玉听他这话，便知他心里动了疑，忙又笑道：“好没意思，白白的说什么誓？管你什么金什么玉的呢！”（第 28 回:p.389）
（黛玉は彼のこのことばを聞いて、彼が気を廻したのだと覚り、急に笑顔をつくって、「なんとつまらないことを……。そんな誓いなど口になさったところでせんないことですわ。あなたと金だの玉だのということに、なにかかわりがございまして？」）（第 28 回:p.311）

16)不然，你则白白的丧命，且无人怜惜。（第 69 回:pp.957-958）

---

[18]「（前八十回） 曹雪芹著 （后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008）《红楼梦》人民文学出版社」をテキストとする。

（さもないと、むざむざ命を落とすばかりか、あなたをあわれと思ってくれる人すらいなくなってしまうでしょうよ）（第 69 回:pp.375-376）

17)因说：“白白的只管乱射，终无裨益，不但不能长进，而且坏了式样，必须立个罚约，赌个利物，大家才有勉力之心。”（第 75 回:p.1046）

(それもただやたらと射たところで結局大してためにもならず、腕も上がらぬのみか、型が崩れてしまおう、ここはどうしても罰則をこしらえ景品でも賭けぬことにはやる気が出まい、というわけで)（第 75 回:p.208）

例 13）では、“⑥谓轻易地；自由自在地。”という意味で、例 14)、16)、17）では、“⑦谓没有效果；徒然。”という意味で、例 15)では、“⑤谓无缘无故地。”という意味である。“白白”の“没有效果；徒然”という意味は、“满語：baibi”[19] に由来する。『紅楼夢』における“白白”は、すべて動詞を修飾する連用修飾語になり、副詞の用法で使用されるため、本研究の形容詞重畳式の研究対象と見なされない。具体的な語例は文末に付録表 1 で示したものである。

4.1.2　語構成

4.1.2.1 基式と重畳式の品詞について

本研究は、基式の品詞の枠を越えており、基式の品詞に拘わらず、重畳式の品詞が形容詞に合致するものが研究対象である。よって、基式の品詞は形容詞だけではなく、動詞、名詞、副詞の場合もある。たとえば、

18)泪光点点，娇喘微微。（第 3 回:p.49）

（涙の光りて点々と、嬌な喘ぎもかそかにて）（第 3 回:p.112）

点：①小黑點。②漢字的筆畫，、稱作點。③液體小點。④核檢，指派。⑤一觸即離或向下微動的動作。⑥燃火。⑦更點。⑧節拍。（《王力古漢語字典》）

点点：①形容零散；也形容小而多或连续不断。②深沉貌。（《汉语重言词词典》）

微：①小，細，少。②衰敗。③卑賤。④幽深，精妙。⑤隱匿。⑥暗中察訪。⑦非。（《王力古漢語字典》）

微微：①微贱；渺小；幼小。②幽静貌。③烟雨迷茫貌。④衰微；衰弱。⑤轻微；稍微。⑥隐约、淡远貌。⑦微笑的样子。（《汉语重言词词典》）

例 18）では、“点点”の基式“点”は、名詞か動詞であり、基式からなる重畳式の“点点”は、形容詞である。“微微”の基式は、形容詞か動詞であり、基式からなる重畳式は形容詞である。

『紅楼夢』における形容詞重畳式は、基式の品詞は形容詞、動詞、名詞などに及び、重畳してから、形容詞の用法で使用される。

4.1.2.2　基式の独用について

先述した 3.1.3.2 で言及したように、AA 式は重言と重畳に分けられる。石锓（2010）は、重言の基式は単音節状態形容詞であるが、もし基式と重畳式に意味の上でつながりがない場合、重畳式と見なされず、基式の独用性がないと指摘している。この基準を基づき、『紅楼夢』における形容詞重畳式の基式で単独に使用できない語例を挙げる。

たとえば、3.1.2 の“鳏鳏”“翦翦”の場合は、基式と重畳式が、意味の上でつながり

[19] 刘正埮ほか（1984:33）《汉语外来词词典》上海辞書出版社.

がないため、基式が単独に使用できないと認められない。もう一つの例を挙げる。

19)秋霖脉脉，阴晴不定，那天渐渐的黄昏，且阴的沉黑，兼着那雨滴竹梢，更觉凄凉。（第 45 回:p.607）
（秋の長雨はしとしとしとしと、降りみ降らずみの定めなさ。その日も次第に黄昏れて、曇り空の暗さは暗し、かてて加えてその雨の、笹の葉にしたたるさまは、凄涼の感をいや増すばかり。）（第 45 回:p.180）

脉脉：①凝视貌。②形容满怀深情，并默默地用眼神表达情意。③犹默默。形容无声无息或有言不得吐。④连续不绝貌。（《汉语重言词词典》）
脉：mo という読み方の項目は字典に収録されていないようである。
基式が単独に使用できない語例は、概ね重言である。基式と重畳式は意味の上で繋がりがないため、基式の単独に使用できず、3.3 で言及した分離のタイプに属する。
以下は、一部の融合タイプの例である。

20)空挂纤纤缕，徒垂络络丝，（第 70 回:p.971）
（むなしく掛かる　ほそきいと　あだに垂れたる　もつれいと）（第 70 回:p.412）

络络：形容连续不断。（《汉语重言詞詞典》）
络：①像網狀的東西，脈絡。②環繞，纏繞。③罩住；牲口罩子，即籠頭。（《王力古漢語字典》）

21)何心意之忡忡，若寤寐之栩栩。（第 78 回:p.1114）
（なんぞや心意の忡忡として、寤寐の栩栩たるがごときは）（第 78 回:p.384）

忡忡：①忧虑不安貌。②饰物下垂貌。③愁怨、愤恨貌。（《汉语重言词词典》）
忡：憂慮不安貌。（《王力古漢語字典》）
重畳式の意味は、基式の項目とつながりがあるので、一部融合のタイプに属する。
以下は包含のタイプである。

22)林之孝家的道："他是园里南角子上夜的，白日里没什么事，所以姑娘不大相识。高高孤拐，大大的眼睛，最干净爽利的。"（第 61 回:p.840）
（林之孝の妻女、「あの人は園の南くぐり門の宿直を受け持っておりまして、日中は格別ご用がございません。お姉さんがあまり覚えがないとおっしゃるのもそのせいでございましょう。頬骨の出た、目玉の大きい、大層きれい好きできびきびしたところのある女でございます」こう答えますと、）（第 61 回:pp.44-45）

大：在体积、面积、力量等方面超过一般的所比的对象。（商务印书馆辞书研究中心编（2015）《古今汉语字典》）
大大：①极言其大，②强调程度范围广深。（《汉语重言词词典》）
基式と重畳式は辞典の項目から異なりがなく、実際に重畳式は描写性などの独特な性格があるので、包含のタイプに属する。

4.1.3　文成分

先述した 3.1.1.5 の王启龙（2003）の分類によって、一般形容詞は形容詞重畳式を含み、述語と連体修飾語は形容詞の主な文成分であると指摘している。『紅楼夢』前八十回における AA 式を考察した結果、連用修飾語の例は最も多く、326 例に達する。述語と連体修飾語は第二位、第三位である。AA 式は『紅楼夢』において、すべての文成分となっているとわかる。表 1 は『紅楼夢』における AA 式形容詞重畳式の文成分についての使用実態を示したものである。

文成分 形式	連用 修飾語	連体 修飾語	補語	述語	主語	目的語	独立語
使用例	326	82	8	112	3	2	9

表 1『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式の文成分

以下に『紅楼夢』前八十回における AA 式の例文を挙げる。

23)宝玉便和彩霞说笑，只见彩霞淡淡的，不大答理，两眼睛只向贾环处看。（第 25 回:p.336）
（宝玉は彩霞を相手にふざけかかりましたが、彩霞は無愛想にろくろく口を利こうともせず、両目の視線は賈環の方に注いだまま。）（第 25 回:p.160）

24)凤姐昨日晚间王夫人就告诉了他宝玉金钏的事，知道王夫人不自在，自己如何敢说笑，也就随着王夫人的气色行事，更觉淡淡的。（第 31 回:p.417）
（熙鳳は昨日の夕方、奥方から宝玉と金釧児とのいきさつを打ち明けられていて、奥方の不機嫌は先刻承知のことですので、自分からまさか座の賑わし役を買ってでるわけもなく、これも奥方の顔色を見い見い万事を運んでいて、なにやらうちとけない心持でいます。）（第 31 回:p.19）

25)淡淡梅花香欲染，丝丝柳带露初干。（第 48 回:p.650）
（色淡き　梅の花　香の染みつつ　枝垂れたる　糸柳　露も乾りぬる）（第 48 回:p.295）

26)那三姐却只是淡淡相对，只有二姐也十分有意。（第 64 回:p.895）
（三姐の方はただもう柳に風と受け流しているのに反し、二姐の方はおぼしめしなら充分ありながら、）（第 64 回:p.195）

例 23）では、従文の主語は“彩霞”であり、“淡淡”は従文の述語として使用される。例 24）では、“淡淡”は動詞の“觉”の補語として用いられ、補語の助詞“得”をつければ、“觉得淡淡的”も成立できる。例 25）では、“淡淡”は、名詞の“梅花”を修飾し、連体修飾語（中国語の“定语”）として使用される。例 26）では、動詞の“相对”を修飾し、連用修飾語（中国語の“状语”）として使用される。

27)宝玉房里常见我的只有袭人麝月，这两个笨笨的倒好。（第 74 回:p.1026）
（宝玉の部屋でいつもわたしのところへ顔を出すのは襲人と麝月とだけで、あの二人ならいかにも気の利かぬげなところがかえって無難なのですがね。）（第 74 回:p.152）

28)天何如是之苍苍兮，乘玉虬以遊乎穹窿耶？（第 78 回:p.1112）
（天　いかなればしかく蒼蒼たるや　玉虬に乗りてもって穹窿に遊ばんか)（第 78 回:p.382）

29)话未说完，急的袭人忙握他的嘴，说：“好好的，正为劝你这些,倒更说的狠了。”（第 19 回:p.262）
（気が気でないのは襲人、あわてて手で彼の口をふさぎ、「まあ、なんてことでしょう、若様のそういった点をとくとご意見申そうという矢さきに、いつもに輪をかけてそんなひどいことをおっしゃるとは！」）（第 19 回:p.296）

例 27）では、“笨笨的”は、主語として用いられる。例 28）では、“苍苍”は、動詞の“是”の目的語として用いられ、例 29）では、“好好的”は、独立語と見なされる。

以上のことから、『紅楼夢』における AA 式はすべての文成分となり、連用修飾語が主な文成分である。王启龙（2003）の「形容詞が主に述語と連体修飾語の文成分になる」という見解とは異なっている。

4.2　『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式

4.2.1　統計的研究

“喟拉拉”“忒楞楞”“哗啦啦”“哎呦呦”“嗳呦呦”“豁啷啷”“豁剌剌”“忽喇喇”などの擬声語を除き、『紅楼夢』前八十回における ABB 式は、異なり語数 64、延べ語数 123 である。

ABB 式の中で、使用頻度が最も高いのは“笑嘻嘻”であり、17 回に達する。次は“好端端”の 6 回、“乌压压”“喘吁吁”の 5 回である。具体的な語例は文末に付録表 2 で示してある。

4.2.2　語構成

张美兰（2001:10-17）は、邵敬敏（1990）を踏まえて、近代中国語の ABB 式を構造分析方式によって、以下の 4 種類に分ける。

① A＋BB→ABB[重叠后缀附加式（接尾辞が重畳する附加式）]
② AB＋B→ABB[后重叠扩展式（後置成分が重畳する拡張式）]
③ BA＋B→ABB[前重叠倒置扩展式（前置成分が重畳し、倒置する拡張式）]
④ AABB-A→ABB[双音重叠前略式前略式（双音重畳する前置成分の A を省略する式）]

第①類は代表的な構造形式であり、张美兰（2001：10）は、このタイプは、近代漢語 ABB 式形容詞の重要な源であり、AB あるいは BA は語にならず、対応する AABB 式、ABAB 式、BABA 式の形式も存在しないと指摘している。よって、CCL コーパスと BCC コーパス[20]で、『紅楼夢』の成書年代以前に、AB あるいは BA が一つの語として使用できない場合、「A＋BB」に属すると考えれば、『紅楼夢』における第①類は、“乱烘烘”“白茫茫”“凉森森”“沉甸甸”“甜丝丝”“空落落”“白漫漫”“黑魆魆”“白汪汪”“黑鬑鬑”“明晃晃”“好端端”“热刺刺”“乌压压”“直瞪瞪”“锦重重”“金晃晃”“黄澄澄”“咸浸浸”“恶恨恨”“松怠怠”“闹穰穰”“碧荧荧”“热腾腾”“冷飕飕”“意悬悬”“气昂昂”“光灿灿”“汗津津”“意绵绵”“油汪汪”“牙痒痒”“气狠狠”“眼睁睁”“笑吟吟”“赤条条”“笑嘻嘻”“笑欤欤”“喘吁吁”“醉醺醺”“怔呵呵”の 41 語である。

[20] BCC コーパス<http://bcc.blcu.edu.cn/>、CCL コーパス<http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/> 2022 年 4 月 25 日参照。

第②類の AB は形容詞として、『紅楼夢』の成書年代以前に使用され、AB の B の重畳を通して、ABB 式を形成する。『紅楼夢』における「AB＋B」の ABB 式は、“昏慘慘”“威赫赫”“静悄悄”“花簇簇”“冷清清”“忙碌碌”“油腻腻”“明亮亮”“羞惭惭”“跳蹿蹿”“情切切”“直挺挺”“寒浸浸”“气恨恨”“直蹶蹶”の 15 語である。

“冷清清”“油腻腻”“静悄悄”などは、同時に AABB 式の“冷冷清清”“油油腻腻”“静静悄悄”も存在する。

第③類では、BA は形容詞として、『紅楼夢』の成書年代以前に使用され、BA は語序を倒置し、BA の B の重畳を通して、ABB 式を形成する。『紅楼夢』における「BA＋B」の ABB 式は、“乱纷纷（纷乱）”“闹吵吵（吵闹）”“硬帮帮（帮硬）”“散松松（松散）”“白花花（花白）”の 5 語である。

第④類は、AB と BA が一つの語として使用できない。AABB 式は、一つの A が省略され、ABB 式を形成する。語例は以下の“颤巍巍（颤颤巍巍）”“荡悠悠（荡荡悠悠）”“战兢兢（战战兢兢）”の 3 例にとどまる。 “颤巍巍”の AABB 式“颤颤巍巍”も『紅楼夢』に出現する。

4.2.2.1 ABB 式形容詞重畳式の性質

これまで、ABB 式は“构词”か“构形”かをめぐって論述されている。张寿康（1985:58）は、“构词法”と“构形法”は、すべて統語論の研究内容に属し、“构词法”は、語素の語構成の方法を研究し、“构形法”は、語の形態変化を研究するという。また、“构形法”は、語の重畳、助詞の添加、音節の嵌りなどを通して、文法意味を表すことであると指摘している。张（1985）の観点から、すべての重畳は、構形重畳である。朱德熙（1982:73）は、ABB 式を「接尾語をつける形容詞」として、状態形容詞に属させて、“构词”と見なす。葛本仪（2014:80-100）は、“黑乎乎”“眼睁睁”などは複合語と派生語の構成手段として、“构词法”に属するのに対して、“冷清清”“亮堂堂”などは，“冷清”“亮堂”の重畳を通して構成され、“构形法”に属するという。吕叔湘（1980/1991）は、ABB 式は、大部分 A と BB によって構成され、ある ABB 式は、AB の B の重畳することによって構成されるという。

以上ことから、ABB 式は“构词”か“构形”かに関して、諸説紛々でまだ定論がない。特に、「A＋BB」と「AB＋B」が同時に存在する場合、通時的な観点から ABB 式は、「A＋BB」からなるのか、または「AB＋B」からなるかのが判断しにくい。本研究は、A と BB のコロケーションを検討するため、便宜上すべての ABB 式を「A＋BB」として処理することにする。

4.2.2.2 A の特徴

ABB 式は単音節語素 A と重畳語素 BB の組み合わせとして、『紅楼夢』における ABB 式の A は、名詞語素、動詞語素、形容詞語素に集中し、概ね語として使用できる。BB は接辞と語根とに分けられ、単独に AA 式の重畳語として使用する場合が多い。

ABB 式の A は単一の品詞だけではなく、たとえば、“油汪汪”の“油”について、《漢語大詞典》によると、名詞の“动物的脂肪和由植物或矿物中提炼出来的脂质物”、動詞の“用油涂饰”、形容詞“浮滑；不诚实”などの意味がある。基本義は名詞で、『紅楼夢』においての用法では、“油汪汪”の“油”は名詞語素である。本研究は、《康熙字典》《漢語大詞典》を参考にし、『紅楼夢』においての用法によって、A の品詞を判断する。「A＋BB」は、単音節語素 A と重畳語素 BB とを組み合わせ、ABB 式を構成すると見なされる。大部分の A は、単独で語として使用できる。『紅楼夢』における「A＋BB」の A は、

品詞によって、以下の三種類に分けられる。

①A は形容詞語素であること。以下の 39 例がある。

――乱烘烘、白茫茫、凉森森、沉甸甸、甜丝丝、空落落、白漫漫、黑魆魆、白汪汪、黑鬓鬓、明晃晃、好端端、热刺刺、乌压压、直瞪瞪、锦重重、金晃晃、黄澄澄、咸浸浸、恶恨恨、松怠怠、闹穰穰、碧荧荧、热腾腾、冷飕飕、昏惨惨、静悄悄、冷清清、忙碌碌、明亮亮、羞惭惭、直挺挺、寒浸浸、乱纷纷、闹吵吵、硬帮帮、散松松、白花花、直蹶蹶。

この類の語例は超半数で、60％を占める。

②A は名詞語素であること。以下の 14 例にとどまる。

――意悬悬、气昂昂、光灿灿、汗津津、意绵绵、油汪汪、牙痒痒、气狠狠、眼睁睁、威赫赫、花簇簇、油腻腻、情切切、气恨恨。

③A は動詞語素であること。以下の 11 例がある。

――笑吟吟、赤条条、笑嘻嘻、笑蚣蚣、喘吁吁、醉醺醺、怔呵呵、跳蹿蹿、颤巍巍、荡悠悠、战兢兢。

形容詞語素の A は、五感との繋がりを示す感覚形容詞が多い。山梨正明（2012:101、109）によれば、日常言語の概念体系は、われわれの身体に関わるさまざまな経験を反映しており、五感や体感に関わる感覚は、人間の身体的な経験の中でも特に中心的な役割を担っている。目、耳、鼻はこの種の感覚に関わる器官の代表例であると指摘する。即ち、視覚は最も感知しやすく、ABB 式の中に、色に関わる形容詞は、最も多く、次に、聴覚と嗅覚に関わる形容詞である。『紅楼夢』における ABB 式の A は、五感に基づき、使用例は視覚、聴覚、嗅覚に集中している。

4.2.2.3　BB の特徴

接辞の定義について、黄伯荣ほか（1991/2011:207）は、接辞は実際的な意味を持たず、固定的な位置に付され、単独では一つの語にならないと指摘している。李劲荣（2014:34-36）は、BB は単独でも語になるが、A と組み合わせても本来の意味を保つので、語根と見なす。同じ A でも BB によって ABB の意味が異なり、この BB も語根であるという。同じ BB が多数の A と組み合わせることができる場合は接辞と見なすと指摘している。

“乱烘烘”“黄澄澄”“沉甸甸”“咸浸浸”“热刺刺”“闹穰穰”は、“乱哄哄”“黄橙橙”“沉钿钿”“咸津津”“闹嚷嚷（攘攘）”とも表記され、BB の機能は表音符号であり、接辞であると見なされる。以上の李（2014）のように、“热刺刺”のほかに、“火刺刺、气刺刺、焦刺刺、歪刺刺、羞刺刺”などの語があることから、“刺刺”は接辞と見なされる。邵敬敏（1990:21）は、BB の組み合わせの範囲が狭ければ狭いほど、意味の虚化程度が低く、BB の組み合わせる能力が強ければ強いほど、相対的に意味の虚化程度が高いと指摘している。

4.2.2.4　ABB の構造形式

A と BB の関係について、石锓（2010:241）は、元明清時代の ABB 式を添加式（红彤彤）、重畳式（慌张张）、接辞式（黑洞洞）、主述式（泪汪汪）に分ける。李劲荣（2014:37）は、ABB 式を派生式、後補式、主述式に分ける。本研究は、李（2014）を踏まえ、『紅楼夢』における ABB 式を分類する。

（1）主述式　A が名詞性語素である場合、A は主語であり、BB は A のことを陳述し、ABB 式は主述式の構造となる。たとえば、“意悬悬”“气昂昂”“意绵绵”などである。

（2）派生式　BB が接辞であれば、ABB 式は派生式である。たとえば、“烘烘”“澄澄”“刺刺”などは、接辞であるため、“乱烘烘”“黄澄澄”“热刺刺”は、派生式と見なされ

る。

(3) 後補式　A が主な意味を表し、BB は A の状態を補足する場合である。この類では、BB は接辞ではなく、語根である。たとえば、“醉醺醺”のように、“醺醺”は、酔っているさまを補充し、ぷんぷん臭わせている様子を表す。また、“笑吟吟”“笑嘻嘻”“喘吁吁”“怔呵呵”“笑欻欻”のように、「動詞＋擬声語」の形式である。石锓（2010:190）は，「動詞＋擬声語」について、唐代以前は並列式であり、現代中国語では附加式と見なされるという。実際に、擬声語の BB は、単独に語として使用されるため、「後補式」と見なされるのが適当だと考えられる。

4.2.3　文成分

石锓（2010:238）は、元明清には ABB 式形容詞が主に連用修飾語として使用されており、ついで連体修飾語、それから述語であり、補語とする例が少ないと指摘している。表 2 は『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式の文成分を示したものである。

文成分 形式	連用 修飾語	連体 修飾語	補語	述語	主語	目的語	独立語
使用例	74	18	2	12	2	3	12

表 2　『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式の文成分

『紅楼夢』前八十回における ABB 式の文成分を考察した結果は、石（2010）の観点と概ね同じである。

4.3　『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式

4.3.1　統計的研究

『紅楼夢』前八十回における AABB 式重ね型は、異なり語数 124、延べ語数 225 を数えるが、文成分と語義が形容詞に合致する重畳式を扱い、《现代汉语重叠形容词用法例释》《现代汉语词典》（第 7 版）に収録される語例を参考にする。“咕咕唧唧”“嘻嘻哈哈”などの 19 語の擬声語は、《现代汉语重叠形容词用法例释》に収録されるが、研究対象に含まれず、“公公婆婆”“上上下下”などは『紅楼夢』において形容詞の用法で用いられていないので、研究対象に含まれない。したがって、『紅楼夢』前八十回の AABB 式形容詞重畳式は、異なり語数は 91、延べ語数は 156 である。具体的な語例は付録表 3 で示したものである。

4.3.2　語構成

吕叔湘（1965/2002:295）は、AABB 式を二種類に分ける。「AB が一つの語になること」の場合は第一種類、「AB が一つの語にならないこと」の場合は第二種類である。たとえば、“渺渺茫茫”“缥缥缈缈”などの基式“渺茫”“缥缈”は語として単独で使用できるが、“莽莽苍苍”“茫茫荡荡”などの AB の“莽苍”“茫荡”は語として単独で使用できないと指摘している。邢福义（1993/2001）、李宇明（2000:315）、杨柳（2012:10）、石锓（2010:126）などは、吕（1965/2002）の分類を踏襲し、前者を“重叠”と呼び、後者を“叠结”あるいは“叠加”と称する。また、杨柳（2012:10）は、前者を「AB×2」で、後者を「AA＋BB」で表記する。本研究は、前者を「[AB×2]の AABB 形容詞重畳式」と称

し、後者を「[AA＋BB]の AABB 形容詞畳加式」と称する。

4.3.2.1　[AB×2]の AABB 形容詞重畳式

「[AB×2]の AABB 形容詞重畳式」の基式 AB は、一つの語として使用できる。石锓（2010:144）は、真の AABB 重叠式は唐代に生じると述べている。CCL コーパスと BCC コーパス[21]で、基式 AB を検索したところ、『紅楼夢』の成書年代以前に、AB を一つの語として使用した用例は、79 例が見られる。

基式 AB の品詞は多様であり、主に動詞の“说笑”“拉扯”からなる重畳式“说说笑笑”“拉拉扯扯”、形容詞の“慌张”“恭敬”からなる重畳式“慌慌张张”“恭恭敬敬”、名詞の“疙瘩”からなる重畳式“疙疙瘩瘩”などがある。

李桂周（1986:12）は、名詞の基式からなる“疙疙瘩瘩”などの AABB 式を状態形容詞と見なすべきだと指摘する。华玉明（2003）は、動詞の基式からなる AABB 式は意味と構文機能の面で、状態形容詞の機能をもつと述べる。

以上から、基式の品詞に拘らず、異なる品詞をもつ基式からなる AABB 式重畳式は、同じ機能と意味をもつと言える。

4.3.2.2　[AA+BB]の AABB 形容詞畳加式

「[AB×2]の AABB 形容詞重畳式」より、「[AA+BB]の AABB 形容詞畳加式」のほうが早く出現する。石锓（2010:128）は、AABB 式は最も早く西周金文に出現し、唐代以前の AABB 式形容詞重畳式は、重言 AA と BB の畳加式であり、基式 AB からなる重畳式ではないと指摘している。また、石（2010:126）は、A と B が単音節の状態形容詞か性質形容詞かによって、AABB 形容詞畳加式を「重言式畳加（穆穆皇皇）」と「重畳式畳加（红红绿绿）」に分ける。

『紅楼夢』における「[AA+BB]の AABB 型形容詞畳加式」は以下の 12 例にとどまる。

――烈烈轰轰 婆婆妈妈 溶溶荡荡 蝎蝎螫螫 业业兢兢 颤颤巍巍 溶溶脉脉 袅袅悠悠 兢兢业业 袅袅婷婷 颤颤兢兢 妖妖趫趫

そのうち、“婆婆妈妈”は、名詞の“婆婆”に“妈妈”が類義的に例挙され、“蝎蝎螫螫”は、名詞の“蝎”の重畳に名詞の“螫”の重畳が重なる。このほかは、すべて石（2010）の「重言式畳加」に属する。たとえば、“溶溶荡荡”は、重言の“溶溶”に重言の“荡荡”が重なるものである。

石锓（2010:133）は、「重言式畳加」の特徴について、①構造の繋がりが深くない、②組み合わせの臨時性、③語順の不安定性、を指摘している。よって、“烈烈轰轰”と“兢兢业业”は、AA と BB の語順が倒置され、“轰轰烈烈”“业业兢兢”となる場合も存在する。また、組み合わせの臨時性のため、AA と BB のコロケーションは自由である。たとえば、“颤颤”と組み合わせるものには、『紅楼夢』に出現する“颤颤巍巍”“颤颤兢兢”のほかに、“摇摇颤颤”“颤颤葳葳”“颤颤抖抖”“颤颤怯怯”などがある。

しかし、「[AB×2]の AABB 形容詞重畳式」と「[AA＋BB]の AABB 形容詞畳加式」の分類は境界がはっきりしていない。たとえば、“大大小小”について、邢福义（1993/2001:78）は、AABB 反義畳結と見なす。しかし、“大大小小”は「大小×2」とすることができ、「大大＋小小」とすることができる。共時的観点から、「AA（大大）」「BB（小小）」「AB（大小）」「AABB（大大小小）」の四つの形式が共存し、AABB 式は基式の AB の重畳式であるか、「AA」と「BB」の畳加式であるか、断言できないと考える。

---

[21] BCC コーパス<http://bcc.blcu.edu.cn/>、CCL コーパス<http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/>2021 年 9 月 23 日参照。

4.3.3　文成分

石锓（2010:174）は、元明清には、AABB 式は主に連用修飾語として用いられ、時には述語や補語や連体修飾語となる場合も存在し、少数ながら主語や目的語となる場合もあると指摘している。表 3 は『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式の文成分を示したものである。

文成分	連用修飾語	述語	補語	連体修飾語	主語	目的語
使用例	65	69	10	5	3	4

表 3　『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式の文成分

『紅楼夢』における AABB 式の文成分について、述語はやや多く、次は連用修飾語である。これは石（2010）と異なっているが、他の文成分は概ね石（2010）と一致している。

4.4　『紅楼夢』前八十回における ABAB 式形容詞重畳式

4.4.1　統計的研究

『紅楼夢』前八十回における ABAB 式重畳式は、異なり語数 73、延べ語数は 110 である。特筆すべきは、重畳後に語義と用法が形容詞に合致する例語が見られないことである。『紅楼夢』における ABAB 式の基式 AB は動詞と形容詞に集中している。動詞 AB からなる ABAB 式は動詞であり、性質形容詞 AB からなる ABAB 式も、語義と用法が動詞に一致する。基式 AB に性質形容詞の用法がある例語は、14 例である。また、状態形容詞 BA からなる BABA 式は、石锓（2010:285）の考察によれば、清代末年に出現したと指摘している。よって、（雪白→雪白雪白）のような BABA 式形容詞重畳式は、『紅楼夢』に出現しないことは、石（2010）の指摘に合致している。

つまり、本研究の研究対象の基準から考えると、『紅楼夢』前八十回に ABAB 式形容詞重畳式は、使用例語がないといえよう。

4.4.2　語構成

『紅楼夢』における ABAB 式重畳式は 73 例であり、そのうち、擬声語の基式 AB からなる ABAB 式は“咯当咯当”“咕咚咕咚”の 2 例にとどまる。

形容詞の基式 AB からなる ABAB 式は、以下の 14 例である。

———挥霍挥霍 随喜随喜 辛苦辛苦 散淡散淡 亲香亲香 端详端详 洒落洒落 热闹热闹 喜欢喜欢 方便方便 可怜可怜 光辉光辉 团圆团圆 疏散疏散

以上の“随喜随喜”“端详端详”“团圆团圆”“洒落洒落”“疏散疏散”などは、基式 AB が形容詞と動詞の両方の語義がある。たとえば、

洒落：①分散的落下。②潇洒；飘逸；豁达。③爽快利落。④用尖刻的語言说他人的不是，令其难堪。（罗竹风（1986）《漢語大詞典》）

以上の①④が動詞の語義であり、②③が形容詞の語義である。

30)那焦大又恃贾珍不在家，即在家亦不好怎样他，更可以任意<u>洒落洒落。</u>（第 7 回：pp.113-114）

（ところでさきの焦大ときては、例によって賈珍の留守をいいことに、——たと

え在宅だったところで、焦大をどうするというわけにもゆかないのですが——なおさらなにをしたとてかまうものかと気が大きくなっています。）（第 7 回：pp.264）

例 30）では、“洒落”の“用尖刻的語言说他人的不是，令其难堪。”の動詞の語義から“洒落洒落”の ABAB 式になり、基式の“洒落”は、性質形容詞ではない。性質形容詞の語義からなる重畳式は、“挥霍挥霍”“辛苦辛苦”“散淡散淡”“亲香亲香”“热闹热闹”“喜欢喜欢”“方便方便”“可怜可怜”“光辉光辉”の 9 例である。

4.4.3　文成分

『紅楼夢』における ABAB 式は、擬声語の基式からなる“咕咚咕咚”（連用修飾語）“咯当咯当”（連体修飾語）のほかに、述語の文成分もある。ABAB 式は、述語となる場合、目的語がつくこともある。たとえば、“张罗张罗买卖”“教导教导他”など。さらに、ABAB 式の動詞用法を説明する。

4.4.4　意味分析

石锓（2010:287）李凤吟（2006）は、ABAB 式形容詞の意味について、“尝试”（試み）、“短时”（短時間）、“少量”（少量）、“轻微”（軽微）などの意味を含んでいると指摘している。李宇明（1996b:24）は、二音節の性質形容詞からなる ABAB 式重畳について、すべて“致使性”を表し、一般的に“AB 一下”“AB 一次”“AB 一回”“AB 一会儿”の形式を具備すると指摘する。例えば、

31)贾珍见凤姐允了，又陪笑道：“也管不得许多了，横竖要求大妹妹辛苦辛苦。我这里先与妹妹行礼，等事完了，我再到那府里去谢。”说着，就作揖下去，凤姐儿还礼不迭。（第 13 回:p.177-178）→横竖要求大妹妹辛苦一回。
（賈珍はまずこれで熙鳳の承諾が得られたものと、またも愛想笑いを浮かべながら、「いまとなっては、なんだかだと申してはおられないのです。ここはなんとしてでもあなたにご出馬いただきお骨折り願わないことにはおさまりがつかないのですから。わたし、いまこの場でさきにお辞儀をさせていただきます。いずれ事が済みましたあかつきには、改めてお屋敷の方へお礼にあがりますが」と駄目押しをしておいて、深々と頭を下げるのでした。熙鳳がお辞儀を返そうにも間にあわない始末。）（第 13 回:p.89-90）

32)说着，自己绰起壶来斟了一杯，自己先喝了半杯，搂过贾琏的脖子来就灌，说：“我和你哥哥已经吃过了，咱们来亲香亲香。”（第 65 回:p.908）→咱们来亲香一下。
（そういうと、わが手で銚子をつかむなり一杯注ぎ、自分がさきに半分ほど飲んだあと、賈璉の首玉を抱え寄せて、残りを口中に無理やり流しこみ、「わたくしとあなたのお兄さんとは、もうとっくに杯まで取り交わした仲、さあ、みな仲良くいたしましょうね」と言い放ちます。）（第 65 回:p.229）

33)因说半日腿酸，未尝歇息，忽又见前面又露出一所院落来，贾政笑道：“到此可要进去歇息歇息了。”（第 17、18 回:p.229-230）→到此可要进去歇息一下（一会儿）了。
（「半日も歩き続けていると、一服もしないせいか、まったく足がだるくなりますな」と洩らしたことですが、そこでひょいとまた行く手を見ますと、またひとつ中庭が見えています。賈政はにっこりして、「さてこのへんでなかへはいって、ひとまず一服ということに」）（第 17、18 回:p.217）

例 31）例 32）では、性質形容詞の“辛苦”“亲香”からなる“辛苦辛苦”“亲香亲香”の文法的な意味は、例 33）の基式の“歇息”からなる“歇息歇息”とほぼ同じであり、ABAB 式は動詞重畳式の特徴を持つといえよう。

4.5　『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式の意味分析

4.5.1　物語性

兪稔生（2007）は、中国語の描写性を豊かにする文法項目のなかで、形容詞の重ね型は描写性が高いと述べている。中国語では、「生動形式」（吕叔湘；1980/1991:716）と言い、いきいきとした表現の効果をもたらすと指摘する。

「生動性」という概念について、描写性を有する以外、本研究はさらに「物語化（エピソード化）」という説明を提案する。重言の働きは、3.2.1 の《文心彫龙》物色篇に記述されるように、「自然からのはたらきかけに応じて、人の心が動き、そこから生まれる感興をことばによって詩に表出する。」（興膳宏；2008:115）を概念化するものである。観察者の感興を重言で表出する方法は、個人の物語を展開する場合のように、抽象的、客観的なほかの言葉よりリアルでなまなましく、生き生きとして描写できる。ある特定の情景、風物を描写するのに、聞き手をその物語に引き込んで、疑似体験的な「臨場感」をもたらす効果があると考えるからである。

34)盈盈烛泪因谁泣（第 23 回:p.312）
（ぼとぼとと蠟燭の誰ゆえに涙せし）（第 23 回:p.102）

例 34）では、「盈盈」は、蠟燭が溶けてこぼれ落ちんばかりになっている様子をリアルに生き生きと描写する。だれかの涙に譬え、その情景を想像させることで、宛も目の前に事態が発生しているかのように物語としてエピソードを表し伝えようとする。

李劲荣(2014:64)は、AABB 式と ABB 式の描写性は、AA 式と BA 式より高いと指摘している。この点から、AABB 式は、描写性の面で代表的な重畳式と言えよう。

35)那风筝飘飘摇摇，只管往后退了去，一时只有鸡蛋大小，展眼只剩了一点黑星，再展眼便不见了。(第 70 回:p.975)
（すると例の大凧、飄々として風に乗り、そのまま引き退くように大空のかなたへと飛んでゆきます。やがて鶏の卵大になり、あっと思うまに一点の黒い星ほどになり、みるみるはや視界から消え去ってしまいました。）（第 70 回:p.424）

飘飘摇摇：形容物体在空中摇动或飘动的样子。(《汉语重言词词典》)

例 35）では、“飘飘摇摇”を通して、凧が空中で風にひらひら揺れ動く様子が描かれる。“飘飘摇摇”が修飾する対象は、紫鵑が飛ばした凧だけを指し、個別の具体性を有する。

李劲荣（2014:70、102）は、「現場性」と呼び、形容詞が重畳する場合、現場性に基づき、出来事の具体的な情景の中に置くと指摘する。具体的な情景で、特定の対象をいきいきと描写し、話し手がその場に身を置いているような臨場感を伴うと解釈する。

4.5.2　具体性と個別性

重言が修飾する対象は、具体的な個別性を有することである。石鋟（2010:36）は、状

態形容詞の意味は比較的具体的で、一般的に有限の一類あるいはいくつかの種類の物を描写し、コロケーションは狭いと指摘している。章太炎（1984:218）は、《訄書重訂本·訂文第二十五　附：正名雑義》で、「白」を表す状態形容詞について、次のように言っている。

> 鳥白曰皧，霜雪白曰皚，玉石白曰皦。《說文》。色舉則類，形舉則殊。故駁於孟子者曰:白羽之白,猶白雪之白;白雪之白，猶白玉之白。《告子》。

「『鳥の白は皧と曰（い）い、霜雪の白は皚と曰い、玉の白は皦と曰う』(『説文』)。色を挙げれば似ているが、形を挙げれば異なっている。だから、孟子に反駁した者は『白羽が白いのは、ちょうど白雪の白のようで、白雪の白は、ちょうど白玉の白のようだ。』（『告子』）と言った：筆者訳」。

石锓（2010:36）は、「白」についての重言を挙げて、「月光之白曰皎皎，脸色苍白曰皪皪，头发之白曰皤皤，水光之白曰滈滈，云彩之白曰英英。」と指摘する。いずれも「白」という意味を表し、修飾対象によって、語彙の使用も異なる。重言の修飾対象は、しばしば具体的な一種類の物事あるいはいくつかの物事だけにとどまる。これに対して、重畳式の「白白」はその制限がない。

李劲荣（2014:89）は、AA 式形容詞重畳式が修飾する名詞について、AAdeN という公式で、「N 满足特定而具体的事物这一特征是形成 AAdeN 式的必要条件。(N が特定かつ具体的な物事を満たす特徴が、AAdeN 式を形成する必要条件である。)」と指摘している。

李劲荣の“特定”というのは、“黑马”“黄书”“红娘”などの「類」に対して、個別性を有する「個」のことである。また、李劲荣（2014:90）は、AAdeN の使用場面について、「是在具体的事件中对某一特定的事物进行描绘。(具体的な事件である特定の事物を描写することである。)」

すなわち、具体的な情景、場面を設定し、その場面の特定のヒト、モノ、コトを描写し、類に対して、個別性を表す。具体的に第 7 章で説明する。

4.6　まとめ

本章は、『紅楼夢』前八十回における AA 式、ABB 式、AABB 式、ABAB 式の形容詞重畳式について、使用頻度と語例を統計処理し、語構成、文成分及び文法的意味から分析した。文成分の面からは、いずれも形容詞重畳式のパターンが、主に連用修飾語として使用されることを指摘した。語構成で、AA 式は、基式の A の性格から分類された。ABB 式は A と BB の性格から分類でき、AABB 式は基式によって、[AB×2]の AABB 形容詞重畳式と[AA+BB]の AABB 形容詞畳加式に分けられた。

第三章の形容詞重畳式の特徴に基づき、描写性を説明するための手段として、物語性を提案した。形容詞重畳式が修飾する対象は、聞き手をその物語に引き込む「臨場感」を伴い、個別性と具体性を有すると見なされることを述べた。

第五章　『紅楼夢』後四十回における形容詞重畳式

5.1　はじめに

『紅楼夢』の前八十回は曹雪芹の作と見なされる。後四十回の作者について、涂全太（1990:49）は、①曹雪芹の原作。②高鶚の補作。③作者不明の補作。④杜芷芳の補作。⑤乾隆と和珅が大金で程偉元と高鶚に補作させた。⑥曹雪芹の友人が、曹雪芹の原作によって、整理した。⑦懸案説、の七種類にまとめる。すなわち、後四十回は、曹雪芹の原作、他人の補作、両者の混合の三種類に分けられ、前八十回と後四十回は、同一の作者であるか否かによって議論される。胡适（2016:51-52）は、①張問陶の詩と注　②兪樾の「郷会試」の律詩の増加　③程偉元の序の「先得二余卷，后又在鼓担上得十余卷。（まず 20 巻余りをもらって、その後、鼓擔で 10 巻余りをもらった。）」のがあまり都合よいこと。④高鶚の序。の四つの証拠から、後四十回は高鶚の補作と指摘する。

このような観点から、本章は、形容詞重畳式という言語手段を通して、作者の文学的風格を比較する。形容詞重畳式は、主観性と描写性を有し、作者の発話の意図と感情を最もよく表している。前八十回と後四十回における形容詞重畳式の語例や使用頻度を比較し、統計学の方法を利用し、文体論から前八十回と後四十回の相違点を明らかにし、作者が同一であるか否かを検証する。

5.2　『紅楼夢』前八十回と後四十回の統計的研究

本章の統計的研究対象は、『紅楼夢』前八十回と後四十回における AA 式、ABB 式、AABB 式であり、文成分と語義が形容詞に合致する重畳式である。擬声･擬態語を除いて、『紅楼夢』前八十回と後四十回における各形容詞重畳式のパターンに応じて、用例数を調査する。表 4 は『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式の語数を示したものである。

形容詞重畳式のパターン	『紅楼夢』前八十回		『紅楼夢』後四十回	
	異なり語数	延べ語数	異なり語数	延べ語数
AA 式	132	542	71	380
ABB 式	64	123	32	66
AABB 式	91	156	69	107

表 4　『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式の語数

以上のデータから、『紅楼夢』前八十回における AA 式、ABB 式、AABB 式は後四十回より多いことが分かる。しかし、『紅楼夢』前八十回の字数[22]は概ね 58 万、後四十回の字数は概ね 27 万であり、分布状況から見れば、前八十回における形容詞重畳式の語数は、後四十回より多いと言えない。

また、前八十回と後四十回に出現する語例を比較してみると、『紅楼夢』前八十回のみに出現する AA 式は 84 例あり、後四十回のみに出現する AA 式は 23 例あり、両者の共用例は 48 例ある。『紅楼夢』前八十回のみに出現する ABB 式は 50 例あり、後四十回のみに

[22] 字数は「(前八十回）　曹雪芹著　（后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008）《红楼梦》人民文学出版社」から数える。

出現する ABB 式は 18 例あり、両者の共用例は 14 例ある。『紅楼夢』前八十回のみに出現する AABB 式は 67 例あり、後四十回のみに出現する AABB 式は 45 例あり、両者の共用例は 24 例ある。具体的な語例は付録表 4、表 5、表 6 で示してある。

5.3　使用頻度からの比較

『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式の使用頻度を比較するため、各回の AA 式、ABB 式、AABB 式の使用頻度を計算し、統計学の Z 検定を利用し、前八十回と後四十回の相違点があるか否かを検討する。

Z 検定は、正規分布を用いる統計学的検定法で、標本の平均と母集団の平均とが統計学的にみて有意に異なるかどうかを検定する方法である。

『紅楼夢』前八十回における AA 式の使用頻度は正規母集団に従うサンプル N1 により、後四十回における形容詞重畳式の使用頻度は正規母集団に従うサンプル N2 によるとする。2 つのサンプルは互いに独立していることを条件とする。以上の統計的な方法を踏まえ、二つの母平均の差に関する検定を用いて、二つのサンプルの平均値には差があるかどうかをテストする。[23]

Z 検定の公式：$Z=\dfrac{\bar{X}-\bar{Y}}{\sqrt{\frac{S1^2}{m}+\frac{S2^2}{n}}}$ [24]

上記のうち、$\bar{X}$ は、『紅楼夢』前八十回における AA 式の使用頻度の平均値であり、$\bar{Y}$ は、『紅楼夢』後四十回における AA 式の使用頻度の平均値である。

S_1^2、S_2^2 は『紅楼夢』前八十回と後四十回における AA 式の使用頻度の分散である。m、n はサンプルの回数で、m＝80、n＝40 である。

$\bar{X}$ と S^2 の公式は以下である。

$$\bar{X}=\frac{1}{n}\sum_{i=1}^{n}Xi \qquad S^2=\frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^{n}(Xi-\bar{X})^2$$

上記のうち、X_i は、第 i 回に出現する AA 式の使用頻度であり、n は、前八十回の総回数の 80 を表す。

$\sum_{i=1}^{n}X_i=X_1+X_2+\cdots+X_{80}=542$

$\bar{X}=\frac{1}{80}\sum_{i=1}^{n}Xi=\frac{542}{80}=6.775$

$S_1{}^2=\frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^{n}(Xi-\bar{X})^2=\frac{1}{80-1}\sum_{i=1}^{n}(X_1-\bar{X})^2+(X_2-\bar{X})^2+\cdots+(X_{80}-\bar{X})^2=\frac{1}{79}\sum_{i=1}^{n}(15-6.775)^2+(3-6.775)^2+\cdots+(4-6.775)^2=12.632$

Y_i は、後四十回の第 i 回に出現する AA 式の使用頻度であり、n は、後八十回の総回数の 40 を表す。

$\sum_{i=1}^{n}Y_i=Y_1+Y_2+\cdots+Y_{40}=380$

$\bar{\bar{Y}}=\frac{1}{40}\sum_{i=1}^{n}Yi=\frac{380}{40}=9.5$

---

[23] 「刘颖 肖天久（2014）〈《红楼梦》计量风格学研究〉《红楼梦学刊》第四辑, pp.260-281」参考。

[24] 茆诗松 程依明 濮晓龙（2011:368）《概率论与数理统计教程》高等教育出版社.

$S_2{}^2 = \frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^{n}(Yi - \overline{Y})^2 = \frac{1}{40-1}\sum_{i=1}^{n}(Y_1 - Y)^2 + (Y_2 - \overline{Y})^2 + \cdots + (Y_{40} - \overline{Y})^2 = \frac{1}{39}\sum_{i=1}^{n}(13 - 9.5)^2 + (14 - 9.5)^2 + \cdots + (22 - 9.5)^2 = 26.872$

$Z = \frac{\bar{X} - \bar{Y}}{\sqrt{\frac{S_1{}^2}{m} + \frac{S_2{}^2}{n}}} = \frac{6.775 - 9.5}{\sqrt{\frac{12.632}{80} + \frac{26.872}{40}}} = -2.992$

統計学では、一般的に、ある事象の発生確率が 0.05 である、或いは 0.05 より低いと「低確率事件」と呼ぶ。つまり、この事象は 5%の確率でしか発生しない。この低確率事象とは、実際に発生する可能性がほとんどない事象を指す。仮説検定では、一般的に元々の仮説（統計学では「帰無仮説」と呼ぶ、以下、元々の仮説を帰無仮説と呼ぶ）が正しいと先に仮定する。たとえば、この仮説に関する検定結果には、低確率事象が発生したことが分かったとしたら、帰無仮説が正しくないことが明らかになる。この場合、帰無仮説を棄却し、対立仮説（帰無仮説と相反する仮説）を採用する。一方、この仮説に関する検定結果には、低確率事象が発生しなかったら、帰無仮説を採用する。この内、帰無仮説を棄却する確率を統計学では「有意水準」と呼び、α と記する。[25)]

有意水準 α が 0.05 をとると、棄却域は：$|Z| \geq Z_{1-\alpha/2}$ である。$Z_{1-\alpha/2}$ は 0.975 であり、正規分布表を調べると、対応する値は 1.96 である。

それによって、AA 式形容詞重畳式に関する仮説検定の結果の絶対値が 1.96 より大きいと、帰無仮説を棄却し、対立仮説を採用すべきである。一方、Z の絶対値が 1.96 より小さければ、帰無仮説をそのまま採用する。本研究の場合、|Z|の値は 2.992 であって、1.96 より大きいため、帰無仮説を棄却し、対立仮説を採用することになる。この結果からすると、前 80 回と後 40 回の AA 式の使用頻度についての平均値は、統計学的な視点から見れば、違うことが明らかになった。

また、以上の Z 検定で ABB 式、AABBB 式の Z 統計量を計算した。

前八十回の ABB 式の数値は以下である。

$\sum_{i=1}^{n} X_i = X_1 + X_2 + \cdots + X_{80} = 123$

$\overline{X} = \frac{1}{80}\sum_{i=1}^{n} Xi = \frac{123}{80} = 1.5375$

$S^2 = \frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^{n}(Xi - \overline{X})^2 = \frac{1}{80-1}\sum_{i=1}^{n}(X_1 - \overline{X})^2 + (X_2 - \overline{X})^2 + \cdots + (X_{80} - \overline{X})^2 = \frac{1}{79}\sum_{i=1}^{n}(1 - 1.5375)^2 + (0 - 1.5375)^2 + \cdots + (2 - 1.5375)^2 = 4.429$

後四十回の ABB 式の数値は以下である。

$\sum_{i=1}^{n} Y_i = Y_1 + Y_2 + \cdots + Y_{40} = 66$

$\overline{Y} = \frac{1}{40}\sum_{i=1}^{n} Yi = \frac{66}{40} = 1.65$

$S^2 = \frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^{n}(Yi - \overline{Y})^2 = \frac{1}{40-1}\sum_{i=1}^{n}(Y_1 - Y)^2 + (Y_2 - \overline{Y})^2 + \cdots + (Y_{40} - \overline{Y})^2 = \frac{1}{39}\sum_{i=1}^{n}(0 - 1.65)^2 + (3 - 1.65)^2 + \cdots + (2 - 1.65)^2 = 2.3872$

---

25) 「島田めぐみ　野口裕之（2021:39-48）『統計で転ばぬ先の杖』ひつじ書房」参考。

ABB 式の Z 値は以下のように示される。

$$Z=\frac{\bar{X}-\bar{Y}}{\sqrt{\frac{S1^2}{m}+\frac{S2^2}{n}}}=\frac{1.5375-1.65}{\sqrt{\frac{4.429}{80}+\frac{2.3872}{40}}}=-0.3317$$

前八十回の AABB 式の数値は以下である。

$$\sum_{i=1}^{n}X_i=X_1+X_2+\cdots+X_{80}=156$$

$$\overline{X}=\frac{1}{80}\sum_{i=1}^{n}Xi=\frac{156}{80}=1.95$$

$$S^2=\frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^{n}(Xi-\overline{X})^2=\frac{1}{80-1}\sum_{i=1}^{n}(X_1-\overline{X})^2+(X_2-\overline{X})^2+\cdots+(X_{80}-\overline{X})^2=\frac{1}{79}\sum_{i=1}^{n}(2-1.95)^2+(0-1.95)^2+\cdots+(3-1.95)^2=2.3266$$

後四十回の AABB 式の数値は以下である。

$$\sum_{i=1}^{n}Y_i=Y_1+Y_2+\cdots+Y_{40}=107$$

$$\overline{Y}=\frac{1}{40}\sum_{i=1}^{n}Yi=\frac{107}{40}=2.675$$

$$S^2=\frac{1}{n-1}\sum_{i=1}^{n}(Yi-\overline{Y})^2=\frac{1}{40-1}\sum_{i=1}^{n}(Y_1-Y)^2+(Y_2-\overline{Y})^2+\cdots+(Y_{40}-\overline{Y})^2=\frac{1}{39}\sum_{i=1}^{n}(3-2.675)^2+(4-2.675)^2+\cdots+(4-2.675)^2=5.0455$$

AABB 式形容詞重畳式の Z 値は以下である。

$$Z=\frac{\bar{X}-\bar{Y}}{\sqrt{\frac{S_1{}^2}{m}+\frac{S_2{}^2}{n}}}=\frac{1.95-2.675}{\sqrt{\frac{2.3266}{80}+\frac{5.0455}{40}}}=-1.8402$$

ABB 式の場合、|Z|の値は 0.3317 であって、1.96 より小さいため、帰無仮説をそのまま採用した。AABB 式の場合、|Z|の値は 1.8402 であって、1.96 より小さいため、帰無仮説をそのまま採用した。この結果からすると、前八十回と後四十回の ABB 式と AABB 式の使用頻度についての平均値は、統計学的な視点から見れば、異なりがないと分かった。

5.4　文体学から見た前八十回と後四十回の相違点

5.4.1　スタイル（style）について

5.4.1.1　定義

スタイル（style）について、南朝梁代の刘勰は、《文心雕龍》（巻六·體性第二十七）の中で、「若總其歸塗，則數窮八體。（もしこれらの種々相を総括してみるならば、それは八体に尽きる。）」[26] と指摘する。古代の中国語では、スタイル（style）は、「体」と呼ぶ。高明凱（1957:320）は、中国語風格（style）学の主唱者として、言語を使う場合、環境によって、環境に適合する特殊な言語手段を選択して、特別な雰囲気や格調を形成する。このような特殊な言葉の雰囲気や格調は言語のスタイル現象であると指摘している。また、高明凱（1963:411-412）は、風格（style）の定義について、さまざまなコミュ

[26] 「戸田浩曉（1978:407-408）『文心雕龍』下　新釈漢文大系 65. 明治書院. 」から引用する。

ニケーションの状況に適応し、特定のコミュニケーションの目的を達成するために、発生した雰囲気と言語のスタイルであると修正する。胡裕树（2011:504）は、高（1963）の定義を踏まえて、風格（style）は、一種の言葉の雰囲気と格調であると見なす。

5.4.1.2　作品のスタイルの表現

南朝梁代の刘勰は、《文心雕龍》（巻六·體性第二十七）の中で、「各師成心，其異各面。（作家は、誰でも自分の性格によって創作に従事するので、一人一人の顔がちがうように、作風も異なる。）」[27] と指摘する。祝克懿（2021:64）は、スタイルは、作品の存在を客観的な基盤として、作者の主体性を通して、個体のスタイルが実現される主観的な要因であり、「作品」は「文学作品」であり、とくに代表的な文学作品を指すと指摘する。作者の主観的な要素が異なれば、自ずと作品のスタイルも異なり、作品の中で、スタイルを表現する手段は言語である。葉蜚聲（1994:20）は、スタイルは、言語によって提供される選択に対して行われる実際の選択であると指摘している。すなわち、作者は、異なる言語手段を選択することによって、個人の異なるスタイルを表現できる。

3.2 で言及したように、形容詞重畳式は、主観性と描写性を有する言語手段である。形容詞重畳式という言語手段の使用状況は、作者のスタイルをよく表現できる。胡裕树（2011:505）は、畳語は異なる雰囲気と格調を表すと指摘し、朱自清の《浆声灯影里的秦淮河》の作品を挙げて、そのうちの“密密”“疏疏”“淡淡”“郁丛丛”“阴森森”などの形容詞重畳式は、“音乐性”と“形象性”を強めると指摘している。

『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式の使用状況を比較し、両者のスタイルの相違点を明らかにする。

5.4.2　前八十回と後四十回における AA 式形容詞重畳式

AA 式は「AA 式重言」と「AA 式重畳」に分けられ、付録表 4 から見ると、『紅楼夢』前八十回における AA 式重言の数は、『紅楼夢』後四十回より圧倒的に多いことが明らかになった。石锓（2010:53）は、AA 式重言は、形容詞重畳式の形式の中で、最も早く出現すると指摘している。徐振邦（1998:4）は、西周金文で“穆穆”などの少数の重言詞が見えると指摘する。向熹（1980）は、《诗经》は韻文で、重言が特別に発達していると指摘している。

以上から、重言は古代中国語ですでに発達し、韻文においての使用頻度が高いことが窺える。

『紅楼夢』は白話小説だが、その中に韻文を混じえている。张耀（2015:2）は、韻文とは、詩、詞、曲、賦と民間歌謡、説唱を含み、その他のすべての押韻している文字と指摘している。梁扬ほか（2006:148）は、『紅楼夢』における韻文の形式について、「《红楼梦》除了诗、词、曲、赋这些常见的韵文体外，更兼备了歌、谣、谚、赞、诔、偈语、对联、灯谜、酒令、骈文……可谓应有尽有。（『紅楼夢』は詩、詞、曲、賦などのよくある韻文体のほかに、歌、謡、諺、賛、誄語、偈（仏典の中で、仏をたたえる韻文）、対聯、提灯の謎、酒令、駢文……を兼備し、ありとあらゆるものがあるといえる。）」と指摘している。薛瑞生（1986:255）は、『紅楼夢』の前八十回における詩、詞、曲、賦などの韻文を考察した結果、190 例に達し、13000 字余りであり、前八十回の全文の 50 分の一を占めると指摘している。これに対して、蔡义江（2001/2004）は『紅楼夢』後四十回における韻文をまとめると、36 例にとどまり、1500 字余りに過ぎないことを明らかにしてい

---

[27] 「戸田浩曉（1978:407-408）『文心雕龍』下　新釈漢文大系 65. 明治書院.」から引用する。

る。

『紅楼夢』前八十回において、“皑皑”“翦翦”“耿耿”“脉脉”など AA 式重言の用例が多く見られ、多く韻文に出現する。『紅楼夢』前八十回における AA 式の 132 語のうち、48 語は韻文から出ており、約三分の一を占める。『紅楼夢』後四十回における AA 式の 71 語のうち、7 語は韻文から出ており、約十分の一を占める。『紅楼夢』後四十回に出現する韻文は、本文に混在して、完全な詩と見なされない。たとえば、

36)探春李纨叫人乱着拢头穿衣，只见黛玉两眼一翻，呜呼，香魂一缕随风散，愁绪三更入梦遥！（第 98 回:p.1351）

（探春も李紈もみなを指図して髪を梳かせ死装束を着けさせるのにてんてこ舞い。そのうち黛玉の両の目がひとたび返ると見れば、あわれ―

香魂 一縷　風に随って散じぬ　愁緒　三更　夢に入りて遥けし）（第 98 回:p.281）

37)正是:心病终须心药治,解铃还是系铃人。（第 90 回:p.1253）

（さても―

心に病むはとど心の薬もて治す可く

鈴を解くはなお鈴を着けし人に俟つ　　とはこれをいったものか。）（第 90 回:p.352）

例 36）では、作者が黛玉の死に対して発した感嘆である。例 37）では、黛玉は雪雁と紫鵑の話を盗み聞きして、宝玉がすでに婚約したと誤解したことで、心が暗くなり、病状が重くなったものの、誤解と知って、病気もだんだんよくなったという状況に対する作者の感嘆である。

蔡义江（2001/2004:1）も、『紅楼夢』は本格的な“文备众体”であり、他の小説では見られないものであると指摘している。『紅楼夢』後四十回における韻文形式には、詩、偈、詞、酒令、歌などがあるものの、前八十回ほど豊富ではない。また、大部分は引用であり、独自の創作ではない。たとえば、“绿窗明月在，青史古人空”（第 89 回:p.1245）について、蔡义江（2001/2004:392）は、この詩は、唐代の崔颢“题沈隐候八咏楼”からの引用であると指摘する。

このように、『紅楼夢』前八十回と後四十回における AA 式重言に焦点を当てると、両者には著しい相違点があり、その原因は、前八十回の韻文の豊富さと繋がるのであると考える。

5.4.3　前八十回と後四十回における ABB 式形容詞重畳式

5.4.3.1　“常规”（norm）と“偏离”（deviation）

许力生（2006:58）は、現代文体学には、“常规”（norm）と“偏离”（deviation）が重要な概念であるとする。フィンランドの Enckvist，N.E（1964）は、「style as deviations from the norm（文体スタイルが常規を逸した逸脱に由来する）」と定義する。現代文体学の創始者と言われるフランスの Charles Bally は、単純に理性概念を表す中立的な言語を常規（norm）として、感情効果や特定の社会的ニュアンスを持つ表現手段を逸脱（deviation）と見なし、中立的な言語を参考にして、異なる文体の表現方式を比較する。[28]

王希傑（1994:111）は、言語のスタイル機能を研究する方法について、いかなる零度の風格も持たない言語材料が存在することを仮定し、その零度の言語材料から様々な逸脱を探究すると指摘する。

[28] 「许力生（2006:58）《文体风格的现代透视》浙江大学出版社」から引用する。

本章は、形容詞重畳式という言語手段の考察を通して、『紅楼夢』前八十回と後四十回の作品としての統一性を検証することを目的とする。よって、形容詞重畳式の基式は、零度の中立的な常規の形式とする。基式を参照し、形容詞重畳式は基式からの逸脱の形式として、異なる作風を表現する。

以下に、『紅楼夢』における例文を見てみよう。

38)金荣气黄了脸，說：“反了！奴才小子都敢如此，我只和你主子说。”（第 9 回: p.137）

（金栄は怒りで顔もなにも土気色にして、「不届き、不届き！おのれ、下司の分際でよくもこんな手荒なことを！えい、そこのけ、こっちはきさまの主人にはなしをつけるんだ」）（第 9 回:p.323）

39)贾琏听如此说,又见凤姐儿站在那边,也不盛妆,哭的眼睛肿着,也不施脂粉,黄黄脸儿,比往常更觉可怜可爱。(第 44 回:p.594)

（こんなふうにいわれて賈璉、見ればまたそちらに立っている熙鳳の、身なりもろくに構わずに、目は泣いて腫れぼったく化粧抜きの青ざめた顔色をしているのがふだんにましていとおしくもあり、かわいくもあり、）（第 44 回:p.145）

例 38)の”黄”は、色だけを表す。これに対して、例 39）の“黄黄”は、顔色を表したうえで、文脈から「可怜可爱（愛おしくかわいい)」のニュアンスが窺える。

基式の“黄”は常規として、零度の中立と見なされ、形容詞重畳式の“黄黄”は逸脱として、「かわいい」の感情を表す。すなわち、作品のスタイルが、形容詞重畳式からうかがえると考えられる。

5.4.3.2　ABB 式形容詞重畳式の逸脱

ABB 式は、同じ A でも BB によって、意味が異なる。A を零度の常規として、ABB 式は BB によって、様々な逸脱を表す。

先述した統計学の観点から、前八十回と後四十回の ABB 式の使用頻度についての平均値は、統計学から見れば、異なりがないことが分かった。その原因は、ABB 式の語数が AA 式形容詞重畳式より少ないためであり、毎回の分布は大差なく、Z 検定から著しい相違点が見えないためである。しかし、具体的な語例を見れば、前八十回と後四十回の ABB 式には相違点がある。

同じ A の ABB 式形容詞重畳式を比較してみれば、A は常規であり、A は同じでも、BB の異なることによって、ABB 式は A の常規から多様な逸脱を表す。

『紅楼夢』前八十回と後四十回における同じ A の ABB 式は、以下の例を挙げることができる。

① 乱烘烘（前）　乱纷纷（前）　乱糟糟（后）　乱腾腾（后）[29]
② 黑魆魆（前）　黑鬓鬓（前）　黑漆漆（后）　黑油油（后）
③ 直蹶蹶（前）　直挺挺（前/后）直瞪瞪（前/后）　直滚滚（后）
④ 气恨恨（前）　气昂昂（前）　气狠狠(前/后)　气哼哼（后）气嘘嘘（后）
　气忿忿（后）
⑤ 白漫漫（前）　白汪汪（前）　白花花（前/后）　白茫茫（前/后）

以下に、“白漫漫、白汪汪、白花花、白茫茫”を例として、説明してみよう。

---

[29] “前”は前八十回の略称で、“后”は後四十回の略称である。“前/后”は前八十回と後四十回に同時に存在することを表す。下同。

40)好一似食尽鸟投林，落了片白茫茫大地真干净！（第 5 回:p.86）

（さてしも　餌の尽きて鳥は林に去り　残れるは　白一面の大地　見果てぬ夢の跡かたなきに似たるかな）（第 5 回:p.188）

41)如此亲朋你来我去，也不能胜数。只这四十九日，宁国府街上一条白漫漫人来人往，花簇簇官去官来。（第 13 回:p.175）

（こんなふうで親戚や友人連中の弔問客は引きもきらず、到底いちいち数えあげられたものではない。この四十九日のあいだじゅう寧国通りの町すじ一帯が、白の喪服を着込んだ人の波で埋まらんばかり、色とりどりの官服を着用した役人連の往来する姿が絶えません。）（第 13 回:p.82）

42)大门上门灯朗挂，两边一色戳灯，照如白昼，白汪汪穿孝仆从两边侍立。（第 14 回:p.184）

（大門にかけられた門灯はあかあかとかがやき、その両側にかけ連ねられた揃いの高張り提灯は昼をもあざむかんばかりの明るさ。また白ずくめの喪服を着用した従僕たちも両脇にかしこまっています。）（第 14 回:p.99）

43)银库上按数发出三个月的供给来，白花花二三百两。（第 23 回:p.309）

（出納係では額面きっかり三ヵ月分の支給額を雪のようにぴかぴかの銀子二、三百両で払い出します。）（第 23 回:p.93）

44)眼见得白花花的银子，只是不能到手。（第 99 回:p.1360）

（真っ白な銀子をみすみすこの目で見ながら、それがこっちの懐にははいってこぬのだから……）（第 99 回:p.303）

45)贾政还欲前走，只见白茫茫一片旷野，並无一人。（第 120 回:p.1592）

（賈政はさらにさきへ進もうとしかかりましたが、あたりは白茫々たる一面の曠野、人っ子一人見当たりません。）（第 120 回:p.344-p.345）

张美兰（2001:21）は、ABB 式は”象生动性”を有し、ある性質や状態を指すだけではなく、それらのイメージや反映している感情を十分に表現すると指摘している。ABB 式は逸脱を最もよく表現できる言語手段であると言えよう。

例 40）45）の“白茫茫”は、“大地”“旷野”を修飾し、観察者の視点は、地面に近く、雲、霧、水などが白く一面に広がっているさま、ぼんやりとした感じを表す。

例 41）の“白漫漫”の“漫漫”は、“广大貌；无涯际貌；烟、云、雪、雾、草木等遍布貌。”（《汉语重言词词典》）という意味で、“白漫漫”は“形容一片白色”（《汉语重言词词典》）と解釈される。“漫漫”は“一面”の意味で、観察者は近くから遠くまでの広い視点で認知する。この場面では、白の喪服を着る人が多いため、寧國通りは、観察者の目に触れる限りに、あたり一面白いさまであることを形容する。寧国府の気勢のすさまじさと葬儀の豪華さを批判する感情を表す。“白漫漫”は常規の“白”からの逸脱を表す。

例 42）の“白汪汪”は、『紅楼夢』が初出である。[30]“汪汪”は“水深广貌；液体盛满貌；水光荡漾貌。”（《汉语重言词词典》）と解釈され、“水汪汪”“泪汪汪”などは、すべて液体と繋がりがある。この場面では、寧國府の正門から入って、白ずくめの喪服を着用した従僕たちを見る情景を描写する。両側の従僕たちを通した鳳姐の視点では、両側の提灯が昼のように照り映え、喪服を着用した従僕たちに反射している。そのさまは、宛も水面に反射したかのような視覚的な印象になる。曹雪芹が“白汪汪”を使用する一因であるだろう。

[30] 文昌荣（1997）《描摹词辞典》中国青年出版社.

例 43）44）の“白花花”は、白く輝く銀を形容する。観察者の認知視点は、光っていることに焦点を当てる。

以上の例からわかるように、A がすべて「白い」という色を表しても、BB により ABB 式は、観察者の個人的な認知を通している。そのため、視点が違えば、描写するものも異なり、様々な主観性と感情を表す。ABB 式は、BB を通して、様々な逸脱を表す。

『紅楼夢』前八十回における ABB 式は、後四十回より豊富で多彩であることにより、作者の異なる感情を表し、異なる作品のスタイルを表す。特に、曹雪芹が初めて使用した例語は、特別な作品スタイルを表現することにつながるのである。

5.4.4　前八十回と後四十回における AABB 式形容詞重畳式

先述したように、前八十回と後四十回の AABB 式の使用頻度についての平均値は、統計学的な視点から見れば、異なりがないことが分かった。しかし、AABB 式の場合、|Z|の値は 1.8402 であって、1.96 より小さいが、1.96 に近く、使用頻度からは、少し相違点があると言える。

胡裕树（2011:506）は、語彙の中の風格要素は、同義語の中で特に明らかに表現されており、異なる感情と文体を表す同義語は、異なる言語スタイルを表現するのに用いることができると指摘している。また、祝克懿（2021:66）は、“同义手段选择论”とまとめる。同義語というより、むしろ類義語のほうが適当だと考えられる。類義語を選択することによって、異なる言語のスタイルを表すと考えられる。

『紅楼夢』前八十回と後四十回における AABB 式は、AA＋BB の形式からなる類義語があり、その類義語を通して、言語のスタイルを検討してみることにする。

『紅楼夢』前八十回と後四十回における類義語の AABB 式は、以下を挙げることができる。

① 拉拉扯扯（前/后） 扯扯拽拽（后）
② 鬼鬼祟祟（前/后） 溜溜湫湫（后）
③ 妖妖趩趩（前） 妖妖乔乔（后）
④ 恍恍惚惚（前/后）恍恍忽忽（前/后）
⑤ 烈烈轰轰（前/后）轰轰烈烈（后）

③の“妖妖趩趩”では、文末注に“”は“乔”と同じ、「妖冶轻佻的样子。趩：行动轻捷，这里有举止轻浮的意思。（なまめかしい軽佻のようす。趩：動作が敏捷で、ここではふるまいが蓮っ葉であるという意味がある。）」[31] とある。

④の“恍恍惚惚　恍恍忽忽”は、表記は異なるものの、意味は同じである。⑤の“烈烈轰轰”は、倒置すれば、“轰轰烈烈”の言い方になる。「形容气魄雄伟、壮烈或声势浩大。（勢いがすさまじいさまを形容する。）」（《汉语重言词词典》）の意味である。③④⑤のグループは意味が同じだが、表記と語順に相違点がある。

では、①と②はどうか。以下、『紅楼夢』における“拉拉扯扯、扯扯拽拽”と“鬼鬼祟祟、溜溜湫湫”の例文を挙げる。

46)林黛玉将手一摔道：“谁同你拉拉扯扯的。一天大似一天的，还这么涎皮赖脸的，连个道理也不知道。”（第 30 回:p.408）

（黛玉はその手を振りはらって、「誰があなたのようなかたと手を取りあってまいるものですか。日一日と大人におなりの身が、まだそんなことを恥ずかしげもな

[31]）「（前八十回） 曹雪芹著 （后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008:1026）《红楼梦》人民文学出版社」の注から引用する。

くなさるおつもり？これしきの道理さえおわかりにならないなんて……」）（第 30 回:p.361）

47)我劝你走罢，别拉拉扯扯的了。我们还有正经事呢。（第 77 回:p.1077）

（さあ、さ、出かけたり出かけたり、もう引き延ばしたりしっこなしだよ、わたしたちはまだ大事なご用を抱えている身なのだからね。）（第 77 回:p.291-p.292）

48)五儿急得红了脸，心里乱跳，便悄悄说道:“二爷有什么话只管说，别拉拉扯扯的。”（第 109 回:p.1466）

（五児はうろたえて顔を赤らめ、心臓もなにもどきどきさせながら、ひそひそ声でたしなめました。「若様、話がおありでしたら、なんなりとお聞かせのほどを。でも、そんな無理やり手を引っ張ることだけはお止めになってくださいまし！」）（第 109 回:p.284）

49)周瑞家的一面劝说：“只管瞧瞧，用不着拉拉扯扯。”（第 103 回:p.1403）

（周瑞の妻女がわきから宥めて、「ご対面なさるのに遠慮はご無用。なにもやたらと引っ張ったりなさることはないでしょうに」）（第 103 回:p.95）

50)便有许多王孙公子要求娶他，又有些媒婆扯扯拽拽扶他上車，自己不肯去。（第 87 回:p.1227）

（と、そこへ、あまたの若君たちが、そなたをわが妻にと、われがちに押しかけてきた。と、こんどは入れ替わりに姿を見せた何人もの媒婆が、てんでに手足を引っぱって彼女を車に乗せようとかかるのを、こちらはどうあってもゆくものかと頑張りとおす。）（第 87 回:p.270）

“拉拉扯扯”については、「①谓拉拽。常表示争执，争斗。（引っ張ることをいう。常に紛争、争いを表す。）②谓牵手挽臂，表示亲昵。（手をつないで腕を組むことをいう、親密ぶりを表す。）」（《汉语重言词词典》）とある。“拉拉拽拽”について、「牵拉、连续不断的牵拉。（引き続けること、絶えずに引き続けること。）」（《汉语重言词词典》）とある。例 47）49）の「拉拉扯扯」は、「引っ張る」という意味で、例 46）48）の“拉拉扯扯”は、「手をつないで腕を組んで、親密ぶりを表す。」という意味である。例文の 50）の“拉拉拽拽”は、“拉拉扯扯”の「引っ張る」の意味と同じだが、後四十回では異なる類義語を使っている。

51)我只问你们：有话不明说，许你们这样鬼鬼祟祟的干什么故事？（第 9 回:p.135）

（一つだけお聞きしたいが、きみたち、はなしがあるならあるで、なぜおおっぴらにしない？いったいだれの許しをえて、こんなふうにこそこそあやしげなことをやってるのさ？そもそもなにをやらかそうってんだい？）（第 9 回:p.317）

52)袭人正要说话，只见那一个也慢慢的蹭了过来,细看时,就是贾芸，溜溜湫湫往这边来了。（第 85 回:p.1195）

（襲人がいましも口を開こうとしたとき、そこへもう一人の方もそろりそろり近寄ってきました。よく見れば、それこそは賈芸で、さももじもじとした様子でやってくるではありませんか。）（第 85 回:p.181）

《汉语重言词词典》に、“鬼鬼祟祟”は、「谓行动躲躲闪闪，不光明正大。（行動がこそこそと、堂々としてないことをいう。）」とある。《汉语重言词词典》に、“溜溜湫湫”は、「形容躲躲闪闪，轻手轻脚的样子。（こそこそと足音をひそめている様子を形容する。）」とある。前八十回と後四十回では、類義語を用いている。

以上のように、AABB 式の使用には異なりがあり、類義語の選択という点から、前八十回と後四十回のスタイルは、相違点があることが窺える。

5.5　まとめ

『紅楼夢』前八十回と後四十回における AA 式、ABB 式、AABB 式を統計的に処理し、前八十回のみに出現する形容詞重畳式と、後四十回のみに出現する形容詞重畳式及び両者に共有する形容詞重畳式を比較した。回ごとに各パターンの使用頻度を考察し、統計学から、前八十回と後四十回における AA 式の使用頻度には顕著な異なりがあり、ABB 式と AABB 式の使用頻度には異なりがないことを明らかにした。

前八十回における AA 式重言が、後四十回より多いというのは、前八十回の韻文の豊富と繋がりがあるからである。文体論の常規と逸脱の理論を踏まえて、前八十回と後四十回における同じ A の ABB 式を比較し、前八十回における ABB 式は、逸脱の形式はもっと多いことが分かった。文体論の同義選択論を通して、前八十回と後四十回における同義の AABB 式を比較すると、両者の使用状況は異なっていた。

本章の考察の結果から、『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式に、顕著な相違点が観察されることから、前後の作者は必ずしも同一人物ではないとは断定出来ないが、少なくとも後四十回に他人の補作の跡があると言えた。

第六章　『紅楼夢』各版本における ABB 式形容詞重畳式の比較研究

6.1　はじめに

3.1.2 で言及したように、ABB 式は AA 式、AABB 式、ABAB 式の「完全重畳」に対し、「不完全重畳」と称され、独特な性格を持っている。各版本における ABB 式は異なり、特にある語例は、最初に『紅楼夢』に見えると考えられる。本章は、『紅楼夢』各版本を言語資料として、各版本の ABB 式形容詞重畳式の使用状況を比較するものである。通時的にみると、ABB 式は元明清時代に大きな発展を遂げた。本章は、“脂硯齋本”の“庚辰本”をテキストとして、そのうちの ABB 式を研究対象として、ほかの写本および刻本の“程甲本”“程乙本”と比較し、各版本における ABB 式の使用状況を明らかにする。形容詞重畳式は主観性が高く、作者の意図をよく表すとされる。各版本の ABB 式を通して、曹雪芹の作品の特徴を検討し、さらに、各版本の関係にも論及していきたい。

6.2　『紅楼夢』の版本についての説明

もとの名を『石頭記』という『紅楼夢』の乾隆五十六年（辛亥年、西暦 1791 年）以前の写本について、伊藤漱平（1996:391）は 1996 年の日本語訳の解説で次のようにいう。

「ところで敢えてみずからを頑石に比えた曹雪芹の原稿本は伝わらず、それからの直接の写本も伝わらない。現存のテキストはすべていわゆる「脂硯齋本」――乾隆初年に脂硯齋なる人物が定本化しかつその評が施された評本『石頭記』、ないしはこれに原本を仰いだものに限られる。」

現在の 12 種の写本は、“甲戌本”“己卯本”“庚辰本”“红楼梦稿本”“蒙古王府本”“戚蓼生序本”“戚宁本”“甲辰本”“舒元炜序本”“俄藏本”“郑振铎旧藏残本”“靖应鹍藏本”と呼ばれ、すべて“脂硯齋本”の系統に属する。以下に、それぞれについて説明する。

1.甲戌本。（乾隆十九年、1754 年）（十六回残存――胡适旧蔵）第一回の「題目の詩」のうしろに、“至脂硯齋甲戌抄閲再評”という語があるので、“甲戌本”と名付けられる。林冠夫（2007:25）は、甲戌本は最も早い『紅楼夢』の写本と指摘する。

2. 己卯本。（乾隆二十四年、1759 年）（三十八回残存――北京図書館蔵、欠失部分の一部たる第五十六~五十八回の三回およびこれに接する前後両回の約半分は、中国歴史博物館蔵）そのうち、第三十一から四十回までの目次のページに、“己卯冬月定本”という字があるので、名付けられる。

冯其庸（2014:7-20）は、己卯本と「3」の庚辰本を比べて、転写と装丁の特徴、両本の回の題目、評言の状況、写本の特徴、禁句の問題、ページによって己卯本と庚辰本の筆跡が共通する問題の六つから考察し、庚辰本が己卯本を底本とする過録本だと証明している。

应必诚（1983:171）林冠夫（2005:144-145）は、冯（2014）と反対の観点を提出する。“己卯冬月定本”は己卯本第四分冊の目録ページにあり、“庚辰秋月定本”は第五分冊から第八分冊にある。林冠夫（2005）は「己卯庚辰本」は翌年に跨って出来上がった定稿本だと考え、庚辰本は己卯本からの過録ではなく、両者は同じ「祖本」、すなわち「己卯庚辰本」から過録したものと指摘する。

3. 庚辰本。（乾隆二十五年、1760 年）（七十八回残存、第 64 回、第 67 回欠失――北京

大学図書館蔵）そのうち、第五冊、第六冊、第七冊、第八冊の目次のページに、“庚辰秋月定本”あるいは“庚辰秋定本”という語があるので、名付けられた。『紅楼夢』（2008:6）の前言に、庚辰本の評価について、次のようにいう。「在上述的这些抄本中，庚辰本是抄的较早而又比较完整的唯一的一种，它虽然存在少量的残缺，但却保存了原稿的面貌，（上述のこれらの写本の中で、庚辰本は、写し取りが比較的に早くて完備している唯一の種類である。庚辰本には、少量の欠落が存在するが、原稿の原状を保存する）」と指摘する。また、冯其庸（1978:85）は、「庚辰本是曹雪芹生前最后的一个本子。（庚辰本は、曹雪芹の逝去前の最後の版本である。）」と指摘する。

4.杨继振藏本。（夢稿本）（中国社会科学院文学研究所蔵）この本の扉に“蘭墅太史手定紅樓夢稿”という字があって、扉の次のページに“紅樓夢稿”と題する。杨继振藏本も“紅樓夢稿本”と称される。林冠夫（2007:164-165）は、杨继振藏本について、次のようにまとめる。

「（一）《杨继振旧藏本红楼梦》，百二十回一次过录完成，过录的时代大致上可定于乾嘉之交。（二）杨本前八十回的底本是个拼凑本。前七回的底本是己卯本，第八回以后，也可能是个拼凑的脂本。（中略）（三）杨本的后四十回，底本也是拼凑本。其中一部分是程乙本，另一部分是早于程甲、程乙的本子。（(一)《杨继振旧藏本红楼梦》の百二十回は、一度の過録で完成した。過録の時代は、大体乾隆と嘉慶の間に定められる。（二）楊本の前80 回の底本は、寄せ集めの本である。前七回の底本は、己卯本で、第八回以降は、寄せ集めの脂硯齋評本の可能性がある。（中略）（三）楊本の後四十回の底本も寄せ集めの本である。そのうちの一部分は程乙本で、ほかの部分は、程甲本と程乙本より早い本である。）」唯一後四十回の写本があり、七十八回末に“蘭墅閲過”がある。

5. 王府本。（北京図書館蔵）第七十一回の末に、“柒爺王爺”の四字があるので、ある王府で収蔵されたとわかる。郑庆山（2002:82）は、「王府本和戚序本的母本或底本是立松轩手抄本（王府本と戚序本の祖本或いは底本は『立松軒手抄本』である）」と指摘する。

6.戚蓼生序本。原底本に戚蓼生の序があるので、名付けられた。最初、有正書局から清末民初で出版され、「有正本」と称する。

7.戚宁本。（南京図書館蔵）应必诚（1983:6）は、全書中、少数の文字が有正書局の戚序本と異なりがあり、同一の祖本の“姉妹本”であると指摘する。

8.梦觉主人序本。（乾隆四十九年、1784 年）巻頭に夢覺主人序があるので、名付けられた。序の末に、“甲辰歳菊月中浣”があって、“甲辰本”とも称される。杜春耕（2010:12）は、《乾隆抄本百廿回紅樓夢稿》の序文で、「程本的前八十回主要依据的是甲辰本（程本の前八十回は主に甲辰本に拠る）」と指摘している。

9.舒元炜序本。（乾隆五十四年、1789 年）（乙酉本）（1-40 回残存）巻頭に舒元炜序があるので、名付けられた。林冠夫（2007:345）は、舒元炜序本と庚辰本との関係について、「这就是，一方面它与庚辰本有着密切的版本联系，或者说存在着某种瓜葛。这样，它只能成书于庚辰秋月之后。（これは、一面で庚辰本と密接な版本上の繋がりをもっており、あるいは何かの結びつきが存在するという。そうとすれば、それは、庚辰年の秋の後にしか本になりえない。）」と指摘している。

10.アジア諸民族研究所ペテルブルグ支部本。（俄藏本）道光十二年（1833 年）にロシアに伝来した。林冠夫（2007:391）は、次のようにいう。

「从总体上说，《红楼梦》的早期抄本，都是属于脂砚斋批本的衍生本。而脂批本又可分为两个系统，即：甲戌本系和己卯庚辰本系。而俄藏本则又是己卯庚辰本系统的晚出本子。祖本形成的来源，不是个单一的本子，而是两种以上本子的拼凑，大约是成于从杨本到梦觉本的时代。（総体的に言えば、『紅楼夢』の早期の写本は、いずれも脂硯斎批本からの

派生本に属する。脂批本は、また二つの系統に分けられる。すなわち、甲戌本の系統と己卯庚辰本の系統である。ロシアの蔵本は、また己卯庚辰本の系統から遅く出た本である。祖本の形成の来源は、単一の本ではなく、二種類以上の本の寄せ集めである。大体楊本から夢覚本までの時代に、本になった。)」

11.郑振铎旧藏残本（第二十三回、第二十四回の二回のみ、北京図書館蔵）林冠夫（2007:401）は、次の結論を出す。「由此却不能见郑本与其他本子有何种联系。（これによって、鄭本は他の本とどのような特殊な繋がりがあるかわからない。)」

12.靖应鹍蔵本（七十八回存す。但し目下所在不明）

以上の 12 種の写本のうち、最後の二種類を除き、1 から 10 までの写本および“程甲本”“程乙本”の二刻本を考察対象とする。郑庆山（2002:78）は、現存する 12 種の『紅楼夢』の写本のうち、“甲戌本”“己卯本”“庚辰本”の底本は、曹雪芹と脂硯齋が乾隆年間に自ら書いた定本と指摘する。张庆善（2010:323）は、一般的に、甲戌本、己卯本、庚辰本は『紅楼夢』の三大早期の抄本と称されると指摘する。

应必诚（1983:57-58）は「《石头记》抄本可分过录本和整理本两类，一般地说，过录本如己卯本、庚辰本流传较早，整理本如梦觉主人序本、舒元炜序本流传较晚，(『石頭記』の抄本は、過錄本と整理本の二種類とに分けられ、一般的に、己卯本、庚辰本のような過録本は、比較的早く世間に広まり、夢覺主人序本、舒元煒序本のような整理本は比較的遅く流行している。)」と指摘している。以上の抄本のうち、甲戌本、己卯本、庚辰本は過録本に属し、蒙古王府本、戚序本、戚宁本、梦觉主人本、舒元炜序本、梦稿本は整理本に属する。应（1983）によると、本研究は、年代にしたがって、以上の抄本の時間前後は以下の順序であろうと推測する。

甲戌本＞乙卯本＞庚辰本＞蒙古王府本 戚序本 戚寧本＞夢覺本＞舒序本

6.3 各版本における ABB 式形容詞重畳式の比較研究

庚辰本は、完備している唯一の版本であるため、人民文学出版社刊（2008）の《红楼梦》は、庚辰本を底本とする。『紅楼夢』における ABB 式形容詞重畳式は、異なり語数 64、延べ語数 123 である。各写本と刻本で、同じ ABB 式は、簡体字と繁体字と異体字の異なりがある。このほかに、版本によって、異なる語彙を選択する場合もある。各版本における具体的な語例は付録表 7 で示している。

以下、『紅楼夢』における ABB 式形容詞重畳式の特徴と使用状況を具体的に分析する。

6.3.1 各版本の異なる ABB 式形容詞重畳式

相原茂ほか（1990:ii）は、ABB 式について、その漢字表記に揺れが見られるのはむしろ常態であるとして、「硬邦邦、硬幫幫、硬梆梆、硬棒棒」を挙げる。相原茂ほか（1990:ii）によれば、語幹の A の担う意味は比較的明瞭であり、把握しやすい。“绿葱葱”とあれば、まず「绿（A)」なのである。我々を不安にさせるのは“葱葱（BB）”の部分であると指摘する。ABB 式の BB の漢字表記は、多様性を表現し、BB の意味は把握しにくい。

『紅楼夢』各版本における ABB 式は、簡体字、繁体字、異体字の異なりのほかに、BB の漢字表記に揺れが見られる。たとえば、“乱哄哄”の第一回の使用状況を挙げる。それらは以下のように表記されている。

乱烘、、[32]（庚辰本、己卯本、梦稿本）

亂烘烘（甲戌本、蒙古王府本、舒元炜序本、程甲本、程乙本）

---

[32] 「、、」は『紅楼夢』庚辰本の写本において、重複を表す。本章は、そのままとする。

亂哄哄（戚序本、戚宁本、俄藏本）
亂哄、、（甲辰本）
もう一つ“闹吵吵”の例を挙げれば、次のようである。
鬧吵、、（庚辰本）　　闹吵、、（己卯本）　　闹炒、、（梦稿本）
鬧烘烘（甲戌本）　　鬧鬧炒炒（王府本、戚序本、戚序本）
鬧、、炒、、（舒元炜序本）　鬧吵吵（甲辰本、程甲本、程乙本）
鬧穰、、（庚辰本、己卯本、梦稿本）
鬧嚷嚷（蒙古王府、戚序本、戚宁本、程甲本、程乙本）
鬧嚷的（甲辰本）　　鬧嚷、、（俄藏本）
ABB 式の BB の漢字表記には様々な表記が見られ、多様性に富んでいるため、BB は具体的な語義を表さないものと考えられる。よって、BB は表意記号というより、むしろ表音記号と言えよう。BB は接辞として、意味の虚加程度が高いことから、各版本における BB の漢字表記は、表音符号としての性質が顕著であり、そのため漢字の表記も異なる。
ABB 式の BB は、意味を把握しにくいこともその証左となるのである。形容詞重畳式は主観性が高く、話者の認知によって、言葉の選択も異なる。したがって、各版本において、ABB 式の BB は様々な形式がある。たとえば、
光燦、、（庚辰本、己卯本、梦稿本）
光燦燦（甲戌本、甲辰本、程甲本、程乙本）
光烱烱（王府本）　　光閃閃（戚序本、戚宁本）　光爍爍（舒本）
白漫、、（庚辰本、）　　白汪、、（己卯本、梦稿本、舒本、俄藏本）
白茫茫（甲戌本）　　白汪汪（王府本、戚序本、戚宁本、甲辰本、程甲本、程乙本）
ABB 式は、各版本によって、異なる語が使用され、抄写者の知識レベル、言語能力と忠実度と関わりがあること、また、BB 式の意味について把握しにくいことを証明する。

6.3.2　ABB 式形容詞重畳式から見た版本関係

『紅楼夢』の写本は原本ではなく、“脂硯齋評本”の過録本なので、複雑である。本節は、各版本における ABB 式の異同を通して、各版本の関係を傍証することにしたい。
付録表 7 のように、各写本で異体字、誤用字などは、頻繁に出現する。抄写人の知識レベルによって、誤字も頻繁に出現する。したがって、考察する際、繁体字と簡体字の差異や異体字、判読できる誤用字を無視し、異なる言葉の使用のみに注目する。

6.3.2.1　己卯本と庚辰本の関係

己卯本と庚辰本の関係について、冯其庸（2014）は、庚辰本が己卯本を底本にする過録本であるとする。これに対して、林冠夫（2005:144-145）は、両者には同じ「祖本」があり、すなわち「己卯庚辰本」から過録すると指摘する。应必诚（1983:171-172）は、両者は密接な関係で、過録の関係ではないと述べる。
現存の己卯本は、後人の収集家によって、校正し補記され、その原状も破壊されている。言語資料として、上海古籍出版社刊の《脂硯齋重評石頭記》（己卯本）は、出版社によって、できるだけ原状回復が試みられている。
現存の 41 回余りの己卯本と 78 回の庚辰本を比較した結果、延べ語数の 123 例に、異なる語数は、“跳蹿蹿、意悬悬、颤巍巍、甜丝丝、白汪汪、松怠怠、喘吁吁、怔呵呵”の 8 例にとどまる。表 5 は己卯本と庚辰本の異同点を示したものである。

		ABB 式	庚辰本	己卯本
相違点	1	跳蹿蹿	跳躥、、	
	2	意悬悬	意懸、、	
	3	颤巍巍	頡嵬、、	
	4	甜丝丝	甜系、、	
	5	白汪汪		
	6	松怠怠		鬆怠、、
	7	喘吁吁	喘吁ヒ	
	8	怔呵呵	怔呵、、	
共通点	9	乌压压	烏鴉	烏鴉

表 5　己卯本と庚辰本における ABB 式の相違点

以上に挙げる 8 例の中で、“意悬悬”の書き方で異なりがあり、“喘吁吁、怔呵呵”は、己卯本で“喘吁吁、怔呵呵”が用いられ、庚辰本で“搖頭喘氣、怔怔”が使用される。そのうち、現存する抄写形式から、“跳蹿蹿、颤巍巍、甜丝丝、白汪汪”は、異なりがあるが、原稿の跡から、両写本は一致している。また、“乌压压”は、己卯本、庚辰本だけが“烏鴉”と書き、ほかの版本では“烏壓壓”“黑壓壓”を使う。

以上のように、両写本における ABB 式は概ね一致し、密接な関係があると窺える。誤用字と修正する前の一致は、同一の底本から過録されたか校正された可能性が高く、同一の「己卯庚辰本」の底本を有すると考えられる。

6.3.2.2　王府本、戚序本と戚宁本の関係

郑庆山（2002:82、163）林冠夫（2007:263）は、王府本、戚序本と戚寧本は同一の底本を有すると指摘する。三写本における ABB 式は、他の版本と異なる特徴がある。表 6 は、王府本、戚序本と戚寧本の異同を示したものである。

		ABB 式	庚辰本	王府本	戚序本	戚寧本
共通点	1	光灿灿	光燦、、	光烱烱	光閃閃	光閃閃
	2	甜丝丝	甜系、、	甜甜的	甜甜的	甜甜的
	3	闹嚷嚷	鬧穰穰		鬧嚷嚷	鬧嚷嚷
	4	好端端	好端、、	好好的	好好的	好好的
	5	喘吁吁	喘吁ヒ	喘氣的	喘氣的	喘氣的
	6	黄澄澄	黄澄澄	黄燈燈	黄燈燈	黄燈燈

	7	油腻腻	油腻腻	腻腻	腻腻	腻腻
	8	笑蚱蚱	笑蚱、、	笑孜孜	笑孜孜	笑孜孜
	9	怔呵呵	怔呵呵	怔怔	怔怔	怔怔
	10	牙痒痒	牙癢、、	牙癢	牙癢	牙癢
相違点	1	气恨恨	氣恨恨	氣的眼紅面青	氣恨恨	氣恨恨
	2	松怠怠		这么着	鬆怠怠	鬆怠怠
	3	直瞪瞪	直瞪瞪		なし	なし
	4	好端端	好端的	好端端	好端的	好端的

表 6　王府本、戚序本と戚寧本における ABB 式の相違点

ほかの版本を比較した結果、三写本における ABB 式に、以下の 10 例は独特な語彙を選択してみ、三写本の間で一致している。“光灿灿、甜丝丝、好端端、喘吁吁、黄澄澄、油腻腻、笑蚱蚱、怔呵呵、闹嚷嚷、牙痒痒”は、三写本には“光閃閃、甜甜、好好、喘氣、黄燈燈、腻腻、笑孜孜、怔怔、鬧嚷嚷、牙癢”とある。この三写本だけ独特な言葉を使用し、ほかの版本と異なりがある。また、“气恨恨、松怠怠、好端端”の三つの言葉について、王府本で“氣的眼紅面青、這麼着、好端端”を使い、戚序本と戚寧本で“氣恨恨、鬆怠怠、好端的”を使う。“直瞪瞪”について、戚序本と戚寧本では、省略されている。

三写本の ABB 式には、独特な一致があり、同一の底本を有する可能性が高いと考えられる。戚序本、戚寧本は王府本と異なりがあるから、王府本より、戚序本と戚寧本の繋がりが密接である。

6.3.2.3　夢稿本、甲辰本と程甲本、程乙本の関係

杜春耕（2010:9、12）は、「乾隆抄本百廿回紅樓夢稿」の序文で、梦稿本は高鶚の「工作記録本」であり、程甲本の前八十回は主に甲辰本に拠ると指摘する。夢稿本と甲辰本は、程本と密接な関係があると見なされる。表 7 は、夢稿本、甲辰本と程甲本、程乙本における ABB 式の異同点を示したものである。

		庚辰本	甲辰本	夢稿本	程甲本	程乙本
共通点	1	跳躥躥	なし	跳躥躥	なし	なし
	2	甜系、、	なし	甜絲、、	なし	なし
	3	凉森森	なし	凉森、、	なし	なし
	4	黑鬓鬓	黑鴉鴉		黑鴉鴉	黑鴉鴉
	5	白花花	見了這些東西		見了這些東西	見了這些東西
	6	好端的	無端的	端	無端的	無端的
	7	油腻腻	這個還罷了		這個還罷了	這個還罷了

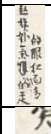
	8	笑蚫、、	咲欣欣	咲欣欣	笑欣欣	笑欣欣
	9	氣恨恨	氣的眼紅面青		氣的眼紅面青	氣的眼紅面青
	10	笑嘻嘻	笑着		笑着	笑着
	11	喘吁吁	搖頭喘氣	搖頭喘氣	搖頭喘氣	搖頭喘氣
相違点	1	明晃、、	明光、、	明晃、、	明晃晃	明晃晃
	2	好端端	好端	好端、、	好端端	好端端
	3	烏壓、、	烏壓壓		黑壓壓	黑壓壓
	4	烏鴉	烏壓		黑壓壓	黑壓壓
	5	直瞪瞪	无	直瞪瞪	直瞪瞪	直瞪瞪
	6	金晃晃	金恍、、		金晃晃	金晃晃
	7	戰兢兢	無	戰兢、、	戰兢兢	戰兢兢
	8	直蹶蹶	無	直蹶、、	直蹶蹶	直蹶蹶
	9	笑嘻、、	無		なし	なし

表 7　夢稿本、甲辰本と程甲本、程乙本における ABB 式の相違点

表 7 のように、夢稿本と甲辰本と程本は、“見了這些東西”“這個還罷了”のように、他の版本と比べて、独特な表現を有する。また、夢稿本より、甲辰本は程本との関係がもっと密接だと窺える。たとえば、“跳躥躥、甜絲絲、涼森森”は甲辰本、程甲本、程乙本で省略され、その省略が一致するのに対して、夢稿本では“跳躥躥、甜絲、、涼森、、”である。また、夢稿本に修正の跡がたくさんあり、これらの跡から、修正する前は、ほかの版本と一致しているが、修正した後、甲辰本、程甲本、程乙本と一致していることがわかる。このように、高鶚はまず他の版本から過録し、夢稿本を作り、程本編纂の工作本をしたように見える。甲辰本は、高鶚が修正した夢稿本に基づき、過録した可能性が高く、夢稿本と程本の間の「中間本」が存在するという仮説を提案する。

6.3.3 『紅楼夢』に初出の ABB 式形容詞重畳式

本研究では、語のバリエーションを探るという観点から、『紅楼夢』における ABB 式について、BCC コーパスと CCL コーパス[33]で検索を行った。加えて、文昌荣編《描摹词辞典》を参考にし、『紅楼夢』に初出の ABB 式があることを確認した。

“凉森森”“甜丝丝”“白汪汪”“意绵绵”“油汪汪”“乌压压”“直瞪瞪”“牙痒痒”“咸

[33] BCC コーパス<http://bcc.blcu.edu.cn/ >、CCL コーパス<http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/>、2022 年 4 月 25 日参照。

津津”“散松松”“直蹶蹶”“羞惭惭”“怔呵呵”の 13 語は、『紅楼夢』以前の著作に使用例が見えない。具体的な意味は、《描摹词辞典》《汉语重言词词典》《近代汉语后缀形容词词典》の辞典の項目によれば、以下の通りである。“意绵绵”は、上記の辞典に収録されていない。

凉森森：首见于清人曹雪芹《红楼梦》。1.清凉的感觉。2.用于特定人物和特定环境，含有阴冷可怕的意味。（文昌荣（1997）《描摹词辞典》）

甜丝丝：首见于清人曹雪芹《红楼梦》。1.形容有甜味。2.形容心中感到幸福愉快。（《描摹词辞典》）

白汪汪：首见于清人曹雪芹《红楼梦》。形容一片白。“汪汪”形容水面宽广。（《描摹词辞典》）

油汪汪：首见于清人曹雪芹《红楼梦》。1.形容油多。2.形容油光闪亮。（《描摹词辞典》）

乌压压：首见于清人曹雪芹《红楼梦》。义同“黑压压”，形容人或物众多。（《描摹词辞典》）

直瞪瞪：见于曹雪芹《红楼梦》。1.形容瞪眼逼视的神态。2.形容直眉瞪眼，十分气恼。（《描摹词辞典》）

牙痒痒：见于清人曹雪芹《红楼梦》。形容切齿愤恨。（《描摹词辞典》）

咸津津：形容微有咸味。（汪维懋（1999）《汉语重言词词典》）

散松松：形容松散的样子。（张美兰（2001）《近代汉语后缀形容词词典》）

直蹶蹶：见于清人曹雪芹《红楼梦》。1.挺直的样子。2.形容刚直的气概。（《描摹词辞典》）

羞惭惭：形容害羞的样子。（《近代汉语后缀形容词词典》）

怔呵呵：形容发愣发呆的样子。（《近代汉语后缀形容词词典》）

上記のように、この 13 語は、清代『紅楼夢』から使い始められた可能性が高いものと考えられる。

上記 13 例の ABB 式の異なりは、“脂砚斋本”抄写者の基礎方言、知識レベル、言語能力と原本に対する忠実度に関係があることが予想され、各版本に様々な形式で表現されている。これらの 13 語は各版本の言語的特徴をよく表すものであろう。

付録表 7 のように、“白汪汪”は庚辰本ではもともと「白汪汪」と書かれ、修正されてから、“白漫漫”になっている。影印の版本から修正の跡が見える。己卯本は、右側に赤文字で“漫”という字を添加する。甲戌本では「白茫茫」と書かれている。上記の 5.4.3.2 で言及したように、“白汪汪”“白茫茫”“白漫漫”“白花花”を比較した結果、“白汪汪”は水面の反射のような「白」で、白い喪服を着用した従僕たちの様子を描写していた。“白汪汪”は、曹雪芹が初めて用いた可能性が高いと推察され、抄写人か点評者が“白汪汪”という言葉遣いに熟知しないため、恣意的に“白漫漫”に修正したのだろう。甲戌本では、「白茫茫」を使って、ぼんやりと白く煙るさまを表し、“白汪汪”ほど適切ではないと考える。

もう一つの“凉森森、甜丝丝”は、甲辰本、程甲本、程乙本では省略され、王府本、戚序本、戚宁本では“甜甜”に変更されている。“乌压压”は各版本で“烏鴉”“烏壓”“烏壓壓”“黑壓壓”などと書かれている。

“直瞪瞪”“直蹶蹶”は、戚序本、戚宁本、舒本、甲辰本、俄藏本では省略されている。“牙痒痒”は各版本で“牙癢”“牙疼”“牙根兒癢癢”などと書かれ、“羞惭惭”は、“羞的臉通紅”“羞臉通紅”“羞惭惭”と書かれ、“怔呵呵”は、“怔怔”“怔克克”と書かれている。

以上の挙げる 13 例は多数の各版本において、様々な形式がある。これらは、曹雪芹の

作品のスタイルを表しているだろう。抄写人か点評者はよくわからないため、勝手にこれらの言葉を修正したと考えられる。

6.4　まとめ

現存する『紅楼夢』の各写本と刻本における ABB 式は多様であり、版本におけるそれらを比較すると、以下の三方面に検証を提供できた。

第一に、各版本の関係をABB式の同異から傍証できた。ABB式の異同状況から各版本の関係を考察した結果、己卯本と庚辰本は、同一の底本から過録したか、あるいは校訂本である可能性が高く、同一の「己卯·庚辰本」の底本を有すると考えられた。戚序本、戚宁本は王府本と異なりがあり、王府本より、戚序本と戚宁本の繋がりが密接であった。ABB 式から夢稿本、甲辰本と程甲本、程乙本の関係を考察した結果、後四十回の続作者と目される高鶚は、まず他の版本から過録し、夢稿本を経て、程本編纂の定本としたものと推測出来る。甲辰本は、高鶚が修正した夢稿本に基づき過録した可能性が高く、夢稿本と程本の間にある「中間本」の仮説を提案した。

第二に、ABB 式は主観性が強い特徴があるため、BB の漢字表記に揺れがあり、把握しにくかった。『紅楼夢』各版本におけるABB式には、BBの形式によって多様性を呈していた。

第三に、“凉森森”“甜丝丝”“白汪汪”などの 13 例の ABB 式は、『紅楼夢』に初出すると見られた。ABB 式は最も強く作者の意図を表すため、この 13 例の ABB 式は各版本で一致せず、様々な形式があった。抄写人か点評人がこれらの ABB 形容詞重畳式に熟知しなかったため、恣意的に修正した可能性があると考えられた。

第七章　認知言語学から見た『紅楼夢』の形容詞重畳式

7.1　文成分の制約条件—“的”との共起—

本節は、『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式を対象に、助詞“的”との共起関係について考察するものである。“的”は、現代中国語で使用頻度が高く、基礎語彙として不可欠な虚詞である。通時的観点からみると、“的”は、元代から次第に早期の“底”と“地”に交替し、明清白話小説において表記としての統一を見た。“的”の文法的機能は多岐にわたるが、本節では、形容詞重畳式との共起に焦点を当てる。現代漢語で形容詞重畳式は、一般的に“的”と共起しなければ文として成立できない特徴がある。たが古代漢語、近代漢語において“的”は形容詞重畳式にとって必須の標識ではない。

本節は、『紅楼夢』における形容詞重畳式と“的”の共起状況を考察し、文成分と意味の面で使用実態を明らかにすることを目的に、“的”の歴史変遷の内因を探究する。認知言語学的観点から“有界”（有界）と「グラウンディング」、および語用論の「描写性弱化」の考えを基に、形容詞重畳式と“的”の共起関係を解釈していきたい。

7.1.1　朱德熙 1961、1993

朱德熙（1961/1980:67-77）は“的”の形式を三種類に分ける。①〔副詞＋“的”〕は副詞性の“的 $_1$”であること。②〔単音節形容詞重畳式（AA 式）＋“的”〕は、形容詞性の“的 $_2$”であること。③〔単音節形容詞＋“的”〕は、名詞性の“的 $_3$”であること。朱（1961/1980）の“的 $_2$”は主に形容詞重畳式と共起し、状態形容詞になると指摘している。また、朱德熙（1993）は、連体修飾語となる状態形容詞と共起する“的”は、“的 $_2$＋的 $_3$”であると修正する。陆丙甫（2003）、沈家煊（1995）、石毓智（2000）は、三つの“的”は同一性を有すると指摘している。

7.1.2　『紅楼夢』における形容詞重畳式と“的”の共起

7.1.2.1　AA 式形容詞重畳式と“的”の共起

『紅楼夢』における形容詞重畳式は AA 式、ABB 式、AABB 式などのパターンがある。『紅楼夢』前八十回における AA 式全 542 例の中で、“的”と共起する例は 296 例であり、半数以上を占める。文成分としての AA 式における、“的”との共起状況を見てみることにする。具体的な用例数は、以下の表 8 で示したものである。

文成分／形式	連用修飾語	連体修飾語	補語	述語	主語	目的語	独立成分	総数
使用例	326	82	8	112	3	2	9	542
“的”との共起	210	37	4	33	2	1	9	296
パーセンテージ	64.4%	45.1%	50%	29.5%	66.7%	50%	100%	54.7%

表 8　『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式と“的”の共起状況

『紅楼夢』における AA 式形容詞重畳式と“的”の共起関係を、以下の二つの方面から取り上げる。

(1)『紅楼夢』における AA 式と“的”の共起の用例は、すべて非韻文に出現し、韻文に

出現しない。重言の中で“的”と共起するのは、“纷纷”“默默”“汪汪”の 3 語にとどまる。韻文は、韻律の制約のため“的”をつけない。この点から、重言は韻文に出現する頻度が高いため、“的”をつけない傾向にあることが指摘される。すなわち、韻文と重言は擬古的表現の手段として、“的”と共起しにくい傾向があるといえよう。

(2)『紅楼夢』における AA 式の文成分について見ると、連用修飾語の例が最も多く、326 例に達する。述語と連体修飾語がそれに次ぐ。AA 式は連用修飾語となる際、“的”と共起する場合が 210 例あり、自由に省略でき、必要ではない状況である。述語となる場合、“的”と共起する語例は、33 例にとどまる。共起できない場合は、概ね韻文に出現する。これら以外に、ABCC のようなコロケーションも多く、現代中国語で成語として使用され、固定される。たとえば、“虎视眈眈”、“天网恢恢”などである。連体修飾語となる場合、“的”と共起する語例は37例である。陆俭明（1988:175）は、状態形容詞は“的”を接辞しないと、直接的に名詞を修飾できないと指摘している。しかし、『紅楼夢』における状態形容詞の AA 式は、大多数が“的”を接辞しないで、直接に名詞を修飾する。韻文のリズムの制約で、“的”と共起しにくいことのほかに、散文にも“黄黄脸儿”“高高孤拐”などの使用例がある。また、“的”の代わりに、“之”“然”と共起する。たとえば、“飘飘浮荡之物”、“粼粼然池面皱碧铺纹”などがある。

7.1.2.2 ABB 式形容詞重畳式と“的”の共起

『紅楼夢』における ABB 式および”的”との共起状況を具体的に示したのが表 9 である。

文成分 / 形式	連用修飾語	連体修飾語	補語	述語	主語	目的語	独立語	語例
使用例	74	18	2	12	2	3	12	123
“的”との共起	41	7	2	8	2	3	7	70
パーセンテージ	55.4%	38.9%	100%	66.7%	100%	100%	58.3%	56.9%

表 9 『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式と“的”の共起状況

以上の AA 式を比較すると、『紅楼夢』における ABB 式は、連用修飾語および連体修飾語となる際、“的”との共起のパーセンテージがやや低く、述語となる場合、“的”との共起のパーセンテージはやや高くなる。中国語の形容詞は、統語論の観点から主に連用修飾語、述語として機能する場合について議論される。本研究は主に、連用修飾語と述語に注目する。ABB 式は連用修飾語や述語となる際、“的”と共起しない場合も多く、連体修飾語となる ABB 式は、“的”と共起しない場合、韻文に出現することが多い。また、直接的に“的”と共起しない場合、ほかの形容詞と連用し、中心語の前に“的”をつける。たとえば、“<u>凉森森甜丝丝</u>的幽香”、“<u>热腾腾碧荧荧</u>的绿畦香稻粳米饭”などである。また、量詞と組み合わせることで”的”を省略できる例も見られる。例えば、“一把明晃晃钢刀”。

述語となる ABB 式は、AA 式と同じく、韻文において、リズムの制約により“的”が省略される。また、独立して述語となる場合、“的”は常に省略される。例えば、

53)一把上面錾着一“鸳”字，一把上面錾着一“鸯”字，<u>冷飕飕</u>，<u>明亮亮</u>，如两痕秋

水一般。（第 66 回:p.921）
（一ふりの表には「鴛」の字を刻み、いま一ふりの表には「鴦」の字を刻んであって、まばゆいばかりの氷の刃は二すじの秋の水のごとくに見えます。）（第 66 回:p.264）

このように、『紅楼夢』における ABB 式の“的”との共起状況は、AA 式の状況と一致している事が分かる。現代中国語において状態形容詞は“的”の共起が必要であることとずれがある点を手掛かりに、『紅楼夢』における AABB 式形容詞重畳式における“的”との共起状況を取り上げる。

7.1.2.3　AABB 式形容詞重畳式と“的”の共起

『紅楼夢』における AABB 式重畳式および“的”との共起状況を示したのが表 10 である。

文成分	連用修飾語	連体修飾語	補語	述語	主語	目的語	語数
使用例	65	5	9	70	3	4	156
“的”との共起	31	2	3	26	2	1	65
パーセンテージ	47.7%	40%	33.3%	37.1%	66.7%	25%	41.7%

表 10　『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式と“的”の共起

AA 式と ABB 式と比較してみると、連体修飾語と連体修飾語とする AABB 式の“的”との共起のパーセンテージは中間において、連用修飾語となる比率が最も高い事が分かる。

AA 式と ABB 式は韻文に使用する場合、“的”との共起は必須ではないのに対して、AABB 式は、非韻文に出現し、韻文に出現しない状況が観察される。また、連体修飾語とする例は 5 例にとどまり、“的”と共起しない 2 例は、以下の通りである。

54)晴雯忙回身进来，笑道：“那里就唬死了他？偏你惯会这蝎蝎蛰蛰老婆汉像的!”（第 51 回:p p.694-695）
（晴雯は拍子にくるり向きを変え、なかへとって返すと、笑いながら、「滅多なことであの人をたまげさせられるものですか！若様ときては、これしきのことでおっかなびっくり、まるで女の腐ったみたいでいらっしゃいますこと！」）となじります。（第 51 回:pp.36-37）

55)一面猜疑，一面抬头再看时，只见花花簇簇一群人又向怡红院内来了。（第 35 回：p.460）
（などと推量しながら、顔をあげてかさねて見やりましたところ、花のような人の群がまたもや怡紅院指してやってきました。）（第 35 回：pp.144-145）

例 54)は、“这”という指示詞と組み合わせることで、また、例 55）は、“一群人”という数量詞と組み合わせることで“的”を省略する。

以上のことから、形容詞重畳式は連用修飾語となる語例が多いと言えよう。野田耕司（2017:8）は、「個別具体性の高い事象、すなわち特定の時空間に現れた特定の参与者（動作者、受動者など）の関わる具体的な動作・状態を表す出来事であればあるほど、その参与者、動作、状態の有様を状語で表現するのに重ね型形容詞を多用するのではな

いかというものである」と指摘する。述語や連体修飾語として用いる場合、AA 式は韻文での使用に際し“的”が省略されやすく、熟語となる際にも“的”は省略されやすい。ABB 式は AA 式と同じく、韻文に使用する際に“的”は省略されやすい。連体修飾語となる AA 式、ABB 式、AABB 式は、数量詞との組み合わせで“的”の省略が起きやすい。

『紅楼夢』における形容詞重畳式にとって“的”との共起は必須条件ではなく、省略する事が許容される。これは、現代中国語における状態形容詞が“的”との共起を必須とする事象と一致しない。次に『紅楼夢』における形容詞重畳式と“的”の共起状況を踏まえて、その内因を試みる。

7.1.3　共起の内因

7.1.3.1　有界から見た形容詞重畳式と“的”の共起

Langacker（1987/2004:486）は、「有界」について、「A region is bounded when there is some limit to the set of interconnected entities it comprises, determined on the either internal configuration or contrast with surroundings.（区域が境界を持つとは、お互いに接続された実体の集合を含んでいる場合であり、それは内部構成ないし環境周囲との比較によって決定される。）」と定義する。辻幸夫（2013:356）は、「全ての動詞は、プロセスを表し、全ての名詞はモノを提示しているとされる。モノとはある領域における区域のことである。従って、名詞は全て何らかの区域を指し示している。このような名詞の種別を考えるとき、その区域内に何らかの境界が設定されているかどうか、すなわちその区域の「有界性／非有界性」が重要となる。具体的には、名詞のプロトタイプである可算名詞は、主要領域において境界が明確に設定され、「有界的」な区域を表している。これに対し、集合名詞はそのような境界が明確ではなく、「非有界的」な区域を表している。（中略）動詞が表すプロセスは、完了プロセスと未完了プロセスとに分けられるが、時間領域において、前者は有界的であるが、後者は非有界的である」と指摘している。

沈家煊（1995:370）は、有界名詞の本質とは、その提示するモノの個体性と可算性であると指摘する。また、大河内康憲（1985:7）は、「量詞と結んだものはひろく名詞について、個別の観念を与え、抽象的なものを具体化するために働いている。」と指摘する。

以上の先行研究から、中国語の名詞は、量詞と結びつくと、数えられる可算名詞になり、有界名詞であると見なされる。

沈家煊（1995:367）は、事物は空間において「有界」と「無界」の対立があり、動作は時間において「有界」と「無界」の対立があり、性状は程度か量で「有界」と「無界」の対立があると指摘する。性質形容詞は「無界」であり、状態形容詞は「有界」である。

言語への反映から見れば、名詞は数量詞を通して、「無界」の不可算名詞と「有界」の可算名詞に分けられる。動詞では、動量詞とアスペクト助詞などを通し、形容詞では重畳式を通して、「無界」と「有界」が現れる。

沈家煊（1995:376）は、名詞、動詞、形容詞はすべてある領域における区域で、「有界」と「無界」の対立があり、お互いに平行性を有すると指摘している。以下に、有界の観点から［形容詞重畳式＋“的”N］構造を説明する。

朱德熙（1956/1999:5）は“白纸”と“雪白的纸”“挺白的纸”を比較し、“白纸”が類別を表し、“雪白的纸”“挺白的纸”の“雪白”“挺白”は分類の根拠ではなく、モノの状況と情態を描写すると指摘している。陆丙甫（1988：103）は、“小牛”と“小的牛”を比較し、“小牛”は“泛指的类别（総括する類別）”を指し、“小的牛”は“不过是眼前这群牛中体型较小者（眼前の群れの中の小さい方に過ぎない）”を指す。すなわち、前者は類の総称で、後者は個別の称呼である。“的”をつけると、類別の類から個別性の個にか

わり、個別性を得ることから、無界から有界に変わると指摘する。沈家煊（1995:376）は、“的”の作用について、無界概念を有界概念に変えると指摘している。よって、「A＋“的”N」の構造は、A が性質形容詞にせよ、状態形容詞にせよ、“的”をつけると、個別性を表し、一般的な総称を表さない。

以上言及したように、量詞も無界名詞から有界名詞に変化させる手段である。沈家煊（1995:377）は、“干干净净衣服”という表現が自然になるためには、“的”もしくは数量詞をつけて、“干干净净的衣服”と“干干净净一件衣服”にすると指摘している。

『紅楼夢』における“小小”18 例の中で、7 例に“的”が省略されており、そのうちの 2 例に“之”が使用され、“的”の役割を担っている。例えば、

56)子兴道：“倒没有什么新闻，倒是老先生你贵同宗家，出了一件小小的异事。”（第 2 回:p.25）
（子興、「格別評判になった話といって耳にいたしませぬが、そう申せば、あなたのご同族のお屋敷で、ちと変わったことがございましたっけ」）（第 2 回:p.66）

57)转过插屏，小小的三间厅，厅后就是后面的正房大院。（第 3 回:p.38）
（これをよけて通ると狭い三間の部屋、その部屋のうしろが奥の正房（母屋）（第 3 回:p.87）

58)南边是倒座三间小小的抱厦厅（第 3 回:p.46）
（側は倒座（表門をはいったところに中庭を挟んで正房に対して建てた棟）で三つに仕切ったこぢんまりした抱厦庁（家屋にさしかけて継ぎたした部屋）（第 3 回: p.104-p.105）

59)后有一半大门，小小一所房室。（第 3 回:p.46）
（その裏手にあたって表門の半分ほどの門をつけたこぢんまりした家屋があります（第 3 回: p.105）

60)罩一件海龙皮小小鹰膀褂（第 49 回:p.663）
（その上から海竜の毛皮を裏にして小鷹をあしらった肩掛けをはおり）（第 49 回:p.326）

61)小小一个人家（第 6 回:p.91）
（ものの数にもはいらぬさる家の者が）（第 6 回:p.197）

62)方才所说的这小小之家（第 6 回:p.91）
（さきほど述べた、そのものの数にもはいらぬ家とは、）（第 6 回:p.197）

63)祖上曾作过小小的一个京官（第 6 回:p.91）
（祖父は以前、ちょっとした都詰めの役人をしていたことがあって）（第 6 回:p.197）

64)小小的年纪倒作下个病根儿，也不是顽的。（第 7 回:p.103）
（お年もお若いのに持病もちでいらっしゃるなどとは、冗談ではございませんもの）（第 7 回:p.234）

65)上面小小两三间房舍（第 17、18 回:p.221）
（手前はこぢんまりした三間ほどの屋舎で）（第 17、18 回:p.194）

66)又有两间小小退步。（第 17、18 回:p.221）
（また二間ほどの小さな離れがあります。）（第 17、18 回:p.194）

67)只是小小之人作此词句，更觉不详，皆非永远福寿之辈。（第 22 回:p.305）
（これが若い者のすることだけに、かような詩句を作るとは、いよいよもって不吉の感を免れぬ。揃って長生きできる連中ではなさそうだ……）（第 22 回:p.85）

68)上面小小五间抱厦（第 26 回:p.352）

（正面はこぢんまりした五間の抱厦になっていて）（第 26 回:p.200）

69)见小小一张填漆床上，悬着大红销金撒花账（第 26 回:p.352）

（そこに据えられた漆ぬりの小型寝台のうえには、緋色の地にとかし金で花模様を散らした帳子がつるしてあって）（第 26 回:p.202）

70)然后看见胭脂也不是成张的，却是一个小小的白玉盒子，里面盛着一盒，如玫瑰膏子一样。（第 44 回:p.593）

（さらに胭脂はと見れば、これがまた薄く伸ばした品でなく、ごく小造りな白玉の蓋物のなかいっぱいに詰めたところは、玫瑰膏（はまなすのエキスを練り固めたもの）かと思われるほど。）（第 44 回:p.141）

71)黛玉放下钓竿，走至座间，拿起那乌银梅花自斟壶来，拣了一个小小的海棠冻石蕉叶杯（第 38 回:p.507）

（黛玉は釣竿を手から放すと、席までいって、例の梅花模様のついた燻銀（硫黄でくすぶらせた）の手酌用徳利を取りあげ、海棠色の凍石（蠟石）で芭蕉の葉形にこしらえた浅い杯を選り取りました。）（第 38 回:p.285）

72)平儿站在炕沿边，捧着小小的一个填漆茶盘，盘内一个小盖钟。（第 6 回:p.98）

（平児は坑のへりに立ち、漆を流しこんだしごくちいさな茶托にちいさなふたつき茶碗をのせてささげたままでいます。）（第 6 回:p.216）

73)小小的顽意（第 73 回:p.1009）

（ほんの手なぐさみを）（第 73 回:p.103）

“小小”はいずれも連体修飾語として用いられ、“的”が省略される 7 例は、すべて量詞と組み合わさる特徴がある。“的”と量詞は無界概念から有界概念へと概念を変更する手段であり、量詞があれば、”两三间房舍”“五间报厦”などは特定の個別性を有し、類別を表さなくなるため、“的”は自由に省略できる。

また、『紅楼夢』において、“一把明晃晃钢刀”、“花花簇簇一群人”のように、ABB 式と AABB 式は、数量詞と組み合わせて、“的”が省略されやすい傾向がある。すなわち、「数量詞」と“的”は、有界のマーカーであり、無界から有界への手段とみなされる。有界手段となる“的”と量詞は同時に出現する必要はないといえよう。

7.1.3.2　描写性弱化

陆丙甫（2003:18-20）は、状態形容詞は単純に描写性を有し、多くの場合“的”が付き、これは“的”が描写性の標記とみなされる動機であり、“的”をつけると、描写性が強くなると指摘する。完权（2018:59）は、「坚持标记论原则的基础上，对“X 的 Y”而言，“的”表示“X 的”对“Y”进行“什么样儿的”特征描写，“的”是标记这种描写关系的标志。（標記論の原則に基づき、『X 的 Y』について述べると、『的』は『X 的』が『Y』に対して、どのような特徴を有するか描写することを示す。「的」は、描出の関係を示す標記である。」と述べる。彼（2008:59）は、“描写”について、Sperber,Dan &Deirdre Wilson（1995:259）の観点を引用し、「描写是言辞的用法之一，如果一段话所表达的思想是被言者当做对事态（state of affairs）的真实描述，那么这段话就是用作描写。（描写とは、言語行動の一つで、もしあるまとまりのある発話により表現された発話内容が、話し手の事態に対する真実の記述であるとみなされる場合、その発話のまとまりは描写として使用される。）」と定義する。

以上から、“的”は現代中国語で、一般的に状態形容詞と組み合わせて、描写性が高くなる機能を有するとみなされる。しかし、『紅楼夢』における形容詞重畳式は、連体修飾

語として用いるにせよ、述語とするにせよ、大よそ半数以下の例で“的”と共起する。

形容詞重畳式のパターンの中で、AA 式が最も早く出現する。西周金文に現れ、『詩経』で大きな発展を遂げる。本節は、主に AA 式を取り上げて、通時的観点から“的”との共起の原因を明らかにしていく。

石锓（2010:56-125）は、AA 式の共起語尾について、先秦時代の韻文において AA 式重言に語尾をつける例は見られず、散文に用いられる AA 式重言は大部分が“焉、乎、然、如、尔”を接辞するという。魏晋の AA 式重言は主に“然”を接辞し、五代から宋までの間では、新たな語尾“底、地、生”を接辞する例が出現する。元明清時代では、AA 式重畳の大部分が語尾として“的”に統一されると指摘する。

『紅楼夢』に“粼粼然”、“醺醺然”という古代中国語の例が見られる。7.1.2.1 で言及したように、韻文は“的”と共起しにくい。石锓（2010:62）は、韻文構造は重言の語尾を制約すると指摘する。よって、『紅楼夢』に“诗词歌赋”形式の韻文が多いため、AA 式が韻文に出現する際、語尾の“的”と共起しにくい点が指摘される。また、石锓（2010:122）は、述語及び補語となる場合、唐代の AA 式は多く語尾をつけず、元明時代に AA 式は多く“的”を接辞し、現代中国語（普通話）の AA 式は、必ず語尾の“的”を伴うという。この変化は AA 式重畳の描写性の弱化の傾向を反映するものであると指摘する。

陆丙甫（2003）完权（2018）が論述するように、“的”は描写性を強める機能を有し、石锓（2010）の通時的な観点を踏まえると、AA 式は重言から重畳へと変遷することで、描写性が弱化する傾向にある。AA 式は述語と補語以外の文成分においては、“的”をつけて、本来描写性弱化の AA 式の描写性を強める傾向があると考える。これが、現代中国語の状態形容詞と“的”の共起の主要な原因であると見なされる。しかし、『紅楼夢』において、“黄黄脸儿”、“高高孤拐”など、非韻文であるにも関わらず“的”と共起しない語例が見られる。《脂硯齋重評石頭記》庚辰本では“黄黄”の右側に“的”を補記し、戚宁本では“黄黄的脸儿”とする。“高高”は庚辰本では“的”と共起せず、戚宁本では“的”と共起する。

清代の『紅楼夢』は、古代中国語の韻文での語尾の省略があるとともに、現代語の“的”と共起する制約に合致しない例があり、元明時期の“的”の多用と現代語の“的”共起の制約との中間地帯（グレーゾーン）に位置し、境界線が明確ではないと考えられる。

7.1.3.3　グラウンディング（grounding）

連体修飾語として用いる形容詞重畳式と“的”の共起について、本節では、認知言語学のグラウンディング（grounding）の観点で説明してみることにする。グラウンディングについて、辻幸夫（2013:81）は、「ある事物が、話し手、聞き手、および両者の間で共用されている知識にたいする位置が特定されて叙述されることを言う」と指摘する。

完权（2012:182）は、量詞、指示代名詞、構造助詞が有する共通性は、認知グラウンディングの機能を反映すると指摘し、“那个糖葫芦”、“一个糖葫芦”、“又大又甜的糖葫芦”の例を挙げて、“那个”“一个”“……的”を通して、個別の“糖葫芦”を選び出し、個別に識別する効果をもたらすとする。このように、“的”は指示代名詞、量詞と同じく、グラウンディングの手段であると言える。［形容詞重畳式＋“的”］について、例えば“红通通的糖葫芦”についてグラウンディングの観点で説明すれば、“糖葫芦”の類を表すのではなく、個別の“糖葫芦”の一種、あるいは選んだ一串の“糖葫芦”を指し、類から個への識別が実現される。“的”は前置される修飾語を提示し、「指定（designation）さ

れたプロセスがグラウンドされ、叙述されるのである」（辻幸夫，2013：81）。

Langacker（1993:13）は、“For our purposes, however, the essential point is simply this: the more intrinsically one entity figures in the characterization of another, the more likely it is to be used as a reference point for it. ”（しかし、ここで重要なのは、ある実体が他の実体の特徴づけにおいてより本質的に描写すればするほど、その実体の参照点として使われる可能性が高くなるということである）と指摘する。周知のように、状態形容詞は描写性が高いと言われ、名詞を修飾する場合、参考点となる可能性が高い。よって、形容詞重畳式と“的”共起の原因について、完权（2018:60-61）は Langacker（1993）の参照点の理論を踏まえて、「“的”具有提高参照体指别度的功能，最终提高了目标体的指别度，亦即通过标记描写关系而达到认知入场。这就是状态形容词后面需要“的”，并且在做定语时的 $_3$ 能够兼并的$_2$的认知基础。（“的”は参照点自体の識別度を向上させる機能を持ち、最終的に目標の識別度を高めるのであり、同様に描写関係をマークすることで認知のグラウンディングを実現するのである。これが、状態形容詞の後に”的”が必要であり、更に、連体修飾語となる「的$_3$」が「的$_2$」と融合できる認知的根拠である。）」と指摘する。

邢晓宇（2015:28）は“指别度”を“可别度”と表現し、“可别度”（identifiability）の概念について、「是指语言使用者对语言单位所指的事物进行指称和识别的变量。”（言語使用者が言語単位で指すものを識別し、特定する変数である。）」と定義する。

これらの議論からみると、“的”の機能は、量詞や指示代名詞と同じく、グラウンディングする手段として、類の一般性から、個の個別性への識別を実現する。“一把明晃晃钢刀”の例は、形容詞重畳式と量詞とを組み合わせて、“的”を省略する。これをグラウンディングで説明すれば、構造助詞の“的”と量詞は、グラウンディングの要素として、お互いに排斥する（邢晓宇，2015:69）。そのため、形容詞重畳式と量詞は同時に修飾語として、“的”が省略されやすい。

形容詞重畳式は、主観性が高く、参与者がその主観性を把握するため、“的”をつけて、“指别度”を高めて、話し手と聞き手の両者に感覚を共有させるという目的をもたらすと考えられる。

7.1.4　まとめ

三つのパターンの形容詞重畳式における“的”との共起状況は、現代中国語の形容詞重畳式の“的”との共起状況は一致しなかった。そこで、認知の「有界」と「グラウンディング」の観点で、その“的”の機能を説明することを試みた。通時的な観点から、形容詞重畳式の「描写性弱化」は、“的”をつける内因になると考えた。また、『紅楼夢』における形容詞重畳式と“的”の共起は、韻文のリズムと熟語の固定と関係があることがわかった。

2008 年人民文学出版社刊『紅楼夢』では、“黄黄脸儿”“高高孤拐”など“的”を省略する例がある。《脂砚斋重評石頭》“庚辰本”“戚宁本”で確認してみると、“黄黄的脸儿”“高高的孤拐”としている。2008 年人民文学出版社版では、写本並びに現代中国語と相違して、“的”が省略されるのはなぜなのか、後の名詞とどのような関係があるか、今後各版本について調査を進め、その内因を課題として検討することにしたい。

7.2　空間化から見た基式と重畳式

7.2.1 『紅楼夢』における基式（単音節性質形容詞）と重畳式（状態形容詞）の比較

7.2.1.1　コロケーション

性質形容詞と状態形容詞が名詞を修飾する場合、どのような異なりがあるのだろう。朱德熙（1956/1999:7、8）は、性質形容詞が名詞を修飾する場合、“白纸”“白的纸”の例を挙げる。性質形容詞は直接的に名詞を伴い、あるいは“的”と共起して名詞を伴う。数量詞がある場合は、“一朵红花儿”のコロケーションで、“红（的）一朵花”のコロケーションは見られない。状態形容詞が名詞を修飾する場合、“雪白的纸”“一朵鲜红的花”“鲜红的一朵花”をあげられると指摘する。

陆俭明（2001:9）は、形容詞と名詞のコロケーションについて、以下のように取り上げる。

雪白的鞋　　*雪白鞋　　雪白一双鞋
水汪汪的眼睛　*水汪汪眼睛　　水汪汪一双大眼睛

以上の現象に補足を加えると、“好好的一件衣服”“一件好好的衣服”の使用例もある。

陆俭明（2001:9）は、「状态词作定语不带“的”，如果不用数量短语，所形成的偏正词组就不能成立。（状態詞が連体修飾語となる時は、「的」をつけない。もし数量フレーズを用いなければ、形成される修飾フレーズが成立できない。）」と解釈する。

以上のコロケーションをまとめれば、以下の六つのコロケーションが設定される。

① 性質形容詞＋名詞
② 性質形容詞＋的＋名詞
③ 数量詞＋性質形容詞＋名詞
④ 状態形容詞＋的＋名詞
⑤ 数量＋状態形容詞＋的＋名詞
⑥ 状態形容詞（的）＋数量詞＋名詞

『紅楼夢』前八十回において、上記①～⑥のコロケーショはすべて存在する。

「性質形容詞＋名詞」の①種類は多く出現する。“大”を例に取れば、『紅楼夢』前八十回に、“大字”“大院”“大厅”“大轿”“大师”などの語彙が使用される。朱德熙（1956/1999:7）は、「性質形容詞＋名詞」は語彙化の傾向があり、“顶大的大老虎”“小不钉点儿的小耗子”の例を挙げ、「性質形容詞＋名詞」の形式は「整体性」があると証明する。『紅楼夢』前八十回において、以下のような例文も存在する。たとえば、

74)进入堂屋中，抬头迎面先看见一个赤金九龙青地大匾，匾上写着斗大的三个大字，是“荣禧堂”，后有一行小字：“某年月日，书赐荣国公贾源”，又有“万几宸翰之宝”。（第 3 回:p.43）
（建物のうちに足を踏み入れ、顔をあげて正面を仰いだ拍子に、まず眼にはいったのは銅作りの九尾の竜で縁どった黒地の大きな横額、それには大字で三字「栄禧堂」とあり、後に小字で一行「某年月日、書して栄国公賈源に賜す」と記し、万機を治らす天子の親筆たるを示す印章がついてあります。）（第 3 回:p.100）

「性質形容詞＋的＋名詞」の②類は成立可能であるが、実際に使用する例は、ほとんど見られない。性質形容詞の前に、常に程度副詞と共起し名詞を修飾する。たとえば、

75)昨日冯紫英荐了他从学过的一个先生，医道很好，瞧了说不是喜，竟是很大的一个症候。（第 11 回:p.151）

（ところが昨日馮紫英さまが自分の以前就いていた先生で医術にくわしいおひとがあるからと推薦してくださいまして、そのかたに診察していただきましたところ、おめでたではない、それどころかなんともはや重い症状だとのお診立てでございましてね。）（第 11 回:p.20）

“一片大海”“一只大船”“一阵凉风”“一对高几”のように、第③類の例は多く用いられる。

以下に『紅楼夢』における例文をあげる。

76)蜂腰削背，鸭蛋脸面，乌油头发，高高的鼻子，两边腮上微微的几点雀斑。（第 46 回:p.615）

（蜂の胴のようにくびれた腰、肉の削げた背、家鴨の卵のように色白の顔、鴉の濡れ羽色をしたつややかな頭髪、高い鼻、両の頬にはうっすらと雀斑さえ見えて……。）（第 46 回:p.198）

77)林之孝家的道：“他是园里南角子上夜的，白日里没什么事，所以姑娘不大相识。高高孤拐，大大的眼睛，最干净爽利的。”（第 61 回:p.840　例 22）の再掲）

（林之孝の妻女、「あの人は園の南くぐり門の宿直を受け持っておりまして、日中は格別ご用がございません。お姉さんがあまり覚えがないとおっしゃるのもそのせいでございましょう。頬骨の出た、目玉の大きい、大層きれい好きできびきびしたところのある女でございます」こう答えますと、）（第 61 回:p.44-p.45）

78)宝玉一面吃茶，一面仔细打量那丫头：穿着几件半新不旧的衣裳，倒是一头黑鬓鬓的头发，挽着个鬟，容长脸面，细巧身材，却十分俏丽干净。（第 24 回:p.330）

（宝玉は茶をすすりながら、とつくり検分しましたところ、この侍女見習、身につけているものこそいずれも着古した衣類ばかりですが、黒々とした美しい髪を一つにまいて結いあげ、すっきりした細おもて、きゃしゃな身体つき、どこから見てもいきで垢ぬけがしています。）（第 24 回:p.148）

79)黛玉放下钓竿，走至座间，拿起那乌银梅花自斟壶来，拣了一个小小的海棠冻石蕉叶杯。（第 38 回:p.507　例 71）の再掲）

（黛玉は釣竿を手から放すと、席までいって、例の梅花模様のついた燻銀（硫黄でくすぶらせた）の手酌用徳利を取りあげ、海棠色の凍石（蠟石）で芭蕉の葉形にこしらえた浅い杯を選り取りました。）（第 38 回:p.285）

“高高的鼻子”“大大的眼睛”のような第④類もあるし、“一头黑鬓鬓的头发”“一个小小的海棠冻石蕉叶杯”“短短的一件水红装缎狐肷褶子”（例 12）の再掲）のような⑤、⑥類も見られる。しかし、例 77）では、“高高孤拐”のように、状態形容詞は、“的”を接辞せず、直接に名詞を修飾する例がある。このほかに、“黄黄脸儿”の例があり、陆俭明（2001）の「状態形容詞は“的”との共起が必要である」という主張と一致していない。

7.1.3.2 で言及したように、清代の『紅楼夢』は、古代中国語の韻文での語尾の省略があるとともに、現代の「的」の必要性と一致しないことがあり、元明の“的”の多用と現代の“的”の必要の中間地帯（グレーゾーン）において、境界線が明確でないと考える。すなわち、『紅楼夢』は、近代中国語から現代中国語への過渡期に位置付けられ、語彙の漸進的変化の時期に置かれていることを傍証する。

7.2.1.2　文法的意味——限定と描写

朱德熙（1956/1999:7、8）は、“白纸”についいて、“白”という属性を用い、“纸”の類名を限定し、“白纸”は新類名であり、状態形容詞が論及した事物の状況と性状を描写すると指摘している。

伊藤さとみ（2001:244、256）は、朱（1956/1999）を踏まえて、性質形容詞は類名と結びついて新たな類名を作りだし、状態形容詞の方は個体を修飾する形容詞であると指摘している。

状態形容詞は、“摹状词”（沈家煊，2015:647）、“生动形式”（吕叔湘，1980/1991:716）と呼ばれる。李劲荣(2014)は、形容詞重畳式の語用を“描绘性”“调量性”“凸显性”とまとめている。周知のように、状態形容詞は描写性がある。

“短发”“大船”“黄土”“凉风”“高声”“高几”などは語彙化して、一つの単語として使用される。性質形容詞は属性として、ほぼ対極の面が存在し、他の類の区別として用いられる。たとえば、以上の例に対して、“长发”“小船”“黑土”“暖风”“低声”“矮几”などが存在し、性質形容詞は区別·限定の働きをする。

“高高的鼻子”“大大的眼睛”“黑鬓鬓的头发”“黄黄脸儿”“热腾腾碧荧荧蒸的绿畦香稻粳米饭”など、状態形容詞について、対極の面が存在しても、意味上完全に対立するのではなく、区別の性格として使用されない。たとえば、“高高”の反対語は“矮矮的鼻子”であろうか。“大大的”の反対語は“小小的”であろうか。状態形容詞（形容詞重畳式）は、事象の性状を描写し、生き生きとした表現を構成する働きを担うのである。

7.2.1.3　使用場面

性質形容詞(単音節形容詞)と状態形容詞(重畳式)の例文によって、使用場面を比較してみることにする。

80)贾琏听如此说，又见凤姐儿站在那边，也不盛妆，哭的眼睛肿着，也不施脂粉，黄黄脸儿，比往常更觉可怜可爱。（第 44 回：p.594）例 39)の再掲）

（こんなふうにいわれて賈璉、見ればまたそちらに立っている熙鳳の、身なりもろくに構わずに、目は泣いて腫れぼったく化粧抜きの青ざめた顔色をしているのがふだんにましていとおしくもあり、かわいくもあり、）（第 44 回:p.145）

81)那刘姥姥因喝了些酒， 他脾气不与黄酒相宜，且吃了许多油腻饮食，发渴多喝了几碗茶，不免通泻起来，蹲了半日方完。（第 41 回：p.555）

（ところで劉婆さん、酒を飲んだまではよいが、黄酒（紹興酒）が身体に合わなかったらしく、それにまたむやみとしつこい食べ物をつめこんだあげく、咽喉が渇くままに茶を飲みすぎた気味もあり、これで下痢をしなかったら不思議なくらい。）（第 41 回：p.42）

82)只见他里头穿着一件半新的靠色三镶领袖秋香色盘金五色绣龙窄褙小袖掩衿银鼠短袄，里面短短的一件水红装缎狐肷褶子，腰里紧紧束着一条蝴蝶结子长穗五色宫绦，脚下也穿着麂皮小靴，越显的蜂腰猿背，鹤势螂形。（第 49 回：p.661）（例 12）の再掲）

（見れば彼女、その中には領と袖とに三色の縁どりを施し、秋香色の地に金糸と五色の糸とでもって竜をぬいとった、褙がせまく袖が小さく、腋の下で釦をかける式の、銀鼠の毛皮裏の短い中古上着を着て、その下にはごく短い水紅色の緞子に狐の腋毛皮を裏にした褶子（乗馬服）を着こみ、腰に蝶結びと長い総飾りとをつけた宮中製の五色の組紐をきっちりしめ、足には鹿皮製の華著な長靴をはいてい

るとあって、これではどう見ても、腰つきは蜂のよう、背の曲げぐあいは猿を思わせ、さながら鶴か蟷螂かといったところです。）（第 49 回：p.323）

83)蜂腰削背，鸭蛋脸面，乌油头发，高高的鼻子，两边腮上微微的几点雀斑。（例 76）の再掲）

（蜂の胴のようにくびれた腰、肉の削げた背、家鴨の卵のように色白の顔、鴉の濡れ羽色をしたつややかな頭髪、高い鼻、両の頬にはうっすらと雀斑さえ見えて……。）（第 46 回:p.198）

84)我这一回去后没别的报答，惟有请些高香天天给你们念佛，保佑你们长命百岁的，就算我的心了。（第 42 回：p.559）

（わたくし、このたびもどりましたうえは、格別ご恩報じもかないますまいゆえ、ただお線香を少々おねだりしてまいって、毎日みなさまがたのためにお念仏申し、百歳までも長生きなさるようにご加護をお祈りいたしましょうぞ。それがせめてものわたくしの気持でございまする」）（第 42 回：p.50-p.51）

85)大门上门灯朗挂，两边一色戳灯，照如白昼，白汪汪穿孝仆从两边侍立。（第 14 回：p.184）（例 42）の再掲）

（大門にかけられた門灯はあかあかとかがやき、その両側にかけ連ねられた揃いの高張り提灯は昼をもあざむかんばかりの明るさ。また白ずくめの喪服を着用した従僕たちも両脇にかしこまっています。）（第 14 回:p.99）

86)一时茗烟果请了王太医来，诊了脉后，说的病症与前相仿，只是方子上果没有枳实，麻黄等药，倒有当归、陈皮、白芍等，药之分量较先也减了些。（第 51 回：p.698-p.699）

（まもなく茗烟が言いつけどおり王太医を招んできました。まず脈をとり、そのあとで病状を述べるのでしたが、前の診立てと大差ありません。ただ処方からは、案の定、枳実・麻黄のような薬が消え、当帰・陳皮・白芍などの薬が名をみせてはいるものの、分量も前に比べて、かなり減っています。）（第 51 回：p.48）

状態形容詞の重畳式は、人物の容貌･みなりを描写することが多い。例 80）では、賈璉が鳳姐に謝る場面を描写し、賈璉の観察を通して、鳳姐の情態･様子を表す。例 82）では、史湘云のみなりを描写し、例 83）では、鴛鴦の容貌を描写する。また、場面･情景を描写することが多い。例 85）では、葬儀の手伝いで栄国邸に到着した凤姐が見たその時の様子を描写する。提灯はどんな様子か、穿孝仆はどんな様子であるか、凤姐の観察から生々しく描写する。その場の情景を目の前で見ているかのように、いかにも現実的な感じを与える。

状態形容詞の形容詞重畳式に対して、名詞を修飾する性質形容詞は、状況を説明する場合が多い。例文 81）では、刘姥姥は黄酒を飲んで、なぜ下痢止するかを説明する。例文 86）では、漢方薬の調剤を説明する。

性質形容詞が修飾する名詞はほぼ類名を表し、限定の働きをして、説明する場面が多用されるのに対して、状態形容詞（重畳式）が修飾する名詞は、個別･具体的な事を表し、描写の働きを担うことから、生々しい場面の描写で多用される。

7.2.2　空間化

7.2.2.1　空間化に関連する概念

（1）空間

空間は、《现代汉语词典》（第 7 版）744 頁で、「物质存在的一种客观形式，由长度、宽

度、高度表现出来，是物质存在的广延性和伸张性的表现。(物質の存在の一つの客観的な形式で、長さ、幅、高さによって表現され、物質の存在の広延性と伸長性の表現である。)」と定義される。

空間は、『広辞苑』(第 5 版)743 頁で「物体が存在しない、相当に広がりのある部分。あいている所。」と定義される。

空間というのは、物理的現実空間と脳内の仮想空間に分けられる。前者はヒト、モノ、コトが現実に存在する容器として、認知される。これに対して、後者は人の認知で想定する仮想空間である。空間は、観察者が設定する容器のメタファーであり、観察対象の存在の基盤である。容器のメタファーとして現実に存在するかどうかを問わずに、脳内に想定される。ただ、人間は現実の存在空間を認知空間として設定しがちで、そのとき両者は重なるのである。本研究の空間は、認知から想定される認知意味論としての「空間」である。

(2) 存在

存在は、《现代汉语词典》(第 7 版)226 頁で、「事物持续地占据着时间和空间；实际上有，还没有消失。(事物は、持続的に時間と空間を占有する。実際にあり、まだ消えていないことである。)」と定義される。

存在は、『広辞苑』(第 5 版)1586 頁で「ある、または、いること。および『あるもの』。動詞の表す内容のうち、その場で動かず時間の経過する状態。」と説明される。

観察対象は、出現･存在･消失の過程を設定すれば、存在は出現と消失の中間地帯に位置付けられる。

7.2.2.2 空間化の定義

すべての事象は空間を基盤として完成される。事象の発生･存在･消失、行為の開始･進行･完了、移動の起点･経路･着点、事象の性状などは、存在の空間がなければ、成立できない。空間として、まず、観察者（話者）と観察対象を設定することが前提であり、これによって、空間の形式（現実空間と脳内空間）を設定する。話者（観察者）は、設定された空間に入って、それから、自身の位置づけをし、定位する。観察者の定位を基盤として、観察者の視点を固定するプロセスとして位置付けられる。

空間化というのは、観察者が観察対象によって、空間が設定され、空間内に観察するプロセスである。

7.2.2.3 空間化の言語化

李宇明（2000:1）は、「“空间”是人类最重要的认知范畴之一，任何语言都必须把这一范畴语言化。空间范畴的语言化有各种各样的表现形式，名词是其主要表现形式之一。(「空間」は、人類の最も重要な認知範疇の一つであり、いかなる言語においても、この範疇を言語化しなければならない。空間範疇の言語化には様々な表現があり、名詞は主要な表現形式の一つである。)」と指摘している。

また、李宇明（2000:2-3）は、名詞の空間性の強弱について、「A 个体名词>集体名词；B 有形名词>无形名词；C 具体名词>抽象名词」とまとめ、文法の顕著な表現は、名詞と数量詞の組み合わせに現われるという。“个体量词（个、头、匹、根、条、棵……)”と組み合わせることができれば、最も強い空間性を有し、“个体量词”と組み合わせることができなければ、比較的に弱い空間性を有し、“种类量词（种、类)”のみと組み合わせれば、最も弱い空間性を有すると指摘している。

代表的な事物は、空間の存在を基盤として認知され、言語に表現すれば、名詞と数量

詞の組み合わせを通して表す。これは、静態の観点から認知される結果と考える。空間に存在するヒト、モノ、コトの動態が認知される場合は、動詞で表し、存在主体の性状が認知される場合は、形容詞で表し、異なる言語手段を通して、空間性の強弱が表現できる。ヒト、モノ、コトは、空間に存在する主体であり、言語化として名詞で表し、動詞と形容詞は、主体の存在を基盤として、ヒト、モノ、コトの動作と状態を表す。以下に空間化の仮説を提案し、空間に存在する主体およびその動作、状態の言語化を試みる。

空間化の言語化は、文法的手段により、ヒト、モノ、コト（具体的な存在と抽象的な存在）を数量、時間、性状などの方面から言語で表現することである。空間化の文法的な手段には、以下の品詞を用いる。名詞の場合は、一般的に名詞と組み合わせる数量詞を通して、示され、動詞の場合は、一般的に動詞と組み合わせるアスペクト助詞を通して、示され、形容詞の場合は、一般的に形容詞の重畳式を通して、示される。

形容詞の空間化の表現は、大島吉郎（2021:13-14）の動詞の空間化の説明を踏襲し、以下のように説明する。

多様な事象の中から、一つの出来事を取り上げ、それをイマ、ココの具体的、個別的な性状として捉えると、その性状を持つ事象が存在する空間、つまり、性状が描写される主体が存在することを前提として、地点を設定し、背景（ground）すなわち情景とする必要が生じる。

7.2.2.4　空間化から見た性質形容詞と状態形容詞

形容詞は、性質形容詞と状態形容詞に分けられる。性質形容詞は、属性を表し、観察者の知識を通して、共通の常識になる場合が多く、現実の空間が存在しなくても、形容詞の性状は変わらない。よって、現実の空間が存在する必要はなく、空間化の容認度が低い。

87)李纨忙欠身笑道：“从古至今，同时隔代重名的很多。”（第 56 回:pp.771-772）
（李紈はすかさず身をかがめて笑いながら、「昔から今日の日まで、同じ世にもまた隔たった世にも、同名の人ならずいぶんとそのためしがございますね」）（第 56 回:p.243）

例 87)では、昔から今日まで、同名の人がずいぶん多いということが共通の認知になるという現実は事実であると認識される。実際に「イマ、ココ」に「同名」の人が存在しない場合でも、「很多」という性状を判断できる。

これに対して、状態形容詞、特に形容詞重畳式は、「イマ、ココ」の性状を描写し、即時に観察者の体験･感覚を通して、そのままの情景を描写する。描写される物事の存在が必須であり、存在する空間（容器のメタファー）を設定する必要がある。観察者は、カメラかビデオのように、物事がその空間に存在する性状を捉え、即時の情景を描写する。現実に存在しなくても、脳内空間に事象を存在させることで想像でき、あたかも目の前に存在するように思い描く。したがって、描写性があるか否かについては、ヒト、モノ、コトの存在する場面（空間）を設定し、存在する対象を設定することによって、決定されるといえよう。例えば、

88)贾母笑道：“看着多多的人吃饭，最有趣的。”（第 75 回:p.1044）
（「大勢で食事をしている図をながめるのはなにより面白いね」と、後室は上機嫌。）（第 75 回:p.204）

例 88）は、賈母が鴛鴦、琥珀、银蝶などの下女を説得し、尤氏と共に食事に誘う情景である。“多多”は、主人と召使が一緒に食事をする賑やかな情景を描写し、観察者の賈母を通して、賈母の部屋に発生する食事の場面をそのままに記録する状態形容詞と言えよう。

7.2.2.5　空間化から見た AABB 式と ABAB 式

形容詞重畳式に、同じ形容詞の基式からなる AABB 式と ABAB 式があり、空間化の観点から比較してみよう。

邢福义（1993/2001:78-79）は、形容詞 AABB 反義畳結（大大小小）が修飾する対象について、多数は「可視性」が強く、一定の空間を占める事物であると指摘している。大河内康憲（1985）は、中国語の数量詞の機能について、「個体化」とし、修飾する事象は「個別のもの」「具体的なもの」「実体がこの世に存在する」と述べている。「空間化」とは、物事の存在する空間を設定し、その空間（フレーム）に存在する主体の存在、動作、状態を言語化することである。特定の空間に存在する対象は、個別性、具体性、個体性の特徴をもつ。

AABB 式は、空間化の文法的手段の一つとして、設定する特定の空間に存在する具体的な主体の状態、視覚的な臨場感を伴い、観察者の目の前に起こっているかのような個別的な情景（事象）を描写する。

ABAB 式形容詞重畳式は、動詞重ね型のように、「試みる」「短時間」などを表し、李宇明（1996b:25）は、一般的に“AB 一下”、“AB 一次”、“AB 一回”、“AB 一会儿”へ変換可能である。動詞の空間化の文法的手段は、「動量詞」を通して実現されると考えられることから、ABAB 式も、空間化の文法的手段となる。例えば、

89)贾珍尤氏二人亲自递了茶，因说道：“老太太原是老祖宗，我父亲又是侄儿，这样日子，原不敢请他老人家；但是这个时候，天气正凉爽，满园的菊花又盛开，请老祖宗过来散散闷，看着众儿孙热闹热闹，是这个意思。谁知老祖宗又不肯赏脸。”（第 11 回：p.150）

（賈珍・尤氏の二人は手ずから茶を配って廻ると、さてにこやかに、「ご後室さまはなんと申しても一族きってのご老体、うちの父あたりでも甥でしかないくらいですから、こんな日にはいかがかと、はじめはお招きいたすのもためらっておりました。しかし、昨今お天気は涼しいうえに、園の菊もいまが一番の盛りでございますから、お祖母さまに気ばらしかたがたお越し願い、子や孫がうち揃って賑やかなところをご覧いただけたらと、そんな気になりました次第。ところがなんと、お祖母さまには顔をたててやろうという思し召しがないのでございますからね」）（第 11 回：p.18）

“热闹热闹”は、“热闹一下”へ変換可能である。寧國府という空間を設定し、寿辰に参加する人々が存在する主体として、酒を飲んだり、料理を食べたりして、にぎやかに過ごすということを表す。料理を食べ始めることは動作の起点で、食べ終わることは動作の終点を表し、寧國府という空間に発生することを根拠とする。

ABAB 式は、「空間化」という仮説で説明でき、動詞の動量詞の認知のアプローチに合致する。つまり、AABB 式と ABAB 式は、いずれも「空間化」という仮説で解釈できる。

7.2.2.6　空間化から見た基式（性質形容詞）から重畳式（状態形容詞）へのプロセス

基式（性質形容詞）が修飾する事象の類に対して、形容詞重畳式が修飾する名詞は個

別具体的な事象であることがわかる。類に対して、類のメンバーは個と称する。共通の本質の属性を有するまとまりの類に対して、メンバーの個体的事象は、類の共通の本質の枠組みの下で、個別的な特徴を有する。

90)王夫人和邢夫人在地下高桌上坐着，外面几席是他姊妹们坐。（第 44 回:p.586）
（王・邢両奥方は床の高卓子の席についており、表のいくつかの席が姉妹たちの分でした。）（第 44 回:p.121）
91)林之孝家的道：“他是园里南角子上夜的，白日里没什么事，所以姑娘不大相识。高高孤拐，大大的眼睛，最干净爽利的。”（第 61 回:p.840　例 22）の再掲）
（林之孝の妻女、「あの人は園の南くぐり門の宿直を受け持っておりまして、日中は格別ご用がございません。お姉さんがあまり覚えがないとおっしゃるのもそのせいでございましょう。頬骨の出た、目玉の大きい、大層きれい好きできびきびしたところのある女でございます」こう答えますと、）（第 61 回:p.44-p.45）

例 90）の“高桌”について、周汝昌、晁继周（2019:160）は、“一种高方桌”と解釈する。“高桌”は、一種の机の名称で、“几”より高い机の類別を表す。例 91）では、“高高孤拐”“大大的眼睛”は、“秦显的女人”の容貌を描写し、個別の女性の顔立ちの特徴を表す。これに対して、“高孤拐”“大眼睛” は一般的に他人と区別できる人間の顔立ちの特徴を表す。両者の意味の異なりは、性質形容詞の「高」と状態形容詞の「高高」によって区別する。野田耕司（2017:12）は、「一方、重ね型形容詞が状語になり易いのは、重ね型形容詞は眼前の事物や動作などの様態を具体的、リアルに描いて事物名詞や動作動詞を描写する表現機能を有するためで、（中略）単音節形容詞を典型とする性質形容詞の表現機能は基本的に事物の分類であるのに対して、重ね型形容詞を典型とする状態形容詞の表現機能は事物や動作の描写であることが、両形容詞の状語としての生起状況に影響を与えているのである。」と指摘している。

空間化の見立てから見た、基式（性質形容詞）から重畳式（状態形容詞）へのプロセスを、中国語の言語化で表現し、「红花→一朵红花（我的红花）→一朵红红的花」を例に取って、認知プロセス説明してみよう。

第一段階は、類（通指 generic）の認知。陆俭明（2001:6）は、「所谓“名词的通指”，是说句中的名词表示的事物的一个类名。（「名詞の通指とは、文の名詞が事物の一つの類名を表すことである。」）」と指摘している。“红花”は、類別として、“白花”“粉花”と区別される性質を持つ。このように、「性質形容詞＋名詞」は裸名詞と同じく、類別を表す。「類」は人の知識による抽象的な概念として、脳内空間に概念の存在が確認される。知識に基づき、概念の抽象的なまとまりとしての類は、言語共同体にとって共通点を持つ。この認知過程は、人間の知識によって類別される事象を設定し、現実に存在の空間を設定する必要がない段階である。すなわち、“红花”は、現実に存在するかどうか問わず、人間の脳内空間に共用概念として存在する。

第二段階は、実体化（具象性）の認知。红花→一朵红花（我的红花）のプロセスは、第一段階の類の概念から、観察者にとって、実体化された事象が認知される。この段階は、類と個のグレーゾーンにあり、どちらとも認知される。たとえば、

92)每个第一名的学生都可以得到一朵小红花。（自作例）
（一位になった学生は、みな一つの小さな赤い花をもらうことができる。）（筆者訳）
93)我的同桌得了第一名，老师奖励了他一朵小红花。（自作例）

（私のクラスメイトは一位になったので、先生が奨励として一つの小さな赤い花を彼にあげた。）（筆者訳）

例 92）では、“一朵小红花”は賞品の下位の一種類として用い、例 93）では、話者と聞き手にとって、実体化が伴う事象である。この段階は脳内空間に存在する概念の類から現実に存在する空間へ移行する。すなわち、空間化の設定する段階である。たとえば、例 92）では、空間はクラスか学年か学校かを設定し、例 93）では、机を同じくする二人が存在する空間（容器のメタファー）を設定する。観察者は設定する空間に入って、当事者として、体験に基づき、事象を参与する。

第三段階は、個の認知。この段階は、「一朵红花（我的红花）→一朵红红的花」のプロセスである。空間に存在する実体から具体的な個体を抽出し、当事者の視点を設定し、観察者の体験·感覚によって、観察した結果を得る過程である。設定された空間において、存在する事象から個別·具体的な個体を抽出し、「イマ」「ココ」に現出する事態を表す。“一朵红红的花”は、空間に存在する事象が固定され、観察者の感覚（視覚）を通して、状態·性状を表す。

94)贾琏听如此说，又见凤姐儿站在那边，也不盛妆，哭的眼睛肿着，也不施脂粉，黄黄脸儿，比往常更觉可怜可爱。（第 44 回:p.594）（例 39）の再掲）
（こんなふうにいわれて賈璉、見ればまたそちらに立っている熙鳳の、身なりもろくに構わずに、目は泣いて腫れぼったく化粧抜きの青ざめた顔色をしているのがふだんにましていとおしくもあり、かわいくもあり、）（第 44 回:p.145）

例 94）では、事情は賈母の部屋に発生し、鳳姐の泣いた容貌を描写する。空間が賈母の部屋に設定され、空間に存在する主体（立ち合いの人々）も設定される。観察者は賈璉であり、観察対象は鳳姐である。観察者は、この部屋の空間における事象に参与する。“黄黄脸”は、その場面、その時の鳳姐の泣いた容貌を描写する。個別的具体性を有し、形容詞重畳式“黄黄”を通して表現される。“黄黄脸”は、立ち合っているすべての人の認知が同じという事ではなく、賈璉の認知だけを表す。ある性状は観察者によって相違点があり、異なる形容詞重畳式を選択する。

性質形容詞から状態形容詞へのプロセスは類の概念から個を分離させる過程である。この過程は空間化を設定するかどうか、空間に存在する主体と観察者と観察対象の関係によって進展する。形容詞重畳式は個体化の文法的手段の一つとして用いられ、その動機付けは、個別化にあると言えよう。

個体化の文法手段には重畳のほかに、数量詞、アスペクト助詞、介詞フレーズなどがある。例文 90) 91）を再掲してみよう。“高桌”は、文脈をはずれれば、類としての机を指す。例 90）の“高桌”は、前の“在地上”の介詞フレーズと共起する。木村英樹（1996:153）は、“在、从、到、往”について、「空間表現を導くことを基本的な働きとする類」と指摘している。介詞フレーズの文法的手段を用いて、空間に位置づけ、“邢夫人”“王夫人”が座っている机を指す。これに対して、例 91）では、“高高孤拐”で描写する人が即時に真実に空間に存在していないが、話者は体験によって、聞き手に観察対象の容貌を描写し、形容詞重畳式の文法的手段を用いる。これは、脳内空間に想定し、架空の存在主体の状態を描写するからであると考えられる。

7.3　視点—「当事者事態関与型」と「傍観者事象観察型」

性質形容詞（類）と状態形容詞（個）の区別は、空間化の設定の有無を前提として扱うが、以上述べたように、性質形容詞にはだれが見ても共通点の属性があるのに対して、状態形容詞は、観察者によって異なりがある。では、性質形容詞と状態形容詞にとって、観察者の視点はどのように位置づけられるか。

空間化を設定するからには、空間と観察者の位置を明確にすべきである。木村英樹（2017:303）の「当事者現場立脚型」と「傍観者俯瞰型」の観点を応用して、視点から性質形容詞と状態形容詞を比較することにしたい。木村英樹（2017:303-304）は、「出来事を発話時現在の＜いま＞に立脚した視点から捉えようとする指向が強い日本語話者は、空間についても、＜ここ＞あるいは＜そこ＞という＜現場＞に自らが立脚し、当事者としての視点で対象を捉えようとします。このような日本語話者のパースペクティヴを、ここでは『当事者現場立脚型』のパースペクティヴと呼ぶことにします。」と指摘している。また、「当事者現場立脚型」と対照的に、木村英樹（2017:305-306）は、「“东南西北”という絶対方位の座標で対象を捉えようとするパースペクティヴは、現場に立脚する当事者としてのそれとは対照に、俯瞰的な視野をもち、対象からやや距離を置いた傍観者的なスタンスで対象を捉えようとするパースペクティヴだと言えます。言うならば『傍観者俯瞰型』のパースペクティヴです。」と指摘している。

類別としての「性質形容詞＋名詞」は、たとえば、“黄酒”“红纸”などは、ある一つの類を表すが、空間化が設定されないため、話者は空間に入ることができず、傍観者として、遠くから観察するしかなく、参与できない。したがって、だれが見ても共通点がある性格から、「東南西北」のような絶対的空間表現と同じく、傍観者の視点から、性質形容詞が修飾する名詞を把握するため、これを「傍観者事象観察型」と称する。

性質形容詞に対して、状態形容詞は観察者の視点によって、異なる性格があることは、「前後･左右･上下」のような相対的空間表現と同じであり、現場立脚型と見なされる。状態形容詞は、空間化を設定し、話者が空間に入って、個体的事物を観察する。観察者は当事者として、自身の視点に基づき、状態形容詞、特に形容詞重畳式の文法的手段を用い、存在主体の性状を描写する。観察者は、参与者の視点に基づき、異なる語彙を選択する。たとえば、“红红的花”のほかに、“红艳艳的花”なども使用できる。観察者として、即時の現場の事態に関与して把握することで、「臨場感」がもたらされ、これを「当事者事態関与型」と称する。

「当事者事態関与型」というのは、観察者は現場に立脚し、それぞれ視点の異なりによって、結果も異なる。言語化すれば、観察者によって異なる形容詞重畳式が選択されることからも明らかである。以下に、『紅楼夢』における例文を具体的に説明してみよう。

95)好一似食尽鸟投林，落了片白茫茫大地真干净！（第 5 回：p.86 例 40）の再掲）

（さてしも　餌の尽きて鳥は林に去り　残れるは　白一面の大地　見果てぬ夢の跡かたなきに似たるかな）（第 5 回:p.188）

96)如此亲朋你来我去，也不能胜数。只这四十九日，宁国府街上一条白漫漫人来人往，花簇簇官去官来。（第 13 回：p.175　例 41）の再掲）

（こんなふうで親戚や友人連中の弔問客は引きもきらず、到底いちいち数えあげられたものではない。この四十九日のあいだじゅう寧国通りの町すじ一帯が、白の喪服を着込んだ人の波で埋まらんばかり、色とりどりの官服を着用した役人連の往来する姿が絶えません。）（第 13 回:p.82）

97)大门上门灯朗挂，两边一色戳灯，照如白昼，白汪汪穿孝仆从两边侍立。请车至正

门上，小厮等退去，众媳妇上来揭起车帘。（第 14 回：p.184　例 42）の再掲）
（大門にかけられた門灯はあかあかとかがやき、その両側にかけ連ねられた揃いの高張り提灯は昼をもあざむかんばかりの明るさ。また白ずくめの喪服を着用した従僕たちも両脇にかしこまっています。）（第 14 回:p.99）

98)贾政还欲前走，只见白茫茫一片旷野，并无一人。（第 120 回：p.1592　例 45）の再掲）
（賈政はさらにさきへ進もうとしかかりましたが、あたりは白茫々たる一面の曠野、人っ子一人見当たりません。）（第 120 回:p.344-p.345）

例 95）から例 98）まで、すべて「白」の意味を表し、異なる形容詞重畳式を使用する。その原因は、修飾する対象と観察者の視点に関わりがある。5.4.3.2 で解釈したように、「白茫茫」は、「大地」「曠野」を修飾し、観察者の視点は、地面に近く、雲、霧、水などが白く一面に広がっているさま、ぼんやりとした感じを表す。」と指摘されている。

例 96)では、観察者は出現していなくても、立脚する位置を想定できる。「宁国府街」の街頭に立ち、近くから遠くまでの広い視点で認知する。この街を空間として設定し、観察者の視点は街頭に立脚し、白の喪服を着る人が多数、行き来する場面を認知し、「白漫漫」を用いる。

例 97）の「白汪汪」は、鳳姐の観察により、正門から奥に入ってくる移動視点を通しの描写であり、5.4.3.2 で言及したように、「両側の提灯が昼のように照り映え、喪服を着用した従僕たちに反射するさまは、あたかも水面に反射したかのような視覚的な印象になる。」と指摘されていて、外から奥までの移動の視点を表す

例 98）では、観察者は賈政であり、僧侶と道士に挟まれる賈宝玉と出会う場面である。賈政の視点をその場面に置き、周りの荒野はぼんやりとした非現実的で幻想的な光景であることを述べる。「廬山の真面目を識らざるは，只身のこの山中に在るに縁る」と規定され、共通する視点の置き方である。空間の真ん中に視点を置くように観察した結果である。

性質形容詞と状態形容詞の認知は、空間化することを前提として、観察者の視点も異なり、前者は知識に基づき、非体験の「傍観者事象観察型」と規定され、後者は体験･感覚に基づき、体験の「当事者事態関与型」と称される。後者は、当事者の立脚する位置によって視点が異なり、言語化すれば、異なる形容詞重畳式を選択することになる。

7.4　共感覚メタファーから見た ABB 式形容詞重畳式

『紅楼夢』における ABB 式の A と BB は、五感と繋がることが多く、A と BB は視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚から感知されやすい。たとえば、“甜丝丝”の“甜”は味覚から感知され、“丝丝”は視覚から感知される。赵青青（2021:207-208）は、主に目の感覚器官に基づいた感覚を視覚とし、耳に基づいた感覚を聴覚とし、舌に基づいた感覚を味覚とし、鼻に基づいた感覚を嗅覚とし、手、皮膚、肌に基づいた感覚を触覚とする。本章では、赵（2021）に基づき、『紅楼夢』前八十回における ABB 式の A と BB を共感覚の観点から検討する。[34)]

[34)] 語例は「（前八十回）曹雪芹著 （后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008）《红楼梦》人民文学出版社.」の前八十回から抽出する。

7.4.1　A と BB の感覚のコロケーション

『紅楼夢』前八十回における ABB 式の 64 例のうち、五感に基づかないのは、“昏慘慘”“气昂昂”“情切切”“意绵绵”“好端端”“恶狠狠”“气狠狠”“气恨恨”“忙碌碌”“羞惭惭”“意悬悬”の 11 例にとどまり、李劲荣（2014:55）、赵青青（2021:208）は上記“好端端”“恶狠狠”などを知覚と見なす。

これらを除く 53 例は、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感との関わりが指摘される。Qingqing Zhao（2020:41-67、82-90）赵青青（2021:208）は、視覚を「色(Color)、光線(Light)、ダイメンション(Dimension)、情状（Visual Situation)」、触覚を「温度（Temperature）、硬度(Hardness)、鋭さ(Sharpness)、湿度(Dampness)、平滑度(Smoothness)、物理的なフォース(Physical Force)、痛さ(Pain)」の下位カテゴリーに分ける。上記の触覚の分類の中で、痛さ(Pain)は強い刺激感を表し、「痒い」のような強くない触覚を含まない。本研究は、痛さ(Pain)を「刺激感」に替える。また、具体的なヒト、モノ、コトは空間に存在し、視覚から感知されやすく、具体的なものを「空間」と標記すると考えられる。本研究は、赵（2021）の分類を踏まえ、視覚を「色、光線、空間、ダイメンション、情状」に分け、触覚を「温度、硬度、鋭さ、湿度、平滑度、物理的なフォース、刺激感」に分ける。以下具体的に『紅楼夢』前八十回における ABB 式の A と BB は、感覚パターンに基づいて説明する。

7.4.1.1　A と BB が異なる感覚である場合

ABB 式の中で、A は意味全般の主要な部分である。王力（1982/2015:198）は ABB 式について、「这种叠字，在意义上不能加添些什么，然而在修辞上却很重要。(こうした畳字は、意味上何も添加できないが、レトリック上きわめて重要である。)」と指摘する。これらの説を踏まえ、以下に『紅楼夢』における ABB 式の A の感覚についてまとめる。表 11 は『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞で A と BB とが異感覚に属するコロケーションを示したものである。

A の感覚	A と BB の異感覚		語例	語数
視覚	視覚＋触覚	視覚_情状＋触覚_温度	乱烘烘	5
		視覚_色＋触覚_フォース	乌压压	
		視覚_空間＋触覚_刺激感	牙痒痒	
		視覚_情状＋触覚_フォース	散松松	
	視覚＋聴覚	視覚_ダイメンション＋聴覚	怔呵呵	
聴覚	なし			
嗅覚	なし			
味覚	味覚＋視覚	味覚＋視覚_ダイメンション	甜丝丝	2
		味覚＋視覚_情状	咸浸浸	
触覚	触覚＋視覚	触覚_温度＋視覚_情状	凉森森、冷清清、寒浸浸、热腾腾	8
		触覚_フォース＋視覚_情状	松怠怠	
	触覚＋聴覚	触覚_硬度＋聴覚	硬帮帮	

		触覚_温度＋聴覚	热刺刺、冷飕飕	

表 11『紅楼夢』前八十回の ABB 式のうち、A と BB とが異感覚であるコロケーション

A と BB が異なる感覚で感知される語例は 15 例あり、感覚と繋がりがある語例の 28.3%（15/53）を占める。

7.4.1.2　A と BB が同感覚の異なる下位カテゴリーである例

視覚と触覚を下位の感覚カテゴリーとして分ける。『紅楼夢』庚辰本前八十回における ABB 式は、A と BB とが同一感覚の枠で、異なる下位の感覚カテゴリーに属する語例が、視覚に集中する。触覚には多様な感覚カテゴリーがあるが、異なる下位の感覚カテゴリーに属する語例が見られない。表 12 に『紅楼夢』庚辰本における ABB 式のうち、A と BB が同感覚の下位カテゴリーにあるものを示す。

感覚	同感覚の下位カテゴリー	語例	語数
視覚	視覚_色＋視覚_情状	白茫茫、白漫漫	12
	視覚_色＋視覚_光線	白汪汪、白花花、金晃晃、黄澄澄、碧荧荧	
	視覚_色＋視覚_ダイメンション	黑鬓鬓	
	視覚_ダイメンション＋視覚_情状	直瞪瞪、直挺挺、直蹶蹶	
	視覚_情状+視覚_ダイメンション	赤条条	

表 12『紅楼夢』前八十回の ABB 式のうち、A と BB が同感覚の異なる下位カテゴリー

7.4.1.3　A と BB が同感覚である例

『紅楼夢』前八十回における ABB 式に、A と BB が同じ感覚で感知される語例は以下の 26 例で、約半数あり、49%を占める。表 13 は、『紅楼夢』前八十回における ABB 式の A と BB が同感覚のコロケーションを示したものである。

感覚	同感覚	語例	語数
視覚	視覚_情状＋視覚_情状	荡悠悠、跳蹿蹿、威赫赫、颤巍巍、空落落、花簇簇、醉醺醺、锦重重、战兢兢、乱纷纷	17
	視覚_光線＋視覚_光線	光灿灿、油汪汪、明晃晃、明亮亮	
	視覚_色＋視覚_色	黑魆魆	
	視覚_空間＋視覚_情状	眼睁睁、汗津津	
聴覚	聴覚＋聴覚	静悄悄、闹吵吵、笑吟吟、笑欤欤、闹穰穰、笑嘻嘻、喘吁吁	7
嗅覚	なし		
味覚	味覚＋味覚	油腻腻	1
触覚	触覚＋触覚	沉甸甸	1

表 13『紅楼夢』前八十回の ABB 式のうち、A と BB とが同感覚であるコロケーション

7.4.1.4　状況と分析

以上の三つの類を分析し、以下の四点にまとめる。

（1）全体的傾向から見ると、『紅楼夢』前八十回における ABB 式の 64 例のうち、53 例は五感と繋がりがある。五感を基盤としての身体の体験は、ABB 式に重要な役割を果たす。三つの類の中で、A が視覚で感知されるものが 34 例であり、最も多い。ついで、順次触覚の 9 例、聴覚の 7 例、味覚の 3 例であり、嗅覚の語例は見られない。

赵青青（2021:211）は、視覚は人類の感覚系統で、顕著性が最も高く、次は触覚であり、ABB 式の A は主に視覚と触覚で感知されることを指摘する。これは現代中国語を研究対象として得られた結論である。近代中国語から現代中国語への過渡期的言語資料としての『紅楼夢』においても、ABB 式の A が視覚と触覚で感知される語例が最も多く、赵（2021）の現代中国語についての結論と一致している。

武藤彩加（2015:380）は、「感覚器官の働きがはっきりと意識される触覚的領域、すなわち触覚、味覚、嗅覚を接触感覚、そうではない視覚と聴覚を遠隔感覚としている。」と述べる。Qingqing Zhao（2020:102）は、視覚は遠隔感覚（without physical contact）で最も具現化を有すると指摘する。視覚は直観的に速く感知される感覚である。また、触覚は手、皮膚、肌などの感覚器官に基づく接触感覚である。山梨正明（2012:118）は、五感の発達過程においては、一般的に触覚が最も原初的な感覚であると述べるように、触覚は最も基本的な感覚として、感知しやすい。すなわち、触覚は接触感覚として、感知しやすく、視覚は遠隔感覚で最も著しく、早く感知しやすいため、視覚と触覚の例が最も多く見られるのであり、近代中国語から現代中国語に至るまで、人間の感覚の感知状況は変わらないものと考えられる。

（2）『紅楼夢』における ABB 式の BB は、最上位は視覚が 36 例、次は順次聴覚が 11 例、触覚が 5 例、味覚が 1 例である。A と BB は異なりがある ABB 式の中で、BB は視覚が 7 例、聴覚が 4 例、触覚が 4 例である。BB の感覚の分布も赵青青（2021）の現代中国語の考察と一致している。赵青青（2021:211）は、BB が視覚、聴覚、触覚で感知されることは“可及性”（accessibility）と関わると指摘する。

以上から、触覚は手、皮膚、肌などの感覚器官に基づいて感知され、体験性が強く、視覚は遠隔感覚で具現性が最も高い。BB を聴覚とする例は、すべて擬声語である。擬声語は自然の音声を再構成した語として、連想、認知しやすい。従って、ABB 式の BB は、概ね視覚、聴覚、触覚に分布している。

ABB 式の A と BB の感覚分布について、『紅楼夢』の語例は、赵（2021）の現代中国語の語例に関する考察結果と一致している。ABB 式の全般から見ると、観察者が感覚器官を通して感知する傾向は、通時の観点から一定の安定性を持つと考えられる。

（3）同感覚の下位カテゴリーが異なる例は視覚だけに集中している。そのうち、「視覚_色＋視覚_光線」という語例が、最も多く注目される。周旭梅（2016:33）は、光線は色を形成する前提と物理的制約の関係から、光と色は依存関係があると指摘する。よって、ABB 式の A と BB は視覚の下位カテゴリーの中で、色と光の組み合わせが多く存在する。

共感覚から見ると、『紅楼夢』における語例は、最上位の A は視覚が 7 例、次に順次触覚が 8 例、味覚の 2 例である。赵青青（2021:211）は、共感覚の A の頻度について、味覚＞嗅覚＞知覚＞触覚＞視覚＞聴覚という傾向が見られることを述べる。これは『紅楼夢』の語例と一致しない。辻幸夫（2013:69）は、共感覚表現の定義について、「この共感覚が基盤となって、1 つの感覚を表す語を他種の感覚を表すのに比喩的に転用したものを

共感覚表現と言う。」と指摘している。共感覚は原感覚と目標感覚の二つの領域を有するが、赵（2021）が、共感覚について、A の単方面の感覚だけから考察を行っていることは一面的であると考えられ、A と BB の両感覚から検討すべきである。

(4) A と BB が同一感覚の下位カテゴリーに置かれる語例は 26 例で、約半数を占める。李劲荣（2014:48）は A と BB が ABB 式になる際、共通の語義を基盤として組み合わせられると指摘する。A と BB は、類義語であることが多く、両方の語義をいっそう強調する。たとえば、“明亮亮”の A は“指日月的光亮”（《漢語大詞典》）の意味で、BB は“形容明亮或闪光发亮的样子”（《汉语重言词词典》）の意味で、両者は類義関係にあり、いずれも「明るい」意味を組み合わせて本来の語義を強調する。よって、A と BB は同一感覚の組み合わせとして多く存在する。

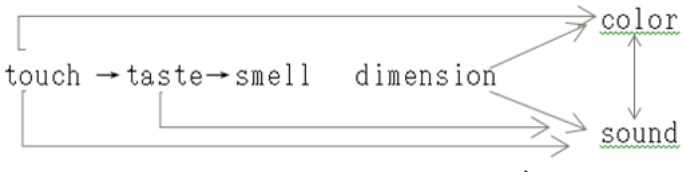
7.4.2　共感覚から見た ABB 式形容詞重畳式の認知プロセス

共感覚表現を有する ABB 式は、A と BB が異なる感覚で感知され、語内部と語外部及び文脈で共感覚メタファーに触れ、認知プロセスは複雑である。本研究は、ABB 式について、三つの認知プロセスの仮説を提案する。第一に、BB の感覚を通して、A の感覚を表す語内の共感覚メタファーである。第二に、ABB 式を全体として、同時に A と BB の両感覚を有する感覚共有語である。第三に、実際の文脈で使用する際、ABB 式の本来の感覚が、共感覚メタファーを通して、他の感覚を表す場合である。

7.4.2.1　語内の A と BB の共感覚メタファー

ABB 式について、肖潇（2012）、井出克子（2001）、赵青青（2021）は共感覚的比喩（synaesthetic metaphor）という観点から分析する。武藤彩加（2015:11）は、共感覚的比喩の定義について、「触覚、味覚、嗅覚、視覚、聴覚に関わる比喩（表現）のことで、ある感覚領域を表す語は別の感覚領域に転用されるという表現をいう。」と定義する。肖潇（2012:131）は ABB 式全体を対象として、A を目標領域（target domain）、BB は起点領域（source domain）として、BB の感覚がメタファーを通して、A の感覚を表すと指摘する。

共感覚メタファーは、方向性が一定している。英語に関する先行研究は、Williams（1976:463）が挙げられ、「触覚→味覚→嗅覚→視覚→聴覚」の方向に従うとする。



（Williams、1976：463、Figure１）

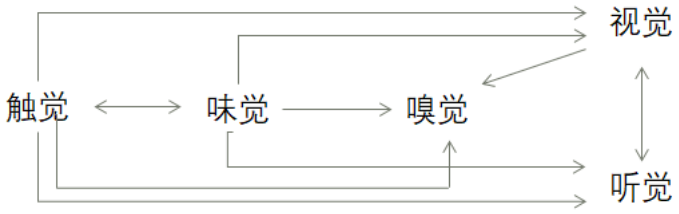
図 3 Williams（1976：463）による英語の共感覚形容詞の方向性

日本語に関する先行研究は山梨正明（1988:60）に代表される。概ね Williams（1976）と一致している。

（山梨、1988：60、図 3-5）

図 4 山梨（1988：60）による共感覚と原感覚の方向性

中国語についての代表的先行研究は、赵青青（2018:50）である。赵（2018）は、《现代汉语词典》における普通形容詞を対象として、以下のスキーマで説明する。



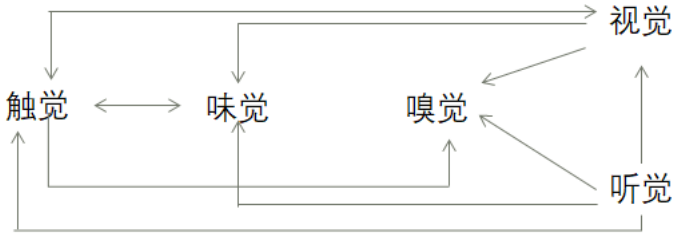
（赵青青、2018:50、図 3）

図 5 赵青青（2018:50）による現代中国語の形容詞の共感覚の方向性

赵青青（2018:50）は現代中国語形容詞の共感覚の方向性について、「（触覚/味覚）→（视觉/听觉）→嗅覚」と指摘する。

また、赵青青（2021:209）は ABB 式形容詞の A と BB の感覚について考察するが、A と BB の感覚の方向性を検討していない。以下に、赵（2021）の語例を基に、方向性をまとめる。

ABB 式において、共感覚メタファーでは、A を目標領域（target domain）とし、BB を起点領域（source domain）とする。即ち A は喻えられる原感覚、BB は喻える共感覚である。赵（2021）の現代中国語の ABB 式形容詞の語例に基づいて、知覚を除き、五感の方向性について、以下の写像スキーマにまとめる。



（赵（2021）の語例に基づく）

図 6 赵（2021）の現代中国語の ABB 式形容詞に依る方向性

ABB 式と山梨正明（1988）などの従来の方向性仮説との異同は、以下のようにまとめられる。

①触覚は聴覚を除き、すべての感覚へ転用される。（触覚→聴覚を除き、仮説と一致する。）

②味覚は触覚だけへ転用される。（仮説と完全一致していない。）

③嗅覚はすべての感覚へ転用されない。（仮説と完全一致していない。）

④視覚は嗅覚、味覚、触覚の感覚へ転用される。（仮説と完全一致していない。）

⑤聴覚はすべての感覚へ転用される。（仮説と完全一致していない。）

以上から、ABB 式形容詞の共感覚メタファーは従来の仮説と一致していないことが多く、中国語の普通形容詞の方向性と異なり、独特な性格を持つと言える。

A と BB が共感覚メタファーに関わる ABB 式形容詞は、『紅楼夢』において 15 例あり、触覚→視覚（4 語）、聴覚→視覚（1 語）、視覚→味覚（2 語）、視覚→触覚（5 語）、聴覚→触覚（3 語）である。これは赵（2021）の ABB 式形容詞の方向性と一致している。触覚→視覚の 4 語は、従来の Williams（1976）と山梨正明（1988）の方向性と一致し、聴覚→視覚の 1 語は、Williams（1976）と一致し、視覚→味覚の 2 語、視覚→触覚の 5 語、聴覚→触覚の 3 語は、従来の方向性と一致しない。

従来の方向性は、生理メカニズムの枠で捉えられ、山梨正明（2012:118）は、「五感の発達過程においては、一般に触覚が最も原初的な感覚であり、視覚、聴覚は、相対的に見てより高次の感覚として発達したものと考えられるが、この発生順序は、以上の基本的な五感の修飾の方向性に反映されている。」と指摘する。よって、触覚→視覚は生理メカニズムで解釈できる。赵青青（2018:53）は、身体の体験性と感覚の顕著性で現代中国語形容詞の共感覚の投射写像も解釈でき、視覚と聴覚は人間の五感で最も重要な感覚と指摘する。視覚、聴覚は感覚が著しいため、ほかの感覚へ転用しやすい。

たとえば、“热腾腾”の“腾腾”は“升腾。指不断向上升起”（《漢語大詞典》）という意味で、熱気が立ち上がる視覚の感覚で「熱」の触覚の感覚を表し、視覚→触覚の共感覚メタファーの転用である。“硬梆梆”“冷飕飕”“热刺刺”について、井出克子（2001:218）は、ABB 式の BB に着目し、擬音語由来と考えられる接尾辞 BB のために、聴覚という感覚を比喩的に意味に加えることができ、共感覚的比喩を比較的一般的な表現と見なすことも可能であると述べる。すなわち、聴覚を表す BB によって、共感覚メタファーの作用を通して、A の触覚を表すことになる。

7.4.2.2　感覚共有語とした ABB 式形容詞重畳式

上述の A と BB は、共感覚という関係性により ABB 式形容詞を形成する。A は主要な意味を担い、BB は A の意味を補充する場合が多く、五感と繋がる ABB 式は A と BB の両感覚を有することが多い。井出克子（2001:220）の「一語内に異なる感覚的な意味を持つものを『感覚共有語』という」規定を踏まえて、ABB 式形容詞の感覚共有性を検討する。

武藤彩加（2015:283-285）は、日本語の擬声･擬態語について、複数（の感覚の）イメージが同時に共存するという現象を捉える。もし ABB 式に応用すれば、たとえば、“凉森森”は、“清凉的感觉”（《描摹词辞典》）という意味で、“森森”の基本義は“树木高耸繁密貌”（《漢語大詞典》）という意味である。木が茂る森に入って、涼しさを感じるため、森が濃密である視覚から連想し、ひんやりとした感じを表す。すなわち、生い茂る森の涼しい経験に基づく、視覚と触覚の同時に生ずる複合感覚を表すものと解釈できよう。

もう一つを挙げる。“冷飕飕”は“形容寒冷”（《描摹词辞典》）という意味で、“颼颼”

は“象声词。形容风声雨声”（《漢語大詞典》）という意味である。風が吹き、雨が降っている時、寒いと感じる経験に基づき、触覚と聴覚の両感覚が同時に生ずる。“冷飕飕”は“冷”に比べて体が風に吹かれるような寒さを具体的に感じさせる表現であると言える。

7.4.2.3　文脈の二次的な共感覚メタファー

以上から、ABB 式のうち、BB の感覚で A を表現する共感覚メタファーは第一段階のプロセスであり、ABB 式が全体として、両感覚を同時に有する場合は第二段階のプロセスである。ABB 式の A は主な感覚で、BB は補充する感覚となる。しかし、『紅楼夢』においての ABB 式は、A の本来の感覚を表す以外、二次的なメタファーを通して、文脈で A と BB 以外の第三種の感覚を表すことがある。実際の例文を見ることにしよう。

99)宝玉此时与宝钗就近、只闻一阵阵凉森森甜丝丝的幽香、竟不知系何香气、遂问：“姐姐熏的是什么香？我竟从未闻见过这味儿。”（第 8 回:p.122）例 6）の再掲）
（宝玉はこのとき、宝釵のすぐそばにいて、なにやらひんやりとしてほのかに甘い香りが、ぷうんぷうんと漂ってくるのを嗅ぎつけました。しかし、なんの香りとも見当がつかず、たまりかねてたずねます。
「お姉さまの焚きしめてらっしゃるのは、なんというお香ですかね？ついぞこんな香りを嗅いだことがないのですけど……」）（第 8 回:p.281）

“凉森森”“甜丝丝”は、BB の視覚から A の触覚への共感覚メタファーを通して、主要な A と副次的な BB と組み合わせる ABB 式形容詞になり、本来触覚と味覚を表す語である。例 99）では、“凉森森”“甜丝丝”は“幽香”を修飾し、嗅覚を表す。主に触覚を表す“凉森森”が香りの嗅覚を表し、ひんやりとした触覚で、共感覚メタファーを通して、嗅覚を表し、触覚→嗅覚の方向性を表す。主に味覚を表す“甜丝丝”が香りの嗅覚を表し、甘い味覚で、共感覚メタファーを通して、快い類似性に基づいて、味覚→嗅覚の方向性を表す。

100)一把上面錾着一“鸳”字、一把上面錾着一“鸯”字、冷飕飕、明亮亮、如两痕秋水一般。（第 66 回:p.921）例 53）の再掲）
（一ふりの表には「鴛」の字を刻み、いま一ふりの表には「鴦」の字を刻んであって、まばゆいばかりの氷の刃は二すじの秋の水のごとくに見えます。）（第 66 回:p.264）

“冷飕飕”は、BB の聴覚から A の触覚への共感覚メタファーを通して、同時に触覚と聴覚を表し、触覚が主要な感覚である。例 100）では、“冷飕飕”で「柳湘莲から尤三姐に送る剣」を修飾し、触覚の体験を通して、剣の冷たさが身に染みる様子を表す。共感覚のメタファーを基に、触覚の寒さの体験を通して、目に見える剣のあり様を視覚的に表す。ABB 式は、実際に使用する際、文脈で二次的な共感覚メタファーのプロセスがあると言えよう。

『紅楼夢』における語内共感覚がある 15 例のうち、文脈から二次的な共感覚メタファーは“汗津津”（視覚→触覚）、“松怠怠”（触覚→視覚）などがある。

7.4.3　共感覚から見た A と BB の制約性

A と BB のコロケーションには、制約性があり、恣意的に組み合わせることはできない。

李劲荣（2014:48）は、A と BB には共通の語義があり、同一の認知領域において、即ち「動作—方式」「物事—性状」「性状—程度」の認知領域を共有するものが ABB 式形容詞を形成すると指摘している。例えば、“白茫茫”“雾茫茫”“水茫茫”を挙げ、A と BB はどちらも“模糊而无边际（ぼんやりと広々と果てしなく）”の語義を有するので、組み合わせることができると解釈している。同一の認知領域には、どのような特徴があるのか、次に共感覚から A と BB の制約性の検討を試みてみよう。

6.3.3 で言及したように、『紅楼夢』初出の 13 語が見られ、以下に、この 13 語を対象として、共感覚から A と BB のコロケーションを分析することにしたい。

初出の 13 語は、“意绵绵”“羞惭惭”を除き、いずれも五感と繋がりがある。“凉森森”“甜丝丝”“乌压压”“咸浸浸”“散松松”“怔呵呵”は、BB の感覚の体験に基づき、A の感覚を表し、共感覚メタファーによって ABB 式を形成する。たとえば、“甜丝丝”の“丝丝”は“形容纤细之物、犹言一丝一丝。”（《汉语重言词词典》）という意味であり、視覚的体験から、味覚がいくらか甘いことを表す。“甜甜”を使って、糸のような微かな甘さを表すことは出来ない。“咸浸浸”も“甜丝丝”のように、視覚から味覚への共感覚メタファーを通して、感知される感覚、状態である。

もう一例見ることにする。“怔呵呵”の BB は擬声語であり、“笑声”《汉语重言词词典》とされ、聴覚的体験に基づき、呆然とした笑顔の様子を表現する。

“乌压压”の“压压”は迫る触覚の感覚を表し、その触覚を使って、黒色の視覚を表現し、人が黒山のように集まっている様子を表す。他の版本も“黑压压”を使って、意味は概ね同じい。ただ“乌压压”は方言の“乌央乌央”と繋がりがあると推察されるため、詳細な考察は今後の課題にしたいと思う。

“白汪汪”は各版本に“白茫茫”“白漫漫”とも表記される。“汪汪”は水と繋がり、“水深广貌”“液体盛满貌”“水光荡漾貌”（《汉语重言词词典》）という意味である。『紅楼夢』のほかの例を見てみよう。

101)林黛玉<u>直瞪瞪</u>的瞅了他半天，气的一声儿也说不出来。（第 30 回:p.407）
（黛玉は目をくわっと見ひらき、ながいこと宝玉をねめつけていましたが、腹立ちが昂じたあまり、ひとこともものがいえない始末。）（第 30 回:p.359）

102)兴儿<u>直蹶蹶</u>的跪起来回道、“这事头里奴才也不知道。就是这一天、东府里大老爷送了殡、俞禄往珍大爷庙里去领银子。二爷同着蓉哥儿到了东府里、道儿上爷儿两个说起珍大奶奶那边的二位姨奶奶来。二爷夸他好，蓉哥儿哄着二爷，说把二姨奶奶说给二爷。”（第 67 回:p.936）
（興児は身を固くして脆き、「この話、事の起こりはてまえも存じませぬ。その日、ちょうど東のお屋敷の大殿様の野辺送りの折のことでございましたが、兪禄が銀子を受領に、珍の御前様を寺へお訪ねいたしましたので、うちの御前様は蓉さまとごいっしょに東のお屋敷へお越しになりました。実はその道の途中で、御前様と蓉さまとこのお二人のあいだに、珍さまの奥様のところのお二人の叔母さまのお話が出たのでございます。御前様があのかたをおほめになりますと、蓉さまは御前様に調子をお合わせになり、それでは二番目の叔母さまをお取りもちいたしましょう、とかようにおっしゃったので……」）（第 67 回:p.311-p.312）

例文 101）の“直瞪瞪”では、目つきを表し、“瞪瞪”は“直视貌”（《汉语重言词词典》）という意味であり、目を大きくあけて目つきのまっすぐな状態を表す。

例文 102）の“直蹶蹶”の“蹶蹶”は“撅撅”とも書かれ、“形容挺直的样子”（《汉语

重言词词典》）の意味を表し、“兴儿”が背をピンと伸ばし、“凤姐”を怖がる様子を描写する。

以上から、A と BB のコロケーションは、同じ語義カテゴリーに位置することで、共通の認知領域として感知されやすい。同感覚はもちろん、異感覚から共感覚メタファーと同一感覚の下位カテゴリーのメタファーの認知メカニズムでの把握も可能となる。

A と BB は五感と繋がりがあり、同一の情景でも観察者によって、体験と経験が異なり、感知も異なる。ABB 式は五感と繋がりが強く、その主観性が高いため、作者の表現意図と表現スタイルを最も端的に表すことができ、そのことから、各版本においての ABB 式に著しい異なりが見られるのである。

7.5　終わりに

本章は、認知言語学の諸観点から、『紅楼夢』おける形容詞重畳式の動機づけを明らかにすることを目的とした。形容詞重畳式の“的”との共起状況は、現代中国語の形容詞重畳式の“的”との共起状況と一致しないことが明らかになった。認知の「有界」と「グラウンディング」の観点で、その“的”の機能を説明することを試みた。通時的な観点から、形容詞重畳式の「描写性弱化」は、“的”をつける動機付けになると考えられた。また、『紅楼夢』における形容詞重畳式と“的”の共起は、韻文のリズムと熟語の固定と繋がりがあることがわかった。

さらに、認知言語学の観点から空間化の仮説を提案し、援用した。性質形容詞は、類の限定を表し、空間化を設定しない。これに対して、状態形容詞は、陳述する対象が個であることを表し、空間化を設定する。観察者は、設定された空間（容器のメタファー）に入って自らを定位し対象を観察する。対象を言語化して表現するには、性質形容詞ではなく状態形容詞を用いる。空間化することにより対象を実体化し、実体化を経て個体化へと向かわせる。性質形容詞から状態形容詞へのプロセスを明らかにした。視点の面からは、性質形容詞は「傍観者事象観察型」であると認められ、状態形容詞は「当事者事態関与型」と認められた。また、共感覚メタファーから、『紅楼夢』における ABB 式は、語内部と語外部および文脈で二次共感覚メタファーに分けられた。第一に、BB の感覚を通して、A の感覚を表す語内の共感覚メタファー場合である。第二に、ABB 式が同時に A と BB の両感覚を有する感覚共有語である。第三に、実際の文脈で使用する際、ABB 式の本来の感覚が、共感覚メタファーを通して、他の感覚を表すことであった。

第八章　形容詞重畳式と『紅楼夢』日本語訳についての考察

8.1　はじめに

本章は、『紅楼夢』前八十回における AA 式を研究対象として、三種の日本語訳との対応関係についての検討を行うものである。『紅楼夢』において、ほぼ三分の一の分量を占める AA 式は、日本語の擬声･擬態語に訳されることが明らかになった。AA 式重言、とりわけ韻文における AA 式重言は、日本語の漢語擬声･擬態語との対応関係が明らかであると考えられる。この対応は、漢文訓読とつながりがあり、形式的な重複が見られることから、形式面においても繋がりがある。

中国語の形容詞重畳式は“生动形式”と見なされ、対訳される擬声･擬態語はどのような状況にあるのであろうか。AA 式形容詞重畳式も日本語の擬声･擬態語も生き生きとした表現として、ビビッド性と描写性を有し、擬声･擬態語は、日本語の“生动形式”の一種と言えよう。AA 式と日本語の擬声･擬態語は、描写性、具体的な個別性、体験性、主観性において共通点が見られる。

本章は、『紅楼夢』と日本語訳を言語資料として、中国語の AA 式と日本語の擬声･擬態語を比較し、両者の描写性と主観性などに関する整合性を探究し、対応の動機づけを探究する。

8.2　『紅楼夢』の日本語訳について

『紅楼夢』は、清の高宗の乾隆五十六年（西歴 1791 年)、辛亥年の歳の冬に初めて活字本が刊行された。この時点を境に、『紅楼夢』には、大量の翻刻本が続々と出現し、私的抄写の段階から公的印刷の段階に入ることとなった。

日本語訳について、1.2.3 で言及したように、全 120 回の全訳本は 9 種だけであり、以下の通りである。

1.松枝茂夫　『紅楼夢』（全 14 冊）岩波書店　（1940.3-1951.4）
2.伊藤漱平　『紅楼夢』（上、中、下）平凡社　中国古典文学全集　第 24-26 巻（1958.12-1960.12）
3.伊藤漱平　『紅楼夢』（上、中、下）平凡社　（1963.2）
4. 伊藤漱平　『紅楼夢』（上、中、下）平凡社　中国古典文学大系　第 44 巻―46 巻（1969. 1 -1970.2）
5.松枝茂夫　『紅楼夢』（全 12 冊）岩波書店　（1972.5-1985.7）
6.伊藤漱平　『紅楼夢』（上、中、下）平凡社　奇書シリーズ 5（1973.5）
7.飯塚朗　『紅楼夢』集英社　世界文学全集　第 11-13 巻　（1980）
8.伊藤漱平　『紅楼夢』（1-12 冊）平凡社　平凡社ライブラリー　（1996.9-1997.11）
9.井波陵一　『新訳　紅楼夢』（全 7 冊）岩波書店　（2013.9-2014.3）

本稿は、上記の中から、5 の松枝訳、8 の伊藤訳、9 の井波訳を選択し、主に 8 の伊藤訳を言語資料として、5 の松枝訳と、9 の井波訳を参照する。三種の日本語訳の底本は以下の通りである。

5 の松枝茂夫訳の前 80 回の底本は、主として俞平伯校訂（1958)《红楼梦前八十回校本》（人民文学出版社）に拠り、後 40 回は程乙本に拠る。

8 の伊藤漱平訳は、俞平伯校訂《红楼梦八十回校本》（人民文学出版社、一九五八年、一九六四年改訂版あり）及びその付録の後四十回（程甲本に拠る）を底本とする。

9の井波陵一の前80回の底本は、庚辰本（1977）《脂硯斎重評石頭記》（中華書局 香港分局 影印本）に拠り、後の40回の底本は程甲本《红楼梦》（書目文献出版社, 1992）（影印本）に拠る。

中国語のテキストには庚辰（1760年）過録本を底本とする人民文学出版社（2008年）刊『紅楼夢』を用いる。同書校注は、中国芸術研究院の紅楼夢研究所に依っている。上記日本語訳の底本も随時参照することとする。

8.3　日中擬声·擬態語について

8.3.1　漢語擬声·擬態語とは

8.3.1.1　オノマトペの定義

日本語学会編『日本語学大辞典』（2018:86）は、オノマトペについて、「外界の物音や状態を言語音で模写した言葉。ガタガタ·ドタッ·ホーホケキョーなどの音や声を言語音で模写した擬音語と、ヒョロヒョロ·ペタン·ヒッソリなどの状態を言語音でいかにもそれらしく模写した擬態語の総称。」と定義している。[35)]

8.3.1.2　漢語擬声·擬態語の概念

金田一春彦（1978/1985:11）は、「擬声語·擬態語には、もともと固有の日本語、すなわち和語のものと、中国から渡来した漢語のものがある。」と指摘する。劉玲（2015:16、25）は、日本語の擬声·擬態語を出自により、固有オノマトペと漢語オノマトペに分類し、古典中国語から受容されたと認め得る場合を指して「漢語オノマトペ」といい、日本語に固有のやまとことばのオノマトペの場合を指して「固有オノマトペ」というと指摘している。

徐一平ほか（2010:3）は、和語擬声語·擬態語に対する漢語系の擬声語·擬態語について、以下のように記している。

漢語系擬音語は、自然界で生ずる種々の音と声を、漢語系の言語音で模写した語の一群。（例：轟々）

漢語系擬態語は、自然界に生起する様々の状態や人間の動作、心理などを、漢語系の熟語で描写した語の一群。（例：煌々、戦々兢々）

このように、日本語の擬声語·擬態語には、和語の擬声·擬態語（固有擬声·擬態語）のほかに、漢語の擬声·擬態語がある。和語の擬声語·擬態語のように、漢語擬声·擬態語も音声と状態を描写し、漢語語彙で表記する。漢語擬声·擬態語は中国語から伝来し、中国語と繋がりがもっと深く、漢語擬声·擬態語と中国語の対応状況を明らかにすることは有意義であると考えられる。

8.3.1.3　漢語擬声·擬態語の形式

金田一春彦（1978/1985:12-13）は、漢語の擬声擬態語の形式について、以下の種類に分ける。

一　漢字一字のもの

燦（として）　寂（として）　恬（として）　杳（として）

二　漢字二字のもの

35）日本語学会編『日本語学大辞典』（2018:86）では、「オノマトペという言葉は、日本語に多数存在する擬態語を本来含んでいないことに問題がある。ただし、擬音語·擬態語を総括する適切な言葉がないので、暫定的にオノマトペの語を使用しているのが現状である。」と指摘する。本章では、擬声擬態語という名称を使用し、引用部分は原文の名称をそのままに用いることとする。

(1)「―焉」の形のもの　溘焉 忽焉
(2)「―乎」の形のもの　確乎　断乎
(3)「―爾」の形のもの　莞爾（として）卓爾　卒爾　渺爾（たる）
(4)「―若」の形のもの　自若　瞠若（たらしめる）
(5)「―如」の形のもの　突如　躍如
(6)「―然」形のもの　　宛然　婉然　　画然　愕然　敢然　欣然　決然　公然　昂然　傲然　渾然　燦然　釈然　粛然　悄然　騒然
(7) 同じ語根を重ねたもの
藹々　唯々　営々　奄々　延々　炎々　快々　呵々　峨々　赫々　嬉々　汲々　炯々　呱々　煌々　匆々　淙々
(8) 同じ子音の拍を重ねたもの
佶屈　恍惚　颯爽　忸怩　瀟洒　参差　凄愴　倉卒
(9) 同じ韻をもつ拍を重ねたもの
婀娜　靉靆　安閑　蜿蜒　宛転　混沌 索漠　蹉跎　惨憺　燦爛　蕭条　従容　嬋娟　蹌踉
(10) 漢字三字のもの
鞠躬如　欣々然　洋々乎
(11) 漢字四字のもの
唯々諾々　意気揚々　侃々諤々　虎視眈々 小心翼々　正々堂々　戦々兢々　八面玲瓏　優々閑々

二の（1）から（6）までは、「爾」「若」「如」「然」などの接尾辞を付けるものであり、（7）（8）（9）は、中国語の重言（畳語）、双声、畳韻に対応する。劉玲（2015:13）は、漢語オノマトペの出自となる古典中国語におけるオノマトペのパターンについて、主として畳韻型、双声型、重言型、接尾辞型の四つにまとめられると指摘している。

8.3.2　和語擬声･擬態語の形式

金田一春彦（1978/1985:14-17）は、和語の擬声擬態語（固有オノマトペ）の形式について、18 種類に分ける。重ね型に注目するため、そのうちの（11）（12）（16）だけを挙げる。

(11) 二拍の語根の繰り返し、ことに第二音がラ行のものが多い
からから　がらがら　かりかり　きらきら　くるくる　こりこり　ころころ
さらさら　ざらざら　じゃらじゃら　しゃりしゃり　じりじり　するする
そろそろ　ぞろぞろ　たらたら　つるつる　とろとろ
いそいそ　かさかさ　かたかた　かちかち　がぶがぶ　きびきび　くしゃくしゃ
ぐずぐず　くよくよ　げぶげぶ　ごしごし　こそこそ　こちこち　ごとごと
ごぼごぼ
(12) 前項に似て類音のものを重ねるもの
あたふた　かさこそ　かたこと　からころ　ちらほら　つべこべ　てきぱき
どぎまぎ　ぺちゃくちゃ　むしゃくしゃ
(16)　　(7)（8）(9) の繰り返し
ぐでんぐでん　　ころりころり　ごろんごろん　のたりのたり　ぱっかぱっか

上記のうちの（11）、（12）、（16）のパターンは繰り返し型である。本研究は、重ね型の AA 式に対応させるため、繰り返しに焦点をしぼって、金田一の（11）（12）（16）の繰り返し型の対応状況に注目することにしたい。

8.3.3　中日擬声･擬態語について

日本語の擬声語は中国語の“象声词”に対応し、これに対して、日本語の擬態語は、中国語のどのような品詞に対応するか。上記のように、状態を言語音で描写する擬態語の定義から、中国語に擬態語らしきものが存在しないわけではない。

徐一平ほか（2010:25-31）は、中国語の擬態語らしきものを 4 種類取り上げる。

第 1 類は、上述の金田一（1978/1985）が論述した日本語の漢語擬声語·擬態語であり、現代中国語に見られるもので、たとえば、“愤然”“赫赫”“蜿蜒”など。第 2 類は、ABB 式の畳語で、“气冲冲”“贼溜溜”“笑眯眯”など。第 3 類は、“风平浪静”“眉飞色舞”“斩钉截铁”“拖泥带水”“一口气”“一溜烟”などであり、「形況詞」と称するもの。第 4 類は、“滴滴溜溜”“骨骨碌碌”などの擬声語の隠喩的用法であり、擬音から擬態に発展したもの。

以上の徐（2010）の中国語の擬態語らしきものにおいて、第 3 類を除き、第 1、2、4 は、主に重畳の形式である。徐一平ほか（2010:11）は、「自然界の音声や状態を模写する語の特徴として、重複が多いことは、おそらく万国共通であろう。」と指摘している。徐氏の擬態語らしきものには、形容詞重畳式が大部分を占めており、中国語で状態を描写するのは、形容詞重畳式が多用される。

形容詞重畳式を「中国語の擬態語」（俞稔生，2007:68）と言い、“摹状词”（沈家煊，2015:644）と称する所以である。

既述したように、AA 式の中で、AA 式重言は、早くも西周金文に発現され、最も早く出現する重畳形式である。また、AA 式重言は、『詩経』において多く用いられ、発達を遂げ、韻文における使用頻度も高い。

8.4　AA 式形容詞重畳式とその日本語訳の対応研究

伊藤訳を考察した結果、542 例の AA 型形容詞重畳式に対応する語例に、174 例の擬声·擬態語が確認され、概ね三分の一を占めることが分かった。対応する擬声·擬態語に、「皑皑、蒼蒼」などの漢語擬声·擬態語と「ひらひら、くさくさ」などの固有擬声·擬態語の二種類があることが指摘される。

擬声·擬態語に対応する 37 例の AA 式重言には、漢語擬音·擬態語に対応する語例が 27 あり、固有擬声·擬態語に対応する語例は 10 例である。韻文に出現する重言は 22 例であり、そのうち、漢語擬声·擬態語の対応例は 18 例で、固有擬声·擬態語の対応例は 4 例のみである。以上から、『紅楼夢』における重言の多数は、漢語擬声·擬態語に対応し、半分以上が、韻文で使用されていることが明らかとなった。

一方、AA 式に対応する固有擬声·擬態語の語数は、127 例であり、全 174 例のほぼ四分の三を占める。非重言型の AA 式形容詞重畳式で、固有擬声·擬態語に対応する語例は 113 例あり、最も多い。次の表 14 は『紅楼夢』における AA 式形容詞重畳式と伊藤訳オノマトペの対応状況を示したものである。

中国語 / 日本語	AA 式形容詞重畳式				語数
	重言型		非重言型		
	韻文	非韻文	韻文	非韻文	
漢語擬声·擬態語	18 例	9 例	5 例	15 例	47 例
固有擬声·擬態語	4 例	6 例	4 例	113 例	127 例
語数	37 例		137 例		174 例

表 14　『紅楼夢』における AA 式と伊藤訳の擬声·擬態語の対応状況

伊藤訳の対応例について、松枝訳と井波訳を調べてみた結果、状況は概ね一致してい

ることが分かった。伊藤訳の対応例は、松枝訳と井波訳においても、概ね擬声･擬態語に対応しているのである。とは言え、日本語訳各本に、異なる訳も存在するのである。以下は主に、重言とオノマトペの対応状況を検討する。

8.4.1　韻文における重言と擬声･擬態語の対応一致の状況

韻文に見られる重言 22 例中、18 例が漢語擬声･擬態語であると考えられ、81.81%を占める。日本語訳各本を比較した結果からも、韻文に見られる重言が漢語擬声･擬態語と認められる割合は、極めて高いものと言える。“皑皑”は、伊藤訳本で「白皚皚」に訳し、井波訳、松枝訳は「皚皚」と訳す例も見られ、異なりがある。『紅楼夢』前八十回における AA 式重言と三種の日本語訳の対応状況は、具体的に付録表 8 で示したものである。例えば、

103)天何如是之<u>苍苍</u>兮，乘玉虬以游乎穹窿耶？
　地何如是之<u>茫茫</u>兮，驾瑶象以降乎泉壤耶？（第 78 回:p.1112）

伊藤訳：天　いかなればしかく蒼蒼(そうそう)たるや
　玉虬(ぎょくきゅう)に乗りてもって穹窿(あめぬち)に遊ばんか
　地　いかなればしかく茫茫(ぼうぼう)たるや
　瑤象(ようぞう)に駕してもって泉壤(よみじ)に降(くだ)らんか（第 78 回:p.382）

井波訳：天(てん)は何(なん)ぞ是(かく)の如く蒼蒼(そうそう)たる　玉虬(ぎょくきゅう)に乗りて以(もっ)て穹窿(きゅうりゅう)に遊(あそ)ばんか
　地(ち)は何(なん)ぞ是(かく)の如く茫茫(ぼうぼう)たる(ごと)　瑤象(ようぞう)に駕(が)して以(もっ)て泉壤(せんじょう)に降(くだ)らんか
　天はどうしてかくも蒼蒼(あおあお)としているのでしょう
　あなたが玉虬に乗って天空を馳せるからでしょうか
　地はどうしてかくも茫茫(ひろびろ)としているでしょう
　あなたが瑤象を御して冥界に降るからでしょうか（第 78 回:p.407）

松枝訳：天何ぞ是(かく)の如く蒼蒼(そうそう)たる　玉虬(ぎょくきゅう)に乗りて以って穹窿(きゅうりゅう)に遊ばんか
　地何ぞ是(かく)の如く茫茫(ぼうぼう)たる　瑤象(ようぞう)に駕(が)して以って泉壤(せんじょう)に降(くだ)らんか（第 78 回:p.306）

中国語原文の重言が日本語の漢語の擬声･擬態語にどう対応しているかについて、各訳本は一致している。呉川（2005:47）は、「訳語は、原語のままに左右に読み仮名を付している。」と指摘している。各訳本の韻文に関する訳し方は、概ね呉（2005）のような訳し方を採用する。井波訳は、現代語の訳文も付けている。同じ漢字で表記する「蒼蒼」は、読み方は音読みの「そうそう」であり、現代語の訳文は訓読みの「あおあお」であり、「茫茫」は、音読みの「ぼうぼう」と訓読みの「ひろびろ」の二つの読み方がある。

韻文に見られる重言において、各日本語訳全てで漢語擬声･擬態語に対応する語例は、以下の 18 例である。

“皑皑”、“苍苍”、“忡忡”、“恢恢”、“茫茫”、“默默”、“脉脉”、“惓惓”、“飕飕”、“烁烁”、“潇潇”、“萧萧”、“栩栩”、“谆谆”、“剪剪”、“暄暄”、“堂堂”、“渺渺”。

8.4.2　韻文における重言と擬声･擬態語の対応不一致の状況

韻文に見られる重言 4 例では、伊藤訳は固有擬声･擬態語に対応し、井波訳は固有擬声擬態語と漢語擬声･擬態語に対応し、松枝訳は漢語擬声･擬態語に対応し、不一致が見られる。たとえば、

104)翦翦舞隨腰 煮芋成新賞（第 50 回:p.670）
伊藤訳：ひらひら舞いて腰にしたごう
今更にながめ賞でつつ芋を煮て（第 50 回:p.343）
井波訳：翦翦として舞いて腰に 随 う
芋を煮て　新 賞 を成し
サッと吹き付ける風に　舞い飛んで腰のあたり
芋を煮て　新たに雪を賞で（第 50 回:p.80）
松枝訳：剪剪として舞いて腰に随う　芋を煮て新 賞 を成し（第 50 回:p.285）

中国語の重言
翦翦：形容风轻而带寒意。[36]
固有オノマトペ：
ひらひら:非常に薄くて軽い物が連続して不規則に揺れ動く様子を表す。（飛田良文 浅田秀子（2002）『現代擬音擬態語用法辞典』）
サッと:物の移動や動作、状態の変化が一瞬に行われる様子を表す。（飛田良文　浅田秀子（2002）『現代擬音擬態語用法辞典』）
漢語オノマトペ：
翦翦：（1）心のあさはかなさま。また、へつらいおもねるさま。
（2）風が吹いて寒いさま。（日本国語大辞典第二版編集委員会（2000.12-2002.1）『日本国語大辞典』）

例文 104）では、重言の“翦翦”は、各日本語訳では、「ひらひら」「翦翦」（サッと）に対応する。重言と漢語擬声･擬態語の「翦翦」は、風が吹いて寒い様子を表し、日本語の「翦翦」は風がかすかに吹くさまを表すことが出来ない。伊藤訳は、「そよ」の意味に注目し、「ひらひら」に対応させた結果、「寒い」の意味を含まず、中国語の「翦翦」の意味を反映させていない。

次に、“楚楚”、“纷纷”、“盈盈”の各訳本の対応状況を検討する。
楚楚：伊藤訳：なよなよ
井波訳：楚楚（ほっそり）
松枝訳：ほっそりとくびれた
纷纷：伊藤訳：くだくだ
井波訳：纷纷（そんなこんなでゴチャゴチャと）
松枝訳：わずらわし
盈盈：伊藤訳：ぼとぼと
井波訳：盈盈（蝋燭が溶けてこぼれ落ちんばかりになっている）
松枝訳：盈盈

井波訳は漢語擬声･擬態語に訳す傾向があり、韻文の漢文訓読のほかに、現代日本語の訳文を付ける。現代日本語で解釈すると長文化するのに対して、漢語オノマトペであれば二字だけで概括可能である。重言の概括性と簡潔明瞭性という点から、字数の制約、韻律を有する韻文に重言の出現する頻度が高いことがうかがえる。中国語の韻文を訳す場合、原文のリズムに従い、訳文に漢語オノマトペを多用することが考えられる。

[36] 「（前八十回） 曹雪芹著 （后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008）《红楼梦》人民文學出版社」の注釈から引用する。

8.4.3　非韻文における重言の対応状況

非韻文は原文の韻律の制約がないため、対応状況の多様性を表す。三種の訳文に見られる訳語は漢語擬声･擬態語であるか固有擬声･擬態語か、一致していない。たとえば、

105)贾赦等见执意不从，只得告辞谢恩回来，命手下掩乐停音，滔滔然将殡过完，方让水溶回舆了。（第 15 回:p.193）

伊藤訳：賈赦らはなんとしてもお聞き入れがないと見て、いたしかたなく、お礼を言上のうえお暇を乞い、御前を退出します。そしてたちもどると配下の者に命じ、憚りありとて奏楽を停止させたまま、ずんずんと葬列を進めさせ、水溶にはこれをやり過ごさしたところで輿を還してもらいました。（第 15 回:p.123）

井波訳:賈珍らは水溶がどうしても譲らないので、やむなく御恩に感謝して辞去すると、配下の者に命じて音楽を停止させ、滔々と流れるように柩を通し終えます。（第 15 回:p.252）

松枝訳:そこで賈赦らはやむを得ず、ありがたき思召を謝して、御前を退いた。そして手下の者に命じて鳴物をやめさせ、どんどんと葬例を通って行かせて、ようやく通り終わってから、水溶殿下にお輿をお返し遊ばすようお願いした。（第 15 回:p.100）

中国語の重言

滔滔:（10）比喻行动或事物像流水一样连续不断。（11）比喻声势浩大。（《汉语重言词词典》）

固有擬声･擬態語

ずんずん:進行や進捗の程度が速い様子を表す。(『現代擬音擬態語用法辞典』)
物事が遅滞なく、すみやかにすすむさま、また、程度のはなはだしさが容赦なく加わり増すさまを表わす語。(『日本国語大辞典』)

どんどん:（2）物事が次々と勢いよく進行する様子を表す。(『現代擬音擬態語用法辞典』)

漢語擬声･擬態語

滔滔:（3）おしなべて一様であるさま。また、世の風潮などが一つの方向に勢いよく移るさま。(『日本国語大辞典』)

例 105）では、重言の“滔滔”は、漢語擬声･擬態語の「滔滔」や固有擬声･語擬態語の「どんどん」「ずんずん」に訳されている。原文と訳文は、「勢いよく」の意味に注目し、対応させている。

類例として、“森森”は漢語擬声･擬態語の「森森」や「さっさっ」「ふさふさ」に訳されている。“汪汪”は、すべて固有擬声･態語に訳するが、訳者によって、別々に「はらはら」「ぼろぼろ」「ボロボロ」に訳されている。

オノマトペに訳されてない例も見られる。たとえば、

106)朔风凛凛，侵肌裂骨。（第 12 回:p.162）

伊藤訳：朔風は凛々として肌を刺し骨をも引き裂かんばかり（第 12 回:p.51）

井波訳：北風はヒューヒューとうなって肌を刺し骨を凍らせ（第 12 回:p.215）

松枝訳：北風の厳しさといったら、それこそ肌を刺し骨をつんざかんばかりである。（第 12 回:p.39）

例 106）では、重言の“凜凜”は漢語擬声･擬態語の「凜々」や固有オノマトペの「ヒューヒュー」に訳されており、さらに、松枝訳の「厳しさ」は一般的な語彙で、擬声･擬態語ではない。

以上から、韻文の訳文は、原文との一致を保持するため、高い割合で漢語擬声･擬態語に訳されている。漢語擬声･擬態語は日本人読者にとって理解しにくいと考えられるため、井波訳では和語の現代語訳文を付けている。非韻文の訳文は、韻律の制約がないため、漢語擬声･擬態語あるいは固有擬声･擬態語いずれか一般的な語彙への対訳が可能である。訳者の認知的感覚によって、異なる語彙が選択されて、“冉冉”“翦翦”などの例に見られるように、原文に適当ではない訳語が時々出現する。ここから考えると、訳者による表現の好みがあり、そうした理解の異同は言葉遣いに反映されている。

8.5　対応の動機づけ

AA 式重言は日本語訳で概ね漢語擬声･擬態語に対応する。漢文訓読みの影響により、原語に沿った訳となる。AA 式重畳は、多くが固有擬声･擬態語に対応する。AA 式は、形式面から、一つの漢字 A が重ねられたものである。対応する日本語訳の擬声･擬態語は、繰り返し型が多く採用される。重畳の形式と意味の関係について、陆镜光（2009:120-121）は、「临摹说（Iconicity in language)」を提出し、臨摹とは、言語形式と意味の『非恣意性』の関係を指す。と指摘している。臨摹説は、日本語で類像性と称する。辻幸夫（2013:373）は、類像の下位概念の図像／イメージについて、「図像（イメージ）は記号の形や音が指示対象の形や音を直接的に反映する記号を言い、文字レベルでは象形文字や絵文字が、一般語彙としては擬音語や擬声語が図像（イメージ）にあたる。」と指摘する。

擬声･擬態語は記号と対象がどのような類似関係をもつのかを表す。辻幸夫（2013:26）は、「オノマトペの担う意味は特定の音に対し有縁性があるという意味で、音象徴と密接な関わりを持つ。」と指摘する。本来の言語記号と意味の関係が恣意的だとみなされることに対して、異論を唱える。

田守育啓（2002:78）は、擬声･擬態語の反復型が多く存在する理由について、描写する音や動作で繰り返しのものを表すのに、反復形が利用されると指摘している。

擬声語は、記号と描写対象の類像性を表し、本研究の研究対象としての AA 式形容詞重畳式は、対応する日本語訳が多く擬態語である。本節は中国語の形容詞重畳式の特徴を応用し、特に、AA 式と漢語擬声･擬態語の共通点を通して、対応の動機づけを検討する。

8.5.1　描写性

3.2.1 から、中国語の形容詞重畳式は描写性が高いという特徴を有することが明らかになった。4.5.1 では、描写性に基づき、本研究は物語性という概念を提案し、形容詞重畳が生々しく効果的に表現することを論述してきた。この観点を日本語の擬声･擬態語に応用して、日本語の擬声･擬態語の描写性を検討する。

本研究は、AA 式に対応状況を考察するため、擬声語を除き、擬態語に焦点を絞り、検討する。天沼寧（1974:8）は、「擬態語とは，われわれ人間を含む生物，無生物，自然界の事物の有様･現象･変化･動き･成長などの状態･様子を描写的･象徴的に音声で表したものである。」と定義する。また、劉玲（2015:27）は、擬態語を擬容語･ 擬貌語･ 写容語･ 模様語と言い、オノマトペを描写語と称する。

107)不雨亦潇潇（第 50 回:p.674）
伊藤訳：雨ならざるもまた瀟瀟と（第 50 回:p.350）
井波訳：雨ふらずして　亦た瀟瀟たり
　　雨も降っていないのに、しのつくように（第 50 回:p.86）
松枝訳：雨ふらざるも亦た瀟瀟たり（第 50 回:p.293）

中国語の重言
潇潇:風雨暴疾貌。（《汉语重言词词典》）
しのつく：篠を束ねてつきおろしたように細いものが一面に続けてはげしく飛んでくる。多く、はげしく雨のふるさまにいう。篠を突く。（『日本国語大辞典』）
日本語の擬声･擬態語
瀟瀟:風雨のはげしいさま。（『日本国語大辞典』）
例 107）では、“潇潇”と「瀟瀟」「しのつく」は暴風雨の激しい様子を表す。暴風雨の状態、様子を想像でき、「瀟瀟」を使わなければ、その生動性を表せず、実感をもたらさない。

108)黛玉见如此，越发气起来，声咽气堵，又汪汪的滚下泪来，拿起荷包来又剪。（第 17、18 回:p.233）
伊藤訳:黛玉はこれを見てなおさら腹が立ち、声も出なければ息もつまりそう、はらはらと涙を流し、巾着を取りあげてまたしても切ろうとします。（第 17、18 回:pp.226-227）
井波訳:黛玉はこの様子を目にすると、ますます怒りがこみ上げ、声はつまり息はふさがり、またポロポロと涙をこぼしながら巾着を取り上げて、これも切ろうとします。（第 17、18 回:p.23）
松枝訳:黛玉はその仕打ちにいよいよ腹を立て、息がつまって声が出す、ぽろぽろ涙をこぼしながら、その荷包をとりあげてまたも剪ろうとした。（第 17、18 回:p.187）

汪汪:眼泪盈眶貌。（《汉语重言词词典》）
はらはら:非常に軽い物が連続してこぼれ落ちる様子を表す。ややプラスイメージの語。（『現代擬声擬態語用法辞典』）
ぽろぽろ:比較的大きくて重い物が連続して落下する様子を表す。（『現代擬声擬態語用法辞典』）
例 108）では、「汪汪」を通して、黛玉が腹を立て、涙をいっぱいためて、絶えず涙を流す様子が描写される。訳本の「はらはら」、「ポロポロ」に対応し、「黛玉」の怒る情景が描写される。“汪汪”、「はらはら」、「ポロポロ」を使えなければ、読者は、「黛玉」がどのように涙を流す様子かよく分からず、自分がその場に身を置いているような臨場感も伴わない。
『紅楼夢』における情景描写は AA 式の使用頻度が高く、対応する訳にも擬声･擬態語が使われる。理由の一つとして、両者とも描写性を有するからと言えよう。それでは、なぜ AA 式と擬声･擬態語は描写性を持ち、臨場感を伴うか。
7.2.2 の空間化で解釈してみることにする。数量詞は、可算名詞の空間の「存在」を表す最もふさわしい手段である。動詞には、開始・進行・完了、起点・経路・着点と関わる完了のプロセスが内在しており、限界があり、空間の存在を表す。形容詞は、修飾する名詞と動詞を通して、重畳式の文法手段により、存在主体の性状を表す。空間化は、

空間に存在する主体を基盤として、「イマ、ココ」の姿を描写する。観察者の認知を通して、形容詞の程度の範囲が示され、限界があり、存在主体の個別性と具体性が表わされる。

擬声･擬態語は限界があるか否か、判断しにくいため、無界か有界か判断しにくい。空間化の仮説で説明すれば、ヒト、モノ、コトが存在する空間を設定することを前提として、空間化が果たされる。擬声･擬態語も、「イマ、ココ」の即時の状態を描写し、それから、設定する空間に入って、存在する主体のそのままの状態を中国語で形容詞重畳式として表し、日本語で擬声･擬態語として表す。

要するに、中国語の形容詞重畳式と日本語の擬声･擬態語は、空間化の文法手段として、存在する主体のそのままの情景を描写し、「臨場感」を伴うため、訳される際、両者が対応することが多いと見られる。

8.5.2　具体的な個別性

本節は、中国語の AA 式重言と日本語の漢語擬声･擬態語とが修飾する対象を比較し、両者の相違点を明らかにする。

実際の用例を見ると、中国語の重言が修飾する対象は固定的であり、重言のコロケーションは範囲が一定しており、四字熟語となる場合が多い。たとえば、

109)皑皑轻趁步（第 50 回:p.670）
伊藤訳:白皚皚足を運べりかろがろと（第 50 回:p.342）
井波訳:皚皚として　軽く歩を趁い
　　真っ白な姿で　ふうわりと歩みを追い（第 50 回:p.80）
松枝訳:皚皚たる軽く歩を趁い（第 50 回:p.285）

中国語の重言
皑皑:白貌。(《汉语重言词词典》)
日本語の擬声･擬態語
皚皚:霜や雪が一面に白く見えるさま。(『日本国語大辞典』)

“皑皑”のコロケーションは、雪と霜であり、CCL コーパス[37]で“皑皑”を検索した結果、コロケーションは概ね“白雪”である。“白雪皑皑”は熟語として固定される。『紅楼夢』における AA 式重言を CCL コーパスで検索すると、ある一定のコロケーシが存在していることがうかがえる。たとえば、“白发苍苍”“天苍苍”“忧心忡忡”“虎视眈眈”“赫赫战功”“天网恢恢”“含情脉脉”“红日冉冉”“眼泪汪汪”“栩栩如生”“烈日炎炎”“谆谆教导”などである。これらの大部分が、現代中国語において四字熟語として固定的に使用されている。

劉玲（2015:48-59）は、奈良･平安時代から近世初期にかけての八種の資料（計 31 文献）を調査し、日本語における AA 式の漢語擬声･擬態語（A は一つの漢字）の使用状況を考察し、計 158 語 633 例を検出し、現代日本語に約半分受け継がれて来たと指摘するとともに、大量の漢語擬声･擬態語が古典中国語から伝来し、借用されることで定着したと指摘する。日本語の漢語擬声･擬態語は、金田一春彦（1978/1985:13）の四字の漢字の用語の一部分に属し、たとえば、「虎視眈眈」「意気揚揚」「小心翼翼」などは四字熟語として、中国語を踏襲している。「眈眈」について、『日本国語大辞典』で「目を鋭く光らせてものを狙うさま。転じて、野心をもって何かをじっと狙っているさま。多く「虎視眈眈」

[37] CCL コーパス<http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/>、2021 年 7 月 24 日参照。

の形で用いる。」と解釈している。これを見ると、「虎視眈眈」は、熟語として多用される。

以上から、中国語の重言および日本語の擬声･擬態語と組み合わせられる対象は、固定され、具体的であり個別的な特徴を有するものであり、使用範囲は限定的である。言語に表現すれば、重言とのコロケーションは、具体的な一定の物事であり、現代中国語に四字熟語として固定的に使用される。中国語の重言の変遷を踏まえて、日本語の漢語擬声･擬態語は四字の漢字の用語になる。

8.5.3　五感からの体験性

3.1 で言及したように、劉勰の《文心雕龍》（巻第十･物色第四十六）の中で、「是以詩人感物，聯類不窮。流連萬象之際，沈吟視聽之區。」という記述がある。興膳宏（2008:116）は、「だから、『詩経』の詩人たちは自然から感興を得ると、極みない連想の翼を馳せた。」、「彼らはありとあらゆる現象の間をさまよい、目と耳に訴えかける全てのものに心を潜めた。」と解釈する。

「視聽之區」は、見る範囲と聞く範囲で吟味することである。すなわち、聴覚と視覚の感覚を通して、自然の風物を感知することによって、感興を得ると、連想を生じる。『詩経』における重言の応用は、聴覚と視覚から感興に合わせて吟味を重ねた結果の言語化であると考えられよう。

『紅楼夢』における AA 式は、概ね目と耳から、視覚と聴覚を通して認知され、それらは身体的な体験を反映する。たとえば、“皑皑、楚楚、苍苍、赫赫、茫茫、冉冉、森森、烁烁、滔滔、汪汪、萧萧、盈盈”などは視覚からの体験性を表す。

110) 炫裙裾之烁烁兮，镂明月以为珰耶？（第 78 回:p.1112）

伊藤訳：裙裾の爍爍たるを炫り　明月を鏤めて璫と為さんか（第 78 回:p.382）

井波訳：裙裾の爍爍たるを炫かせ　明月を鏤めて以て璫と為さんか
裳裾をキラキラ輝かせ　明月を散りばめて飾り玉とするのでしょうか(第 78 回:pp.407-408)

松枝訳：裙裾の爍爍たるを炫かり　明月を鏤めて以って璫と為さんか（第 78 回：p.307）

中国語の重言

烁烁：光芒闪烁貌；鲜艳貌。(《汉语重言词词典》)

日本語の漢語擬声･擬態語

爍爍：(1)明るく照り輝くさま。光のほか、花が照り映えるさまにもいう。灼然。(2)盛んなさま。(3)なまめかしい色のさま。(『日本国語大辞典』)

例 110）では、「爍爍」は裳裾の鮮やかに美しさだけではなく、目を奪わんばかりの美しさをも表す。そこで、井波訳は「キラキラ輝かせ」に訳す。この美しさは観察者の目から視覚を通して、感知されたものである。色彩などがあざやかで、視覚を強く刺激する。「爍爍」を使うことで、観察者の視覚の体験を聞き手に伝え、宛もその情景に身を置いているような実感を聞き手や読者にもたらす。

また、“纷纷”“飕飕”などは耳から入って来る聴覚の体験性を表し、“暄暄、凛凛、炎炎”などは触覚の体験性を表す。

111)连宵脉脉复飕飕（第 45 回:p.609）

伊藤訳：夜を籠めて　霏霏と　また颼颼と（第 45 回:p.181）
井波訳：連宵　脈脈　復た颼颼
　　一晩じゅう　脈脈　また颼颼と（第 45 回:p.270）
松枝訳：連宵霏霏また颼颼（第 45 回:p.149）

中国語の重言
飕飕:象声词 1、风声　2、雨声　3、风吹草木摇曳声。(《汉语重言词词典》)
日本語の漢語擬声･擬態語
颼颼：(1) 風の音がかすかに聞こえるさま。
　　(2) 雨の音がかすかに聞こえるさま。(『日本国語大辞典』)

例文 111）は、小雨がしとしと降って、風がヒューと吹く様子を表す。“飕飕”は中国語の「象聲詞」で、日本語の擬音語に対応する。耳からの聴覚的体験を通して、微風が吹く音が感知される。林黛玉が、病気のため瀟湘館で休んでいる時、秋夜のしとしとと降る雨の音およびかすかな風の音を聞いて、思わず胸が苦しくなっている時の情景であり、彼女が「代別離」の詩を書いている。

このように、中国語の重言と日本語の漢語擬声･擬態語は、五感の中でも特に聴覚と視覚から感知され、いきいきとしたリアルな情景を描写する。では、なぜ五感の中でも、視覚と聴覚が最初に認知されるのであろうか。視覚と聴覚は味覚、触覚、嗅覚より、発達し感知しやすいのであり、その結果、中国語の重言と漢語擬声･擬態語では、視覚と聴覚から認知される語例がもっとも多いと考えることが出来るのではなかろうか。

8.5.4　主観性

3.2.3 で言及したように、観察者の参与度と評価の二方面から主観性を判断する。本節は、『紅楼夢』前八十回における AA 式と日本語訳を挙げ、主観性から AA 式と擬声･擬態語を比較する。

AA 式という表現形式を用いて、観察者は「眼前の“N”の本来の姿を見たまま」[38] を視覚的に捉え、直感的なものを伝える。観察者の臨場感を伴い、参与度も高い。従って、主観性も高いと見なされる。また、もし話者が現場に居なくても、AA 式の言語手段を使えば、話者は観察者を通して、描写する対象があたかも目の前に存在するかのように想像できる効用があり、主観性も高いと見なされる。すなわち、まずフレームとしての存在する空間を設定し、その空間に対象を設定するという空間化を施す。擬声･擬態語については、『広辞苑』（第 5 版）626 頁に、擬音語とは「実際の音をまねて言葉とした語。」、650 頁に、擬態語とは「視覚･触覚など聴覚以外の感覚印象をことばで表現した語。」と定義する。擬声･擬態語は五感の感覚器官で認知し、感覚イメージを直感的に表す言語手段である。観察者の感覚器官を通しており、参与度も高いと見なされ、主観性を有する。

以下に、『紅楼夢』における AA 式と擬声擬態語の対応例文を見よう。

112)话犹未了，林黛玉已摇摇的走了进来。(第 8 回:p.122)
伊藤訳: その声も終わらないうちに、もう当の林黛玉、ふうらりふらりと部屋のなかまではいってきていましたが、(第 8 回:p.282)
井波訳:その声がまだ終わらぬうちに、黛玉は早くもゆらゆらと中に入って来ましたが、(第 8 回:p.157)

[38] 小野秀樹（2004:59）「名詞における形容詞の属性付与と様態描写」『現代中国語研究』(6)，pp.49-67,168.

松枝訳:その言葉がまだ終わらないうちに、もう林黛玉がゆらゆらと風にゆられるような様子で部屋の中へはいってきていた。（第 8 回:p.239）

摇摇:动摇不稳的样子。(《现代汉语重叠形容词用法例释》)

ふうらりふらり:反復· 連続形。本体に自立性がなく不安定に揺れ動く様子を表し、不安定・無力感の暗示がある。(『現代擬音擬態語用法辞典』)

ゆらゆら:流体や他動物が柔らかく遅い速度で揺り動かされる様子を表す。『現代擬音擬態語用法辞典』

例 112）では、観察者はビデオのように、林黛玉の弱々しく揺れながら歩く様子を記録し、聞き手に伝える。聞き手は、林黛玉の歩く様子を想像することができ、そこには臨場感を伴い、主観性が表れる。日本語訳の「ふうらりふらり」、「ゆらゆら」に対応し、揺れ動くさまを表す。視覚からイメージを伝えて、主観性も有する。

113)凤姐故意用手摸着腮，诧异道："既没人吃生姜，怎么这么辣辣的？"（第 30 回:p.410）

伊藤訳：熙鳳はわざと手であごのあたりをなでてみて、けげんそうに、「生姜を食べているひとがいないとなると、はてな、どうしてこうもぴりぴりするのかしら？」（第 30 回:p.367）

井波訳：熙鳳はわざと手で頬をさすりながら、いぶかしげに言いました。「誰も生姜を食べていないというなら、どうしてこんなにピリピリするのかしら？」（第 30 回:p.277）

松枝訳：熙鳳はわざと顎を撫でながらいぶかしげな顔をして、「どなたも生姜を食べていらっしゃらないのに、どうしてでしょ、こんなにヒリヒリするのは？」（第 30 回:p.308）

辣辣：形容辣或者感觉辛辣，酸辣。(《现代汉语重叠形容词用法例释》)

ぴりぴり:連続して刺激を感じる様子を表す。（中略）辛さの場合、刺激自体はそれほど強くないが、内部にも刺激を感じている暗示があり、主体の敏感さが強調される。『現代擬音擬態語用法辞典』

ひりひり：表面に軽い刺激を連続して感じる様子を表す。ややマイナスイメージの語。『現代擬音擬態語用法辞典』

例 113）では、王熙鳳の想像した生姜の嗅覚が描写される。王熙鳳の観察者の経験から、聞き手にその生姜の匂いを伝え、いかにもその匂いを嗅ぐかのようである。日本語訳で、「ぴりぴり」が使われ、「辛い」より、「皮膚や粘膜が小刻みにはじかれるような辛みを持続的に感ずるさま。」(『広辞苑』第五版）を表す。観察者の嗅覚器官からの参与度が高く、「辛い」より「ぴりぴり」のほうが主観性が高いと言えよう。評価はプラス評価かマイナス評価に分ける。参考量と期待量の関係によって、判断する。

114)林黛玉便赶着来瞧，只见宝玉正拿镜子照呢，左边脸上满满的敷了一脸的药。（第 25 回:p.337）

伊藤訳：急いで見舞いに顔を出しました。見れば宝玉は鏡に映してみているところで、左の頬のあたり一面にべったり軟膏をつけています。（第 25 回:pp.163-164）

井波訳：黛玉が急いで様子を見に来たところ、ちょうど宝玉は鏡を持って火傷の具合を見ている最中で、顔の左側にはべっとりと薬が塗られています。（第 25 回:p.168）

松枝訳：そのとき宝玉は鏡を取ってのぞいていた。黛玉は彼の左頬に膏薬がいっぱい塗られているのを見て、（第 25 回:p.136）

满满：很满。（《现代汉语重叠形容词用法例释》）

べったり:比較的広い面積に隙間なく粘着している様子を表す。マイナスイメージの語。（『現代擬音擬態語用法辞典』）

べっとり:液体の粘度が非常に高くて物に粘着している様子を表す。ややマイナスイメージの語。（『現代擬音擬態語用法辞典』）

115)说着拿过酒来，满满的斟了一杯喝干。（第 44 回:p.587）

伊藤訳：そういうと、酒を運ばせ、なみなみ一杯注がせて飲み乾しましたので、（第 44 回:p.124）

井波訳：そう言って酒を取り上げ、なみなみと注いで飲み干します。（第 44 回:p.240）

松枝訳：といいつつ、杯になみなみとついだのを一息にぐっと飲み幹したので、（第 44 回:p.102）

なみなみ：容器にあふれるほど液体が満ちる様子を表す。ややプラスイメージの語。『現代擬音擬態語用法辞典』

例 114）の「滿滿」は、いっぱいの意味である。宝玉が顔を蔽い、黛玉に見せない様子からみると、好ましくないことを表す。訳本の「べっとり」「べったり」の「貼り気が離れない様子」は、『現代擬音擬態語用法辞典』に基づき「マイナスイメージの語」と解釈する。

例 115）では、「滿滿」を通して、容器にあふれそうになるほど酒を満たすことが表わされる。王熙鳳が酒を運ばせ、なみなみ一杯注がせて飲み乾したことから、誕生日の日の嬉しそうな様子がうかがえ、好ましく、期待量を超えるのを表す。訳本の「なみなみ」は、『現代擬音擬態語用法辞典』で「プラスイメージの語」と解釈する。

つまり、「プラス評価」、「マイナス評価」は、いずれも、観察者の主観的な感情と態度を帯びる。期待量を超えるか及ばないかは、主観的な基準によって判断される。

8.6 まとめ

本章は、『紅楼夢』の言語資料と三種類の訳本を比較対照し、AA 式と擬声･擬態語との関わりを取り上げて検討した。両者の対応状況では、韻文における重言は漢語擬声･擬態語に対応し、非韻文における重言は漢語擬声･擬態語か固有擬声･擬態語か一般的なものに対応し、多様性を表していた。それらを対象に、物語性、具体的な個別性、主観性、五感からの体験性から分析を行った。

対応する内的要因を検討した結果、以下の共通点があることを主張した。

第一に、AA 式と擬声･擬態語は、文法的な意味において、描写性を有し、実際に応用する際、「その時、その場所」の情景をいきいきと描写する効果があり、「物語性」を有する。物事の存在する空間（フレーム）を設定し、空間に存在する主体は、臨場感を伴い、観察者の目の前で起こっているかのような個別的な情景（事象）を描写する。

第二に、AA 式も、オノマトペも、観察者の参与度とプラスとマイナス評価が含まれ、主観性が顕現しやすい。

第三に、現代中国語でも日本語でも、多くの形容詞重畳式は、四字熟語として、固定的に使用される。また、中国語の重言と日本語の漢語擬声･擬態語は、身体的五感を基盤

としたもので、主に聴覚と視覚から認知されるのは、聴覚と視覚は高次の感覚として発達したものだからである。

第九章　終章

9.1　結論

本研究は、『紅楼夢』各版本と日本語訳を言語資料として、形容詞重畳式を研究対象として、AA 式、ABB 式、AABB 式、ABAB 式などのパターンを統計的に研究し、使用頻度を明らかにした。データ化した対象は、『紅楼夢』前八十回と後四十回における AA 式、ABB 式、AABB 式、ABAB 式の語例と使用頻度、『紅楼夢』各版本における ABB 式の使用実態と頻度、『紅楼夢』前八十回における AA 式と三日本語訳に対応する語例であった。以上の考察に基づいて、本研究の成果を以下のようにまとめる。

(1)『紅楼夢』における形容詞重畳式の使用実態を体系的に明らかにすることが出来たものと考える。まず基式によって形容詞重畳式の各パターンを語構成の面から分類した。文成分の面からは、AA 式、ABB 式、AABB 式が圧倒的に連用修飾語として使用されていることを指摘した。意味の面からは、形容詞重畳式を使用することで、ある特定の情景、風物を描写する際に、「臨場感」を伴い、聞き手をその場面に引き込む「物語性」をもたらすことを指摘した。重言が修飾する対象は、具体的な個別性を有することを指摘した。

(2)『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式の使用頻度を Z 検定により統計処理したところ、前八十回と後四十回の AA 式には、顕著な異なりが見られ、ABB 式と AABB 式の使用頻度には異なりがないことを明らかにした。文体論の常規と逸脱の理論を踏まえて、前八十回における同じ A の ABB 式は、逸脱の形式は更に多いことが分かった。文体論の同義選択論を通して、前八十回と後四十回における類義の AABB 式の使用状況は異なることが分かった。これらの考察の結果から、『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式には、顕著な相違点が観察されることから、前八十回と後四十回の作者は同一人物ではないとまでは断定出来ないが、少なくとも後四十回に別人の補作の跡があると結論付けた。

現存する『紅楼夢』の各写本と刻本に見られる ABB 式の異同状況から各版本の関係を考察した結果、己卯本と庚辰本は、同一の底本からの過録本、あるいは校訂本である可能性が高く、同一の「己卯·庚辰本」の底本を有すると想定し得た。戚序本、戚宁本は王府本と異なりがあり、王府本より、戚序本と戚宁本の繋がりが密接であった。ABB 式から夢稿本、甲辰本と程甲本、程乙本の関係を考察した結果、後四十回の続作者と目される高鶚は、まず他の版本から過録し、夢稿本を経て、程本編纂の定本としたものと推測出来た。甲辰本は、高鶚が修正した夢稿本に基づき過録した可能性が高く、本研究は夢稿本と程本の間の「中間本」の仮説を提案した。

(3)『紅楼夢』と三種類の代表的な日本語訳に対応する語例を比較した結果、AA 式と擬声·擬態語に対応関係が見出されることを指摘した。原文と訳本との対応状況を分析し、訳本がどう対応させようとしたのか、その動機づけを解明した。認知言語学の観点から、描写性、個別性、五感からの体験性、主観性の共通点があることを主張した。両者の相違点は、具体的に次の三点にまとめられる。

①AA 式と擬声·擬態語は、描写性が高い代表的な有標表現である。

②AA 式も擬声·擬態語も、観察者（話者）の参与度と評価を通して、主観性を把握しやすかった。

③AA 式は定量形容詞として、擬声擬態語は尺度軸に一定の位置付けが出来ないことから、定量化しにくいものと推定した。

(4) 認知言語学の観点から空間化の仮説を提案した。性質形容詞は、類の限定を表し、空間化を設定しなかった。これに対して、状態形容詞は、陳述する対象が個であることを表し、空間化を設定した。観察者は、設定された空間（容器のメタファー）に入って自らを定位し対象を観察する。対象を言語化して表現するには、性質形容詞ではなく状態形容詞を用いる。空間化することにより対象は実体化し、実体化を経て個体化へと向かう、性質形容詞から状態形容詞へのプロセスを明らかにした。視点の面からは、性質形容詞は「傍観者事象観察型」であると認められ、状態形容詞は「当事者事態関与型」と認められた。また、共感覚メタファーから、『紅楼夢』における ABB 式は、語内部と語外部および文脈で二次共感覚メタファーに分けられた。第一に、BB の感覚を通して、A の感覚を表す語内の共感覚メタファーであった。第二に、ABB 式を全体として、同時に A と BB の両感覚を有する感覚共有語であった。第三に、実際の文脈で使用する際、ABB 式の本来の感覚は、共感覚メタファーを通して、他の感覚を表すことであった。

(5) 13 例の ABB 式が『紅楼夢』を初出とすると考えられた。また、現代語と対比すると、『紅楼夢』における状態形容詞は“的”と共起するという制約に合致しない例があり、この状況は元明時期における“的”の多用と現代語の“的”共起の制約との中間地帯（グレーゾーン）に位置し、近代中国語から現代中国語への言語の連続性、語彙の変遷との関わりといった観点からの課題も窺えることを指摘した。

以上、『紅楼夢』における形容詞重畳式を通して、『紅楼夢』の言語特徴に新たな視点を提供し、前八十回と後四十回の作者の同一性、版本関係などに傍証としての客観的データを示した。本研究は認知言語学の諸理論を援用することで、重畳の動機づけを解明し、その結果を広く言語学の重ね型研究に貢献することが期待されるとともに、近代中国語の研究に大きな意義をもつことが考えられる。

9.2 今後の研究課題

本研究は以下の三つの方面に触れることができなかったので、これらが今後の研究課題となる。

第一に、空間化の仮説の理論について、認知言語学の観点から、体系的にわかりやすく説明したい。本研究では、空間化で形容詞のみを説明した。動詞と名詞についても、今後継続的に研究を行っていきたい。

第二に、紅楼夢の続作、あるいは『児女英雄伝』を言語資料として、今後は各作品における形容詞重畳式を考察し、言語の連続性について研究したい。

第三に、重畳は、日本語と中国語のほかに、タイ語、韓国語などにも豊富に観察されるものであり、言語類型学の観点から、重畳式の動機付けについて取り組んで行きたいと考える。

引用書目：

庚辰本：
１.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《脂硯齋重評石頭記》庚辰本（1-4） 人民文學出版社
己卯本：
2.（清）曹雪芹著（1981）《脂硯齋重評石頭記》上下 上海古籍出版社
红楼梦稿本：
3.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《乾隆抄本百廿回紅樓夢稿》（1-3） 人民文學出版社
甲戌本：
4.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《脂硯齋重評石頭記》』甲戌本 人民文學出版社
蒙古王府本：
5.（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《蒙古王府本石頭記》（1-7）人民文學出版社
戚序本：
6.（清）曹雪芹著（1988）《戚蓼生序本石頭記》（1-8）文學古籍刊行社
戚宁本：
7.（清）曹雪芹著（2011）（紅樓夢古抄本叢刊）《戚蓼生序本石頭記》（1-5）南圖本 人民文學出版社
舒元炜序本：
8.（清）曹雪芹著（2019）（紅樓夢古抄本叢刊）《舒元煒序本紅樓夢》（1-3）人民文學出版社
甲辰本：
9.（清）曹雪芹著（1989）《甲辰本紅樓夢》（1-4）書目文獻出版社
俄藏本：
10.（清）曹雪芹著（2014）（紅樓夢古抄本叢刊）《俄羅斯聖彼得堡藏 石頭記》（1-6）人民文學出版社
郑振铎藏本：
11.（清）曹雪芹著（1977）《鄭振鐸藏本紅樓夢》沈阳出版社
程甲本：
12.（清）曹雪芹 高鶚 著（1992）《程甲本紅樓夢》（1-6）書目文獻出版社
程乙本：
13.（清）曹雪芹著（紅樓夢叢書）《程乙本新鐫全部繡像紅樓夢》（1-6）廣文書局
現代の版本：
14.（前八十回）曹雪芹著 （后四十回）无名氏续 程伟元 高鹗整理（2008）《红楼梦》人民文学出版社
日本語訳：
15.曹雪芹作 松枝茂夫訳（1972.5-1985.7）『紅楼夢』（全 12 冊）岩波書店
16.曹雪芹 高鶚作 飯塚朗訳（1980）『紅楼夢』集英社版 世界文学全集 11、12、13
17.曹霑作 伊藤漱平訳（1996.9-1997.11）『紅楼夢』（1-12 冊）平凡社 平凡社ライブラリー
18.曹雪芹作 井波陵一訳（2013.9-2014.3）『新訳 紅楼夢』（全 7 冊）岩波書店

参考文献：

日本語：

相原茂 韓秀英（1990）『現代中国語 ABB 式形容詞逆配列用例辞典』くろしお出版.

天沼　寧（1974）『擬音語· 擬態語辞典』東京堂出版.

池上嘉彦（2008）「＜主観的把握＞――認知言語学から見た日本語話者の一側面」昭和女子大学大学院言語教育·コミュニケーション研究(3)，pp.1-6.

池間里代子（2019）「『紅楼夢』の畳語使用について―前 80 回と後 40 回の文体を中心に―」『文体論研究』65，pp.27-40.

井出克子（2001）「中国語五感表現に見られる共感覚に基づく比喩について」『中国語学』（248），pp.213-227.

伊藤さとみ（2001）「『白鞋』と『雪白一双鞋』」『中国語学』248，pp.244-258.

伊藤漱平（2008）「日本における『紅楼夢』の流行―幕末から現代までの書誌的素描」『伊藤漱平著作集　紅楼夢編 下』第三巻　汲古書院.

大河内康憲（1985）「量詞の個体化機能」『中国語學』232，pp.1-13.

大島吉郎（2021）「中国語における『状態』についての試論――『状態』をどう規定するか」『中国言語文化学研究』第 10 号，pp.11-29.

太田辰夫（1988）『中国語史通考』白帝社.

小野秀樹（2004）「名詞における形容詞の属性付与と様態描写」『現代中国語研究』第 6 期，pp.49-62、138.

木村英樹（1996）『中国語はじめの一歩』筑摩書房.

――――（2014）「“指称”の機能―概念、実体および有標化の観点から―」『中国語學』261，pp.64-83.

――――（2017）『中国語はじめの一歩』筑摩書房.

金田一春彦（1978／1985）「擬音語· 擬態語概説」浅野鶴子編　金田一春彦解説『擬音語· 擬態語辞典』角川書店.

興膳 宏（2008）『中国名文選』岩波書店.

呉川（2005）『オノマトペを中心とした中日対照言語研究』白帝社

財団法人新村出記念財団（1998）『広辞苑』第 5 版　岩波書店.

時衛國（2009）『中国語と日本語における程度副詞の対照研究』風間書房.

島田めぐみ　野口裕之（2021）『統計で転ばぬ先の杖』ひつじ書房.

徐一平 谯燕 吴川 施建军（2010）『日本語の擬音語·擬態語に関する研究』學苑出版社.

田梅（2014）「現代語畳語·畳語形容詞の構造について―現代中国語、日本語の畳語·畳語形容詞―」『大学教育』11，pp.76-87.

田守育啓（2002）『オノマトペ　擬声· 擬態語を楽しむ』岩波書店.

中国語学研究会編（1969）『中国語学新辞典』光生館.

張恒悦（2016）『現代中国語の重ね型―認知言語学のアプローチ―』白帝社.

辻　幸夫（2013）『新編　認知言語学キーワード事典』研究社.

東郷吉男（1982）「平安時代における重複式語幹の形容詞について―かな系文学作品の用例を中心に―」『国語学』130，pp.19-34.

戸田浩曉（1978）『文心雕龍』下　新釈漢文大系 65. 明治書院.

西尾寅弥（1972）『形容詞の意味·用法の記述的な研究』秀英出版

日本語学会編（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版.

日本国語大辞典第二版編集委員会（2000.12-2002.1）『日本国語大辞典』小学館.

野田耕司（2017）「結果を表す形容詞状語文と重ね型形容詞―事象の個別具体性の観点から―」熊本学園大学『文学·言語学論集』第 23 巻第 1 ·2 合併号，pp.7-52.

橋本四郎（1957）「ク活用形容詞とシク活用形容詞」『女子大国文』5，pp.1-12.

飛田良文 浅田秀子（2002）『現代擬音擬態語用法辞典』東京堂.

武藤彩加（2015）『日本語の共感覚的比喩』ひつじ書房.

山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館.

山梨正明（1988）『比喩と理解』（認知科学選書 17）東京大学出版会.

————（2012）『認知意味論研究』研究社.
兪稔生（2007）「中国語の描写性を豊かにする文法項目」『現代社会学部紀要』5 巻 1 号. pp.67-71.
劉玲（2015）『漢語オノマトペの受容に関する研究』學苑出版社.
六角恒広（1988）『中国語教育史の研究』東方書店.

中国語：
程俊英 蒋见元 今译 松岡栄志 日译（2015）《诗经》大中華文庫　漢日對照　外文出版社.
蔡义江（2001/2004）《红楼梦诗词曲赋鉴赏》中华书局.
杜春耕（2010）〈『夢稿本』序〉（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《乾隆抄本百廿回紅樓夢稿》 人民文學出版社.
董雪松（2015）〈ABB 式形容词主观化及其量级研究〉《中国海洋大学学报》第 1 期，pp.113-118.
冯其庸（1978）《论庚辰本》上海文艺出版社.
——（1989）〈序〉（清）曹雪芹《甲辰本紅樓夢》书目文献出版社.
——（2010a）〈影印脂硯齋重評石頭記庚辰本序〉（清）曹雪芹著（2010）（紅樓夢古抄本叢刊）《脂硯齋重評石頭記》（庚辰本）人民文學出版社.
冯其庸 李希凡（2010b）《红楼梦大辞典》增订版 文化艺术出版社.
——（2014）《论庚辰本》增补本　商务印书馆.
[明]方以智　著（1990）《通雅》中国书店影印 据清康熙姚文燮浮山此藏轩刻本影印.
葛本仪(2014)《现代汉语词汇学》（第 3 版）商务印书馆.
郭珑（2000）〈《诗经》叠音词新探〉《广西师范大学学报》第 2 期，pp.49-52.
[晋]郭璞　注 [宋]邢昺　疏（2010）《爾雅注疏》上海古籍出版社.
高明凯（1957）《普通语言学》新知识出版社.
——（1963）《語言論》科学出版社.
黄伯荣 廖序东（1991/2011）《现代汉语》（增订五版）上下册 高等教育出版社.
侯冬梅（2015）〈基于语料库的现代汉语 ABB 形容词句法功能及相关问题考察〉 张三夕、戴建业《华中学术》第十二辑 华中师范大学出版社，pp.243-254.
胡适（2016）《红楼梦考证》北京出版社
胡孝斌（2007）〈现代汉语双叠四字格 AABB 式研究〉北京语言大学博士论文.
胡裕树（2011）《现代汉语（重订本）》上海教育出版社.
漢語大詞典編纂處整理（2005）《康熙字典》標點整理本 漢語大詞典出版社.
华玉明（2003）〈双音节动词重叠式 AABB 的状态形容词功能〉《唐都学刊》第 2 期，pp.121-124.
蒋静忠（2018）《现代汉语表主观量副词研究》科学出版社.
蒋绍愚（2005）《近代汉语研究概要》北京大学出版社.
贾彦德（1988）<汉语 XYY 型词的义位>《语文研究》第 2 期，pp.36-41.
陆丙甫（1988）<定语的外延性、内涵性和称谓性及其顺序>《语法研究和探索》4，北京大学出版社，pp.102-116.
——（2003）<“的”的基本功能和派生功能—从描写性到区别性再到指称性>《世界汉语教学》第 1 期，pp.14-29.
陆俭明（1988）<现代汉语中数量词的作用>《语法研究和探索》4，北京大学出版社，pp.172-186.
——（2001）<中国语语法教学中需关注的语义现象>《中国语学》248，pp.1-15.
陆镜光（2009）<重叠·指大·指小---汉语重叠式既能指大又能指小现象试析> 汪国胜 谢晓明（2009）主编《汉语重叠问题》华中师范大学出版社.

刘丹青（1986）<苏州方言重叠式研究>《语言研究》第 1 期，pp.7-28.
[南朝·梁]刘勰 著 王运熙 周锋 撰（1998）《文心雕龙译注》上海古籍出版社.
刘颖 肖天久（2014）<《红楼梦》计量风格学研究>《红楼梦学刊》第四辑，pp.260-281.
刘正埮 高明凯 麦永乾 史有为（1984）《汉语外来词词典》上海辞書出版社.
李凤吟（2006）<双音节性质形容词 ABAB 式的重叠—兼与 AABB 式比较>《集美大学学报（哲学社会科学版）》第 2 期，pp.58-62.
李桂周（1986）<也谈名詞的 AABB 重叠式>《汉语学习》第 4 期，pp.11-13.
李劲荣 陆丙甫（2016）<论形容词重叠式的语法意义> 《语言研究》第 4 期，pp.10-20.
李劲荣（2006）<形容词重叠式的量性特征>《学术交流》第 1 期，pp.142-146.
——（2014）《现代汉语形容词生动形式的语用价值》 中国社会科学出版社.
李泉（2005）<单音形容词原式性研究>北京语言大学博士学位论文.
——（2006）<单音形容词重叠的形式和语法意义>《对外汉语研究》第二期，pp.141-150, 商务印书馆.
李善熙（2003）<汉语“主观量”的表达研究>中国社会科学院博士论文.
李宇明（1996a）<论词语重叠的意义>《世界汉语教学》第 1 期，pp.10-19.
——（1996b）<双音节性质形容词的 ABAB 式重叠>《汉语学习》第 4 期，pp.24-27.
——（2000）《汉语量范畴研究》华中师范大学出版社.
林冠夫（2005）<论己卯庚——《红楼梦版本论》之一>《红楼梦学刊》第 6 辑，pp.128-160.
——（2007）《红楼梦版本论》文化艺术出版社.
林焘（2001）<北京官话溯源>《林焘语言论文集》商务印书馆，pp.173-190.
黎锦熙（1959）<汉语构詞法和詞表研究（下）>《北京师范大学学报》第 6 期，pp.71-93.
——（1924/2007）《新著国语文法》湖南教育出版社.
吕叔湘（1942/2002）《吕叔湘全集第一卷 中国文法要略》辽宁教育出版社.
——（1965/2002）〈形容词使用情况的一个考察〉《吕叔湘全集 第二卷 汉语语法论文集》辽宁教育出版社.
——（1980/1991）《现代汉语八百词》增订版 商务印书馆.
梁扬 谢仁敏（2006）《红楼梦语言艺术研究》人民文学出版社.
罗竹风主编(1986)《漢語大詞典》上海辞书出版社.
[漢]毛亨 傳 [漢]鄭玄 箋 [唐]陸德明 釋文（2017）《宋本毛詩詁訓傳》國家圖書出版社
马建忠（1898/1998）《马氏文通》商务印书馆.
茆诗松 程依明 濮晓龙（2011）《概率论与数理统计教程》高等教育出版社.
潘国英（2015）《汉语动词重叠的历史研究》中国社会科学出版社.
潘晓（2011）〈《红楼梦》形容词重叠问题研究〉华中师范大学修士论文.
朴镇秀（2009）〈现代汉语形容词的量研究〉复旦大学博士论文.
钱乃荣（2008）《现代汉语》重订本 江苏教育出版社.
谯燕（2008）《现代日语叠音词研究》学苑出版社.
任海波（2001）〈现代汉语 AABB 重叠式词构成基础的统计分析〉《中国语文》第 4 期，pp.302-308.
宋丹（2015）〈《红楼梦》日译本研究（1892-2005）〉 南开大学博士学位论文.
邵敬敏（1990）〈ABB 式形容词动态研究〉《世界汉语教学》第 1 期，pp.19-26.
沈家煊（1995）〈“有界”与“无界”〉《中国语文》(5)，pp.367-380.
——（2001）〈语言的“主观性”和“主观化”〉《外语教学与研究》第 4 期，pp.268-275.
——（2015）〈汉语词类的主观性〉《外语教学与研究》第 5 期，pp.643-658.
[清]史夢蘭 原著 高光新 點校(2015)《疊雅》史夢蘭集三 天津古籍出版社.
石锓（2004）〈形容词 ABAB 式重叠的种类、形成时间及其他〉《广播电视大学学报（哲学社会科学版）》第 4 期，pp.85-89.

——（2005）<唐以前的 AABB 式形容词语>《三峡大学学报》第 2 期，pp.57-61.
——（2010）《汉语形容词重叠形式的历史发展》商务印书馆.
石毓智（1996）<试论汉语的句法重叠>《语言研究》第 2 期，pp.1-12.
——（2000）<论“的”的语法功能的同一性>《世界汉语教学》第 1 期，pp.16-27.
——（2001）《肯定与否定的对称与不对称》北京语言文化大学出版社.
商务印书馆辞书研究中心编（2015）《古今汉语字典》商务印书馆.
涂全太（1990）<《红楼梦》后四十回研究资料综述>《河南大学学报》第 2 期，pp.49-59.
唐作藩（2007）《中国语言文字学大辞典》中国大百科全书出版社.
文昌荣（1997）《描摹词辞典》中国青年出版社.
王国栓（2004）<汉语形容词 AA 式重叠与量范畴>《汉语学习》第 4 期，pp.24-27.
王国璋 吴淑春 王干桢 鲁善夫（1996）《现代汉语重叠形容词用法例释》商务印书馆.
王力（1943/1985）《中国现代语法》商务印书馆.
——（1980）《汉语史稿》上 中华书局.
——(1982/2015)《汉语语法纲要》中华书局.
——主编（2000）《王力古漢語字典》中华书局.
王利器（1979）<《红楼梦》是学习官话的教科书>《红楼梦学刊》第 1 辑，pp.163-168.
王启龙(2003)《现代汉语形容词计量研究》北京语言大学出版社.
完权（2012）<超越区别与描写之争:“的”的认知入场作用>《世界汉语教学》第 26 卷 第 2 期，pp.175-187.
——（2018）《说“的”和“的”字结构》学林出版社.
（英）威妥玛著 张伟东译（2002）《语言自迩集——19 世纪中期的北京话》北京大学出版社，p.5.
汪维懋（1999）《汉语重言词词典》军事谊文出版社.
王希傑（1994）<語言風格和民族文化> 程祥徽 黎運漢主编《语言風格論集》澳門寫作學會 南京大学出版社.
吴艳（2014）<关于日语中叠语结构形容词的研究>《景德镇高专学报》第 1 期，pp.73-75.
邢福义著 萧国政编（1993/2001）<形容詞的 AABB 反义叠结>《20 世纪现代汉语语法“八大家”邢福义选集》东北师范大学出版社.
邢晓宇（2015）《认知入景视角下现代汉语名词的修饰语研究：功能与语序漂移》西南大学博士论文.
薛瑞生（1986）《红楼采珠》百花文艺出版社.
徐丽（2014）<日本明治时期汉语教科书研究---以《官话指南》《谈论新篇》《官话急就篇》为中心>北京外国语大学博士论文.
许力生（2006）《文体风格的现代透视》浙江大学出版社.
[東漢]許慎 撰（2012）《說文解字》影印本 浙江古籍出版社.
[漢]許慎 撰 [清]段玉裁 注（1981/1988）《说文解字注》上海古籍出版社.
向熹（1980）<《诗经》里的复音词>《語言學論叢》第六辑 商务印书馆，pp.27-54.
——（1993）《简明汉语史》上 高等教育出版社.
肖潇（2012）<浅析通感隐喻在汉语 ABB 式形容词构成中的作用>《时代文学》（2），pp.131-133.
徐振邦（1998）《连绵词概论》大众文艺出版社.
徐正考 周瑜（2019）<汉语 ABB 式状态形容词程度语义特征的衍生历程与认知分析>《中国语言文学研究》（2）,pp.17-22.
谢自立、刘丹青（1995）<苏州方言变形形容词研究>《中国语言学报》第 5 期，商务印书馆，pp.214-245.

应必诚（1983）《论<石头记>庚辰本》上海古籍出版社.
叶宝奎（2001）《明清官话音系》厦门大学出版社.
葉蜚聲（1994）<话说风格>程祥徽　黎運漢主编《语言风格论集》澳门写作学会　南京大学出版社.
杨柳（2012）<现代汉语 AABB 重叠式状态词研究>扬州大学硕士论文.
[明]楊慎 撰 李調元 校定（1985）《古音複字》 《五色線 古音駢字 古音複字》丛书集成初编 中华书局.
杨振兰（2003）<现代汉语 AA 式叠音词、重叠词对比研究>《齐鲁学刊》第 4 期，pp.65-69.
朱德熙（1956/1999）<现代汉语形容词研究>《朱德熙文集 第二卷 汉语语法论文》商务印书馆.
——（1961/1980）<说“的”>《现代汉语语法研究》，pp.67-103.
——（1982）《语法讲义》商务印书馆.
——（1993）<从方言和历史看状态形容词的名词化>《方言》第 2 期，pp.81-100.
张国宪（2000）<现代汉语形容词的典型特征>《中国语文》第 5 期，pp.447-458.
中国社会科学院语言研究所词典编辑室 编（2016）《现代汉语词典》（第 7 版）商务印书馆.
赵军（2010）《现代汉语程度量及其表达形式研究》华东师范大学博士论文.
赵克勤（1987）《古汉语词汇概要》浙江教育出版社.
祝克懿（2021）<语言风格研究的理论渊源与功能衍化路径>《当代修辞学》第 1 期，pp.59-71.
张美兰（2001）《近代汉语后缀形容词词典》贵州教育出版社.
赵青青 黄居仁(2018)<现代汉语通感隐喻的映射模型与制约机制>《语言教学与研究》（01）,pp.44-55.
赵青青 熊佳娟 黄居仁(2019)<通感，隐喻与认知——通感现象在汉语中的系统性表现与语言学价值>《中国语文》（2）,pp.240-253,256.
赵青青（2021）<通感隐喻视角的现代汉语 ABB 式状态形容词>《世界汉语教学》第 35 卷 第 2 期，pp.206-219.
郑庆山（2002）《红楼梦的版本及其校勘》北京图书馆出版社.
张庆善（2010）<影印《脂砚斋重评石头记》己卯本前言>《红楼梦学刊》第 3 辑，pp.323-328.
周汝昌 晁继周（2019）《新编红楼梦辞典》商务印书馆.
周汝昌（1987）《红楼梦词典》广东人民出版.
张寿康（1985）《构词法和构形法》湖北教育出版社.
章太炎（1984）《章太炎全集》（三）上海人民出版社.
周旭梅(2016)<现代汉语 ABB 式颜色形容词构词研究> 华东师范大学硕士论文.
张耀（2015）<先秦诸子散文中韵文现象的研究>中国海洋大学硕士论文.
英語
Enckvist，N.E.et al（1964）. *Linguitics and Style.* OxfordUniversity Press.
Joseph，M.Williams（1976）*Synaesthetic adjectives: A possible law osemanticchange*. Language. 52(2),pp.461-478.
Langacker, R.W(1987/2004) *Foundations of Cognitive Grammar 1 Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.西方语言学原版影印系列丛书 6 北京大学出版社.
Langacker, R.W(1993) *Reference-point constructions*. Cognitive Linguistics 4-1，pp.1-38.
Langacker, R.W(2004)*Remarks on nominal grounding In Functions of language.* John Benjamins Publishing Company.pp.77-113.
Langacker, R.W(2008)*Cognitive Grammar: A Basic Introduction* .Oxford University Press.
Lyons, J.(1977) *Semantics*.2vols.Cambridges:Cambridge University Press.

Qingqing Zhao（2020）*Embodied Conceptualization or Neural Realization:A Corpus-Driven Study of Mandarin Synaesthetic Adjectives*，Springer.

Shen Yeshayahu（1997）*Cognitive constraints on poetic figures Cognitive Linguistics* 8(1)，pp.33-71．

Sperber,Dan &Deirdre ilson. (1995) *Relevance:Communication and cognition.*2nd edition.OxFord: Blackwell.《关联：交际与认知》，蒋严译，中国社会科学出版社.

付録表

付録表１：『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式

重畳式の意味は、1.《汉语重言词典》と 2.《现代汉语重叠形容词用法例释》を参考にし、基式の意味は、3.《王力古漢語字典》、4.《古今汉语字典》、5.《说文解字》を参考にする。以下に《1》、《2》、《3》、《4》《5》で略称する。

番号	語例	基式		『紅楼夢』における形容詞重畳式			
		品詞	辞典の語義	『紅楼夢』においての意味	頻度	文成分	
						類型	頻度
1	翦翦	動詞	①割斷。②剷除。③鉸（後起義）。④姓氏《3》	形容风轻微而带有寒意。《1》	1	連用修飾語	1
2	醺醺	形	飲酒過量，以致於神志不清《4》	喝醉的样子。《2》	1	補語	1
3	扰扰	形	混亂《4》	紛亂貌《1》	1	連体修飾語	1
4	哀哀	形	悲傷、悲痛。《4》	悲伤不已貌。《2》	1	述語	1
5	暧暧	形	昏暗不明的样子《4》	昏暗不明的样子。《2》	1	連体	1
6	皑皑	形	皑，霜雪之白也。《3》	形容洁白的样子。《2》	1	連用	1
7	斑斑	名	斑点《4》	斑点众多的样子。《2》	2	述語	1
						連用	1
8	笨笨	形	智力差，愚笨《4》	粗笨。《1》	1	主語	1
9	楚楚	名/動	①“牡荆”。 ②古代的刑杖， ③痛苦 ④整齊 ⑤周代諸列國 ⑥指湖南和湖北 ⑦ 姓《4》	形态或体态姿容娇美。《1》	1	述語	1
10	簇簇	動/名/量词	① 聚集。②聚在一起的東西。③蹙，皱缩。④量詞。丛，群。《4》	丛聚的样子。《1》	2	連体	1
						述語	1
11	痴痴	形	①愚蠢。②癫狂。③執著，癡迷不捨。《3》	沉迷爱恋的样子。《2》	3	述語	2
						連用	1
12	重重	形/動	Zhong ①厚重。②重视，崇尚。③加重，增加。④副词。表示程度深。 chong①重複，重叠②	Cong 层层。Zong 程度深《2》	4	zong 連用	3
						cong 述語	1

			單位名詞。層。《3》				
13	肿肿	名/動	① 癰，毒瘡。 ② 肌體浮脹《3》	紅而浮脹。《1》	1	述語	1
14	苍苍	形	草色。《3》	形容茫无边际。《1》	1	目的語	1
15	忡忡	形	忡：憂慮不安貌。《3》	忧虑不安貌。《1》	1	述語	1
16	点点	名/動	点：①小黑點。②漢字的筆畫，、稱作點。③液體小點。④核檢，指派。⑤一觸即離或向下微動的動作。⑥燃火。⑦更點。⑧節拍。《3》	①形容零散；也形容小而多或连续不断。②深沉貌。《1》	4	述語	3
						連体修飾語	1
17	低低	形	在一般水准或标准之下。《4》	形容声音细小轻微。《2》	2	連用	2
18	多多	形	数量大《4》	指数量大，次数频繁。《2》	7	連用	6
						連体	1
19	呆呆	形	发愣，表情死板《4》	形容发呆的样子。《2》	7	述語	1
						連用	6
20	瞪瞪	形	直视。《3》	直视貌。《1》	1	述語	1
21	大大	形	在体积、面积、力量等方面超过一般的所比的对象。《4》	①极言其大，②强调程度范围广深。《1》	5	連体	1
						連用	4
22	淡淡	形容詞	①浅，薄。 ②不热心、兴趣不大。《4》	①形容味道不浓，浓度不高。 ②形容冷淡的，不热情的《1》	6	述語	3
						補語	1
						連体	1
						連用	1
23	眈眈	動	視近而志遠。《5》	形容注视的样子。《2》	3	述語	3
24	叠叠	動	重叠《4》	形容层次多，层层重迭的样子。也形容连续不断的样子。《1》	1	述語	1
25	短短	形	長的反義詞。《3》	时间、空间相对很短。《1》	1	連体	1
26	纷纷	形	众多 混淆，杂乱 《4》	①纷乱；多而杂乱。②忙乱；忙碌。③盛貌④众多貌，多形容络不绝、接二连	8	述語	3
						連体	2
						連用	3

				三的样子。《1》			
27	忿忿	動	憤怒、怨恨《4》	很生氣的樣子。《2》	1	連用	1
28	滚滚	動	液體受熱達到沸點而翻騰《4》	急速滚动貌谓液体受热沸腾，也形容汤水很热。《1》	1	連体	1
29	乖乖	形	顺从，听话。《4》	顺从的，听话的。《2》	2	連用	2
30	高高	形	由下到上距离大的，《4》	形容物体隆起、突出的样子。《1》	2	連体	2
31	耿耿	形	光明、明亮《4》	明亮貌　形容灯烛光。《1》	1	連体	1
32	惚惚	形	模糊不清《4》	恍惚，謂心神不定，神志不清，糊塗。《1》	1	連用	1
33	辉辉	名/動	光輝照耀《4》	明亮貌，光亮貌。形容有光泽、有光彩。《1》	1	述語	1
34	好好	形	优点多令人满意。《4》	①喜悦貌 ②认真，尽力 ③平白。无端 ④顺从 ⑤很好、完好 ⑥程度深《1》	58	述語	7
						連体	8
						連用	34
						独立语	9
35	缓缓	形	缓和，不紧张《4》	犹言徐徐，缓慢貌《2》	4	連用	4
36	惶惶	動	恐懼。《3》	恐惧不安的样子。《2》	1	述語	1
37	昏昏	形	胡涂《4》	形容头脑迷糊，神志不清《2》	2	述語	2
38	黄黄	形	① 五色之一，中央土色。②草木枯黄。③幼兒。④老人。⑤事情失敗或落空。（晚起義）《3》	颜色很黄。《2》	1	連体	1
39	赫赫	形	① 火紅的樣子，紅彤彤。②顯耀、顯赫。《3》	威严、显赫。《1》	1	主語	1
40	忽忽	動/副	①忽略，不經心 ②迅速，突然 ③極小的量度單位	失意貌；心中空虚恍惚。《3》	1	連用	1

			名。《3》				
41	恢恢	形	廣大，寬廣。《3》	形容极其宽广。《2》	1	述語	1
42	红红	形	粉紅。《3》	顏色很紅。《2》	1	連用	1
43	眷眷	動	怀念、依恋《4》	① 依恋向往貌。②形容垂爱；器重。③形容诚挚，一心一意。《1》	1	主語	1
44	静静	形	①平静，安定 ②寂静，没有声响《4》	形容非常安静，没有声响。《2》	4	連用	4
45	急急	形	急躁，着急。《4》	着急的。《2》	2	連用	2
46	紧紧	形	①加强了拉力。 ②與“緩”相對。指收縮。③堅固。《3》	①很紧。 ②非常接近。 ③不放松，牢固《2》	6	連用	6
47	皎皎	形	洁白，明亮。《4》	光明貌、明亮貌。《1》	1	述語	1
48	娟娟	形	秀丽，美好。《4》	明媚貌，美好貌。谓月色美好。《1》	1	述語	1
49	寂寂	形	静，没有声音。《4》	寂静，寂寞。《2》	1	述語	1
50	空空	形	空虚，内无所有。《4》	什么都没有的。《2》	6	連用	1
						連体	5
51	款款	形	缓慢《4》	徐缓。《2》	4	連用	4
52	碌碌	形	平庸 繁忙《4》	①平庸，无能貌。随众附和貌。 ②形容辛苦繁忙。《1》	4	述語	3
						連体	1
53	历历	動/副詞	①經過,經歷。 ②盡,遍。 ③依次列出。 ④選擇，推算。 ⑤歷法，歷算。 ⑥察看。稀疏。 ⑧ 馬廐。《4》	（物体或景象）一个一个清清楚楚的。《3》	3	述語	2
						連用	1
54	鳏鳏	名	①一種大魚。②老而無妻。《3》	忧愁不寐貌。《3》	1	述語	1
55	恋恋	動	愛慕不舍。《3》	想念不忘，不忍分離。《2》	1	連用	1
56	凛凛	形	寒也。《5》	寒冷。《2》	1	述語	1

57	懒懒	形	懒惰，不勤快 疲倦没力气。《4》	不勤快，没精打采。《2》	9	述語	7
						連用	1
						補語	1
58	辣辣	形	像姜蒜辣椒等的有刺激性的味道。《4》	形容辣或者感觉辛辣，酸辣。《2》	1	述語	1
59	泠泠	形	清涼《4》	清凉貌，冷清貌。《1》	1	述語	1
60	寥寥	形	空旷，空虚 《4》	空虚貌。《1》	1	連用	1
61	聊聊	形	廖之誤稀少 《5》	注略微稀少或为寥寥之误 无聊，无所慰藉。《1》	1	述語	1
62	凉凉	形	冷，微寒。 《4》	温度低的，清凉的。《2》	1	連体	1
63	络络	動/名	① 像網狀的東西，脈絡。②環繞，纏繞。③罩住；牲口罩子，即籠頭。《3》连续不断《4》	形容连续不断。《1》	1	連体	1
64	粼粼	形	水在石间明净、清澈的样子《4》	波浪起伏貌。《1》	1	連体	1
65	茫茫	形	广阔无边的样子。《4》	形容没有边际，不清晰。 遥远，形容距离。《2》	4	連用	1
						述語	1
						目的語	1
						連体	1
66	渺渺	形	水辽阔无边的样子 遥远。《4》	悠远貌；水远貌。《1》	1	連体	1
67	慢慢	形	缓慢，迟缓 《4》	速度低，迟缓。跟快相对。《2》	39	連用	39
68	忙忙	形	着急，慌张 急促，急迫 急迫加紧地做。《4》	急迫。《2》	41	連用	41
69	满满	形	①充滿。②驕傲。③成。④期滿（後起義）《3》	很满。《2》	7	連体	3
						連用	4
70	默默	形	寂静，不出声《4》	形容不说话，不出声。《2》	16	連用	11
						述語	5
71	绵绵	形	①蠶絲結成的片或團 ②相連續。 ① 細而密。《3》	连续不断貌。谓情谊深长，情思不断。《2》	1	述語	1
72	朦朦	形	迷糊迷惘《4》	迷惘貌。《1》	1	連用	1

73	脈脈		无	无声无息，好像深含感情的样子。《2》	3	述語	3
74	嫩嫩	形	指某些食物烹调时间短、容易咀嚼。《4》	指某些食物烹调时间短、容易咀嚼。《1》	1	補語	1
75	飘飘	名/動	飘，回风也。《5》 飘荡，随风飘动。《4》	随风飘荡的样子。《2》	3	連体	1
						連用	1
						述語	1
76	平平	形	平常，普通。《4》	一般，普通《2》	2	述語	1
						補語	1
77	轻轻	形	①用力不猛。 ② 轻松，轻快。《4》	①轻微。谓动作用力不大，不猛。 谓声音低弱。 ②轻易。《2》	12	連用	12
78	切切	形	急迫。 深切，恳切。《4》	形容恳挚殷切。《1》	1	述語	1
79	怯怯	形	胆小害怕，《4》	形容胆怯的样子。《2》	1	述語	1
80	亲亲	形	爱，亲爱的《4》	亲热，亲切。《1》	1	連体	1
81	齐齐	形	整齐《4》	形容整齐。《2》	1	連用	1
82	纤纤	形	细微，微细《4》	细微，微细。《1》	1	連体1	1
83	惓惓	形	危急，危重《4》	恳切。《2》	1	連体	1
84	冉冉	形	柔弱下垂的样子。《4》	形容枝叶、毛等柔软下垂《2》	1	述語	1
85	热热	形	温度高，与冷相对。《4》	形容很热。《2》	1	連用	1
86	速速	形	快，迅速《4》	急速、赶快。《1》	1	連用	1
87	讪讪	形	羞惭，难为情。《4》	形容不好意思，难为情。《2》	4	連用	3
						述語	1
88	森森	形	树木众多的样子。 阴沉幽暗《4》	草木繁密貌 清凉貌《1》	2	述語	2
89	飕飕	形	清凉《4》	天气冷或寒气逼人。《1》	1	述語	1
90	丝丝	名	丝，蚕所吐也。《5》	形容纤细之物《1》	1	連体	1

91	松松	形	① 形容头发乱。 ② 松散，不紧密 ③ 使松，放松。 ④ 放开，解开。 ⑤ 不严格；不紧张，缓和。《4》	松软隆起貌。《1》	2	連用	2
92	酸酸	形	像醋的气味或味道《4》	形容酸的味道《2》	1	連体	1
93	团团	動/量	围绕 成团成堆的东西。《4》	形容旋转或围绕的样子。《2》	5	述語	1
						連用	4
94	烁烁	形	发光《4》	光芒闪烁貌；鲜艳貌。《1》	1	述語	1
95	堂堂	名	① 古代宫室，前為堂，後為室。②同祖的親屬稱堂，如堂兄弟（後起義）③山之寬平處。④高。《3》	形容容貌仪表庄严大方。 形容有志气或有气魄，形容阵容或力量大。《2》	2	連体	2
96	滔滔	形	① 大水弥漫。 ② 广大的样子。 ③ 激荡，振荡。 ④ 傲慢。 ⑤ 涌聚。《4》	①形容大水滚滚。 ②比喻连续不断。《2》	1	連用	1
97	迢迢	形	遥远《4》	远貌。《1》	1	連体	1
98	婷婷	形	美好的样子《4》	形容人或花木美好。《2》	2	連用	2
99	微微	形	细小，轻微《4》	轻微。《3》	7	述語	1
						連用	4
						連体	2
100	汪汪	形/動	深广的样子 液体聚集在一起。《4》	眼泪盈眶貌。《3》	2	述語	1
						連用	1
101	巍巍	形	高大《4》	高大的样子。《2》	1	述語	1
102	小小	形	在体积、面积、数量、强度、年纪等方面不及一般的或不及比较的对象。与大相对。《4》	在体积、面积、数量、强度、年纪等方面不及一般的或不及比较的对象。与大相对。《2》	18	連体	18
103	细细	形	泛指事物微小 琐屑，不重要 柔嫩《4》	颗粒小的。 声音细小的。 仔细。 周到完备。《2》	53	連用	50
						連体	1
						述語	2

104	悬悬	動	牵挂;挂念《4》	不安貌，心神不定貌。《2》	1	述語	1
105	新新	形	没有用过的《4》	谓没用过的，不陈旧。《1》	1	連体	1
106	潇潇	形	水清深的样子《4》	①风雨暴疾貌②小雨貌。③凄清冷寂貌《1》	1	述語	1
107	暄暄	形	温暖 方言，松软《4》	景色美好貌。《1》	1	述語	1
108	萧萧	形	清净冷落《4》	草木摇动或摇落貌。也形容草木摇落声。《1》	1	述語	1
109	栩栩	形	形容生动活泼的样子《4》	形容生动活泼的样子。《2》	1	述語	1
110	些些	形	少量《4》	少许。《3》	1	連体	1
111	炎炎	形	天气极热《4》	灼热，炽盛。《2》	1	述語	1
112	远远	形	空间距离大《4》	形容距离长，或者差别大。《2》	20	連体	3
						連用	17
113	隐隐	動/形	隐，蔽也《5》 深奥，精微《4》	隐约不分明。《2》	7	連用	4
						連体	2
						述語	1
114	遥遥	形	距离远 时间久。《4》	形容距离远 形容时间长久。《2》	2	連用	2
115	摇摇	動	摇，动也。《5》	动摇不稳的样子。《2》	2	連用	1
						述語	1
116	酽酽	形	液汁浓，味道厚。《4》	浓厚浓重。《1》	1	述語	1
117	洋洋	形	众多盛大。《4》	自得貌，喜乐貌，优游自在貌。《2》	2	連体	1
						述語	1
118	悠悠	形	飘荡，荡悠 遥远，久远《4》	①动荡貌，飘忽不定貌②水流连绵不断貌。③思念貌；悠思貌。《2》	3	連体	1
						述語	2
119	盈盈	動	充满《4》	①形容情绪，气氛等充分流露，或形容多，充满。《2》	1	連体	1
120	夭夭	形	草木茂盛《4》	①美盛貌。《1》	1	述語	1

121	阴阴	形	幽暗 层云密布。《4》	①幽暗或阴湿的样子《2》	2	連体	1
						述語	1
122	依依	動/形	依，倚也。《5》 顺从《4》	①依恋不舍的样子，亦用来形容思恋怀慕的心情。《2》	5	連用	4
						目的語	1
123	痒痒	形	皮肤或粘膜受刺激，引起抓挠的感觉。《4》	①形容皮肤或粘膜受刺激，需要抓挠的感觉，《2》	4	述語	3
						補語	1
124	恹恹	形	精神疲乏，也形容病態。《4》	精神不振貌，微弱貌。《1》	4	連体	1
						連用	2
						述語	1
125	怔怔	動/名	发呆、发愣。《4》	呆愣的样子。《1》	10	述語	2
						補語	1
						連用	7
126	整整	動/形	使整齐。 完整;全部在内。《4》	达到一个整数《2》	1	連体	1
127	谆谆	形	教诲不倦的样子。《4》	形容恳切教导《2》	3	連体	2
						連用	1
128	早早	形	在先的。《4》	比常时为早；很早。《1》	2	連用	2
129	直直	形	不弯曲，呈直线。《4》	不弯曲直挺的样子。《1》	1	述語	1
130	足足	形	多，充足。《4》	很充裕，很充分。《2》	1	連用	1
131	闷闷	形	心情不舒畅，心烦。《4》	不舒畅，心烦《2》	19	述語	12
						連用	6
						補語	1
132	剪剪	動名	通翦。①剪刀。②用剪刀等把东西断开。③灭除。④指交叉的动作或状态。⑤像剪刀的东西。《4》	同翦翦。	1	述語	1

付録表 2：『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式

番号	語例	頻度	文成分	
			類型	頻度
1	乱烘烘	2	連用修飾語	2
2	荡悠悠	4	独立語	1
			述語	1
			連体修飾語	1
			連用	1
3	意悬悬	1	連体	1
4	跳蹿蹿	1	連用	1
5	昏惨惨	2	連用	2
6	气昂昂	2	連用	2
7	威赫赫	2	連用	2
8	白茫茫	1	連体	1
9	闹吵吵	1	連体	1
10	凉森森	1	連体	1
11	颤巍巍	2	連用	1
			連体	1
12	光灿灿	1	連用	1
13	沉甸甸	2	主語	1
			連用	1
14	甜丝丝	2	連体	1
			独立語	1
15	空落落	2	独立語	1
			述語	1
16	硬帮帮	1	連用	1
17	汗津津	1	補語	1
18	静悄悄	4	述語	3
			目的語	1
19	白漫漫	1	連用	1
20	黑魆魆	1	連用	1
21	白汪汪	1	連体	1
22	花簇簇	1	連用	1
23	情切切	1	連用	1
24	意绵绵	1	連用	1
25	黑鬓鬓	1	連体	1
26	油汪汪	1	連体	1
27	明晃晃	1	連体	1

28	好端端	6	独立語	2
			述語	1
			連用	3
29	热刺刺	2	連用	2
30	乌压压	5	連体	2
			連用	3
31	笑吟吟	1	連用	1
32	直瞪瞪	2	連用	2
33	冷清清	4	連用	2
			連体	1
			独立語	1
34	赤条条	3	連用	3
35	白花花	2	連体	2
36	醉醺醺	1	連用	1
37	忙碌碌	1	述語	1
38	锦重重	1	連用	1
39	金晃晃	1	連用	1
40	直挺挺	3	連用	3
41	黄澄澄	2	主語	1
			連用	1
42	油腻腻	3	述語	1
			目的語	1
			独立語	1
43	牙痒痒	1	述語	1
44	咸浸浸	1	独立語	1
45	笑欤欤	2	連用	2
46	寒浸浸	1	述語	1
47	气恨恨	1	連用	1
48	气狠狠	1	連用	1
49	散松松	1	補語	1
50	恶恨恨	1	連用	1
51	松怠怠	1	目的語	1
52	闹穰穰	1	連用	1
53	碧荧荧	1	連体	1
54	明亮亮	1	独立語	1
55	战兢兢	1	連用	1
56	直蹶蹶	1	連用	1
57	乱纷纷	2	述語	2

58	热腾腾	1	連体	1
59	冷飕飕	1	独立語	1
60	眼睁睁	2	連用	1
			独立語	1
61	笑嘻嘻	17	連用	17
62	喘吁吁	5	連用	5
63	羞惭惭	1	独立語	1
64	怔呵呵	1	連用	1

付録表 3　『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式

番号	語例	頻度	文成分	
			類型	頻度
1	说说笑笑	9	連用修飾語	1
			述語	8
2	疯疯癫癫	3	述語	3
3	悠悠荡荡	1	述語	1
4	迷迷惑惑	1	述語	1
5	扭扭捏捏	2	連用	1
			述語	1
6	烈烈轰轰	1	目的語	1
7	斯斯文文	2	連用	2
8	怯怯羞羞	2	述語	2
9	恭恭敬敬	2	連用	2
10	鬼鬼祟祟	9	連用	2
			述語	6
			連体	1
11	老老实实	2	連用	2
12	殷殷勤勤	1	連用	1
13	婆婆妈妈	3	述語	3
14	慌慌张张	7	述語	2
			連用	5
15	浩浩荡荡	2	述語	2
16	明明白白	3	述語	2
			連用	1
17	溶溶荡荡	1	述語	1
18	业业兢兢	1	述語	1
19	唠唠叨叨	1	連用	1
20	飘飘荡荡	1	述語	1
21	趔趔趄趄	1	述語	1
22	泼泼撒撒	1	述語	1
23	规规矩矩	2	連用	2
24	悲悲戚戚	1	連用	1
25	来来往往	1	述語	1
26	干干净净	2	連用	2
27	舒舒服服	1	連用	1
28	琐琐碎碎	1	述語	1
29	拉拉扯扯	6	述語	4

			主語	1
			連用	1
30	含含糊糊	1	連用	1
31	恍恍惚惚	2	述語	2
32	恍恍忽忽	1	連用	1
33	消消停停	1	述語	1
34	顺顺溜溜	1	連用	1
35	兴兴头头	6	連用	5
			述語	1
36	奇奇怪怪	1	連体	1
37	隐隐约约	1	連用	1
38	忙忙碌碌	2	連用	1
			目的語	1
39	冒冒失失	1	連用	1
40	伶伶俐俐	1	補語	1
41	蝎蝎螫螫	3	連体	1
			述語	1
			連用	1
42	清清静静	1	連用	1
43	摇摇落落	1	補語	1
44	谨谨慎慎	2	補語	2
45	辛辛苦苦	3	述語	2
			連用	1
46	颤颤巍巍	1	連用	1
47	公公道道	1	連用	1
48	疯疯颠颠	2	述語	2
49	高高兴兴	1	連用	1
50	隐隐绰绰	1	連用	1
51	飘飘摇摇	2	述語	1
			連用	1
52	偷偷摸摸	2	連用	2
53	清清白白	1	連体	1
54	悠悠扬扬	1	連用	1
55	粗粗笨笨	1	主語	1
56	溶溶脉脉	1	連用	1
57	和和气气	1	連用	1
58	端端正正	1	連用	1
59	赫赫扬扬	2	述語	2

60	齐齐整整	3	連用	1
			補語	2
61	严严密密	1	連用	1
62	心心念念	1	連用	1
63	昏昏默默	2	述語	2
64	昏昏沉沉	1	連用	1
65	藏藏躲躲	1	述語	1
66	大大小小	1	主語	1
67	哭哭啼啼	2	補語	1
			述語	1
68	重重叠叠	1	述語	1
69	哭哭泣泣	1	連用	1
70	絮絮叨叨	1	連用	1
71	空空落落	1	補語	1
72	痴痴呆呆	1	述語	1
73	滴滴点点	1	連用	1
74	袅袅悠悠	1	連用	1
75	疯疯傻傻	1	述語	1
76	小小巧巧	1	述語	1
77	老老诚诚	1	目的語	1
78	停停妥妥	1	補語	1
79	兢兢业业	2	述語	1
			連用	1
80	喜喜欢欢	2	述語	1
			連用	1
81	袅袅婷婷	1	述語	1
82	周周全全	1	補語	1
83	腻腻烦烦	1	述語	1
84	长长远远	2	連用	2
85	葳葳蕤蕤	1	目的語	1
86	颤颤兢兢	1	連用	1
87	花花簇簇	1	連体	1
88	清清净净	1	連用	1
89	丰丰富富	2	述語	1
			連用	1
90	渺渺冥冥	1	述語	1
91	妖妖趫趫	1	述語	1

付録表 4　『紅楼夢』前八十回と後四十回における AA 式形容詞重畳式の比較

	前八十回特有な語例		共用例			後四十回特有な語例	
	語例	使用頻度	語例	前八十回の使用頻度	後四十回の使用頻度	語例	使用頻度
1	翦翦	1	哀哀	1	1	薄薄	2
2	醺醺	1	痴痴	3	2	朗朗	1
3	扰扰	1	重重	4	5	炯炯	1
4	暧暧	1	多多	7	2	簌簌	2
5	皑皑	1	呆呆	7	25	活活	4
6	斑斑	2	纷纷	8	3	浓浓	1
7	笨笨	1	忿忿	1	1	怏怏	2
8	楚楚	1	耿耿	1	2	永永	1
9	簇簇	2	好好	58	35	咻咻	1
10	肿肿	1	缓缓	4	4	凭凭	1
11	苍苍	1	昏昏	2	2	炳炳	1
12	忡忡	1	静静	4	8	乏乏	1
13	点点	4	急急	2	6	长长	1
14	低低	2	紧紧	6	3	亭亭	1
15	瞪瞪	1	空空	6	8	匆匆	1
16	大大	5	历历	3	1	奄奄	3
17	淡淡	6	懒懒	9	1	烘烘	1
18	眈眈	3	茫茫	4	2	虚虚	1
19	叠叠	1	渺渺	1	1	严严	3
20	短短	1	慢慢	39	36	冷冷	2
21	滚滚	1	忙忙	41	9	影影	1
22	乖乖	2	默默	16	4	牢牢	3
23	高高	2	绵绵	1	1	深深	1
24	惚惚	1	脉脉	3	1		
25	辉辉	1	轻轻	12	40		
26	惶惶	1	怯怯	1	1		
27	黄黄	1	冉冉	1	2		
28	足足	1	讪讪	4	7		
29	忽忽	1	松松	2	1		
30	恢恢	1	团团	5	1		
31	红红	1	滔滔	1	1		
32	眷眷	1	迢迢	1	1		
33	皎皎	1	微微	7	35		
34	娟娟	1	汪汪	2	1		
35	寂寂	1	小小	18	1		
36	款款	4	细细	53	34		
37	碌碌	4	萧萧	1	1		
38	鳏鳏	1	远远	20	16		
39	恋恋	1	隐隐	7	2		
40	凛凛	1	洋洋	2	2		
41	辣辣	1	悠悠	3	1		
42	泠泠	1	依依	5	1		

43	寥寥	1	恹恹	4	2		
44	聊聊	1	怔怔	10	9		
45	凉凉	1	早早	2	10		
46	络络	1	直直	1	3		
47	粼粼	1	闷闷	19	8		
48	满满	7	赫赫	1	1		
49	朦朦	1					
50	嫩嫩	1					
51	飘飘	3					
52	平平	2					
53	切切	1					
54	亲亲	1					
55	齐齐	1					
56	纤纤	1					
57	惓惓	1					
58	热热	1					
59	速速	1					
60	森森	2					
61	飕飕	1					
62	丝丝	1					
63	酸酸	1					
64	烁烁	1					
65	堂堂	2					
66	婷婷	2					
67	巍巍	1					
68	悬悬	1					
69	新新	1					
70	潇潇	1					
71	暄暄	1					
72	栩栩	1					
73	些些	1					
74	炎炎	1					
75	遥遥	2					
76	摇摇	2					
77	酽酽	1					
78	盈盈	1					
79	夭夭	1					
80	阴阴	2					
81	痒痒	4					
82	整整	1					
83	谆谆	3					
84	剪剪	1					

付録表 5　『紅楼夢』前八十回と後四十回における ABB 式形容詞重畳式の比較

	前八十回特有な語例		共用例			後四十回特有な語例	
	語例	使用頻度	語例	前八十回の使用頻度	後四十回の使用頻度	語例	使用頻度
1	乱烘烘	2	笑嘻嘻	17	17	气哼哼	1
2	荡悠悠	4	空落落	2	2	黑漆漆	1
3	意悬悬	1	静悄悄	4	2	血淋淋	1
4	跳蹿蹿	1	喘吁吁	5	7	扑簌簌	3
5	昏惨惨	2	好端端	6	5	笑盈盈	1
6	气昂昂	2	颤巍巍	2	2	直滚滚	1
7	威赫赫	2	冷清清	4	1	乱糟糟	2
8	怔呵呵	1	白花花	2	1	娇怯怯	1
9	闹吵吵	1	气狠狠	1	1	哭啼啼	1
10	凉森森	1	直挺挺	3	2	气嘘嘘	1
11	羞惭惭	1	直瞪瞪	2	1	呆磕磕	1
12	光灿灿	1	明晃晃	1	1	毛烘烘	1
13	沉甸甸	2	白茫茫	1	1	喘嘘嘘	1
14	甜丝丝	2	战兢兢	1	1	红扑扑	1
15	眼睁睁	2				气忿忿	1
16	硬帮帮	1				假惺惺	2
17	汗津津	1				黑油油	1
18	冷飕飕	1				乱腾腾	1
19	白漫漫	1					
20	黑魆魆	1					
21	白汪汪	1					
22	花簇簇	1					
23	情切切	1					
24	意绵绵	1					
25	黑鬓鬓	1					
26	油汪汪	1					
27	热腾腾	1					
28	乱纷纷	2					
29	热刺刺	2					
30	乌压压	5					
31	笑吟吟	1					
32	直蹶蹶	1					
33	闹穰穰	1					
34	赤条条	3					
35	明亮亮	1					
36	醉醺醺	1					
37	忙碌碌	1					
38	锦重重	1					
39	金晃晃	1					
40	松怠怠	1					
41	黄澄澄	2					
42	油腻腻	3					
43	牙痒痒	1					

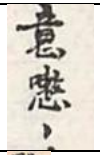
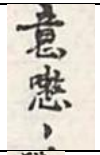
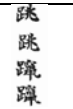
44	咸浸浸	1					
45	笑蚣蚣	2					
46	寒浸浸	1					
47	气恨恨	1					
48	碧荧荧	1					
49	散松松	1					
50	恶恨恨	1					

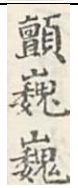
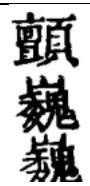
付録表 6　『紅楼夢』前八十回と後四十回における AABB 式形容詞重畳式の比較

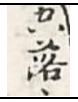
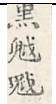
	前八十回特有な語例		共用例			後四十回特有な語例	
	語例	使用頻度	語例	前八十回の使用頻度	後四十回の使用頻度	語例	使用頻度
1	妖妖趫趫	1	慌慌张张	7	6	悠悠忽忽	1
2	疯疯癫癫	3	拉拉扯扯	6	3	模模糊糊	1
3	悠悠荡荡	1	颤颤巍巍	1	2	溜溜湫湫	1
4	迷迷惑惑	1	昏昏沉沉	1	3	鬼鬼头头	1
5	扭扭捏捏	2	蝎蝎螫螫	3	1	躲躲藏藏	1
6	斯斯文文	2	冒冒失失	1	3	来来去去	1
7	怯怯羞羞	2	和和气气	1	3	闹闹穰穰	1
8	老老实实	2	含含糊糊	1	1	战战兢兢	1
9	殷殷勤勤	1	唠唠叨叨	1	2	弯弯曲曲	2
10	婆婆妈妈	3	干干净净	2	2	扯扯拽拽	1
11	浩浩荡荡	2	鬼鬼祟祟	9	5	断断连连	1
12	明明白白	3	疯疯傻傻	1	2	稳稳重重	1
13	溶溶荡荡	1	恍恍惚惚	2	5	指指点点	1
14	业业兢兢	1	忙忙碌碌	2	1	妥妥当当	1
15	飘飘荡荡	1	说说笑笑	9	4	迷迷痴痴	1
16	趔趔趄趄	1	规规矩矩	2	1	恍恍荡荡	1
17	泼泼撒撒	1	烈烈轰轰	1	1	疯疯癫癫	3
18	悲悲戚戚	1	恍恍忽忽	1	1	安安顿顿	1
19	来来往往	1	恭恭敬敬	2	2	安安逸逸	2
20	琐琐碎碎	1	兢兢业业	2	1	妖妖乔乔	1
21	消消停停	1	舒舒服服	1	1	娇娇痴痴	1
22	顺顺溜溜	1	辛辛苦苦	3	2	飘飘艳艳	1
23	兴兴头头	6	飘飘摇摇	2	1	影影绰绰	3
24	奇奇怪怪	1	谨谨慎慎	2	1	急急忙忙	1
25	隐隐约约	1				疑疑惑惑	1
26	伶伶俐俐	1				啼啼哭哭	1
27	清清静静	1				多多少少	1
28	摇摇落落	1				轰轰烈烈	1
29	公公道道	1				舒舒坦坦	1
30	疯疯颠颠	2				热热闹闹	1
31	高高兴兴	1				飘飘拽拽	1
32	隐隐绰绰	1				体体面面	2
33	偷偷摸摸	2				乱乱吵吵	1
34	清清白白	1				冷冷清清	1
35	悠悠扬扬	1				哭哭喊喊	2
36	粗粗笨笨	1				将将就就	1
37	溶溶脉脉	1				庸庸碌碌	1
38	端端正正	1				闷闷昏昏	1
39	赫赫扬扬	2				摇摇摆摆	1
40	齐齐整整	3				狠狠毒毒	1
41	严严密密	1				和和顺顺	1

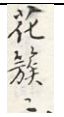
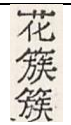
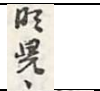
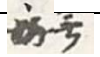
42	心心念念	1				顽顽皮皮	1
43	昏昏默默	2				孤孤凄凄	1
44	藏藏躲躲	1				渺渺茫茫	1
45	大大小小	1				委委屈屈	1
46	哭哭啼啼	2					
47	重重迭迭	1					
48	哭哭泣泣	1					
49	絮絮叨叨	1					
50	空空落落	1					
51	痴痴呆呆	1					
52	滴滴点点	1					
53	袅袅悠悠	1					
54	小小巧巧	1					
55	老老诚诚	1					
56	停停妥妥	1					
57	喜喜欢欢	2					
58	袅袅婷婷	1					
59	周周全全	1					
60	腻腻烦烦	1					
61	长长远远	2					
62	葳葳蕤蕤	1					
63	颤颤兢兢	1					
64	花花簇簇	1					
65	清清净净	1					
66	丰丰富富	2					
67	渺渺冥冥	1					

付録表 7　『紅楼夢』各版本における ABB 式形容詞重畳式

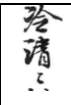
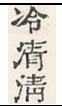
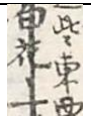
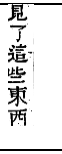
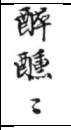
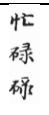
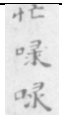
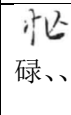
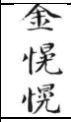
番号	ABB 式語例	庚辰本	己卯本	夢稿本	甲戌本	蒙古王府本	戚序本	戚寧本	舒元煒序本	夢覺主人本	列藏本	程甲本	程乙本
1	乱烘烘	乱烘、、	乱烘：	乱烘：	亂烘烘	亂烘烘	亂哄哄	亂哄哄	亂烘烘	亂哄、	亂哄哄	亂烘烘	亂烘烘
		亂烘、、	乱烘、、	乱烘、	亂烘烘	亂烘烘	亂烘烘	亂烘烘	亂烘、	亂烘烘	亂烘、、	亂烘烘	亂烘烘
2	荡悠悠	蕩悠、、	蕩悠：	蕩悠、	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	缺	蕩悠悠	蕩悠悠
		蕩悠、、	蕩悠:	蕩悠、	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	荡悠、、	蕩悠悠	缺	蕩悠悠	蕩悠悠
		蕩悠、、	蕩悠:	蕩悠、	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	蕩悠悠	荡悠、、	蕩悠悠	缺	蕩悠悠	蕩悠悠
		蕩悠、、	蕩悠、	蕩悠、	缺	荡悠悠	荡悠悠	荡悠悠	荡悠悠	荡悠悠	荡悠、、	荡悠悠	荡悠悠
3	意悬悬	意懸、、			意懸懸	意懸懸	意懸懸	意懸懸	意懸、、	意懸懸	缺	意懸懸	意懸懸
4	跳蹿蹿	跳躥、、				躥			跳躥〇	無	缺	無	無
5	昏慘慘	昏慘、、	昏慘、、	昏慘、	昏慘慘	昏慘慘	昏慘慘	昏慘慘	昏慘：	昏慘慘	缺	昏慘慘	昏慘慘
		同上	同	同上	同上	同上	昏慘慘	昏慘慘	昏慘：	同上	缺	昏慘慘	昏慘慘

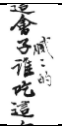
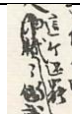
			上：										
6	气昂昂	氣昂昂	氣昂、、	氣昂、	氣昂昂	氣昂昂	氣昂昂	氣昂昂	氣昂、、	氣昂昂	缺	氣昂昂	氣昂昂
		、、	無重複標誌	無重複標誌	氣昂昂	無重複	重复簪纓	重复簪纓	頭帶簪纓	無重複	缺	無重複	無重複
7	威赫赫	威赫：	威赫：	威赫、	威赫赫	威赫赫	威赫赫	威赫赫	威赫、、	威赫赫	缺	威赫赫	威赫赫
		、、	無重複標誌	無重複標誌	威赫赫	無重複	重复高登	重复高登	爵祿高登	無重複	缺	無重複	無重複
8	白茫茫	白茫：	白茫：	白茫：	白茫茫	白茫茫	白茫茫	白茫茫	白茫、、	白茫茫	缺	白茫茫	白茫茫
9	闹吵吵	鬧吵：	闹吵吵	闹炒：	鬧烘烘	鬧鬧炒炒	鬧鬧炒炒	鬧鬧炒炒	鬧、、炒、、	鬧吵吵	缺	鬧吵吵	鬧吵吵
10	凉森森	凉森、、	凉森、、	凉森、、	凉森森	凉森森	凉森森	凉森森	凉森森	無	凉森、、	無	無
11	顫巍巍	顫巍、、		顫巍、、	顫巍巍				同戚寧本				
		頡嵬、、		顫巍、、	缺	顫巍巍	顫巍巍		同戚宁本				同程甲本
12	光灿灿	光燦、、	光燦：	光燦：	光燦燦	光烱烱	光閃閃	光閃閃	光爍爍	光燦燦	缺	光燦燦	光燦燦
13	沉甸甸	沉甸、、	沉甸、、	沉甸、、	沉甸甸	沉甸甸	沉甸甸	沉甸甸	沉甸甸	沉甸甸	沉甸、、	沉甸甸	沉甸甸

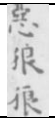
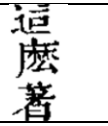
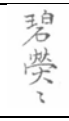
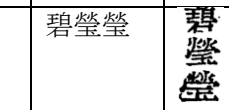
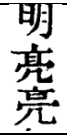
		沉甸、、	沉甸、、	沉甸、、	缺	沉甸甸	沉甸甸	沉甸甸	沉甸、、	沉甸甸	沉甸甸	沉甸甸	沉甸甸
14	甜丝丝	甜系、、	甜糸、、			甜甜的	甜甜的	甜甜的	同甲戌本	無	甜	無	無
		甜絲、、	缺	甜丝、、	缺		同王府本	同王府本	缺		甜絲、、	甜絲絲	
15	空落落	空落、、	空落、、	空落、	缺	空落落	空落落	空落落	空落落	空落落	空落、、	空落落	空落落
		空落、、	缺		缺	空落落	空落落	空落落	缺	空落、、	空落、、	空落落	空落落
16	硬帮帮	硬帮、、	硬帮、、	硬帮、	缺	硬帮帮		硬帮帮	同戚序本	同戚序本			
17	汗津津	汗津、、	汗津、、	汗津、	缺	汗津津	汗津津	汗津津	汗津津	汗津津	汗津、、	汗津津	汗津津
18	静悄悄	净悄、、	净悄、、	净悄、、	缺	净悄悄	靜悄悄	靜悄悄	静悄悄	静悄悄	静悄悄	靜悄悄	靜悄悄
		静悄、、	静悄、、	静悄、、	缺	静悄ヒ	靜悄悄	静悄悄	静悄悄	静悄悄	静悄悄	靜悄悄	靜悄悄
		静悄、、	静悄、、	静悄、、	缺	静悄悄	静悄悄	静悄悄	静悄悄	静悄悄	静悄、、	靜悄悄	靜悄悄
		静悄、、	静悄、、	净悄、、	缺	静悄悄	静悄悄	静悄悄	静悄、、	静悄悄	静悄、、	靜悄悄	靜悄悄
19	白漫漫	白漫、、	白漫、、	白漫、	白漫漫	白漫漫	白漫漫	白漫漫	白茫、	白漫漫	白漫、、	白漫漫	白漫漫
20	黑魆魆	黑魆、、			缺				同戚宁本				

21	白汪汪			白汪、		白汪汪	白汪汪	白汪汪	白汪、	白汪汪	白汪、、	白汪汪	白汪汪
22	花簇簇	花簇、、		花簇、	花簇簇			花簇簇	同己卯本			花簇簇	
23	情切切	无	情切、、	情切、、	缺		情切切	情切切	情土刀土刀	情土刀土刀	情土刀土刀	情切切	情切切
24	意绵绵	无	意绵、、	意綿、、	缺		同王府本	同王府本	同王府本	同王府本	同王府本	意綿綿	意綿綿
25	黑鬓鬓	黑真、、	缺		缺	黑鬓鬓	黑鬓鬓	黑鬓鬓	黑鬓、、	黑鴉鴉	黑鬓鬓	黑鴉鴉	黑鴉鴉
26	油汪汪	油汪、、	缺	油汪、、	無	油汪汪	油汪汪	油汪汪	油汪汪	油汪汪	油汪、、	油汪汪	油汪汪
27	明晃晃	明晃、、	缺		明晃晃	明晃晃	明晃晃	明晃晃	明晃晃	明光光	明晃、、	明晃晃	明晃晃
28	好端端	好端的	缺	 端、	好端的	好端端	好端的	好端的	好端端	無端的	好端端		無端的
		好端、、	缺	好端、	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端、、	好端端	好端端
		好端、、	好端、、	好端、、	缺	好端端	好端端	好端端	好端端	好端	好端端	好端端	好端端
		好端、、	好端、、	好端、、	缺	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端
		好端、、	好端、、	好端、、	缺	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端	好端端
		好端、、	缺	好端、、	缺	好好的	好好的	好好的	缺	好端端	好端、、	好端端	好端端
29	热刺刺	同夢稿	缺		熱刺刺	熱刺刺	熱刺刺	熱刺刺	熱刺刺	熱刺刺			
		熱刺、、	熱		缺	热刺刺	熱刺刺	熱刺刺	缺	熱刺、、	熱刺、、	熱刺刺	熱刺刺

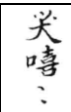
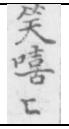
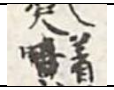
			刺、、										
30		烏壓、、	缺		缺		烏壓壓	烏壓壓	烏壓壓	烏壓壓	烏壓壓		黑壓壓
		烏壓、、	烏壓、、	烏壓、、	缺	烏壓壓	烏壓壓		烏壓、、	烏壓壓	烏壓壓	烏壓壓	烏壓壓
	乌压压	烏壓、、	缺	烏壓、、	缺	烏壓、、	烏壓壓	烏壓壓	缺	烏壓壓		烏壓壓	烏壓壓
		烏壓、、	烏壓壓	黑壓、、	缺	烏壓壓	烏壓壓		缺	烏壓壓		黑壓壓	黑壓壓
		烏鴉	烏鴉		缺	烏壓壓	烏壓壓	烏壓壓	缺	烏壓		黑壓壓	黑壓壓
31	笑吟吟	笑吟、、	缺	笑吟、、	缺	笑吟吟			缺	笑吟吟	咲吟、、	笑吟吟	
32	直瞪瞪	直瞪、、	缺	直瞪、、	缺	直瞪ヒ	直瞪瞪	直瞪瞪	直瞪瞪		直瞪瞪		
		直瞪瞪	缺	直瞪瞪	缺		无	无	缺	无	无	同上	同上
33	冷清清	冷清、、	缺	冷清、、	缺	冷清清	冷清清	冷清清	冷清清	冷清清	冷清清		
		冷清、、	缺	冷清、、	缺	冷清清	冷清清	冷清清	缺	冷清清			
		冷清、、	缺	冷清、、	缺	冷清、、	冷清清	冷清清	缺	冷清清			

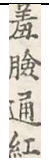
		冷清、、	缺	冷清、、	缺	冷清ヒ	冷清清	冷清清	缺	冷清清			
34	赤条条	赤條、、	缺	赤條、、	缺	赤條條	赤條條	赤條條	赤條、、	赤條條	赤條、、	赤條條	赤條條
		赤條、、	缺	赤條、、	缺	赤條條	赤條條	赤條條	赤條、、	赤條條	赤條、、	赤條條	赤條條
		赤條、、	缺	赤條、、	缺	赤條條	赤條條	赤條條	缺	赤條條	赤條、、	赤條條	赤條條
35	白花花	白花、、	缺	白花、	缺	白花花	白花花	白花花	白花、、	白花花	白花、、	白花花	白花花
		白花、、	缺		白花花	白花花	白花花	白花花	白花花		白花花		
36	醉醺醺	酔醺醺	缺			醉醺	醉醺醺	醉醺醺	醉醺醺	醉醺醺		醉醺醺	醉醺醺
37	忙碌碌	忙碌碌	缺	忙碌、、			忙碌碌	忙碌碌	忙碌碌		 碌、、	忙碌碌	忙碌碌
38	锦重重	錦重重	缺		錦重ヒ	錦重重	錦重重	錦重重	錦重重	錦重重	錦重、、	錦重重	錦重重
39	金晃晃	金晃、、	金晃、、		缺	金晃晃	金晃晃	金晃晃		金恍、、		金晃晃	金晃晃
40	直挺挺	寫 法 同己卯本		直挺、、	缺				同舒本	同舒本	同舒本	同舒本	同舒本
		直挺、、	缺	直挺、、	缺	直挺挺	直挺挺		缺	直挺挺	直	直挺挺	
		直挺、、	直	直挺、、	缺	直挺挺	直挺挺	直挺挺	缺	直挺挺	直挺、、	直挺挺	直挺挺

			挺、、										
41	黄澄澄	黄澄、、	黄澄、、	黄澄、、	缺		黄燈燈	黄燈燈	黄澄澄	黄澄澄	黄澄、、	黄澄澄	黄澄澄
		黄澄、、	缺	黄澄、、	缺	黄澄澄	黄澄澄	黄澄澄	缺	黄澄澄	黄澄、、	黄澄澄	黄澄澄
42	油膩膩	油膩、、	缺	油膩、、	缺				缺			油膩膩	
		油膩、、	缺		缺	油膩	同戚寧本	油膩膩	缺		油膩	同甲辰本	同甲辰本
		油膩、、	油膩、、		缺		油膩膩	油膩膩	缺	油膩膩		油膩膩	油膩膩
43	牙痒痒	牙根儿癢癢	缺		缺	牙癢	牙癢	牙癢	牙疼	牙癢	牙癢	牙癢癢	牙癢癢
44	咸浸浸	鹹浸、、	缺	鹹浸、、	缺	鹹浸、、	鹹浸浸	鹹浸浸	缺	鹹浸浸		鹹浸浸	鹹浸浸
45	笑蚫蚫2	笑蚫、、	缺		缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	咲欣欣	咲嘻、、	笑欣欣	笑欣欣
		笑蚫、、	缺		缺	笑孜孜	笑孜孜	笑孜孜	缺	咲嘻嘻	咲嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
46	寒浸浸	寒浸、、	缺	寒浸、、	缺	寒浸ヒ	寒浸浸	寒浸浸	缺	寒浸浸	寒浸、、	寒浸浸	寒浸浸

47	气恨恨	恨、、的	缺		缺	氣的眼紅面青	氣恨恨	氣恨恨	缺	氣 的 眼紅面青	气恨、、	氣 得 眼紅面青	氣的眼紅面青
48	气狠狠	氣狠、、	缺	氣狠、、	缺	氣狠ヒ	氣狠狠	氣狠狠	缺	氣狠狠	氣狠、、	氣狠狠	氣狠狠
49	散松松	散鬆、、	缺	散鬆、、	缺	散鬆、、	散鬆鬆	散鬆鬆	缺	散鬆鬆	散鬆的	散鬆鬆	散鬆鬆
50	恶恨恨	惡恨、、	惡恨、、	惡狠、、	缺		惡狠狠	惡狠狠	缺	惡狠狠	惡恨恨	惡狠狠	惡狠狠
51	松怠怠	鬆將怠怠劃去咕唧	鬆怠、、		缺	这么着	鬆怠怠	鬆怠怠	缺	這麼着			這麼着
52	闹穰穰	同己卯本		鬧穰、、	缺		同戚寧本		缺		鬧嚷、、	鬧嚷嚷	鬧嚷嚷
53	碧荧荧	碧熒、、		碧荧	缺		碧熒熒	碧熒熒	缺		碧瑩、、	碧瑩瑩	
54	明亮亮	明亮、、	明亮、、		缺	明 亮	明亮亮	明亮亮	缺		明亮、、		明亮亮
55	战兢兢	戰兢兢	缺		缺	戰兢兢	无	无	缺	无	无	戰兢兢	戰兢兢
56	直蹶蹶	直蹶蹶	缺	直蹶蹶	缺		無	無	缺	無	無	直蹶蹶	直蹶蹶

57	乱纷纷	乱紛、、	亂紛紛	乱紛、、	缺	亂粉粉	亂紛紛	亂紛紛	缺	乱紛、、	亂紛紛	亂紛紛	亂紛紛
		乱紛、、	乱紛紛	乱紛、、	缺	亂粉粉	亂紛紛	亂紛紛	缺	乱紛紛	同上	亂紛紛	亂紛紛
58	热腾腾	熱騰、、	热腾腾	热騰、、	缺	熱騰ヒ	熱騰騰	熱騰騰	缺	熱騰騰	熱騰、、	熱騰騰	熱騰騰
59	冷飕飕	冷颼、、	冷颼、、	冷颼、、	缺	冷颼、、	冷飕飕	冷飕飕	缺	冷飕、、	冷飕、、	冷飕飕	冷飕飕
60	眼睁睁	眼睁、、	眼睁、、	眼睁、	眼睜睜	眼睁睁	眼睁睁	眼睁睁	眼睁、、	眼睁睁	缺	眼睁睁	眼睁睁
		眼睁、、	缺	眼睁、、	眼睁睜	眼睁睁	眼睁睁	眼睁睁	眼睁睜	眼睁睁	眼睜、、	同 程 乙 本	眼睁睁
61	笑嘻嘻	笑嘻、、	咲嘻、、	咲嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		咲嘻、、	笑嘻讓坐	笑嘻讓坐	缺	笑讓	同甲辰本	同甲辰本	咲讓坐	笑讓坐	咲讓坐	笑讓坐	笑迎讓坐
		笑嘻、、	咲嘻、、	咲嘻	缺	笑嘻嘻	同王府	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	咲嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻嘻	笑嘻、、	咲嘻、、	缺	笑嘻ヒ	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	笑嘻、、	咲嘻、、	缺	笑嘻ヒ	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	咲嘻、、	咲嘻、、	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻

		咲嘻、、	咲 嘻、、	咲嘻、、	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻		笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	笑 嘻、、	笑嘻、、	缺	咲嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	 、、		缺		笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	無	咲嘻、、	無	無
		笑嘻、、	咲 嘻、、	咲嘻、、	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	缺	咲嘻、、	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	缺	咲嘻、、	缺	笑嘻嘻	笑嬉嬉	笑嬉嬉	缺	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	缺	笑嘻、	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻、、	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	缺		缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑着	笑嘻、、	笑着	笑着
		笑嘻、、	笑　嘻 嘻	咲嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嬉嬉	笑嬉嬉	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻、、	笑　嘻 嘻	咲嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嬉嬉	笑嬉嬉	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻、、	笑嘻嘻	笑嘻嘻
		笑嘻嘻	缺	咲嘻、	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	缺	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻	笑嘻嘻
62	喘吁吁	喘吁、、	喘 吁、、	喘吁、、	缺	喘吁、	喘吁吁	喘吁吁	喘吁、	喘吁吁	喘吁、、	喘吁吁	喘吁吁
		喘吁、、	喘 吁、、	喘吁、、	缺	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘 呼 呼 吁吁	喘吁吁	喘吁、、	喘吁吁	喘吁吁
		喘吁、、	缺	喘吁、、	缺	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘 喘 吁 吁	喘吁吁	喘吁吁
		喘吁、、	喘 吁、、	喘吁、、	缺	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁	喘吁吁

		喘吁ヒ		搖頭喘氣	缺	喘氣的	喘氣的	喘氣的	搖頭喘氣	搖頭喘氣	抬頭喘氣	搖頭喘氣	
63	羞慚慚	羞慚、、	羞慚、、		缺	羞慚慚	羞慚慚	羞慚慚	羞慚慚		羞漸、、	羞臉通紅	羞臉通紅
64	怔呵呵	怔呵、、		怔、、的	缺	怔怔	怔怔	怔怔	怔克克	怔怔	怔怔	怔怔	怔怔

付録表 8　『紅楼夢』前八十回における AA 式と三日本語訳の対応

	語例	原文	訳文	語数	注
1	翦翦	1 翦翦舞随腰。 （第 50 回:p.670）	1. ひらひら舞いて腰にしたごう（第 50 回:p.342）（伊藤訳 下同）	1	韻文 固有
			2. 翦翦として舞いて腰に随う（第 50 回:p.80）（井波訳 下同）		
			3. 翦翦として舞いて腰に随う（第 50 回:p.285）（松枝訳　下同）		
2	皑皑	2 枝柯怕动摇。皑皑轻趁步 （第 50 回:p.670）	１. 白皚皚足を運くりかろがろと(第 50 回:p.342)	1	韻文 漢語
			2. 皚皚として軽く歩を趁い(第 50 回:p.80) 真っ白な姿で　ふうわりと歩みを追い		
			3. 皚皚たる軽く歩を趁い(第 50 回:p.285)		
3	斑斑	3 任他点点与斑斑。 （第 34 回:p.456）	1. ままよそこかしこ点々と斑ら痕(第 34 回:p.134)	2	韻文 漢語
			2. 他の点点たると斑斑たるとに任す(第 34 回:p.41)		
			3. 任他點點と斑斑と(第 34 回:p.107)		
		4 汝南泪血，斑斑洒向西风 （第 78 回:p.1111）	1.斑斑と濯ぎて西風に向かい(第 34 回:p.381)		韻文 漢語
			2.斑斑として濯ぎて西風に向かい(第 34 回:p.484)		
			3.斑斑と濯いで西風に向かい(第 34 回:p.305)		
4	楚楚	5 纤腰之楚楚兮 （第 5 回:p.72）	1. 柳腰なよなよとして(第 5 回:p.156)	1	韻文 固有
			2.繊腰の楚楚として(第 5 回:p.83)		
			3.繊腰の楚楚たるは(第 5 回:p.133)		
5	苍苍	6 天何如是之苍苍兮（第 78 回:p.1112）	1.天いかなればしかく蒼蒼たるや(第 78 回:p.382)	1	韻文 漢語
			2.天は何ぞ是の如く蒼蒼たる(第 78 回:p.407)		
			3.天何ぞ是の如く蒼蒼た(第 78 回:p.306)		
6	忡忡	7 何心意之忡忡 （第 78 回:p.1114）	1.なんぞや心意の忡忡として、寤寐の栩栩たるがごときは。(第 78 回:p.384)	1	韻文 漢語
			2.何ぞ心意の忡忡たる(第 78 回:p.411)		

			3.何ぞ心意の忡忡として（第 78 回:p.308）		
7	点点	8 泪光点点（第 3 回:p.49）	1.涙の光りて点々と（第 3 回:p.112）	4	韻文漢語
			2.涙は点々ときらめき、ため息はひそやかにあだっぽく（第 3 回:p.57）		
			3.涙の光点々と、嬌めく喘ぎ微もけく（第 3 回:p.95）		
		9 任他点点与斑斑。（第 34 回:p.456）	1.ままよそこかしこ点々と斑ら痕（第 34 回:p.134）		韻文漢語
			2. 他の点点たると斑斑たるとに任す（第 34 回:p.41）		
			3. 任他點點と斑斑と（第 34 回:p.107）		
		10 燕泥点点污棋枰。（第 79 回:p.1120）	1.碁盤汚す燕の泥点々と（第 79 回:p.394）		韻文漢語
			2. 燕泥点点として棋秤を汚す（第 79 回:p.424）		
			3. 燕泥点点として棋秤を汚せり（第 79 回:p.316）		
8	多多	11 多多给你母亲些银子（第 19 回:p.260）	1.どっさりあんたの母親に銀子をつかませておやりになれば（第 19 回:p.289）	7	非韻文固有
			2. あんたの母さんにたっぷり銀子をはずめば、（第 19 回:p.59）		
			3. おまえの母さんにたんとお金をやるからおっしゃってくださるにちがいないし、（第 19 回:p.240）		
		12 这些东西，你多多的替我带了来。（第 27 回:p.369）	1.そんな品ばかり、どっさり仕入れてきていただきたいのですわ。（第 27 回：p.253）		非韻文固有
			2.そういった品をたくさん持って帰ってくださったら、（第 27 回:p.213)		
			3.そんなのをうんとたくさんもってきてくださいませんこと？（第 27 回:p.209）		
		13 与你多多的带两船来（第 67 回:p.929）	1.あなたにどっさり船二艘分なりと持ってこさせましょう。（第 67 回:p.287）		非韻文固有
			2.船で二艘分ほどたっぷり持って帰らせ（第 67 回:p.126）		
			3.それこそお船に二、三杯		

			がとこも持ってきてあげますよ。（第 67 回:p.233）		
9	呆呆	14 晴雯见他呆呆的（第 57 回:p.780）	1.晴雯は宝玉が茫然とした態で、頭じゅうに汗をかき。（第 57 回:p.268）	7	非韻文漢語
			2.晴雯は彼が呆然とし、（第 57 回：p.241）		
			3.晴雯は宝玉がぽかんとして（第 57 回：p.218）		
		15 磕了个头，呆呆而去（第 73 回:p.1012）	1.一つ叩頭して、茫然とした様子で立ち去りました。（第 73 回：p.111）		非韻文漢語
			2.「もうしません」と言って叩頭すると、ポカンとしたまま立ち去ります。（第 73 回：p.254）		
			3.「は、はい、もうけっして」といって叩頭すると、きょとんとしたまま帰って行った。（第 73 回：p.80）		
		16 宝玉见他这样,便怅然如有所失，呆呆的站了半天。（第 79 回:p.1122）	1. 宝玉は彼女のその出かたをみて、あまりにひどいとまいってしまい、茫然としてしばし立ち尽くしていましたが（第 79 回：p.400）		非韻文漢語
			2.宝玉は彼女のこうした様子を目にすると、何かを失くしてしまったかのようにガックリし、しばし呆然と立ち尽くしていましたが、（第 79 回:p.428）		
			3.宝玉は彼女のそうした様子を見て、悲しくなり、何ものかを失ったかのように、そのまま長いことぼんやり立ちつくしていたが、（第 79 回：p.321）		
		17 贾芸便呆呆的坐到晌午（第 24 回:p.329）	1.賈芸はそこでぼんやりお昼までかけていましたが（第 24 回:p.145）		非 韻 文 固有
			2.賈芸はお昼までぼんやり座っていましたが、（第 24 回:p.158）		
			3.賈芸はぼんやりとそこに正午まで坐りこんでいた。（第 24 回:p.122）		
10	眈眈（耽耽）	18 手足眈眈小动唇舌（第 33 回:p.439）	1.手足眈眈すこしく唇舌を動かすこと（第 33 回:p.86）	3	非韻文漢語
			2.手足眈眈小しく唇舌を動		

			かし(第 33 回:p.16)		
			3.手足眈眈小しく唇舌を動かし(第 33 回:p.66)		
		19 他们尚虎视眈眈（第 45 回:p.606）	1.それこそ虎視眈々として （第 45 回:p.177）		非韻文 漢語
			2.虎視眈眈として （第 45 回:p.45）		
			3.それさえ憎んで虎視眈眈として （第 45 回:p.146）		
		20 那边各各皆虎视耽耽（第 71 回:p.984）	1. みなそちらでそれぞれ虎視眈眈とにらみを利かせています(第 71 回:p.37)		非韻文 漢語
			2.賈政の所の体面のある人々は、みなあちらで虎視眈々としています(第 71 回:p.214)		
			3. あちら側の連中はいずれも虎視眈々(第 71 回:p.31)		
11	纷纷	21 纷纷说甚亲疏密（第 22 回:p.298）	1.くだくだし、親いの疎いの口にして（第 22 回：p.69）	8	韻文 固有
			2.紛紛甚の親疏密を説く （第 22 回:p.113）		
			3.わずらわし何ぞ血縁の疎密をいうやp 55		
		22 一路纷纷议论不一。（第 64 回:p.885）	1. 論議は紛々として一ならず。（第 64 回:p.173）		非韻文 漢語
			2. 一路紛々として議論は定まりません。（第 64 回:p.64）		
			3. といって非難するものもあるというふうで、さまざまの取り沙汰で持ちきっていい。（第 64 回:p.136）		
12	忿忿	23 忿忿的躺著去了。（第 22 回:p.296）	1.ぷりぷりして横になってしまいました。（第 22 回：p.61）	1	非韻文 固有
			2.プンプンして横になってしまいます。（第 22 回：p.109）		
			3.ぷりぷりしながら寝てしまった。（第 22 回：p.49）		
13	惚惚	24便惚惚的睡去（第5回：p.71）	1.まもなくグウグウ寝こんでしまったのですが(第5回:p.155)	1	非韻文 固有
			2.朦朧として眠りに落ちますが(第5回:p.81)		

			3.目につぶったかとすぐにぐうぐう寝入ったのであるが、(第5回:p.132)		
14	辉辉	25珠翠之辉辉兮（第5回:p.72）	1. 飾り珠きららきららと（第5回:p.156）	1	韻文固有
			2.珠翠の輝輝として（第5回:p.83）		
			3.珠翠の輝々たる（第5回:p.133）		
15	好好	26好好的衣服熏的烟燎火气的（第8回:p.122）	1.ちゃんとした着物にお香を焚きしめるような人の気が知れませんね（第8回:p.156）	58	非韻文固有
			2.せっかくの衣裳を煙でくすぶらせてしまうんですもの(第8回:p.157)		
			3着物を煙でいぶしてわざわざきな臭くするなんて(第8回:p.238)		
		27你还不好好的呢，这几日生气，仔细他捶你。（第47回:p.632）	1.さあ、おまえ、いつまでぼやぼやしている気なの。お父上はここのところ、ご機嫌がよくないから、用心しないと、いまに打郷の目にあいますよ。（第47回：p.245）		非韻文固有
			2.ちゃんとするのよ！ここ数日ほどご機嫌斜めだから、打たれないように気をつけなさい。（第47回：p.29）		
			3.いつまでぼやぼやしているんだよ。お父さまはこのところ気が立っていらっしゃるから、用心しないとひっぱたかれるよ。（第47回：p.203）		
		28前儿那两篓还摆在议事厅上，好好的原封没动（第61回:p.841）	1.せんだってあの二篭はまだ議事庁に置いたままで、ちゃんと封までもとどおりになっておりますのに、（第61回:p.46）		非韻文固有
			2.おとといのあの二つの籠はまだ議事庁に置かれたままで、きちんと元通り封をしたまま触っていないのですから(第61回:p.327)		

			3.このあいだの二籠はまだ議事庁に、そっくり元の封のまま手をつけずに並べてありますよ。(第61回:p.37)		
16	缓缓	29凤姐缓缓走入会芳园中登仙阁灵前（第14回:p.184）	1.熙鳳はゆっくりと歩を運んで会芳園にはいり（第14回：p.100）	4	非韻文 固有
			2.熙鳳はゆっくりと会芳園の登仙閣の霊前までやってきますが(第14回：p.240)		
			3.熙鳳は静かに歩いて会芳園に入り、(第14回:p.81)		
		30见一对红衣太监骑马缓缓的走来（第17、18回:p.236）	1. と見るまに、ふたり一組の紅衣をつけた太監が騎馬でゆっくりとやってきて(第17.18回:p.235)		非韻文 固有
			2. 紅い衣を身に着けた一組の太監が馬に乗ってゆっくりと姿を現し、(第17.18回:p.28)		
			3. たちまち紅衣の太監がふたり、馬を並べてしずしずとやってきて、(第17.18回:ｐ.104)		
17	昏昏	31每日家情思睡昏昏（第26回：p.355）	1.日ごとのもの思いに　うとうとと(第26回:p.210)	2	韻文 固有
			2.毎日家、情思に睡昏昏(第26回:p.191)		
			3.日ごとのものを思えばとろとろと眠くて(第26回:p.175)		
		32为甚么`每日家情思睡昏昏’（第26回:p.355）	1.「どうして「日ごとのもの思いにうとうとと」なさいますのさ？」(第26回:p.210)		韻文 固有
			2.どうして、「毎日家、情思に睡昏昏」なんです？(第26回:p.192)		
			3.どうして「日ごとのものを思えばとろとろと眠く」なるんです。(第26回:p.175)		
18	赫赫	33 圣虞之功德仁孝，赫赫格天（第 63 回:p.877）	1.赫々として天にも届きたまわんばかり、(第 63 回:p.153)	1	韻文 漢語
			2.聖虞〔舜のこと〕の功徳や仁孝は赫々として天に格り、(第 63 回:p.51)		
			3.赫々として天に格り(第 63 回:p.121)		

19	忽忽	34 不觉就忽忽的睡去（第56回:p.774）	1.それも一時、「グウグウ」と寝入ってしまいました。（第56回:p.250）	2	非韻文固有
			2.黙り込んだままあれこれ思いめぐらせます。（第56回:p.232）		
			3.ついととろとろと寝入った（第56回:p.204）		
20	恢恢	35 天网恢恢，疏而不漏（第69回:p.958）	1.天網恢恢、疎にして漏らさず（第69回：p.376）	1	韻文漢語
			2.天網恢々、疏にして而も漏らさず（第69回:p.171）		
			3.天網恢々、疏にして而も漏らさず（第69回:p.313）		
21	紧紧	36 拉住贾母，王夫人的手，紧紧的不忍释放，（第17、18回:p.249）	1.後室と奥方の王氏の手をとって、しっかとにぎりしめられたまま、しかねたご様子で、（第17、18回：p.264）	6	非韻文固有
			2.おばあさまと王夫人の手を引き寄せると、ギュッと握りしめたまま離すに忍びず、（第17、18回：p.44）		
			3.ご隠居さまと王夫人の手をしっかとお握りになって、いつまでも離すに忍びかねておいでになる。（第17、18回：p.218）		
		37 宝玉见他妩媚温柔，心中十分留恋，便紧紧的搭着他的手（第28回：p.386）	1.宝玉は玉菡のなよなよとした女にも見まほしい態度にぞっこんまいってしまい、ぎゅっと彼の手をにぎりしめて、（第28回:p.302）		非韻文固有
			2.宝玉は彼がなよやかでおっとりしているのを見て、内心すっかり魅せられてしまい、そこで自分の手をぴったりと彼の手に重ね合わせて言いました(第28回:p.242)		
			3 宝玉はそのやさしさ艶やかさが心から慕わしく、しっかりと彼の手を握りしめ（第28回:p.253）		
		38 腰里紧紧束着一条蝴蝶结子长穗五色宫绦（第49回:p.661）	1. 腰に蝶結びと長い総飾りとをつけた宮中製の五色の組紐をきっちりしめ（第49回:p.323）		非韻文固有
			2.腰には瑚蝶結びを下げ飾		

			りにしている、両端が長い房になった宮中製の組紐をキュッと締め、（第 49 回:p.68）		
			3.腰には瑚蝶結びを下げ飾りにしている、両端が長い房になった宮中製の組紐をキュッと締め、（第 49 回:p.267）		
		39 便坐在炕沿上，却紧紧的将宝玉搂入怀中（第 77 回:p.1086）	1 坑のへりに腰をおろしたかと思うと、やにわにぎゅっと宝玉を抱きしめました。（第 77 回:p.319）		非韻文固有
			2 そう言うと、坑の縁に座って、宝玉をひしと抱きしめます。（第 77 回: p .364）		
			3 坑のへりに腰をおろすと、ぎゅっと宝玉を抱きしめた。（第 77 回:p.253）		
22	空空	40因有个空空道人访道求仙（第1回:p. 4）	1.またま空空道人なる者が道の師を求めて、（第1回:p.24）	6	非韻文漢語
			2.空空道人なる者が神仙の道を求めようとして、（第1回:p.4）		
			3.ここに空空道人というものがあって、（第1回:p.17）		
		41空空道人乃从头一看（第1回:p. 4）	1.空空道人が初めのあたりを一読しましたところ（第1回：p.24）		非韻文漢語
			2.そこで空空道人が最初から読んでみますと（第1回:p.4）		
			3.そこで空空道人、はじめから読んでみると（第1回：p.18）		
		42空空道人遂向石头说道（第1回:p.4）	1.これではと空空道人、そこで岩に向かって、(第1回:p.25)		非韻文漢語
			2.そこで空空道人は石に向かって言いました。（第1回:p.5）		
			3.そこで空空道人がその石に向かって（第1回：p.18）		
		43空空道人听如此说，思忖半晌（第1回：p.6）	1.と、こういうはなしですので、空空道人、しばし思案のすえ、（第1回:p.28）		非韻文漢語
			2.そのように言われて、空空道人はしばらく考え込み		

			、（第1回:p.7）		
			3.こういわれて空空道人は、しばらく考えたのち、（第1回：p.21）		
		从此空空道人因空见色（第1回:p.6）	1. 一方、道人は空から色を見（擬声擬態語に対応しない）（第1回：p.28）		
			2.これより空空道人は空によって色を見、（第1回：p.7）		
			3.して道人みずからは、ついに空によりて色を見、（第1回：p.22）		
23	款款	44独凤姐款款站了起来（第13回:p.176）	1.なかで熙鳳だけは悠々として立ちあがるのでした。（第13回:p.86）	4	非韻文漢語
			2.中でひとり熙鳳だけはゆっくりと立ち上がります。（第13回:p.232）		
			3.ただひとり熙鳳だけはやおら立ちあがった。（第13回:p.68)		
24	碌碌	今风尘碌碌，一事无成（1-1）	伊藤は第一段落を訳しない	4	
			いま浮世であくせく苦労を重ねながら、何ひとつ満足に成し遂げられずにいる折		
		45非碌碌你我尘寰中之人也（第15回:p.193）	1.碌碌として俗世につながるるおたがいごときとちがいます。（第15回:p.123）		非韻文漢語
			2.俗世であくせくするわたしたちとは違います。（第15回:p.251）		
			3.碌碌たるおたがいのような塵俗の人ではありませぬ。（第15回:p.100）		
25	凜凜	46朔风凛凛，侵肌裂骨（第12回:p.162）	1. 朔風は凜々として肌を刺し骨をも引き裂かんばかり（第12回:p.51）	1	非韻文漢語
			2.北風はヒューヒューとうなって肌を刺し骨を凍らせ、まる一晩ほとんど凍死寸前の有様です。（第12回:p.215）		
			3.北風はの厳しさといったら、それこそ肌を刺し骨をつんざかんばかりである。（第12回:p.39）		

26	懒懒	47意思懒懒的歪在床上（第26回:p.354）	1.わけもなくものうくて、寝台に寝そべったまま、うとうとしかかるふうでした（第26回:p.206）	9	非韻文固有
			2.けだるそうにベッドに横たわり（第26回:p.190）		
			3.なんとなくけだるいままに、寝台に横になってうとうとしていた。（第26回:p.173）		
27	辣辣	48既没人吃生姜，怎么这么辣辣的（第30回:p.410）	1.生姜を食べているひとがいないとなると、はてな、どうしてこうもぴりぴりするのかしら（第30回:p.367）	1	非韻文固有
			2. 誰も生姜を食べていないというなら、どうしてこんなにぴりぴりするのかしら（第30回:p.27）		
			3. どなたも生姜を食べていらっしゃらないのに、どうしてでしょ、こんなにヒリヒリするのは？（第30回:p.308）		
28	茫茫	49地何如是之茫茫兮（第78回:p.1112）	1. 地いかなればしかく茫茫たるや（第78回:p.382）	4	韻文漢語
			2. 地は何ぞ是の如く茫茫たる（第78回:p.407）		
			3. 地何ぞ是の如く茫茫たる（第78回:p.306）		
29	渺渺	50蒙茫茫大士，渺渺真人携入红尘（第1回:p.4）	1. 茫茫大士と渺渺真人の手引きをえて浮世のただなかに連れてゆかれ（第1回:p.382）	1	非韻文漢語
			2.茫茫大士と渺渺真人の導きで俗世に入り（第1回:p.407）		
			3.茫茫大士と渺渺真人の手によって紅塵の世界に連れこまれ（第1回:p.18）		
30	慢慢	51我们慢慢的进城再谈，未为不可。（第2回:p.33）	1.ぶらぶら城内へもどろう。その上でだって、はなしならいくらでもできるのだから（第2回:p.81）	39	非韻文固有
			2.ボチボチ城内に戻って改めて語り合うことにしても差し支えあるまい（第2回:p.38）		
			3.そろそろ城内に帰って、改めて話のつづきを伺うこ		

			とにしようかね（第2回:p.69）		
		52再慢慢的着人去收拾（第4回:p.64）	1.そのうえでぼつぼつ人をやって片づけさせるとしたら（第4回:p.141）		非韻文固有
			2.ゆるゆる人をやって片づけさせる方が穏当ですよ（第4回:p.74）		
			3.その上でゆるゆる人をやって片づけさせる方が楽じゃないかね（第4回：p.121）		
		53那凤姐只管慢慢的吃茶，（第6回：p.100）	1.熙鳳の方はそれにはかまわず、ゆっくりと茶をすすり（第6回:p.225）		非韻文固有
			2.熙鳳の方はただおもむろにお茶を飲むだけで（第6回:p.128）		
			3ところが熙鳳の方では、ただ静かにお茶をすすり、（第6回：p.102）		
		54慢慢的问他（第7回:p.110）	1.さてそれからゆるゆると（第7回：p.255）		非韻文固有
			2.おもむろに尋ねてゆきます（第7回:p.144）		
			3.静かにその年齢や勉強のことなどをたずね（第7回:p.217）		
		55慢慢的放下酒，垂了头（第8回：p.124）	1.そろっと杯を置くと、うなだれてしまいました。（第8回：p.290）		非韻文固有
			2.ゆるゆるとお酒を置いてうなだれます。（第8回:p.160）		
			3.しぶしぶ酒杯をおくと、そのままうなだれてしまった。（第8回：p.245）		
		56凤姐儿慢慢的走着（第11回：p.156）	1. そういって、ゆっくりゆっくり歩きながら（第11回:p.35）		非韻文固有
			2. 熙鳳はゆっくり歩きながら尋ねました。（第11回:p.207）		
			3. やはりのろのろした歩調で歩きながら（第11回:p.26）		
		57就是那件东西不得好木头，暂且慢慢的办罢。(第11回:p.159)	1.ただあれ（棺）だけは恰好の材が手にはいらないので、差し当たってゆっくり構えているようなものです		非韻文固有

			けれどね（第11回：p.42）		
			2.ただ例の物によい木が得られなくて、とりあえずボチボチやってるわ（第11回:p.210）		
			3.ただあれにする材のいいのが手にはいらないものですから、ここのところゆっくり構えているんですけど。（第11回:p.32）		
		58宝玉答应了，慢慢的退出去(第23回:p.311)	1.宝玉は「はい」と返事して、そろりそろり退出しますと（第23回：p.99）		非韻文固有
			2.宝玉は「ハイ」と返事して、そろそろと退出し（第23回:p.132）		
			3.宝玉は「はい」と答え、しずかにお前を退出すると（第23回:p.81）		
		59便把脚慢慢停着些走（第26回:p.353）	1.とたんに芸はゆっくりと歩を運びはじめ（第26回：p.204）		非韻文固有
			2.のろのろと立ち止まっては歩きつつ（第26回:p.189）		
			3.急に歩調をゆるめ、（第26回:p.172）		
		60且入席，有话慢慢的说。（第26回:p.358）	1.まあ、席にお着きになってください、おはなしはそのうえでゆっくり承りましょう（第26回:p.220）		非韻文固有
			2.ひとまず座にお入りください。ゆっくりお話ししましょう。（第26回:p.196）		
			3.まあまあ、席に着いて、そのお話はゆっくり伺いましょう（第26回:p.184）		
		61一个一个从墙根下慢慢的溜上来（第29回:p.394）	1.ひとりまたひとりと、塀のかげのあたりからこそこそ姿を現わす（第29回:p.325）		非韻文固有
			2.一人また一人と壁の下からゆっくりこっそり姿を現します。（第29回:p.254）		
			3.ひとり又ひとりと、塀の陰から姿を現した。（第29回:p.272）		

		62忽见林黛玉在前面慢慢的走着（第32回:p.433）	1. ひょいと見ると黛玉がまえの方をとぼとぼと歩いていて（第32回:p.70）		非韻文固有
			2.見れば黛玉が前方をゆっくりと歩き、（第32回:p.7）		
			3.黛玉がすぐ前方をそろそろ歩いていて、（第32回:p.52）		
		63一面慢慢的走着（第33回:p.439）	1.とぼとぼと歩を運びます。（第33回：p.86）		非韻文固有
			2.ゆっくり歩いているいちに（第33回：p.16）		
			3.とぼとぼ足のむくままに(第33回:p.66）		
		64方慢慢的扶着紫鹃（第35回:p.460）	1.ゆっくりゆっくり紫鵑の肩を借りながら瀟湘館へもどってきます。（第35回:p.146）		非韻文固有
			2.やがて紫鵑に支えられながら、ゆっくり瀟湘館に戻ります。（第35回:p.49）		
			3.やがて紫鵑の肩にすがって瀟湘館へ帰ってきた。(第35回:p.116）		
		65把这大杯收着，我带了家去慢慢的吃罢。(第41回:p.547)	1.こちらの大きなお杯の方は、取っておいて家へ持ち帰り、ゆるゆるやらせていただくということに（第41回：p.20）		非韻文固有
			2.この大きな杯はしまいこんで、家に持って帰っからゆるゆるいただくことにしましょう（第41回：p.185）		
			3．この大杯はどうかしまっておいて、わたくし家へ持って帰りましてから、ゆっくり飲ませていただきましょう。（第41回:p.16）		
		66一面说笑,一面慢慢的吃完了酒，还只管细玩那杯(第41回:p.548)	1. と笑いながらしゃべる一方、ちびりちびりやって酒を飲み乾してしまいましたが、なおもその杯をさも気に入ったげにながめ入っています。（第41回:p.23）		非韻文固有
			2.談笑しながら、ゆっくりお酒を飲み干すと、なおもその杯をしげしげと眺めています。（第41回:p.187）		

			3.笑って話しながら、ゆっくりと酒を飲みおわると、ばあさんはしきりにその杯をひねくりまわして、あかず眺めていた。（第41回:p.18）		
		67只得认着一条石子路慢慢的走来（第41回:p.555）	1.そうもいってはおられず、のろりのろり石ころ路をたどってやってきました。（第41回:p.43）		非韻文固有
			2.どうにか石畳を見つけてゆっくり進みます。（第41回:p.196）		
			3.仕方がないので、石畳みの路に沿ってとぼとぼと歩いた。（第41回:p.34）		
		68又要照着这样儿慢慢的画，可不得二年的工夫（第42回:p.567）	1. それからあのとおりにゆっくり描いてゆくとしたら、どうしても二年はたっぷりかかりましょうよ（第42回:p.73）		非韻文固有
			2それにあの通りゆっくり描いていったら、二年でも到底足りませんわ（第42回:p.212）		
			3それからその通りにゆっくりゆっくり描かなきゃならないでしょ。そうすればどうしたって二年くらいはかかろうじゃありません。（第42回:p.59）		
		69又要照着这个慢慢的画，这落后一句最妙。（第42回:p.567）	1.それからあのとおりにゆっくり描いてゆくとしたら」、この最後の落ちが利いていますよね（第42回:p.73）		非韻文固有
			2.それにあの通りゆっくり描いていったら、このオチがとってもすばらしいわ。（第42回:p.212）		
			3.『ゆっくりゆっくり描かなきゃ』というこの最後の一句が特におもしろいわ。（第42回:p.59）		
		70先放下五十两银子给你们慢慢作会社东道（第45回:p.601）	1.みなさんのためにじっくりと社のお亭主役を相務めましょう。（第45回：p.159）		非韻文固有
			2.まず五十両の銀子を供出して皆さんのためにゆるゆる詩社の主人役を務めましょう。（第45回:p.258）		

			3. 取ろ敢えず五十両だけお預けしまして、ゆるゆると詩社の亭主役をつとめましょう。（第45回:p.132）		
		71宝玉慢慢的上了马（第52回:p.710）	1. 宝玉はゆったりと馬上の人となります。（第52回:p.78）		非韻文固有
			2.宝玉はゆっくりと馬に乗ります。（第52回:p.141）		
			3.宝玉はゆらりと馬にまたがった。（第52回:p.63）		
		72又用小牙刷慢慢的剔出绒毛来。（第52回:p.715）	1.そこでこんどは小さな象牙の刷毛を使ってゆっくり毛羽を落とします。(第52回:p.94)		非韻文固有
			2.さらに小さな歯ブラシでゆっくり細糸を梳き出します。(第52回:p.147)		
			3.小さな象牙の刷毛でそっとけばをを落とした。(第52回:p.74)		
		73众媳妇们方慢慢的一个一个的安分回事（第55回:p.758）	1.妻女たちはそれではと、ゆっくり一人ずつなかへはいって神妙に用件の報告をしましたが(第55回:p.205)		非韻文固有
			2.媳婦たちはそこではじめて一人ずつゆっくりと、分を弁えながら報告し、さきほどのようにバカにしたいい加減な態度を取ろうとはしません。(第55回:p.208)		
			3. そこで女房たちは一人一人静かにはいってきて神妙に用件を報告し、さきほどのようなぞんざいな、人をなめてかかった態度とは打ってかわっていた。(第55回:p.166)		
		74宝玉也慢慢行来。（第58回:p.800）	1.宝玉もゆっくりゆっくりそちらへ向かって歩を運びます。(第58回:p.324)		非韻文固有
			2.宝玉もゆっくりと近づきますが、(第58回:p.268)		
			3.宝玉もそろそろとそちらへ近づいて行った。(第58回:p.261)		

		75黛玉方慢慢的起来，含笑让坐（第64回:p.889）	1.黛玉はそれで、ゆっくりと身を起こし、笑顔をつくってかけるようにとすすめました。(第64回:p.184)		非韻文固有
			2.黛玉はゆっくり起き上がると、笑みを含んで席を勧めます。(第64回:p.70)		
			3.黛玉はようやくものうげに起き上がり、笑みを含んで席をすすめた。(第64回:p.146)		
		76慢慢的吃了再细细的吹一套来。（第76回:p.1059）	1.ゆっくりこれを乾したうえで、こんどはしみじみとしたのを一曲吹くようにと伝えさせます。(第76回:p.241)		非韻文固有
			2.ゆっくり賞味した後、再びこまやかに一曲演奏するよう命じます。(第76回:p.322)		
			3.ゆっくり飲んでから、編曲をもう一つしんみりと吹くようにと伝えさせられた。(第76回:p.19)		
		77且叫你乐这几天，等我慢慢的摆布了来，那时可别怨我（第80回:p.1130）	1.いまにゆるゆるとこちらの奥の手を出してやるからね。(第80回:p.420)		非韻文固有
			2.ここ数日ぐらい、おまえを楽しませてやろうじゃないの。じわじわ手を打っていくからね。その時になってわたしを恨むんじゃないよ！(第80回:p.439)		
			3.まあ当分おまえにいい夢をみさせておくが、おいおいそのうちにやっつけてやるから、(第80回:p.336)		
31	忙忙	78且忙忙收拾房屋，岂不使人见怪（第4回:p.65）	1.それをこちらがせかせかと家の掃除にかからせた日には、人も変にとりはすまいかえ。(第4回:p.142)	41	非韻文固有
			2.わたしたちが慌てて屋敷を片付けたりしたら、人から変に思われずにはすまないわ。(第4回:p.74)		
			3.それをこちらでもってばたばたとお家のお掃除などさせたりしたんでは、かえ		

			っておまえ、人さまから悪く思われはしないかしら。(第4回:p.122)		
		79贾瑞听了，喜之不尽，忙忙的告辞而去（第12回:p. 162）	1. 賈瑞はそれと聞いてうれしくてならず、匆匆に暇を告げて帰りました。(第12回:p.50)		非韻文漢語
			2. 賈瑞はそれを聞いて有頂天になると、急いで暇乞いをして帰り（第12回：p.214）		
			3賈瑞はそれを聞いて、もう嬉しくてたまらず、さよならをいうのもそこそこに帰っていったが、（第12回:p.38）		
		80只得忙忙的穿衣（第13回:p.170）	1.そうもしておられず、そそくさと着物を着込むと(第13回:p.72)		非韻文固有
			2.やがて急いで服を着ると(第13回:p.22)		
			3.急いで服を着て(第13回:p.57)		
		81忽有门吏忙忙进来（第16回:p.202）	1.そこへにわかに門詰めの取り次ぎの者がばたばたと駆けこんできて(第16回:p.147)		非韻文固有
			2.そこへいきなり門番が息せき切って奥へ駆け込み、(第16回:p.263)		
			3.突然、取次ぎの門番があたふたと奥へ駆けこんで、(第16回:p.119)		
		82忙忙的更衣出来（第16回:p.214）	1.あたふた着替えをするなり出てきました。(第16回：p.177)		非韻文固有
			2.急いで着替えて出て来ましたが、(第16回:p.278)		
			3.さっそく服を着換えてでてきた。(第16回:p.144)		
		83只篦了三五下，只见晴雯忙忙走进来取钱。（第20回:p.272）	1.ほんの四、五回も櫛を使ったばかりのところへ、晴雯がせかせかと銭を取りにはいってきて、(第20回:p.322)		非韻文固有
			2.三度か四度梳いたばかりのところへ、晴雯が慌ただしく銭を取りに入って来ます。(第20回:p.76)		
			3. 四、五へんすいたとき、		

			晴雯がばたばたと駆けこんできた(第20回:p.266)		
		84忙忙的要过青盐擦了牙（第21回:p.280）	1.宝玉はとりあわず、せかせかと青塩を出させて歯を磨き口をすすいで済ませてしまいます。（第21回：p.20）		非韻文固有
			2. 宝玉はおかまいなしに急いで青塩を求めて歯を磨き(第21回:p.88)		
			3. 塩をもらって歯をみがき(第21回:p.16)		
		85忙忙的要茶漱口（第28回:p.378）	1.そそくさと茶を出させ、口をすすぎます(第28回:p.277)		非韻文固有
			2.宝玉は急いでお茶を求めて口を漱ごうとします(第28回:p.228)		
			3. 口をゆすぐ茶をほしいとせきたてた。(第28回:p.230)		
		86忽见一个老婆子忙忙走来（第32回:p.436）	1.突如ばたばたと老女がやってきて、(第32回:p.80)		非韻文固有
			2.一人のばあやがあたふたとやって来ていいました。(第32回:p.12)		
			3.突然ひとりの老婆がばたばた走ってきた。(第32回:p.60)		
		87便忙忙的走了（第33回:p.441）	1.あたふたと立ち去りました。(第33回:p.92)		非韻文固有
			2.そそくさと出て行きます。(第33回:p.19)		
			3.そそくさと帰って行った。(第33回:p.72)		
		88只见几个小丫头并老婆子忙忙的走来。（第49回:p.653）	1.そこへいくたりかの侍女見習と老女たちがあたふたやってきて(第49回:p.301)		非韻文固有
			2.数名の小侍女とばあやが慌ただしくやって来て、笑いながら言いました。(第49回:p.58)		
			3.幾人かの小女とばあやがせかせかした様子でやってきて(第49回:p.250)		
		89就着野鸡瓜齑忙忙的咽完了（第49回:p.664）	1.そのなかへ雉の脚の肉の蕊をぶちこみ、さらさらと流しこみました。(第49回:p.328)		非韻文固有
			2.野鶏瓜齏だけでそそくさと平らげます。(第49回		

			:p.71)		
			3.雉の爪の和えものをふりかけ、さらさらとかき込んだ。(第49回:p.272)		
		90便忙忙的抽身跑了。（第32回:p.435）	1.すたこらその場から逃げだしてしまいました。(第32回:p.75)		非韻文固有
			2.そそくさと身を翻して駆け出します。(第32回:p.10)		
			3.すごすごとその場をにげだした。(第32回:p.57)		
		91宝兄弟这会子穿了衣服，忙忙的那去了？（第32回:p.435）	1.宝玉さんは、いま時分正装などしなさって、あたふたとどちらへお越しになったのでしょうね？（第32回：p.76）		非韻文固有
			2.宝さんはこんな時に衣裳を着替えて、慌ただしくどちらへいらしたの？(第32回:p.10)		
			3. 宝玉さまは服を召してひどくお忙しそうにお出かけのようでしたね。今ごろどちらへ？(第32回:p.57)		
		92一面说着，早已进了城，仍从后门进去，忙忙来至怡红院中（第43回:p.583）	1.などといっているうちに、早くも城内なかにはいり、もとどおり裏門を通って、あたふた怡紅院までやってきました。(第43回:p.116)		非韻文固有
			2.そう言っているうちに、早くも城内に入ります。元通り裏門から入ると、急いで怡紅院までやって来ます。(第43回:p.234)		
			3.そういううちにも、はや城内にはいった。もとのように裏門からはいり、急いで怡紅院へ駆けつけた。(第43回:p.96)		
		93宝玉听了，喜欢非常，答应了忙忙的回来。（第62回:p.861）	1.宝玉はそれを聞くと、鬼の首でも取ったかのような喜びよう、合点承知のすけと、あたふたもどってゆきます。(第62回:p.106)		非韻文固有
			2.宝玉はそれを聞いて大喜びし、返事をすると大急ぎで戻ります。(第62回:p.28)		
			3.宝玉は嬉しくてたまらなかった。わくわくしながら		

			、大急ぎでそれを取りに行く道すながら(第62回:p.85)		
		94路上工夫忙忙的就那样再三要来定（第66回:p.921）	1.それも旅の途中だというのに、やいのやいのとああまでしつこく縁談を取り決めようとしたわけで、(第66回:p.267)		非韻文固有
			2.旅の途中の慌ただしいさなかに、あのように再三にわたって縁組を求められると、(第66回:p.115)		
			3.旅先のあの気ぜわしい中で、あんなにしつこく結納を、(第66回:p.215)		
		95忽有贾母那边的小丫头子忙忙走来找鸳鸯（第72回:p.997）	1.不意に後室のところの侍女見習があたふた鴛鴦を探しに顔を見せ、こう伝えました。（第72回:p.73）		非韻文固有
			2. おばあさま付きの小侍女が慌ただしくやって来て、鴛鴦を見つけると言いました。(第72回:p.233)		
			3. 突然ご隠居さまのところの小女が、せかせかと鴛鴦をたずねてきた。(第72回:p.50)		
		96是以忙忙的焚过纸马钱粮（第80回:p.1134）	1.そわそわと紙馬たくりさが六六十二回前出）・銭糧（紙銭のたぐい、神仏を祭るとき焚く）を供え終わるがはやいか、庫裡に退って休息するのでした。(第80回:p.433)		非韻文固有
			2.早々に紙銭を焚くと(第80回:p.445)		
			3.そこで、宝玉はそそくさと紙馬やおわそわと紙馬たくりさが供えると(第80回:p.346)		
32	满满	97左边脸上满满的敷了一脸的药（第25回:p.337）	1.左の頬のあたり一面にべったり軟膏をつけています。(第25回:p.164)	7	非韻文固有
			2.見れば宝玉は鏡に映してみているところで、左の頬のあたり一面にべったり軟膏をつけています。(第25回:p.168)		
			3.黛玉が急いで様子を見に来たところ、ちょうど宝玉は鏡を持って火傷の具合を		

			見ている最中で、顔の左側にはべっとりと薬が塗られています。(第25回:p.158)		
		98满满的斟了一杯喝干（第44回:p.587）	1.なみなみ一杯注がせて飲み乾しましたので、(第44回:p.124)		非韻文固有
			2.そう言って酒を取り上げ、なみなみと注いで飲み干します。(第44回:p.240)		
			3.といいつつ、杯になみなみとついだのを一息にぐっと飲み幹したので(第44回:p.102)		
33	默默	99梓泽余衷，默默诉凭冷月（第78回:p.1111）	1.梓沢の余衷、黙黙と訴えて冷月による(第78回:p.381)	1	韻文漢語
			2.梓沢の余衷　黙黙として　訴えて冷月に憑る(第78回:p405)		
			3.梓沢の余衷　黙黙と　訴えて冷月に憑る(第78回:p.305)		
34	朦朦	100见袭人朦朦睡去。（第20回:p.271）	1.どうやら襲人はうとうとと眠りについたようでした。（第20回:p.319）	1	非韻文固有
			2.襲人はスャスャ寝入っています。(第20回:p.75)		
			3.襲人はうつらうつら眠かし(第20回:p.264)		
35	脉脉	101无风仍脉脉（第50回:p.674）	1.風なきになお脈々と降るとはいかに(第50回:p.350)	3	韻文漢語
			2.風無くして仍お脈脈たり(第50回:p.86)		
			3.風無きも仍お脈脈たり(第50回:p.292)		
		102秋霖脉脉，阴晴不定（第45回:p.607）	1.秋の長雨はしとしとしとしと、降りみ降らずみの定めなさし(第45回:p.180)		非韻文固有
			2.秋の長雨はいつまでも続き、空模様はコロコロ変わります。(第45回:p.268)		
			3.秋の霖雨は霙霙として、晴曇がきまらない。(第45回:p.148)		
		103连宵脉脉复飕飕（第45回:p.609）	1.夜を籠めて霙霙とまた颼颼と(第45回:p.181)		韻文漢語
			2.連宵脈脈復た颼颼(第45回:p.270)		
			3.連宵脈脈また颼颼(第45回		

			:p.149)		
36	飘飘	104同了疯道人飘飘而去（第1回:p.18）	1.物狂い道士のあとについてふらりどこかへ立ち去ってしまいました。(第1回:p.54)	3	非韻文固有
			2.いかれた道士と一緒に飄々と去って行きます(第1回:p.22)		
			3.その道士とともに飄々として行ってしまった。(第1回:p.45)		
		105探春所作风筝，乃飘飘浮荡之物（第22回:p.304）	1.探春の作の凧というのは、ふわりふわりと飛びあがるしろものだ。(第22回:p.84)		非韻文固有
			2.探春が作った風箏は、ふわふわと漂う物だ。(第22回:p.121)		
			3.探春の作った紙鳶は、ふわりふわりと浮かび漂うものである。(第22回:p.68)		
37	轻轻	106轻轻笼住束发冠（第8回:p.125）	1.そろっと束髪冠をとめておいて(第8回:p.294)	12	非韻文固有
			2.髪冠の上からやさしくすっぽりかぶせると、(第8回:p.163)		
			3.そろっと束髪冠をとめておいて(第8回:p.248)		
		107一面轻轻的替他盖上。（第21回:p.280）	1.そっと彼女に布団を掛けてやりました。（第21回：p.19）		非韻文固有
			2.そっと布団を掛けてやります。(第21回:p.87)		
			3.そっと湘雲に蒲団を着せてやった。(第21回:p.15)		
		108便轻轻的伸手进去（第34回:p.448）	1.そろっと手をなかへさしのべ(第34回:p.109)		非韻文固有
			2.そっと手を伸ばして中衣を脱がせます(第34回:p.28)		
			3.そこで襲人がそっと手をさし入れて(第34回:p.80)		
		109只得轻轻起来，就将芳官扶在宝玉之侧（第63回:p.873）	1.止むなくそっと起き上がり、芳官を抱えるようにして宝玉のわきまで連れていって、(第63回:p.140)		非韻文固有
			2.やむなくそっと担ぎ上げ、宝玉のそばまで運んで行ってそのまま眠らせ、(第63回:p45)		

			3.そっと立ちあがって、芳官を宝玉の側に連れて行って(第63回:p.110)		
		110轻轻的便推拽过这边阶矶上来。（第75回:p.1045）	1.ただ七、八人の若党たちにこれを牽かせ、軽々とこちらの石段のところまで持ってこさせました。(第75回:p.207)		非韻文漢語
			2.楽々とこちら〔寧国府〕の正門の階段まで動かします。(第75回:p.301)		
			3.軽々とこちらの石段のところまで引張ってきた。(第75回:pp.103-104)		
		111尤氏方住了，忙和王夫人轻轻的请醒（第76回:p.1059）	1.尤氏は話を打ち切り、さっそく奥方の王氏といっしょになってそっと起こしにかかりました。(第76回:p.244)		非韻文固有
			2.尤氏は話すのを止め、急いで王夫人とともにそっとお目覚めになるよう促します。(第76回:p.323)		
			3.そこで尤氏が話をやめて、王夫人と共にそっとおこそうとすると、(第76回:p.194)		
38	怯怯	112低下头只管弄衣带，那一种娇羞怯怯（第34回:p.449）	1.もじもじと帯をいじくり廻すばかり。そのおずおずと嬌びを含んではにかむさまにはえもいわれぬものがあり(第34回:p.112)	1	非韻文固有
			2.ひたすら衣裳の帯をいじるだけで、その恥ずかしそうな様子には名状し難いものがあるのを見ると、(第34回:p.29)		
			3.帯をいじくっているおずおずとした羞らいぶりに(第34回:p.88)		
39	惓惓	113因蓄惓惓之思，不禁谆谆之问。（第78回:p.1111）	1.因りて倦倦の思いを蓄え、諄諄しき問いを禁じ得ず(第78回:p.381)	1	韻文漢語
			2.因りて倦倦の思を蓄えて(第78回:p.405)		
			3.因りて倦倦の思いを蓄えて(第78回:p.305)		
40	冉冉	114只见烈日炎炎，芭蕉冉冉（第1回:p.10）	1.かっかと照りつける真夏の日射しとゆらゆら揺らぐ芭蕉ばかり。(第1回:p.35)	1	非韻文固有

			2.日さまがギラギラ輝き、芭蕉がゆらゆら揺れるばかりで(第1回:p.11)		
			3.真夏の日ざしがかっかと照りつけ、芭蕉の葉がゆらゆらとゆらいでいるばかり。(第1回:p.28)		
41	森森	115凤尾森森（第26回:p.354）	1.鳳の尾なす笹の葉はさっさっと(第26回:p.208)	2	非韻文固有
			2.鳳尾森森(第26回:p.191)		
			3.ふさふさとの尾なすなよ竹の葉が春風にさやさやとかすかな音を立ててゆらいでいる(第26回:p.174-175)		
		116只觉得风气森森，比先更觉凉飒起来。（第75回:p.1050）	1.あたりの空気は森々として、さいぜんにもまして冷え冷えとした感じが加わり。（第75回:p.221）		非韻文漢語
			2.風の気配は陰鬱になり、先ほどに比べると身を切るような冷たさを帯びています。(第75回：p.309)		
			3.無気味な空気があたりに立ち込めて、寒さが急に身にしみた。(第75回:p.176)		
42	飕飕	117连宵脉脉复飕飕（第45回:p.609）	1.夜を籠めて霧霧とまた颼颼と(第45回:p.181)	1	韻文漢語
			2.連宵脈脈復た颼颼(第45回:p.270)		
			3.連宵脈脈また颼颼(第45回:p.149)		
43	松松	118这尤三姐松松挽着头发（第65回:p.909）	1.この尤三姐、髪はふんわりとわがね(第65回:p.230)	2	非韻文固有
			2.三姐は髪をフワッと結い(第65回:p.96)		
			3.尤三姐は頭髪をゆるく綰ね、(第65回:p.185)		
		119松松的挽了一个慵妆髻（第58回:p.804）	1.ふうわりと間に合わせの雷を結ってやりました。(第58回:p.339)		非韻文固有
			2.ふんわり慵妆髻〔フワッと一方に垂れた番〕を結ってやると(第58回:p.276)		
			3.間に合わせにふうわりとした髻を結ってやり、(第58回:p.273)		
44	团团	120底下就团团的坐了一屋子，吃了一夜酒就散了。（	1.そのさきは、ぐるりと部屋いつぱいにまるくかけ、	5	非韻文固有

		第54回:p.744）	夜っぴて酒盛りをして、それにてお開き、（第54回：p.168）		
			2.底下はですね、皆で仲良く一つの部屋に座り、一晩じゅうお酒を飲んでお開きになりました。(第54回:p.188)		
			3それからね、みんな仲よく一部屋に集まって、一晩お酒を飲んで、そうして散会しました。(第54回:p.135)		
		121右垂首贾政宝玉，贾环，贾兰，团团围坐。（第75回：p.1052）	1.賈政・宝玉・賈環・賈蘭の順にぐるつと円陣をつくるようにしてかけました。(第75回：p.225)		非韻文固有
			2.右手に買政、宝玉、買環、買蘭が、 順番に円を描くように座りますが(第75回:p.311)		
			3.右手に賈政・宝玉・賈環・賈蘭がまるく取り囲んで掛けた。(第75回:p.178)		
		122方又入坐，团团围绕（第76回:p.1057）	1.ぐるり車座にかけました。(第76回:p.236)		非韻文固有
			2.再び席に戻って円くテーブルを囲みます。(第76回:p.319)		
			3.またまるく輪になって席についた。(第76回:p.187)		
45	烁烁	123炫裙裾之烁烁兮，（第78回:p.1112）	1.裙裾の礫礫たるを絃り(第78回:p.382)	1	韻文漢語
			2.裙裾の礫礫たるを絃かせ(第78回:p.407)		
			3.裙裾の礫礫たるを絃かり(第78回:p.307)		
46	堂堂	124这都是堂堂正大随人之正气。（第77回:p.1083）	1. ああいったのはいずれも堂々として正大。（第77回：p. 308）	2	非韻文漢語
			2. これらはみな正々堂々と人の正気に随い(p. 359)		
			3. これらはみな堂々正々、その人の正気に随って(p. 245)		
		何我堂堂须眉诚不若彼裙钗哉？（第1回:p.1）	1.伊藤は訳しない		
			2.堂々たる男子のわたしがあの女性たちに及びもつかなかったとは(第1回:p.1)		
			3.松枝訳なし		

47	滔滔	125滔滔然将殡过完（第15回:p.193）	1.ずんずんと葬列を進めさせ(第15回:p.123)	1	非韻文固有
			2.滔々と流れるように柩を通し終えます。(第15回:p.252)		
			3.どんどんと葬例を通って行かて、ようやく通り終わってから。(第15回:p.100)		
48	微微	126两边腮上微微的几点雀斑。（第46回:p.615）	1.両の頬にはうつすらと雀斑さえ見えて(第46回:p.198)	7	非韻文固有
			2.両の頬にはうつすらと雀斑があります。(第46回:p.5)		
			3.そしてあごのあたりにほんのちょっぴり雀斑がある。(第46回:p.164)		
		127凤姐微微冷笑道（第67回:p.936）	1.熙鳳はうっすら冷笑を浮かべ、(第67回:p.313)		非韻文固有
			2.熙鳳はかすかに冷笑して言いました。(第67回:p.138)		
			3.対応する訳本がない		
		128觉得心口微微的疼（第38回:p.507）	1.どうも胸がちょっと苦しいのよ（第38回:p.285）		非韻文固有
			2.胸がかすかに苦しく感じます(第38回:p.122)		
			3.なんだか胸がチクチク痛むので(第38回:p.226)		
49	汪汪	129黛玉见如此，越发气起来，声咽气堵，又汪汪的滚下泪来，拿起荷包来又剪。（第17、18回:p.233）	1.黛玉はこれを見てなおさら腹が立ち、声も出なければ息もつまりそう、はらはらと涙を流し、巾着を取りあげてまた　しても切ろうとします。(第17、18回:p.227)	2	非韻文固有
			2.黛玉はこの様子を目にすると、ますます怒りがこみ上げ、声はつまり息はふさがり、またポロポロと涙をこぼしながら巾着を取り上げて、これも切ろうとします。(第17、18回:p.23)		
			3.黛玉はその仕打ちにいよいよ腹を立て、息がつまって声が出す、ぽろぽろ涙をこぼしながら、その荷包をとりあげてまた剪ろうとした。(第17、18回:p.187)		

50	小小	130南边是倒座三间小小的抱厦厅（第3回:p.46）	1.南側は倒座（表門をはいったところに中庭を挟んで正房に対して建てた棟）で三つに仕切ったこぢんまりした抱厦庁（家屋にさしかけて継ぎたした部屋）、(第3回:p.104-105)		非韻文固有
			2.南側には北向きになった三間の小さな抱厦庁〔差し掛けの部屋〕が正房に継ぎ足され（第3回:p.53）		
			3.南側は倒座で三間の差し掛けの小さな抱厦庁（第3回:p.89）		
		131后有一半大门，小小一所房室。（第3回:p.46）	1.その裏手にあたって表門の半分ほどの門をつけたこぢんまりした家屋があります(第3回:p.105)		非韻文固有
			2.奥には中ぐらいの大きさの門と、一棟の小さな建物があります。(第3回:p.53）		
			3.その奥の方に中くらいのの門のついた一郭がある。（第3回:p.89）		
		132上面小小两三间房舍（第17、18回:p.221）	1.手前はこぢんまりした三間ほどの屋舎で一明両暗の造り（第17、18回:p.194）		非韻文固有
			2.正面にはこぢんまりした三間の建物があって(第17、18回:p.6)		
			3.その上方にある小さな、二間か三間ほどの家屋は、（第17、18回：p158）		
		133祖上曾作过小小的一个京官（第6回:p.91）	1.祖父は以前、ちょっとした都詰めの役人をしていたことがあって（第6回：p.197）		非韻文固有
			2.先祖は都でしがない役人だったことがあり、(第6回:p116)		
			3.その祖父はつまらぬ都詰めの小役人をつとめたことがあり、(第6回:p.169)		
		134上面小小五间抱厦（第26回:p.352）	1.正面はこぢんまりした五間の抱厦になっていて(第26回:p.200)		非韵文固有
			2.正面の小さな五間の抱厦〔差し掛けの部屋〕(第26回:p.188)		

			3.上は小さな五間の抱厦で、（第26回：p.169）		
52	细细	135宝玉便走近黛玉身边坐下，又细细打量一番，（第3回:p.50）	1.宝玉はそこでつかっかと黛玉のそばにいってかけ、またしてもしげしげとながめいったすえ、たずねました。(第3回:p.50)	53	非韻文固有
			2.またひと　しきりじっくり眺めた後で尋ねました。(第3回:p.58)		
			3.宝玉はそこで黛玉のそばに掛けて、またもしみじみとうち守っていったが、しげしげとながめいったすえ(第3回:p.96)		
		136便有一股细细的甜香袭人而来。（第5回:p.70）	1.部屋の戸口に着くか着かぬかに、ほんのり甘ったるい香りが鼻を撲ちます。(第5回:p.153)		非韻文固有
			2.細くたゆたう甘い香に包まれま　す。(第5回:p.80)		
			3.ほんのかな甜い香のにおいがぷうんと鼻をつき(第5回:p.131)		
		137再细细的算账（第15回:p.200）	1.きちんとかたをつけさせてもらうからね(第15回:p.143)		非韻文固有
			2.ひと寝入りした後で、改めてちゃんと決着をつけるからね。(第15回:p.260)		
			3.とくとかたをつけるよ(第15回:p.115)		
		138龙吟细细（第26回:p.354）	1.竜の嘯くか竹の管はしうしうと(第26回:p.208)		非韻文固有
			2.龍吟細細(第26回:p.191)		
			3.ふさふさとの尾なすなよ竹の葉が春風にさやさやとかすかな音を立ててゆらいでいる(第26回:p.174-175)		
		139细细的看了一会（第7回:p.106）	1.しばらくはしげしげと眺めいっていましたが(第7回:p239)		非韻文固有
			2.じっくり観察した後で(第7回:p.136)		
			3.つくづくとその顔をうちながめていたが、(第7回:p.204)		
		140向脸上细细一认（第34回:p.450）	1.相手の顔をしげしげと見やれば(第34回:p.117)		非韻文

			2.よくよく顔を見つめてみると(第34回:p.31)		固有
			3.まじまじと見やると(第34回:p.92)		
		141一面细细端详了半日（第41回:p.548）	1.しばらくのあいだ、じっと見入っていたあげくに(第41回:p.24)		非韻文固有
			2.劉ばあさんはそう言いながら、ためつすがめつ眺めたあげくに言いました。(第41回:p.187)		
			3.ばあさんはそういいながら、長いことしきりにためつすがめつした末、いった。(第41回:p.19)		
		142宝玉细细吃了，果觉轻浮无比（第41回:p.553）	1.宝玉はこれをじっくり味わいながら飲み　乾しましたが、言いしにたがわずそのこぐのあるうま味はまた格別(第41回:p.37)		非韻文固有
			2.宝玉はじっくり味わいますが、なるほどたとえようもなくサラリとしているので称賛してやみません。(第41回:p.193)		
			3.宝玉はよく味わいながら飲んだ。なるほどさらっとしてふくよかな味わいは得もいわれぬので(第41回:p.20)		
		143岫烟听了宝玉这话，且只顾用眼上下细细打量了半日（第63回:p.876）	1.宝玉を上から下までまじまじと見守っていましたが（第63回:p.149）		非韻文固有
			2.岫烟は宝玉の話を聞くと、挨拶状をしばらく仔細に目で追っていましたが(第63回:p.49)		
			3.岫烟は宝玉の話を聞き、あっけにとられた目つきで宝玉を見上げ見下ろし、ややしばらくまじまじとうちまもっていたが、(第63回:p.118)		
		144慢慢的吃了再细细的吹一套来。（第76回:p.1059）	1.ゆっくりこれを乾したうえで、こんどはしみじみとしたのを一曲吹くようにと伝えさせます。(第76回:p.241)		非韻文固有

			2.ゆっくり賞味した後、再びこまやかに一曲演奏するよう命じます。(第76回：p.322)		
			3.ゆっくり飲んでから、編曲をもう一つしんみりと吹くようにと伝えさせられた。(第76回:p.191)		
53	潇潇	145不雨亦潇潇（第50回：p.674）	1.雨ならざるもまた瀟瀟と(第50回:p.350)	1	韻文漢語
			2.雨ふらずして亦た瀟瀟たり(第50回:p.86)		
			3.雨ふらざるも亦た瀟瀟たり(第50回:p.191)		
54	暄暄	146良夜景暄暄。（第76回:p.1064）	1.光も暄暄良夜なりけり（第76回:p.259）	1	韻文漢語
			2.良夜景暄暄たり（第76回:p.330）		
			3.良夜景は暄暄たり（第76回:p.204）		
55	萧萧	147楸榆飒飒，蓬艾萧萧（第78回:p.1111）	1.楸榆は颯颯たり、蓬艾は蕭蕭たり（第78回:p.381）	1	韻文漢語
			2.楸榆　颯颯たり、蓬艾蕭蕭たり（第78回:p.404）		
			3.楸榆は颯颯たり、蓬艾は蕭蕭たり（第78回:p.305）		
56	栩栩	148若寤寐之栩栩（第78回:p.1114）	1.寤寐の栩栩たるがごときは（第78回:p.384）	1	韻文漢語
			2.寤寐の栩栩たるが若し（第78回:p.411）		
			3.寤寐の栩栩たるが若き（第78回:p.308）		
57	炎炎	149只见烈日炎炎，芭蕉冉冉（第1回:p.10）	1.かっかと照りつける真夏の日射しとゆらゆら揺らぐ芭蕉ばかり。(第1回:p.35)	1	非韻文固有
			2.日さまがギラギラ輝き、芭蕉がゆらゆら揺れるばかりで(第1回:p.11)		
			3.真夏の日ざしがかっかと照りつけ、芭蕉の葉がゆらゆらとゆらいでいるばかり。(第1回:p.28)		
58	远远	150俄见一僧一道远远而来（第1回：p.2）	1.ひょっこり現われましたのがあたりに見かけぬ僧と道士、二人連れではるかかなたよりやってきました。（第1回：p.18）	20	非韻文固有

			2.ふと一人の僧と一人の道士がはるばるやって来るのが目に入ります。（第1回：p.2）		
			3.突然、ひとりの僧侶とひとりの道士がつれだって、はるか遠くのほうからやって来た。（第1回：p.15）		
59	摇摇	151泪烛摇摇爇短檠（第45回：p.608）	1.涙燭はゆらゆらと短檠に燃え（第45回：p.181）	2	韻文固有
			2.涙燭摇摇として　短檠に爇え（第45回：p.269）		
			3.涙燭摇摇として　短檠に爇え（第45回：p.149）		
		152话犹未了，林黛玉已摇摇的走了进来（第8回:p.122）	1.もう当の林黛玉、ふうらりふらりと部屋のなかまではいってきていましたが、（第8回:p.282）		非韻文固有
			2.その声がまだ終わらぬうちに、黛玉は早くもゆらゆらと中に入って来ましたが（第8回:p.157）		
			3.その言葉がまだ終わらないうちに、もう林黛玉がゆらゆらと風にゆられるような様子で部屋の中へはいってきていた。（第8回:p.239）		
60	盈盈	153盈盈烛泪因谁泣（第23回:p.312）	1.ぼとぼとと蝋燭の誰ゆえに涙せし（第23回:p.102）	1	韻文固有
			2.盈盈たる燭泪誰に因りて泣く（第23回:p.134）		
			3.盈盈たる燭涙誰に因りて泣ける（第23回:p.84）		
61	阴阴	154满屋内阴阴翠润（第35回:p.461）	1.そのため部屋のうちはほのぐらく、しっとりとした翠の空気が充満し（第35回:p.150）	2	非韻文固有
			2.部屋じゅうほの暗く緑色にしっとりと潤い（第35回:p.50）		
			3.部屋の中はしっとりと翠に潤い（第35回:p.118）		
		155天又阴阴的，只怕有雪（第52回:p.709）	1.空がまたどんよりして雪もよいでございます。（第52回:p.75）		非韻文固有
			2.どんより曇っていますから、たぶん雪になるでしょう。（第52回:p.139）		
			3.また曇ってきましたわ。		

			雪かもしれませんね。（第52回:p.60）		
62	怔怔	156香菱怔怔答道（第48回:p.650）	1.すると香菱、あっけらかんとして。（第48回:p.297）	10	非韻文固有
			2.香菱は呆けたように答えました。（第48回:p.53）		
			3.すると香菱はキョトンとした様子で答えた。（第48回:p.）		
		157唬的满屋中子弟都怔怔的痴望（第9回:p.137）	1.ど胆を抜かれたのは部屋のなかの若い連中、みなあきれはて、茫然と見守るばかりです。(第9回:p.322)		非韻文漢語
			2.部屋の中の子弟たちはみなポカンと見　やるぱかりです。(第9回:p.178)		
			3.部屋じゅうの生徒たち、みなびっくりして、あっけにとられて見ているばかり。（第9回：p.271）		
		158也不觉怔怔的滴下泪来（第32回:p.435）	1.自分も思わず呆然となり涙をこぼすのでした（第32回:p.75）		非韻文漢語
			2.そこまで考えると、思わず呆然として涙がこぼれ落ち、(第32回:p.10)		
			3.彼女も思わず茫然として涙を落とし、（第32回：p.57）		
		159小蝉气的怔怔的（第60回:p.825）	1.蝉姐児はかっとなったあまり、しばし茫然としていましたが（第60回：p.401）		非韻文漢語
			2.蝉姐児は怒りで呆然とし、(第60回:p.305)		
			3.蝉姐児は逆上したあまりボーッとなっていたが、（第60回：p.324）		
		160林黛玉先还怔怔的，听后来见说到自己身上，便啐了宝钗一口，红了脸（第57回:p.793）	1.黛玉もはじめのうちこそぼんやり聞いていたものの、あとでこんどは自分が引き合いに出されたとあって（第57回:p.307）		非韻文固有
			2.黛玉は最初のうちはまだポンヤリしていましたが、のち話がわが身に及んだので、宝叙に向かってペッと唾を飛　ばし、顔を赤くしながら、（第57回:p.25）		

			3.黛玉、はじめのうちはぽかんとして聞いていたが、(第57回:p.247)		
63	諄諄	161因蓄惓惓之思，不禁諄諄之問。（第78回:p.1111）	1.因りて倦倦の思いを蓄え、諄諄しき問いを禁じ得ず（第78回:p.381）	3	韻文 漢語
			2.諄諄の問を禁ぜず（第78回:p.405）		
			3.諄諄の問いを禁じえず（第78回:p.305）		
64	早早	162果有此心，叫他早早歇了心（第46回:p.623）	1.なんにしてもそんな気でいるようなら、さっさとあきらめさせることだ。（第46回:p.222）	2	非韻文 固有
			2.もし本当にそんな気でいるようなら、さっさとあきらめさせろ。（第46回:p.16）		
			3.もうそういう気があるなら、今のうちにすっぱりと思いきるいうにいっておけ。（第46回:p.183）		
65	直直	163无奈宝玉发热事犹小可，更觉两个眼珠儿直直的起来（第57回:p.780）	1.宝玉のこの発熱はまだまだ序の口で、こんどは両の目の珠がにょっきり飛び出しそうになり（第57回:p.269）	1	非韻文 固有
			2.両方の眼はどんよりと生気をなくし（第57回:p.241）		
			3.目つきがすわって（第57回:p.218）		
66	闷闷	164心中闷闷了，回至房中榻上默默盘算，（第56回:p.774）	1.心中すっきりせぬままに、部屋の榻（長寝台）の上にもどると、黙りこくってあれこれ考え廻らしていましたが（第56回:p.250）	19	非韻文 固有
			2.悶々として部屋に戻ると、寝椅子の上で黙り込んだままあれこれ思いめぐらせます（第56回:p.232）		
			3.心中悶々として部屋にかえり、榻の上でじっと黙りこんでいろいろ考えているうちに(第56回:p.204)		
		165自己闷闷的（第21回:p.282）	1.ひとりくさくさした態で(第21回:p.28)		非韻文 固有
			2.一人悶々として、(第21回:p.91)		

			3.ただひとり悶々として(第21回:p.23)		
		166出来进去只是闷闷的（第23回:p. 314）	1.ただもう悶々としています。（第23回:p.106）		非韻文漢語
			2.ひたすら悶々としています。（第23回:p.136）		
			3.すっかりふさぎこんでしまった。（第23回:p.86）		
		167这里林黛玉见宝玉去了，又听见众姊妹也不在房，自己闷闷的。（第23回:p.316）	1.こちらは林黛玉、宝玉は立ち去ってしまいましたし、それに姉妹たちも留守だと聞いたので、ひとり悶々と部屋へもどる道すがら(第23回:p.113)		非韻文漢語
			2.自分もつまらない気持ちになります。(第23回:p.139)		
			3.なんだかくさくさした気持ちになって(第23回:p.92)		
		168正闷闷的，（第24回:p.332）	1.ちょうどそんなふうにくさくさしているところへ(第24回:p.153)		非韻文固有
			2.ちょうとくさくさしていた時(第24回:p.162)		
			3.かくてすっかりふさぎこんでいるところへ、(第24回:p.129)		
		169林黛玉见宝玉出了一天门， 就觉闷闷的，没个可说话的人（第25回:p.337）	1.林黛玉は宝玉が一日じゅう外出したままですので、くさくさしてきても、はなし相手とてありません。(第25回:p.163)		非韻文固有
			2.黛玉は宝玉が一日じゅう外出していたので、話し相手も なくてつまらない思いをしており、(第25回:p.168)		
			3.黛玉は宝玉が一日中外出して帰らなかったため、話し相手も なく退屈しきっていた。(第25回:p.136)		
		170倒是宝玉心中闷闷不乐（第31回:p.417）	1.ところが一方の宝玉は、くさくさして気が晴れず(第31回:p.21)		非韻文固有
			2.宝玉の方は内心鬱々として楽しまず(第31回:p.288)		
			3.悶々としてすこぶる楽しまず、(第31回:p.16)		

		171省得天天闷闷的无个开心。（第36回:p.481）	1.これさえあれば、くる日もくる日もくさくさと気晴らしもなしに過ごさなくとも済もうよ（第36回:p.212）		非韻文 固有
			2.毎日悶々として沈んだ気持ちにならなくてすむよ（第36回:p.80）		
			3.毎日毎日ふさいでばかりいちゃいけないよ。（第36回:p.167）		
		172宝玉只得罢了，回来闷闷的（第37回:p.497）	1.宝玉はしぶしぶ得心したものの、もどってからもくさくさした態でいるのでした。（第37回:p.257）		非韻文 固有
			2.戻って来ても気が晴れません。（第37回:p.104）		
			3.宝玉は仕方なくすごすご帰ってきてふさぎこんでいたが。（第37回:p.203）		
		173宝玉只得闷闷的转步（第79回:p.1119）	1.宝玉も止むなくくさくさした気持で足を運ぶのでしたが（第79回:p.391）		非韻文 固有
			2.宝玉はやむなく悶々としながら踵を返しますが（第79回:p.423）		
			3.宝玉はひとり悶々として歩いていたが、（第79回:p.314）		
67	剪剪	174轻寒风剪剪（第76回:p.1063）	1.肌寒の風吹き渡る剪々と(第76回:p.258)	1	韻文 漢語
			2.軽寒　風　剪剪たり 風がさやさや吹いて うっすら寒く(第76回:p.330)		
			3.軽寒　風は剪剪たり(第76回:p.204)		

注：語例に下線をつける AA 式は AA 式重言であり、原文に下線をつける例文は韻文から引用することを意味する。訳文に下線をつける語例は対訳語例である。注の「韻文」は「韻文から引用する」の略称であり、「漢語」は「漢語擬声･擬態語」の略称であり、「固有」は「固有擬声･擬態語」の略称である。語数は、『紅楼夢』におけるある AA 式の使用頻度を指す。

図表一覧

図 1　量幅と量点.....18
図 2　基式と重畳式の意味関係.....23
図 3　Williams（1976：463）による英語の共感覚形容詞の方向性.....79
図 4　山梨（1988：60）による共感覚と原感覚の方向性.....80
図 5　赵青青（2018:50）による現代中国語の形容詞の共感覚の方向性.....80
図 6　赵（2021）の現代中国語の ABB 式形容詞に依る方向性.....80
表 1 『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式の文成分.....27
表 2 『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式の文成分.....31
表 3 『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式の文成分.....33
表 4 『紅楼夢』前八十回と後四十回における形容詞重畳式の語数.....37
表 5　己卯本と庚辰本における ABB 式の相違点.....52
表 6　王府本、戚序本と戚寧本における ABB 式の相違点.....53
表 7　夢稿本、甲辰本と程甲本、 程乙本における ABB 式の相違点.....54
表 8 『紅楼夢』前八十回における AA 式形容詞重畳式と“的”の共起状況.....57
表 9 『紅楼夢』前八十回における ABB 式形容詞重畳式と“的”の共起状況.....58
表 10『紅楼夢』前八十回における AABB 式形容詞重畳式と“的”の共起.....59
表 11『紅楼夢』前八十回の ABB 式のうち、A と BB とが異感覚であるコロケーション.....77
表 12『紅楼夢』前八十回の ABB 式のうち、A と BB が同感覚の異なる下位カテゴリー.....77
表 13『紅楼夢』前八十回の ABB 式のうち、A と BB とが同感覚であるコロケーション.....77
表 14『紅楼夢』における AA 式と伊藤訳の擬声･擬態語の対応状況.....88

論文初出掲載一覧

1. 胡春艶（2020）〈漢語 AA 式形容詞重疊式語義的歴時研究－－以“绵绵”一词为例〉《文化创新比较研究》（33）, pp.153-155.
2. 胡春艶（2021）「『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式について―ABB 型を中心に―」『外国語学研究』，（23）, pp.49-56.
3. 胡春艶（2021）「『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式について―AA 型を中心に―」『外国語学会誌』，（50），pp.24-33.
4. 胡春艶（2021）「中国語 AA 式形容詞重畳式の語義変容 ―『綿綿』を中心に―」『新世紀人文学論究』，（5），pp.173-186.
5. 胡春艶（2022）「『紅楼夢』前八十回と後四十回の比較研究――形容詞重畳式を中心に」『中国言語文化学研究』，（11），pp.131-140.
6. 胡春艶（2022）「『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式について―AABB 型と ABAB 型を中心に―」『外国語学会誌』，（51），pp.162-172.
7. 胡春艶（2022）「中国語の形容詞と程度副詞の関係についての一考察」『東アジア国際言語研究』，（3），pp.153-163.

学会発表：

1. 東アジア国際言語学会第 8 回大会（2021 年 2 月 27 日）
   テーマ：中国語の形容詞と程度副詞の関係性 ―『紅楼夢』前八十回を中心に―
2. 第十二届汉日对比语言学研讨会（2021 年 8 月 20 日--22 日）浙江師範大学開催
   テーマ：『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式とその日本語訳の対照研究―AA 型を中心に―
3. 2021 年日语教育与日本学研究国际研讨会（2021 年日本語教育と日本語学研究国際シンポジウム）同済大學開催（2021 年 11 月 13-14 日）
   テーマ：『紅楼夢』前八十回と後四十回の比較研究 ―形容詞重畳式を中心に―
4. 東アジア国際言語学会第 9 回大会（2022 年 2 月 12 日）
   テーマ：『紅楼夢』前八十回における AA 型重言とその日本語訳の対照研究
5. 東アジア言語文化学会第二回大会（2022 年 2 月 20 日）
   テーマ：『紅楼夢』前八十回各版本における ABB 型形容詞重畳式の比較研究
6. 日中対照言語学会第 46 回大会及び 2022 年日中対照言語研究国際シンポジウム（2022 年 5 月 14-15 日）北京理工大学開催
   テーマ：『紅楼夢』における形容詞重畳式と“的”の共起についての一考察
7. 大東文化大学大学院中国言語文化学専攻・外国語学部中国語学科共催第 23 回学術シンポジウムプログラム（2022 年 7 月 24 日）
   テーマ：認知言語学見た『紅楼夢』前八十回における形容詞重畳式―基式との関わりを中心に―

謝辞

桜の三月、三年にわたる『紅楼夢』における形容詞重畳式についての研究を遂行し、本研究の作成にあたり、多くの方々にご指導ご鞭撻を賜りました。ここに深謝の意を表します。

まず、指導教官の大東文化大学外国語学研究科中国言語文化学専攻大島吉郎教授には、終始適切なご指導を賜りました。大島教授から認知言語学の理論、研究の方法、資料の収集など、基本的な研究の姿勢について、細部にわたるご指導をいただきました。暖かい関心と優しいご指導、精神的な面から激励をいただき、深く感謝いたします。

また、同学科佐竹保子特任教授から、古代中国語についてのご指導、論文のご修正をいただいたことに、心より感謝申し上げます。外国語学研究科日本言語文化学専攻上村圭介教授から、統計学の方法をいただき、感謝の意を表します。大東文化大学名誉教授田中寛教授から、タイ語の重ね型について重要な示唆をいただいたことに心より感謝いたします。

東洋大学名誉教授王亜新先生には、本研究を進めるにあたり、認知言語学の理論などについてご指導してくださいました、感謝に堪えません。東アジア言語文化学会の会長高橋弥守彦、会長代行呉川教授、副会長趙海誠教授には、学会の発表の機会をいただいただけではなく、貴重なご助言をいただき、諸氏に御礼申し上げます。

早稲田大学大学院日本語教育研究科小宮千鶴子教授、黒竜江大学名誉教授修士指導教官陳百海教授、南京工業大学丁瑞媛教授、復旦大學劉佳琦副教授は、終始見守ってくださり、感謝に堪えません。

本論文の審査に当たられた山東大學時衛国特任教授、大東文化大学中国言語文化学専攻丁鋒先生には、貴重なご助言、コメントをいただき、ここに感謝いたします。

論文を進めるにあたり、常州工学院李哲副教授、遼寧師範大学孫宇雷先生、海南師範大学蘇亮先生からご助言をいただき、同窓の院生、特に趙丹楠さんには、多大な議論、ご協力をいただき、留学時代の宝物でございます。

日本へ留学して以来、就職の東北石油大學の関係者に深く感謝申し上げます。最後に日本での研究生活を支えてくれた両親、夫、息子、励ましてくれた友人のご支援に感謝に堪えません。

本研究においてひとまず『紅楼夢』についての研究の一端をまとめることといたしますが、残された課題は少なくありません。

筆者は、ハルビン師範大学学部を卒業し、日本語教師として教職に就き、その後黒竜江大学修士に進み、大東文化大学博士に歩を進める中で、日本語教育と国際中国語教育に力を尽くしております。これからも研究と教学の高みを目指し、本研究を起点として、深く研究に精進していきたいと思います。

先生方と友人の方々に対し、ここに厚く御礼申し上げます。

胡　春艶

2023 年 3 月